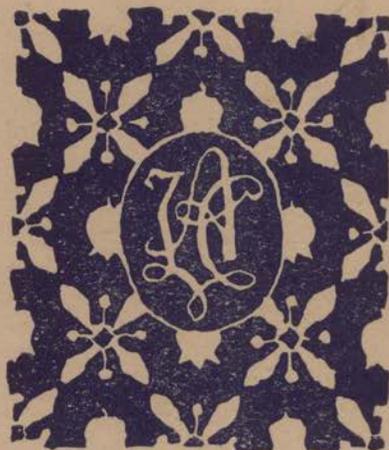


# 山 岳



XLIX

マナスル登山隊にお伴して  
偉大な成果をおげた!

東洋レーヨンの

**ナイロン** スポーツ用品  
アミラン 用 品

テント・ウインドヤッケ・ジヤムパー  
ザイル・スリーピングバッグ・リュックサック



東洋レーヨン株式会社

石油の輸入と販売



出光興産

社長 出光 佐三

本社 東京 銀座 東四丁目

## MARUZEN BOOK NEWS

---

••• 山 岳 書 特 選 •••

### THE MOUNTAIN WORLD 1953

Edited by **Marcel Kurz**

1953. 17×45 cm., 220 p. with Photographs. ¥ 1,380

### OUR EVEREST ADVENTURE

The Pictorial History from Kathmandu to the Summit

By **John Hunt**

1954. 19×25 cm., 128 p. With Photographs ¥ 685

### LAND UPLIFTED HIGH

By **Jhn Pascoe**

1952. 14×22 cm., 235 p. With Photographs ¥ 1,000

### MOUNTAINS OF TARTARY

By **Eric Shipton**

15×23 cm., 224 p. With Photographs ¥ 1,100

### THE ULTIMATE MOUNTAINS

An Account of Four Monshs' Mountain Exploring  
in the Central Himalaya

By **Thomas Weir**

With four maps and 48 pages of photographs

by Thomas Weir and Douglas Scott

1953. 14×22 cm., 98 p. ¥ 1,150

### IM SCHATTEN DES HIMALAJA

Zauber und Wunder in Nepal

Von **Alexandra David-Neel**

Mit 19 Abbildungen

auf Kunstdrucktafeln und einer Karte

1935. 15×23 cm., 185 p. ¥ 1,150

東京・日本橋・丸ビル  
全国各地支店・出張所

**丸 善**

振替東京第5番  
電 (27) 2321・2351









マナスル（ローの部落より）

山

岳

第四十九年



# 山岳 第四十九年 目次 (一九五四年度)

マナスル・一九五三年紀行	三田幸夫	一
科学班の旅	中尾佐助	五
調査ノートとところどころ	川喜田二郎	六
アンナプルナ・一九五三年	京都市大 学 山岳会	八
アコンカゲア覚え書	関根吉郎	一〇
北海道の山小屋	伊藤秀五郎	一四
ハントの「エヴェレスト登頂」をめぐるつて	松方三郎	一七
ヒマラヤン・ノーツ ナンガパルバート登頂 — 一九五三年 —	田中栄藏	一八
戦後に於ける学生登山		
戦後八年	慶応山岳部	二〇
後立連峰を中心として	大阪大学山岳部	二六
戦後の記録	早大山岳部	二四
再出発の断面	金坂一郎	三〇

## 海外寄稿

The Fight for K2	Robert H. Bates	卷末
An ascent of Chopicalqui in the Peruvian Andes	Fred D. Ayres	一五
戦後のヒマラヤ登攀年譜 (一九四五—一九五三)	田中栄藏	一九

写真

マナスル——ローの部落より	(山崎英雄)	巻頭
一九五三年遠征隊員	(依田孝喜)	八
ベースキャンプよりマナスルを望む	(依田孝喜)	九
第六キャンプよりピナクルを望む	( " )	三二
マナスル七三〇〇米附近より見た西藏の山々(山崎英雄)	( " )	三六
ピムタコーチの朝	( " )	八六
ナムンパンデヤン南麓のキャンプよりマナスル・P 29を望む	(今西寿雄)	八七
一九五三年京都大学士山岳会アンナブルナ遠征隊員		一〇一
アンナブルナII峰南面の障壁上半部	(今西寿雄)	一〇三
第一キャンプより見上げたアンナブルナIV峰	( " )	一一〇
第三キャンプ直下の氷壁より見上げたアンナブルナIV峰	( " )	一一四
マルシヤンデイとナウルコーラの出合よりアンナブルナII峰東面を眺む		一一五
一九五三年早稲田大学体育会山岳部アコンカグア遠征隊員		一二四

西方上空よりアコンカグアを望む	(日高信六郎)	一三五
空沼小屋・十勝岳白銀荘		一六四
奥手稲山の家・無意根小屋		一六五
一九五三年アメリカK 2 遠征隊員	卷末	二

Camp VI より新彛省の山々を望む		三
フアンドイの斜面よりチョピカルキを望む		一四
チョピカルキ最高キャンプより頂上を望む		一五

図版

マナスル隊員露営日数表		四四
ティジェラ附近地形概念図		七九
ムクチナートから見たダウラギリ		八〇
アンナブルナ一九五三年ルート図		九一
アンナブルナ第四峰登路図		九二
ヘルヴェチア ヒュツテ		一五五
同 平面図		一五六

表紙

(佐藤久一朗)

# マナスル・一九五三年

## 紀行 三田幸夫

### 隊の編成

一九五三年一月二日、例年通り殆んど年賀客もない気楽さで縁側に寝椅子を持ち出し、独り温い午下りの陽ざしを浴び乍ら無聊の一刻を過して居る時、不意に庭から珍客榎さんを迎えて喜んだ。

几帳面な榎さんの事とていつもの通り東京での年賀の帰りと思われた。早速、その縁側に茶袱台ちやくぶだいを据えて先ず御屠蘇をくみ乍らという事になった。が、榎さんはいつもと違い稍々改まつて、実は早速ですがと用件を切り出した。

簡単に要点丈をいうと、私に今度のマナスル遠征隊の隊長を引受けてくれないかという事であつた。此の事は既に前回のヒマラヤ委員会で松方君が引受けてくれ、私達も申し分のない隊長を得たと喜んで安心して居たのだが、同君がどうしても行けない事情になつた事に依るとの話。又、榎さんは、之は自分独りの意見ではなく他の主な委員や隊員候補の連中の意見をも代表しているのだと附け加えた。私としても突然な事ではあるし、一応考えさせて頂きたいが猶他にも適当な仁もあろうしその方も充分お考え置き願ひ度い旨を申し添えた。

結局、私としては隊長を引受ける事になつたのだが、当時の事情をもう一度振り返つてみたいと思う。

この横さんの申出を受けた頃、日本山岳会としては既にヒマラヤ委員会及選衡委員会によつて主な隊員候補の選出は著々として進行して居た。そして最も困難な氷瀑地帯に活躍し、且氷の技術に未経験な隊員達を指導すべくアルプスで十年の経験を持つ高木、田口の両君が此の役割を果すべく決定的な候補になつて居た。此の兩人と共に、前年のマナスル踏査隊に参加した竹節も当然な候補者であつた。同君は、立教のナンダコット隊にも参加した我国でのヒマラヤ通である。

又、若い隊員達の候補も夫々広い範囲から充分な検討の下に現在の山岳界の第一線に活躍して居る連中の顔触れが浮び上つていた。夫等の人達の経験、技術、性格といったものに就いて私個人としては一人一人に就いて親しく知悉してはいなかつたが、信頼せる選衡委員達に依つて推薦された人達なら先ず安心して行を共にし得るものと考えられた。

隊員の選出に就いては、先ず隊長を選び、その隊長の意向に従つて適当な隊員が選ばれ、チームワークのとれる隊の編成を試みる事が理想的と思われる。然し之も云う事は易しいが、いざやつてみると思わぬ支障が起つて思い通りに行かぬ事もあり得ると思う。殊に遠征の規模が大きくなり、時日が切迫してくると此の隊の編成という事は想像以上に難しいものになる。英国のようにヒマラヤの経験者を各年合層に数多く持つて居る場合と異り、吾国の様な外国の山、或は氷に対する経験者が殆んど皆無に近い場合には誠にその隊員の選出に就いては困難を感じざるを得ない。

若くて強い丈でも困る。技術がうまい丈でもいけない。長い期間中、凡ゆる困難に打ち克つて隊全体のチームワークを保つ為にはあく迄自分を殺して協調し得る性格の所有者でなければならぬ。人一倍体力、健康の優れた者たる事は云う迄もない。登山の第一級の経験者たる事は勿論の事。この意味で我国では氷河を持たぬ関係上、冬山の充分な経験者である事は必須の条件である。雪の山に強い若い隊員はマナスルでも威力を発揮してシェルパ達を驚かし

めた。

隊員の中には機械知識のある者が若干必要である。氣象観測機械、測量機械、ラジオ、無線通信機械等の操作、修理等が出来ないと困る。記録の為に写真、映画の技術者も欲しい。荷物の輸送、シェルパや人夫の操縦の為に現地語の解る者が理想である。印度辺境ではヒンドスタニーがよく通じるがネパールでは駄目だった。シェルパの何人か多少解する事が出来たに過ぎなかつた。通訳がいるから英語が解せれば大体用は足りる。シェルパには英語の片言を解する者が可なり居る。結局は解る事柄でも言葉が通じるか通じないかに依つて仕事の進捗状態は非常に違ふ。輸送指揮官的な立場にある者は特に語学の達者である者が希<sup>希</sup>わしい。

エヴェレスト隊にはヒンドスタニーを解する者若干、ネパール語の解る者迄居た。スイスのダウラギリ隊には英語の解らぬ隊員は一人きりであつた。

日本隊には語学の達者な田口、高木がいたし、それに次で村山が活躍した。帰りには村木迄何とか英語で電話の応答送る程になり、各隊員もシェルパと気が通じ合う様になつて英語やヒンドスタニーの片言のチャンポンで何か用を足していた。

都会地では政府の高官連、新聞記者等との折衝が多いので特に英語は堪能な者が居た方が万事スムーズに事が運ぶ。私自身も一通りはやれるが高木、田口が居たので心強かつた。又医者が必要な事は絶対条件である。登山隊にとつては外科医の方が望ましいかも知れないが、マナスル隊は内科医ではあるが山に経験の深い辰沼博士を起用した。勿論一通りの外科的処置は当然心得ているので心配はなかつた。それに動物を専攻し札幌医大の解剖学教室に学ぶ山崎が助手になつた。幸にして此の遠征にはひどい怪我人も病人も出なかつたが此の両人の参加は隊にとつても心強い存在であつた。そして途中中々々の部落民達の病人の治療等に努力を続けた事によつて日本隊に対する現地人の尊敬、信頼を勝ち得た事は隊にとつても少なからぬプラスになつた。

隊員中に動植物、地質、鉱物、氣象の觀測、地形の測量等の専門家が居る事も望ましいが、遠征隊が登山を終局の目的とする以上遺憾乍ら此の方面はどうしても可なり割愛せざるを得ない。此点、中央氣象台の好意で色々な觀測機具を借用し、山田隊員の丹念なたゆまざる觀測によつて素人としては立派なデータが得られた事は特記する功績である。然し中尾、川喜田の科学班が前年に引続きマナスル周辺の植物、人文的研究を果すべく参加出来た事は學術面に於ても大きな收穫であつた事と思う。氷河や氣象の専門家の候補者もあつたが隊に受け入れる余裕のなかつたのは誠に残念であつた。將來は日本としても純粹な登山とは別に學術的な遠征隊をヒマラヤの未知な地域に派遣する程の余裕を持ちたいものである。

(此の稿を書いている時、京大の木原均博士を隊長とする立派な學術探險隊が来年カラコルムに派遣される旨の新聞発表があつた。私の年来の念願が実現される事と心から喜んでゐる次第である)

さて、私自身の隊長を引受けるに至つた経緯いきさつに戻る事にする。

其後、前年マナスル踏査隊に参加した高木、田口両君の屢々の訪問を受け現地の模様を詳細に説明され充分な補佐をするから安心して隊長を引受けてくれと熱心な依頼を受けた。又、若い年令層の隊員選擧に尽力した日本山岳会の成頼、谷口、林君達からも若い連中の希望が私の隊長にある事を伝えられ、之亦熱心な慫慂を受けた。

私にとつては過分な信頼を持たれた訳である。遠征隊の準備が著々として進められているのに隊長がまだ決まらぬいのはお話にならない。私の個人的問題さえ解決されれば万事うまく行く段階に來た訳である。

隊長たるの条件としては、勿論ヒマラヤ登山に充分な経験のある事は論を俟たない。が、同時に体力等の点から年令的に相當なハンディキャップというものが考えられる。私自身の希望から云えば、老年でも強い人もあろうが、五十才前で、少なくとも、マナスルならば五六〇〇米の第四キャンプ以上、いざという時は七一〇〇米の第八キャンプ位でも指揮をとれる程の体力の所持者でありたい。同時に語学の英語は勿論現地語も多少解れば猶理想的である。

こんな私の希望条件からいうと私自身は年令、体力の点はどう最<sup>キマ</sup>貞目に見ても及第とは云えないが、こういう弱<sup>ツヨク</sup>点を高木、田口他の連中が補つて呉れるという。私の仕事としては、カルカタヤカトマンズでの官民との公式折衝、山ではベースキャンプ迄行つて全体の指揮をとつて貰いたい、それ以上の実際の登攀に関する責任は高木がとるといふ解決点に到達した。

が、残るのは誰しも同じ事だろうが、私にとつても家庭と勤務先の会社との個人的な事情に関する問題である。人間誰しも生身である以上ヒマラヤの様な長い骨の折れる道中に病氣する事もあろう、相当以上な山登りなのだから途中アクシデントが絶対にならないとは誰も保証出来ない。そうかと云つてそんな事を心配していたらヒマラヤ遠征登山なんか初めから考えなければ良い。東京に居てどんな慎重居士にしろ、いつ交通事故等でやられるか之亦保証の限りではない。こんな理屈で家庭の方は喜んで(?)納得して貰つた。

今度は勤務先の会社の問題だ。之には少々困つた。というのは、私の場合、法定最小限の数の役員の一<sup>ヒト</sup>人として現在の会社に参加して未だ二ヶ月を経た許りであつた。それで下手をすると半年近くも留守をしなければならぬと乍らと当然問題である。会社を辞めて迄出かける事は私の現在の事情が許さない。之は私を身代りに推した松方を始め、伊集院、早川の諸君が手別けして会社の幹部、相談役の偉い人達を説得して廻つて呉れた。結局は、会社側の私が「半年程遅れて入社したと考えれば」と云う都合のよい理解ある解釈に依り、一番心配していた問題も一<sup>ヒト</sup>慮<sup>ウ</sup>が<sup>ウ</sup>ついた。

くだらぬ私的な事情をくどくどと書いたがこういう問題はいつも起り勝ちなので一<sup>ヒト</sup>慮<sup>ウ</sup>御参考迄に説明して置く必要があると思う。私以外の各隊員達も夫々生活に直結した職業を持つ以上、長い休暇をとる為には一通りならぬ苦心をした筈であるが、山岳会の幹部達も熱心に駆け廻つて呉れて夫々周囲の人達の諒解を獲得して此の問題も全部無事解決された事は幸いであつた。こんな事も済んで了えば何でもない様なものゝ、ヒマラヤ登山というものに対する社会

的の理解が深められた一つの段階に到達した事と思つて感謝に堪えない次第である。

こんな次第で私自身も公然と遠征隊に参加出来る事になつた訳だが、考えてみると仲々責任重大な事をひしひしと感じさせられる。只、曾て何年かの間、あけくれ何時の日に私達の仲間によつてヒマラヤの巨人に立ち向えるかと心を碎いて暮した印度は、私にとつて何か第二の故郷といつた様ななつかしさで一杯である。シッキムやクル奥地の山旅の思い出がついこの間の様な鮮明さで脳裡に浮んでくる。そういつた楽しい回想が今度の大きな遠征に対する準備を少しも億劫がらせなかつた。そして極端な多忙に追われ乍ら、隊の既定の方針を中心に計画は急速に具体化していった。

かくて隊長及び隊員の正式な決定が発表された。その氏名、経歴等は左の通り。之は「マナスル」に記載された松方君の紹介をそのまま、此処に借用する事にした。

三田幸夫(52) 万邦交易取締役。一九二五年のカナダ、アルバータ(三八九五メートル)初登頂隊の隊員であり、その後主としてインド、南方方面の貿易に従事し、インド滞在中にはシッキム及びクル方面の旅行もしている。一九五三年の登山隊の隊長。日本山岳会評議員。

竹節作太(46) 毎日新聞社運動部長。スキー選手として一九二八年オリンピックに出場、一九三六年のナンダ・コット(六八六七メートル)初登頂の際は毎日新聞の記者として特派され、一行と共に登頂した。一九五二年の踏査隊の時には、一行に遅れて参加して後半の踏査に加わり、一九五三年の登山隊では隊員の一人として参加、報道方面の仕事に當つた。

加藤泰安(41) 新アジア貿易通信社勤務、一九三七年以来数回蒙古地方に入つている。登山隊ではもつぱら輸送と兵站の仕事に當つた。日本山岳会理事。

高木正孝(40) 神戸大教授。専攻は心理学。欧州留学中(一九三八―四七年)ドイツ並びにスイスのアルプス諸

峰に親しんだ。日本山岳会理事。

田口二郎(40) 岸本商店勤務。一九三七年から四七年まで滞欧、アルプス各方面で山に親しんだ。高木と共に氷河についての経験者として踏査隊並びに登山隊に於て重要な役割を与えられた。日本山岳会理事。

辰沼広吉(37) 医博、慶応大学医科大學講師。一九五三年登山隊のドクターとして隊員の保健、医学方面の資料収集、治療等に従った。日本山岳会理事。

依田孝喜(36) 毎日新聞社写真部員。登山隊のカメラマンとして参加した。

中尾佐助(35) 浪速大学助教授。専攻は栽培植物。ポナペ、蒙古、小興安嶺、カラフト等の學術調査隊に参加している。マナスルの踏査隊ならびに登山隊に於て常に科学班員として資料の収集に当った。

村山雅美(34) 市田株式会社勤務。日本山岳会理事。

川喜田二郎(32) 大阪市大助教授。一九四二年の大興安嶺隊々員。専攻は人文地理。登山隊科学班員として参加、人文方面の資料の収集と調査を担当した。

加藤喜一郎(32) 佐倉飼料株式会社勤務。

山田二郎(32) 佐倉飼料株式会社勤務。日本山岳会理事。

村木潤次郎(29) 早大鑄物研究所助手。日本山岳会理事。

一九五三年の登山隊では村山、加藤、山田、村木などの層が年令の上でも中心となり、自然實際の山でも登山隊の中堅となるわけだったが、装備その他の隊の準備についても、隊員の中ではこの辺が中心となつて働いた。

山崎英雄(28) 札幌医大解剖学教室勤務。

石坂昭二郎(24) 東京出版販売株式会社勤務。

## 東京出發迄

去年の踏査隊から引続いて隊の本部は呉服橋の辰沼医院の一室に置かれていた。御茶の水の日本山岳会は当時電話もなかつたし地理的にも不便であつたからである。

病院の電話は隊の為に使われ通してあつた。看護婦嬢は患者よりも登山隊関係の来訪者の応接に忙がしかつた。出入りの人間が急激に増えた事は周囲の人には病院の繁昌を思惟せられたかも知れない。が、病院にとつては至極迷惑であつたに違いない。

狭い部屋には装備品や食糧の見本等が散乱して足の踏場もない。その中で靴屋が足の寸法をとる。洋服屋が未だつかまらぬ隊員を探しに来る。電話にしがみついている隊員や準備委員達は新聞社、飛行機会社、船会社、梱包会社、運送屋等との折衝に声を洩らしている。その傍らには食糧や装備品の膨大にして複雑極る英文のリスト作成に大重なものもいる。

大学山岳部の現役連中が先輩指導のもとに貴重な時間と労力を犠牲にして食糧装備の分類整備等の為に凡ゆる努力を傾注して呉れた。女子大の連中迄が此の面で熱心な協力を提供してくれた。

装備品は大きく六つに分類された。即ち一、高地用個人装備、二、露営用具類、三、炊事用具、四、登攀用具、五、キャラバン用具、六、通信並びに観測器具。

食糧も又大きく五つに分類された。即ち、一、行進間及びベースキャンプの食糧、二、ベースキャンプ特別食、三、ベースキャンプ予備食糧、四、高所キャンプ特別食、五、高所キャンプ食。

之等一番問題の荷物が船便で積み出されると、一応ほつとしたものゝ、皆の多忙さは最後迄決して軽減されなかつた。



山田

石坂

加藤(泰)

田口

村木

加藤(喜)

依田

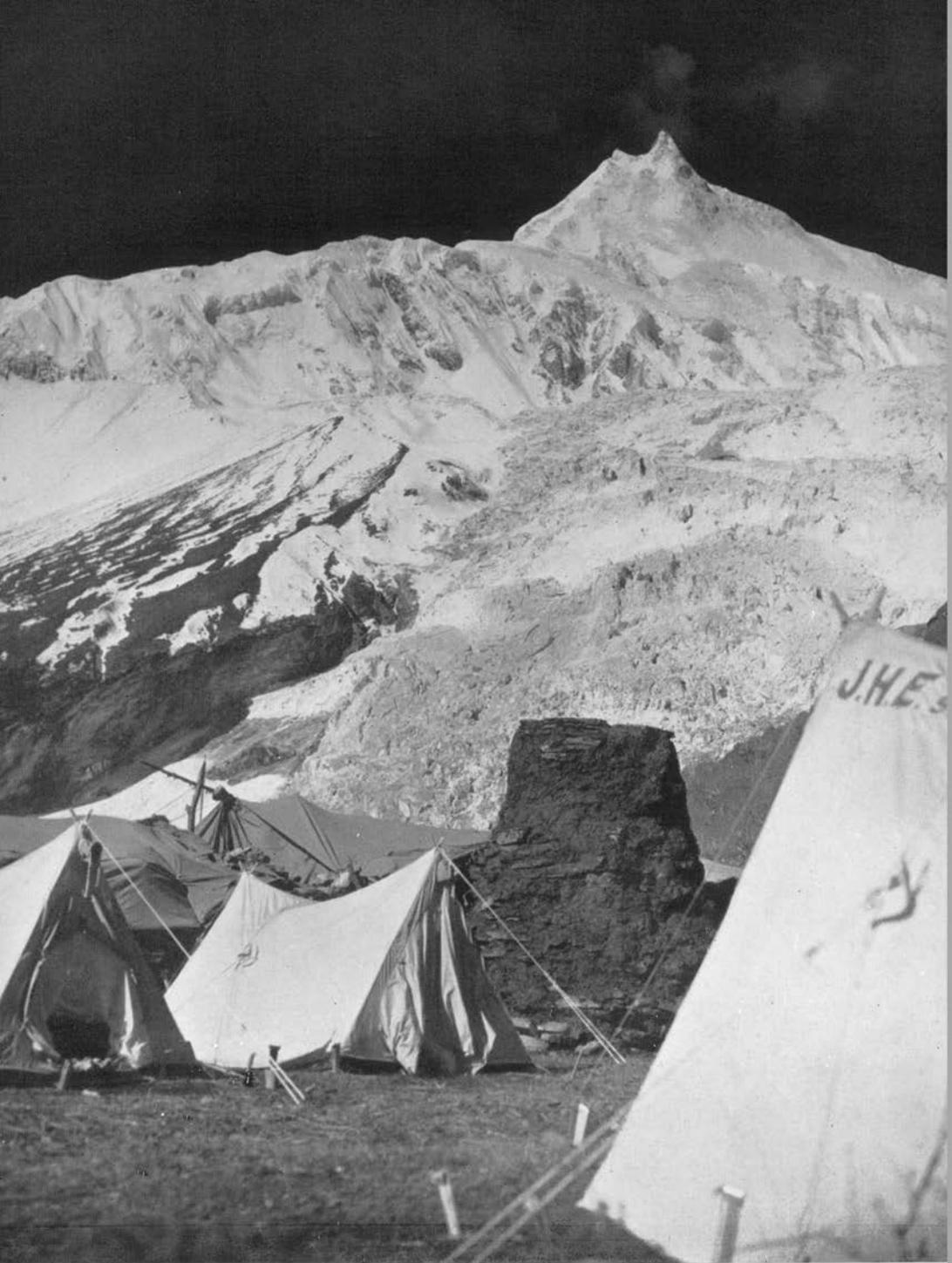
村山

辰沼

三田

高木

山崎



ベースキャンプよりマナスルを望む

日本隊としては初めて試みられる酸素補給器はボンベと共に出発間際に至つて完成された。マナスルの高度では之に頼らない方針でいたから特にその重要性は認めなかつたが、登攀の苦勞を軽減する意味で完璧なものが得られるなら勿論あるに越した事はない。大いに研究の要がある。そして日本を出る前に充分に隊員達にその使用の方法、性能を認識せしめて置く位の時間的余裕を持たねばならない。が、残念ながら今回はその余裕がなかつた。

前述の装備品や食糧の明細な英文のリストは各隊員に渡され、どの番号の梱包には何がどの位入つているかという事が一目瞭然と解る様に配慮された。それ等の装備、食糧品は多くのベニヤ製キャラバンボックスに収納され、その箱は一人一人のポーターに担ぎ良い様、又同時にキャラバンの幕営の際には机や椅子代りにも使用されて便利な様に工夫されていた。

隊員のパスポートや、予防注射等の折衝が始まると愈々出発も眼の前といった焦燥感に駆られてくる。それでも複雑な問題が後から後から追いかけて各人の自由な時間は段々制約されて来る。公的私的な歓送会といったものが手帳の約束欄からはみ出してくる。

私としては、出発前に隊員全部が小さな山でも好いから二三日位でもゆつくり自由な時間を得てお互に話し合い度いと思つた。が、そんな余裕を持つ事等到底問題外であつた。只隊員の過半数が箱根の温泉で多少落ちついた一晩を過す事が出来たのがせめてもの幸せであつた。それにしても、その夕食前の数刻さえ態々やつてきた毎日新聞の座談会に割愛せざるを得なかつた。

漸く三月四日が先発隊の出発と決つた。BOAC機も予定通りブックされ、田口、加藤(泰)、村山、加藤(喜)の四名が勇躍羽田を飛び立つた。吾々後発隊の飛行機は三月十三日の金曜日と決つた。縁起を担ぐ訳ではないが三日の金曜日だから席も空いていて吾々大勢が同時に席がとれたのだからと一同苦笑した。が、この日はBOACの都合で十八日に延期され、残りの本隊十一名は歓送の人達でこつた返す羽田空港の待合室に送り込まれた。

その混雑の中で幾度か写真班のフラッシュや放送会社のマイクの前に立たされた揚句漸く先発隊と同じ午後十一時十分のBOAC機上の人となつた。

### 東京——カルカッタ——カトマンズ

窓へ顔を押つけて見るが、送る友達や家族の顔もゴツチャになつて誰が誰だか見分けもつかない儘、飛行機は方向転換して滑走路から至極あつさりと飛び立つて了う。

途中、沖繩のカデナ、香港、バンコック、ラングーンへ下りるが、翌晩はカルカッタへ着いて了うのだから頗るあつけない。昔四週間もかかつて悠長な船旅を続けた事を思うと本当に地球面の距離が縮まつた事を思わせられる。

カルカッタのダムダム空港は夜の十一時を過ぎても流石に暑い。税関では早速担当隊員が厄介な荷物通関の折衝に当る。高木の経験と、現地の人達の応援で円滑に行つている様だったが多少の問題が残つて解決は翌日、翌々日に持ち越す事にする。ネパール王へ献上の松の盆栽は遺憾乍ら通関は駄目になつた。その間私は新聞社の連中との応待である。一通りの話を済まして夜も遅いから詳しい話は明朝ホテルの各社共同のインターヴューでという事にして漸く空港からにげ出す事が出来た。

車に乗るとバラックポア街道の並木路の夜風は流石に涼しい。昔ゴルフ場への通い慣れた道丈になつかしい。運転手とのヒンドスタニーの会話で段々昔の生活を思い出してくる。廿年も前に暮した様な気がしなくなる。

冷房のプリンセス・ホテルに一同が落ち着いたのはもう二時に近かつた。時間外だつたがボーイに心付ゴツヤをはずんで冷い麦酒とつまみ物をとり寄せて先ず安着の乾杯をあげた。

東京から持ち越しの睡眠不足は到々此の夜も取り返さぬまゝ廿日の朝から早速多忙の日が始まつた。

総領事館、銀行、船会社、知人への挨拶、協力の依頼、ネパール総領事、ヒマラヤン倶楽部への儀礼的訪問。気象

台に氣象通報の特別依頼。其の間新聞記者への応待、オール・インディア・ラジオでの放送。昼と夜には前記關係先からの招宴への出席等々眼の廻る様な忙がしさである。自動車を駆て走り廻るとはいえ何といつても百度を越す炎天下の事である。冷房のホテルへ帰つてパンツ一枚になれる時が極楽であつた。若い隊員達も夫々分担を決めて言葉の不自由を克服し、飛行機会社との折衝、遠い空港の税関へ往復して通関の談判、空輸荷物の打合せ等正に八面六臂の働きであつた。そして私と高木、村木三名を残して八名の者は一先ず先発隊の待つカトマンズへ飛ばせる事が出来た。

三月二十四日の出発まで五日間に兎に角前述の仕事は大過なくやりおわたしたのは先ず成功であつた。が、最後の出発の朝も二時起きて、前の晩は十二時迄親切な人達の招待を断れなかつたという調子であつた。

ダムダム空港を早朝に発つたインディアン・ナショナル・エア・ウェイの飛行機は昼前にカトマンズの空港に着いた。其処には先着の仲間、シェルパの代表、昨年来の日本隊への協力者たるネパール王子秘書のダルシャン、王家の一族であり私邸の一部を提供してくれたシャハ氏等の出迎えを受けた。又、ダルシャンの提案で、その日印度へ出発する前首相コイララ氏に会つた。今は野に在るが必ずや立ち上るべき人物であるから会つておいたらとの事であつたが、果して我々が登山中政変があつて彼が再び首相になつたニュースをサマのベースキャンプでキャッチした。

カトマンズのそれからの数日は又カルカッタの多忙に輪をかけたものゝ様だつた。然し我々は既にヒマラヤの支園口に乗り込んだのだ。

先発隊は勿論凡ゆる必要な準備を続けていくれたので大いに助かつた。そんな期待もあつて到着早々先ず第一に私の欲した事は暫くの睡眠であつた。処が事情は到底そんな事も許されなかつた。そして此処でも亦ひつきりなしに追い廻されて結局出発迄に私は到々街の見物の機会も与えられなかつた。が、私のやつた事が隊長として当然なすべき遠征隊の仕事の一つである事は間違いない。直接山登りに関連した事ではないにしろネパールでの遠征隊にとつて

こういう事も甚だ肝要な仕事の一つになる。全体にとつて無形のプラスになつたとしたなら望外の喜びである。連日引張り廻されても心身の疲労を忘れて苦にならなかつた。

此処で私に課せられた主な仕事は、王様を始め、各閣僚、其他到底名前も憶え切れない程の政府、民間の主要な人達への儀礼的な訪問、協力の要請といった事が先ず第一に必要なものであつた。が、之にはダルシャンを始め、前年の経験で此の間の事情をよく呑み込んでいる高木、田口両隊員の側面からの協力があつて始めてやり通し得た事と今以つて信じている。御蔭で各方面から可成りの好感を持たれ又協力を与えられた。

宿舎たるシャハ邸の内庭にはシェルバ達が天幕を張つて寝起きし、遠征隊の荷物の管理に當つた。膨大な荷物はポーター一人当りの重量三十キロ平均にパックされ其の数三百を越えた。その計量、梱包の仕事たるや頗る複雑厄介を極め、担当の加藤（喜）、山田、村木等隊員の指揮下にシェルバの面々が実に小気味よく働いた。各国の遠征隊に參加した彼等の経験にして初めて物をいう訳である。

人夫としては、ブリガンダキの險路を経て更に平原の住民には苦手である寒気の増すサマ辺の高い処迄行かねばならぬ為、体力的に相当な連中が必要となる。そこでカトマンズ周辺の山地から成る丈強い人夫が集められた。

彼等は食糧自分持ちで更に三十キロ余りの荷物を担ぐ事になる。食糧は途中の部落で大体手に入れる事が出来るが殆んど寝具等は持たぬ着のまゝの者が多い。そして大半が裸足である。

高地に入るに従つて寒気に堪え兼ねて脱落する者が出る場合も想像されるので、其の時の事も計算に入れて色々対策が講じられた。そして三百名近くの人夫が集められいつでも出発できる迄の準備が完成した。

東京に居る時から、三百余名の大部隊が長い、然も悪い道を行進する時に想像される露营地、食糧入手の問題、又悪場にかゝつて通過に手間どるといつた場合を考えてキャラバンは二つに分けるという方針であつた。各国の大きな遠征隊も同様な方法をとつている様だ。

三月二十六日、高木を隊長とする先発隊は隊員七名（高木、加藤（泰）、村山、加藤（喜）、山田、山崎、石坂）シエルバ八名、ポーター百九十名、通訳一人（ディリー）総勢二百六名の大部隊となつてシヤハ邸を後にした。

先発隊を送り出した後、取り散らされたシヤハ邸に突然カイザー將軍からの贈物、当地では仲々手に入らぬ貴重なスコッチウイスキーとラムが一打宛届いた。此の珍品獲得に外交的殊勲をたてた田口は改めて隊員達から尊敬の目を以つて見直された様であつた。

そんな騒ぎの最中に今度は王宮からの使者が現われた。五時シャープに王様が我々に謁見するというのだ。使者のチット・ブックに御受けする旨の署名を認めて早速皆参内の相談にとりかゝる。カトマンズの人間は万事のんびりとしていて頗る時間の觀念に縁遠いが、こと高官連とのエンゲージメントとなると頗る几帳面に極端にいと分秒も違えずといつた調子である。結構な話だが悠長に構えて万一遅刻しては一大事と、夫々とつて置ききの背広にネクタイもきちんと結び充分時間の余裕をとつて王宮に参内した。

通されたのは質素だが明るい瀟洒な御居間らしい洋風の部屋で、卓子には日本から移植されたという満開の八重桜が花瓶に活けられ、その鮮かな薄桃色の色彩が眼にしみて印象的であつた。

王様は五時きつかりに部屋の入口に起立して迎える我々の前に現われた。四十を半ばも過ぎたと思われる温雅な容貌の持主で、流暢な英語は仲々洗練されたものであつた。四角張らぬうちとけた謁見が二十分程も続き、私はネパール官民から昨年来日本遠征隊が受けた好意と協力に感謝し、今年も宜しく御願ひしたい旨を伝えた。王様は自分の出来る事は何でも取計らうから遠慮なく申し出て呉れと述べられた。そして田口隊員から持参の双眼鏡を献上し、再び隊員一人一人が握手を交わして王宮を辞した。

三月二十七日、本隊は隊員六名（三田、田口、辰沼、村木、竹節、依田）通訳一名（サガール）シエルバ七名、ポーター六十二名、それに科学班は中尾、川喜田、通訳のヤチンドラの三名にポーター十八名を配して総勢九十七名の

部隊となつた。シャハ邸前に勢揃いした一行は美しく着飾つた貴婦人達から花環を首にかけられてヒマラヤへの門出に向つた。

### カトマンズよりサマへの道

カトマンズからサマへの旅は予定通り約十八日間、途中六日目のアルガート・バザールと十三日目のニヤックで先発隊と再会として連絡をとり一日ずつ休養をとつた。

前半の行程は高度も低く、想像を絶する暑さで、ヒマラヤ前山の特徴である毎日の様に小さな峠を越えるのは仲々の苦勞であるが、ポーター達は流れる汗をもとせぜ極めて陽気にキャラバンを続けた。が、ともするとこの暑熱に避易して一寸した木陰にも腰を下して容易に尻を上げ様としない事がある。こういう場合、シエルパ達は適当に彼等を追い立て、キャラバンを選れさせない様後になり先に羊群を追う犬の様な役目をする。

ヒマラヤの旅には良く記述されるチチウタラと称する休み場が適當の間隔をおいて旅人に涼風と憩いを提供する。路傍に石を積み重ね荷物を担いだまゝ腰を下すのに丁度良い様な高さに作られている。そして其処には必ず巨大な菩提樹と榕樹が生い繁り何百年もの昔から旅人を酷熱の苦痛から救つて呉れている。又、時たま其処には地酒の濁酒カキウや焼酎ロシユを売る女達を見る事も出来る。昔日本の街道筋でも盛夏には茶店でよく焼酎ロシユを売つたと聞く。霍乱カクランや暑氣払いの効能は何処でも古今同じものなのだろう。

先発隊の高木登攀隊長は、私との約束を守り几帳面に毎日の日誌と連絡事項を天幕場毎に残していつて呉れた。毎日時間を決めて連絡をとろうとした携帯無線電話も距離が離れ過ぎて役に立たなくなつたのでこの高木のメッセーヂが役に立つた。ユーモラスなその内容が本隊にとつて毎日の楽しみにもなつた。それ等のメッセーヂ伝達は本隊の幕営すべき場所近くの部落民等に頼むのが常であつた。或る日、路傍に斃れ苦悶にうごめく汚い男を発見した。傍らに

は飲み水を入れたかけ茶碗が置かれ、小松がたてられ陽を遮っていた。近付いてみると胃痙攣様の症状で仲々苦し相であつたが辰沼の注射で生色を取り戻した。すると彼は懐から紙片を出して吾々に示した。見ると高木からのメッセージで末尾には病気でキャラバンから脱落してカトマンズへ帰す男だとなつた。可哀想だつたが薬品と食物を若干与えて吾々はキャラバンを続けた。

隊員の一人一人には隊員附のシエルパが配属された。彼等はそれ等隊員の身の廻りの世話をする。英国統治下の印度では家庭でも旅行先でもボーイが附そつて何から何迄身の廻りの世話をするのが慣習だつた。そういった慣習から、昔から英国隊によつて訓練されてシエルパの一つの仕事になつたものと思われる。

私のシエルパはアン・ツェリン四号で、三九才。ヒマラヤ経験も相当なもの。無口で無愛想だつたがよくこまめに動き廻つた。隊長附シエルパという誇もあつたらしい。シエルパの中では、ヒンドスタニーも解る方だつたので私にとつては万事都合だつた。文盲の彼は荷物に書かれた文字が解らないが、私の荷物は他の沢山の同じ形の荷物の中にあつても良かったちどころに見分ける事ができた。注意してみると、一寸持ち上げてみてその重量によつて私の荷物を判別するのだ。彼の動物的カンの良さには呆れて了つた。

道中炊事班のシエルパは老バンシーを長としてキャラバンに先行し、炊事天幕を素早く建てると焚木が集められ、先ず御茶が沸かされる。

私達が到着して、並べられた椅子に腰を下ろして御茶おちやの一刻を楽しんでいる間に、隊員附のシエルパ達は各々の主人の為に天幕を張り、シートを敷き寝袋を掛け、個人用キャラバン・ボックスが天幕内で戸棚兼机代りとなつて小さいな小住宅が出来上る。暗くならぬ内に天幕の入口にはハリケン・ランターンが点火される。

我々の夕食が始まる。シエルパ達は周囲で食欲旺盛な隊員達の給仕に忙がしい。食卓が片づいて初めてシエルパ達の自由な時間になる。炊事天幕に集つた其処が彼等にとつて一番楽しいひとときであろう。毎夜遅く迄彼等の談笑が

続く。シエルパは本当に朗らかで無邪気な存在である。それでいて仲々信心深い。朝暗いうちから彼等の天幕からよく詭経の音が聞える。私達の気心と一脈相通じる好い山仲間である。

私は毎朝一番の早起であつた。天幕から顔を出すといち早くシエルパが熱い紅茶を持つて来る。椅子に腰を掛けて周囲の景色を眺めているうちに水をたゝえた洗面器とうがい用のコップの水が用意される。

皆の髭もそろそろ伸び始めた頃である。洒落者のパンシーは好く髭の白髪を抜き乍ら缺で手入れに余念がない。

キャラバン中の食事は、出来る丈現地調達で間に合せようという事だつた。従つて、にわか鶏街道と我々が称した程何処でも鶏が手に入るので毎日の様に鶏と卵の御馳走だつた。が鶏は新鮮なのに肉が硬く、料理も下手なので之が毎日のように続くのには少々閉口した。米はボロボロで一種異様な臭味があり、これ亦余り感心しなかつたが、竹節のみ一人之を賞味していた。メリケン粉を練つて油でいためたチャパッティは概ね好評であつた。キャラバンの食糧はもう少し研究の余地がある。野菜不足の此の辺の旅には、乾燥野菜も充分携行すべきであらう。コーヒー、紅茶、ミルクの様なものも亦豊富に支給したかつた。之等のものは勿論用意してあつたが大半は高所用に準備されたものが多かつた。欲を云えば、パンを焼く位の用意も欲しかつた。

キャラバンは山麓に到達する迄の間に隊員達の身体を作るのに役立つ。従つて事情が許すならば食糧問題も充分考へて、栄養食をとり嗜好品等も不自由させたくない。

日本での準備期間からカトマンズを出発する迄隊員達の毎日は殆んど忙殺され通してある。キャラバンに出て初めて開放された自由な体となるのだ。私達は只サマのB・Cへの道を急いだが、エヴェレスト隊の様に、途中の幾日かを割いて高所へ登り、高度への馴化を計つたのは確かに一つの良い方法である。私達はマナスル自体の登攀中に日程の余裕を織り込んで高度馴化を考慮したのだ。

キャラバン中で私の一番心配していた事はブリガンダキに入つてからの悪路に就いてゝあつた。之は前年の踏査隊

の報告で大分おどかされていた為でもあつた。幾日かの間、谷筋の悪場を何百人かの重い荷を背負つたポーターが屢屢通過せねばならないのだから当然慎重であらねばならない。そんな事から全隊を二つに分ける事は日本から考へていた方針であつた。悪場で進行が阻まれ一人が二分間待たされても百人では二百分即ち三時間二十分の間キャラバンとして進行が遅れる事になる。三百人だつたら十時間という事になる。

之は可成り極端な仮定かもしれないが、マナスルの帰途吊橋を渡るのに一人が平均一分半位かゝつた事がある。幸いにしてブリガンダキの悪路や、写真でおなじみの棧道等では心配した程の事故もなく無事に通過しお寄せた。然し、あの崖に僅かに突き出た棧道には屢々腐つた箇所も発見された。岩壁に打ち込まれた丸太が抜けかかつたものもあつた。

其処を何百人もの人間が重い荷物を担いで通るのだから考へてみれば冷汗ものに違いない。之がモンsoon中の雨で滑る時でなくつて良かった。隊員達にとつて大した事でなくとも重荷を背負つたポーター達にとつてはかなり悪い路である。

ニヤックへ到着の日、我々キャラバンの前を歩いてきたチベット人が一人数百米下の谷へ落ちたまゝとの事を聞いてひやりとした。実際に余り気持のよい場所ではなかつた。一九五四年の隊ではポーターが一人、余り大した事も無い処で流されて日本隊唯一の犠牲者になつた。日本アルプス辺の流れでも今以つて犠牲者が度々出ている。ブリガンダキの様な何日もかゝる悪路に大部隊を動かす場合慎重すぎる位であつて丁度いゝだろう。

キャラバン全体としてポーターの中に心配していた程の落伍者が出なかつたのも幸いであつた。ブリガンダキに入つてから夜は段々寒くなつたが、ろくな寝具を持たぬポーター達は附近の洞窟を深し求め焚火をして要領の良い泊りをやつていたのには感心した。そしてカトマンズのポーターの大半は裸足のまゝ荷物をサマ迄運んだのだ。途中から参加したグルンやチベット人のポーター達は、夫々手製の毛布やフェルトンの靴等も準備して、寒さには相当慣れて

いるので心配はなかつた。

病人も全体から見れば皆無に近く、辰沼ドクターや助手の山崎の注意深い配慮に負う処が多かつたと思う。

余興話になるが、ポーターが一人丈逃げ帰つた事がある。カトマンズで一人の男が是非連れていつて貰いたいと申し出た。聞いてみると鳥や動物の鳴声、自動車や飛行機其他色々な疑音が仲々うまい。カトマンズの猫八だ。それにマッサードが得意だ。私がやらしてみると成程素人離れた按摩の腕前だ。そこで長い道中、ポーター達をも楽しませ、疲れた隊員の筋肉をもみほぐすにも好適と思つて参加を許した。そして一応隊長附という事にして私の荷物を少担がせる事にした。隊長附というのが大分得意らしかつた。道中第一夜は忙がしくて按摩をさせる事を忘れていた。第二夜も同様であつた、処が第三日の未明、誰も知らぬ裡に彼が日当も貰わず逐電した旨の報告があつた。彼としてみれば、毎晩隊長の按摩をしたり、物真似をやつて皆を笑わせ、至極気楽な道中をやるつもりだつた処、初日からその存在を閑却され、二日目の晩にはシェルパ達が翌日から彼にポーター並みの荷物を担がせようと相談しているのを聞き込んで驚いて逃げ出した次第との事であつた。可哀想であつたが彼の滑けいな顔を思い出して皆腹をかゝえて笑つた。

キャラバンの朝の出立は仲々忙がしい。本隊の人数は先発隊に較べれば半分の百名程だが、之が早朝すつかり荷ごしらえをして出かけるのには相当手間どる。ポーター達は部落があれば必ずと云つていゝ位附近にダラムサラと称する旅人の無料宿泊所があるので此処へ泊る。そんな時は炊事も楽なので出発も楽だが、山間へ入つてそんな設備のない処ではよくしたもので、附近に岩窟があつたり要領よく三三五五泊り場を見つけて露営している。そういう連中が出立時に我々の天幕に集まつて来て、シェルパの指令を待つ訳だ。その頃我々は大抵未だ食事未だ。給仕をするシェルパは我々の済んだ後で食事をして、炊事天幕、食器の後始末をするので我々の後ろに突立つたまゝ頗る待ち遠し相な顔をしている。その間、隊員附のシェルパは其の主人達の天幕、其他一切のものを小気味好く片づけて荷造りを

済ませポーターに割当てる。一番やり切れないのは、食後の一休みが出来ない事だ。

若い隊員等、もう一皿御飯のお代りをと思つている時にシェルパは済んだものと思つてサッサと食器を片づけてしまふ。一寸腰を上げると椅子がサッサと持つてゆかれて了う。後ろには十五脚の椅子を運ぶ係りのポーターが二人虎視眈々と隊員の立上る隙を覗つているのだ。彼等にしてみればぐずぐずしていると荷造りに手間がかゝつて他のポーター達より出発が遅れて了うので気が気ではないのだ。折角のゆつくり一服も、椅子をとられては仕方なく、リュックサックの上や近所の岩でも見つけて腰を下ろす事になる。そんな具合に我々が一休みしたり、朝の生理的欲求を満足させて近くの谷や岩陰から帰つて来る頃にはポーター達はすつかり出払い、炊事天幕も片付いて、ゲルカ帽を斜め粋にかぶつたパンシーシェルパが炊事の一隊を引連れて出かけて行く。私は何時も二三の隊員と共に一番殿シヤカりとなつてゆつくりキャラバンの後を追つた。

四月十三日、カトマンズから十八日間の長い旅を続け到々サマのベースに入る日だ。途中、針葉樹林がぱつと開け、チョルテンが真中に建つている広い芝生に出た。会津から上越の山で時折美しい田代を中にかこんで森林が突然開ける景観を思い出す。然し此処では、田代(湿原)の代りに乾燥した芝生、周囲の森林の遙か上には、七千、八千米級の雪峯がぎつしりと屏風のように立ちはだかつている。遂にマナスルは私達の眼の前にあるのだ。高い。そして大きい。踏査隊の写真に依つて私の心の底に焼付いているその姿に今現実に向いあつているのだ。初対面の様な気がしない。恐ろしいという感もない。皆腰を下して繰返し繰返しその姿に見入る。稍々落着いて漸く地図をとり出し学問的な観察にとりかゝる。或る隊員はシェルパのハラハラするのを尻目に二米程のチョルテンに積石を蹴落し乍ら登ろうとしてゐる。二米でも高く登つてよりよい眺望を欲張ろうとしてゐるのだ。

風のないよい日和だが、マナスルの頂には雪煙がまつわりついている。其の右に鎗の穂先の様なピナクルが突き立っている。それから下に東尾根が吊り下つている。此の尾根は昨年今西隊が偵察して問題なく駄目なことが解つて

いる。望遠鏡で眺めるとプラトリーの線に出る前に既に大きな切れ込みが行途を阻んでいる。問題のノースコルは見えないが氷瀑直下の黒岩はよく見える。あの下へうまく行けば第二か第三天幕が張れるかも知れない。北峯からのかりに大きな雪崩があつたにしろ、黒岩の頭はうまくそれを二つに振り分けるか、どつちかの側に落してくれるだろう。竹節は去年に較べて雪は随分下迄下りていて凄味が減じているという。モンズン前の降り積つた雪の状態と、モンズン後の雪が溶け続けた後の状態が異なるのは当然だ。然しクレバスが雪にすつかり蔽われているのは或る場合通過しよいかもしれない。今日は兎に角、あの氷河の下迄行けるのだ。気が急ぐが仲々腰を上げる気にならない。それ程惹きつけられる展望なのだ。

北峯もナイケ山も良く見える。が、マナスルの南々東に続く七八三五米のP 29、七八六四米のヒマルチュリと、マナスルに劣らぬ氷の巨人達の系列である。何処かに登り口はないかと、各々の鞍部から、又幾つかの氷の皺の一筋一筋を視線が追い続ける。然しどれもこれも仲々厄介相だ。マナスルが登れたら此辺では何としても此の二つの何れかを試みたい。山に登る者は謙虚であるべきだ。然し同時に又欲張つた食欲もしきりに感じる。私丈の事だつたらうか？

二時間余も此処にねばつて漸くみこしを上げた。森林帯を抜け出た高台から、直ぐ眼の下に広々としたゴルフ場の様な芝地が現われ、犂牛が点々と草を喰んでいる。チョルテンやメンドンが続く先には、サマの部落が一塊りに見え、その奥の僧院の屋根が黄金色にキラキラと輝き、何か平和な桃源境に近づく様な甘美な胸のときめきを感じた。

#### サマのベースキャンプ

四月十三日、一日先に到着した先発隊に依つて一応の根拠地らしい準備の出来上つたベースキャンプに本隊としてのキャラバンの終止符を打つ事になつた。高木以下吾々を迎える先発隊の連中は既に余程前から此土地に住みついて

いるといった顔付である。

此の日は私にとつて亡母の四十年忌で、ティルマンの丘で迎えた私の五十三回目の誕生日と共に此のヒマラヤの旅での思い出となるべき日である。

此処は三八五〇米、B・Cとしては少々低い憾みもあるが、高度という点を除いては先ず申し分ない地点である。日本に居る時から想定していたB・Cとしての必要条件は概ね備えていた。

良い水と豊富な燃料が近くから得られる。サマ部落は約一時間行程の近距離にあり、必要に応じ労力食料共此の部落を中心に近接した部落から入手し得る便宜があつた。

地形から云うと、マナスル氷河の舌端に面した古い堆石に続く台地にある広場で、夏季牛飼が放牧に登つて来て滞在する為彼等の住居となる石を積んで囲いを作つた放牧小舎の跡がある。この小舎の事を土地のものはカルカという。其の芝の広場は北側に樹木の繁つた丘がもり上り、ずっとナイケ山（六七〇〇米）の背稜に迄続き、うまい具合に寒い風を防いで呉れている。東南はずつと開けてサマの部落やそれに続くゴルフ場の様な美しい広場が遙かに見下ろされる。西には直ぐ疎林が続ぎ、之は間もなく急な登りとなつてマナスル氷河の左岸への登路となる。

先ず長期滞留の基地として、傷病者の療養の為、又高度にやられ、或いは激しい登攀に疲労した隊員の元氣回復の為、等といった諸条件を充たすのに此以上登つては到底これ丈のB・Cとしての好適地は得られないであらう。

その意味で更に出来る丈快適な設備をするべく努力が続けられる事になつた。

屋根こそないが幾つかの放牧小舎の趾は仲々役に立つた。ポーターの寝場所になり、吾々の食堂や台所にも利用された。土建屋重役の経歴を持つ加藤泰安は、此の食堂の石壁の外側にシェルパを動員して重い石を積み上げ煙突を構築した。その基部、石壁の内側には洒落た煖炉迄作り上げた。又、西側の壁の一部がくり抜かれてビニール布を硝子代りにした気の効いた明り通りの窓も出来上つた。

窓の下の石を積んだベンチには柔かい杜松トウシュの葉がクッションとなり、その前には食卓代りのキャラバンボックスの  
一列を隔てて折疊式椅子が並び、十三人の隊員が同時に坐れる立派な食堂兼集会所となつた。それ迄は夜になると、  
食後の会談には羽毛衣に着ぶかれて、寒い何時間かを過さねばならなかつたが、煖炉が完成してからはぬくぬくと快  
適な夕食の後、寝る迄の時間が惜しい程早く過ぎる様に感じられた。

この食堂は懸賞に依つて現地ロクシユ（日本の焼酎に類する酒）に因よんだ「麓酒亭タカサカ」という名が採用され、当選者  
村山隊員は隊長賞ビール一缶を獲得した。

無邪気なシェルパ達は、始めサーブ連が何の工事を始めるのかと不審顔だつたが、仕事が行進するにつれ興味を持  
ち始め、覚えてたての炭坑節を片言交りに歌い乍ら好く終い迄手伝つた。彼等は窓の台石や、食堂の入口の軒端等に、  
いつも美しい花の束を飾る事を忘れぬ風流さを持つていた。又、最年少のシェルパ、チビ（綽名）によつて煖炉の上  
の壁に山羊の頭骨が飾られた。それは何時しか焦茶色にいぶされ仲々渋味のある置物となつた。が、B・C撤収のど  
さくさの時、素早い隊員の一人の記念品として密かに彼のキャラバンボックスに藏い込まれた様だ。

又、加藤泰安は、広場の一隅にシートを壁と天井代りにした一坪程の浴場を作つた。焚火で焼いた幾つかの石を持  
ち込み、備えつけの馬穴の水を除々に注ぐ事に依つて生じる水蒸気の中で、吾々は快適な蒸し風呂を楽しむ事が出来  
る様になつた。始めは、雪降りの時でも、次々に満悦の態で此の天幕風呂へ出入りする裸のサーブを薄気味悪相に眺  
めて居たネパール人の通訳や、シェルパの何人かも、終いには此の味を覚えて了つた様だ。生れて以来温浴の味を知  
らぬ彼等にとつて異常な経験であると同時に案外快適な味に驚いたらしい。

飽く事を知らぬ泰安棟梁は、今度は、又他の一隅に手頃な面積の石を鋳板代りにした御狩場焼の設備をこしらえ上  
げた。隊員達はその囲りに腰を下し、辛子醬油カラシに犂牛ウシの焼肉で驚くべき食欲を發揮してその健啖振りにシェルパ達の  
胆を冷やした事一再ならずであつた。

ヒマラヤ登山隊中かゝる施設を備えたものは恐らく吾々をもつて嚆矢とするかも知れぬ。之も泰安隊員の器用さなくしては望み得べくもなく、同時にかゝる遠征時にこの位の余裕を持ち得た事を今以つて感謝している。

麓酒亭に続くコックのパンシーシェルパが陣取る厨房の他に、大小十五程の天幕が張られた。その中には食糧、裝備品の保管用、或は医療用の特殊のものもあつた。又氣象観測の為に諸種の気圧計、温度計、湿度計、風速計等も固定配置された。

此処に到着して私が最初に心配した事は便所の問題であつた。長期間相当数の人間が滞留する場合、この幕営地を清潔に保つことは衛生上の見地からも当然必要な事である。それで天幕群から稍々離れた一定の個所に黄旗を立て、此処を隊員用の場所と決定したが、悪天候の時等、たまに手近な処で間に合せる無神経なものもあつたが、事柄が事柄丈にそう嚴重な取締りも出来なかつた。シェルパやポーター達は紙を使用しないので、その用を足した場所はサーブのそれと直ぐ識別出来るが、案外彼等は御行儀がよかつた。英国隊等に依るしつけの影響によるものではなからうか？ 然し乍ら、兎に角二ヶ月に亘るB・C滞留中近くに非衛生極まるサマを控え、屢々その部落民の訪問を受け、又食糧物資を仕入れていたが、チブス、赤痢等の発生もなかつたのは幸いであつた。之は辰沼ドクターの隊員シェルパ達の保健に対す熱心な努力の賜である。又部落民への予防注射等も見えぬ効果を發揮していたと思える。

B・Cに於ける最初の一週間程は屢々降雪があり、天候も定まらなかつたので此の期間を利用して前述の様な設備の強化が進められ、又一方、複雑極まる食糧裝備の点検等の為有効に時間を使用する事が出来た。その後、行動が始められてからも骨休めの日等には、隊員やシェルパも一緒になつて運動会を催し、走巾飛びや手頃な石を利用しての砲丸投等に技を競い、各自持て余した元気を発散せしめた。

夜は麓酒亭に於て夕食後の数刻を今後の計画方針等に就ての研究討論に費し、或は句会を催したり、童心に還つて怪談に花を咲かせた事もあつた。

此処は、サマの部落民が後ろの山へ薪をとりに来る丁度途上であり、彼等はその往復の都度吾々の生活を珍しがり、又何かと物欲しそうに天幕の傍に座り込んで動かぬものが多いので、天幕場の周囲に縄を張り廻して彼等の矢鱈に入り込むのを防いだ。之はネパールの何処へ行つても経験する事で、英国のエヴェレスト隊も最初のB・Cで同様の経験をしている。

### サマのラマ僧院訪問

B・Cに到着して四日目の四月十六日、予め打合せの上サマのゴンバに儀礼的な訪問を試みる事になった。というのは、吾々がB・Cに長い間滞留する間、相当量の食糧物資の供給、人夫の提供等を此の部落に仰ぐ必要があつた。所が、此のサマに古くからあるラマ僧院の僧正は、その宗教上の見地からも此の谷の附近一帯の部落民に君臨する大きな勢力の保持者である關係上、吾々としてはどうしても相当の敬意を表す必要があつたのだ。

一行は私の他に竹節、高木、加藤(泰)、山崎、石坂、依田、通訳のデイリー、サーダーのガルツェン他シエルバ数名であつた。

此の僧院はよく手入れの行き届いた公園の様な芝生に取囲まれ、遠くから眺めると屋根の上の法輪が金色に輝いて仲々美しいが、近づいて眼のあたり見ると相当薄汚い建物である。泰安は蒙古のラマ廟に較べて問題にならぬ程見劣りがするという。私がシッキムのパミオンチで御詣りした僧院も之よりは遙かに立派であつた。が、此のブリガンダキ溪谷の果てでは第一の僧院であるとの事だ。

やがて、七十余才という老僧正とその弟の僧正が現われて、一行は寺内に招ぜられ正式の会見が始まつた。傍には五六人のラマ僧が胡座をかいて細長い紙片の経文のコーラスを唱え乍ら、吾々の様子を好奇の面持でちらちらと盗み見ている。正面には巨大なけばけばしい色彩の仏像を中心に、之亦原色調の曼陀羅が垂れ下つている。仏前には真鍮

の灯明鉢にバターの灯がともし、米や花の数々が供えられている。

私の英語の挨拶が、通訳のデイリーのネパール語でガルツェンに伝えられ、それが西蔵語となつて僧正に伝えられる。僧正の言葉はその反対の形式をとつて私に戻つて来る訳である。

私の最初の言葉は、去年日本隊が此処で大変御世話になつた事の御礼と、今年も何分の御協力を願いたいという事であつた。之に対し僧正は、のつけから意外な事を言い出した。「去年日本隊がやつて来た為に腸チブスが流行してとんだ厄年であつた。今年もそれが心配だ。」と。デイリーが早速反駁した。「チブスが流行したのは日本隊が来る前からだつた。それで去年は林ドクターが大勢の患者を治療してやり、瀕死の状態だつた僧正の息子を助けてやつた事をよもや忘れはしないだろう。」と。僧正はケロリとした顔で続けた。「カンブンゲン（マナスルの西蔵名）氷の肩の意）の頂きには古来ダイヤモンドと金がある。之を取つて行かれては困る。」と。こんな荒唐無稽な話に真面目な返答をし兼ねていると、ガルツェンがすかさず「自分達は只カンブンゲンの写真を撮るのが目的なのだ。」と当意即妙な返答によつて巧みに僧正の鋒先を外らした。僧正は更に言葉を続け「御山が荒れるから鳥獸を殺生する事は慎んで貰い度い」と。

その時傍に立つていた山崎が厭に神妙な顔をしていた。彼は此の朝B・Cで鳴兎を撃ちとめてガルツェン達にたしなめられた許りの処だつたのである。信心深いシェルパは山へ登る前には殺生は慎んでゐるらしい。山崎は動物が専攻で解剖学教室に籍を置く学徒。珍らしい動物の剥製が重要なのは商売柄止むを得ないのだ。

問答は之で無事解決。お互に協力し合う事を約した。尤もこの問答中、向側の発言者は能辯極まる弟の僧正で、彼はなかなか油断のならないスマートさの所有者だとの事を聞いていた。老僧正は終始黙つて合槌をうつていた。此処で老僧正は正座につき礼拝の式が始まつた。私達は仏陀の前に立つて合掌し、米と水を供え、ガルツェンは床に身体を伏せ正式なラマ教の礼拝をし、他のシェルパは之にならつた。そして私はガルツェンから渡された一握つかのルピー銀

貨を老僧正の経机の上に積み重ね、部落の病人はいつでも治療するし必要な薬品も喜んで提供しようと申し出た。老僧正は之に対し後刻全僧侶を集めて吾々の為に登山の無事を祈るであろうと約束した。

この間、続けられたラマ僧達の誦経のコーラスは、単調で余り高低はないが一種怪奇な環境の裡にあつて、快いハイモニーとなつて私の耳にいつまでも残つていた。

僧院の前には吾々を取り巻いてボロ着物を纏つたラマ僧達が雲集した。竹節の持参した唐獅子を染めた真赤な絹の風呂敷の贈物に僧正達は満足げに目を細め、シエルパが配る硝子の色とりどりの美しい腕輪に、ラマ尼達は相好を崩して奪い合いを演じた。そして人々は、大声で独り言を言つてるかにみえるB・Cと通話をする石坂の無線に驚威の眼を見張つて飽きなかつた。その驚きは、日本の開国当時見物人が声の伝わる電話線に胆をつぶした以上のものであつたかも知れない。

僧院訪問を終つた吾々は、猶も煩くつき纏うラマ僧や部落民から逃れて去年の隊のB・C近くの広場で遅い昼食をとつた。去年の隊は此処へ天幕を張つて僧院からやれ殺生をして血を流しては困るとか、附近の薪木を切つては困るとか、色々な注文をつけられて閉口したとの事である。今年のB・Cが更に高い処に選ばれたのにはそんな事も一つの理由になつていた。

ラルキヤ峠への岐れ道のチョルテンから左へ折れ、マナスル氷河の舌端が正面に見える頃から陽はかげつて薄ら寒くなり、B・Cの人声が聞えて来る時分には空は大分暗くなり小雪さえちらつき出して来た。

## 登攀の計画

登攀の計画に就ては一九五二年度の今西隊の報告が当然重要な資料となつた。その時の写真と、又その写真に依つて作製された地図は未だ見ぬマナスルの山貌を色々な角度から想像し得る或程度概念を形造るのに非常に役立つ

た。特に竹節の撮影になるラルキャ氷河から見たマナスルの北面はナイケ・コルから黒岩、氷瀑地帯、ノース・コル、プラトール、頂上と余す所なく露呈され、更に東尾根附近から撮されたナイケ山、北峰を背景とするマナスル氷河の全貌は、黒岩、氷瀑地帯等その側面から見た地形と相俟つて其の地域の傾斜度距離等を想像するのに又々大いに役に立つた。

勿論之等の写真は前年のモンスーン後に撮られたものだから、吾々のモンスーン前とは積雪の状態に於て或程度の相違は当然ある筈だが、地形全体に就ては私にとつて、他にかげがえのない参考資料であつた。そして此の二葉の写真は其後、依田がナイケ・コルから撮つた氷瀑地帯の望遠写真と共に登攀中いつも私の肌身離さず持ち歩いたものであつた。

一番懸念されたのはナイケ・コルから上の氷瀑地帯であつた。そして前述の写真は拡大鏡を通して仔細に観察され、それ等の氷瀑の個々に就てその大きさが丸ビルの何倍位かといった具合に比較検討の対象にもなつた。

その当時私は、エルゾグのアンナブルナの英訳本を繰返し読み耽つて居た。それを通して何となくアンナブルナがマナスルに対する想像上の諸条件と一脈通ずる相似点がある様に思われた。之は勿論私個人の観念的な想像ではあるが、之に基いてキャンプの進め方といったもの等を比較して地図上に置いてみたりした。そして漠然として之はあつたが伸縮性を持つた案も一応頭に描く事が出来る様になつた。只フランス隊のとつたラッシン・アッタックのみには全面的には賛成し兼ねたが、飽く迄慎重にキャンプを進める中に必要に応じては或程度の部分的ラッシンの必要は起り得るだらうと考えた。今此の稿を走り書きして居るノートの一端に当時アンナブルナと未だ知られぬマナスルを比較してその距離、時間、速度、天幕の進め方、隊員の配置方法とかがメモされたのが残つて居るのを見返して感無量である。

以上は東京に於て出発準備に多忙を極めつつあつたさ中に考えられた方針の一つであるが、更に具体的な計画に就

ては現場の実際の諸条件が考慮されるべき事は当然である。

ベース・キャンプの設営が一段落つき、第一キャンプが張られ有線電話が架設された頃から真剣に計画の第一歩が始められつゝあつた。

四月十九日、ベース・キャンプの食堂に於て私と高木、田口、加藤（泰）が集まり、始めて次の様な登攀の第一次基本案が作られた。

第一隊 高木、田口、竹節、ガルツェン、アンダワ。

目的、前進基地としてのナイケ・コル偵察。

第二隊 加藤（喜）、山田、村木、シエルパ三名。

目的、第一隊のサポート。

第三隊 村山、山崎、石坂、残りのシエルパ及ポーター若干名。

目的、前進天幕への荷運び、電話線の架設。

問題の鍵となるものにナイケ・コル、氷瀑地帯、ノース・コル、プラトーといった具合に幾段階もの未知の境地が多かつた。隊員の構成に就ても仲々早くから決定的な編成を作り上げるのは難しかつた。其処で始めからしやくし定規的な極地法式に依る細い日程の作製は避け、状況に依つては充分伸縮性を持たせる方法をとり度かつた。一度予定の一部に変更が起ると、余りキチンと細かく作られたプランは之を組み変えるのが仲々困難と想像されたからである。勿論未知の地域が少ない場合は、相当突込んだぎりの線迄の計画は或程度当然可能ではあると思われるが。

私としては東京で隊長を引受ける条件の一つとして年齢、体力から言つてもB・Cに留まる事を妥当とした。B・C以上は高木に登攀の責任を持つて貰う事にした。高木と田口はアルプスでの氷の充分な経験者として、又前年度マナスル踏査隊員として氷河やヒマラヤに就ての若い未経験の隊員達を指導し得る絶好の有資格者と思われた。

竹節は全隊員中ヒマラヤでの最古参者であるが、新聞報道という特別の責任を持たせられて居るので報道、写真担当の依田と共に攻撃の主力行動に縛られぬ必要があるという事が考慮された。が、同時に竹節は前年度高木がマナスル氷河でクレバスに落ち、九死に一生を得た時の同行者として高木とは特別な因縁があり、偵察には兩人でザイルを結び会う機会を持たしめ度かつた。又、何とかしてノース・コル迄は事情の許す限り登つて貰い度かつた。然も之は私の感傷的な面が手伝つた事かも知れない。アルバータの岩壁登攀に楨氏と私は特にアンザイレンした。前年冬の立山遭難で生死を共にした仲であつたのだ。そんな事も思い出して居た。

結局、竹節は高木と偵察を共にし、ノース・コルにも達して私の希いはかなえられた。

頂上を覗う最初の隊員としては加藤(喜)、山田、村木等が一応考えられ、登頂隊としては二つ以上編成され、必要に応じては慎重度を考えて高木、田口等の年配経験者をそれ等の各隊に混えてはどうか等様々な案が考慮されもした。

エヴェレストのハント隊の様に、始めから綿密な予定行動が殆どその計画通り遂行されて居るのは羨ましい限りではあるが、エヴェレストに対する英国の長年に亘る豊富な経験と知識の上に、更に一九五〇年の瑞西隊に依るサウス・コル以上迄がすつかり解つて居た事は誠に大きな利点であると云えよう。

兎に角、吾々にとつてはマナスル氷河以上は未知の世界であつた。そして取り敢えず既述の様な大まかではあるが一応の第一次登攀計画に依る三隊が編成され、直ちに実行に遷される事になつた。

## C・1—C・4 建設

四月二十日、降雪中にC・1が予定通り四六〇〇米の地点に建てられ、B・Cとの有線電話が通じた。

四月二十二日、此の日の前進は予想を裏切られC・1から僅かに登り、堆石の上端が尽き様とする氷河上の小高い

雪上五〇〇〇米の地点にC・2が建設された。雪崩からの安全性という必要条件を充たす為にC・1から比較的距離ではあつたが敢えて此の地点が選ばれた。従而其後C・1は単に荷物の置場所、連絡天幕としてのみ利用される事になり事実上宿营地としての価値はなくなつた。

始めの予想では前年度、此の氷河を登つた竹節、高木等の経験から、あわよくばC・2をナイケ・コル或は其直下の黒岩辺に置けるかも知れないといつた甘い考えもあつた。処が、キャンプを進めるに従つて其の距離が意外に遠く、漸くにしてヒマラヤのスケールに対す認識の薄弱性が現われ始めた。シェルパの一部にもマナスルはエヴェレストに較べ奥行が仲々深いと言ふ者が居た。

四月二十三日、高木隊はC・2を出発、前日に引続きスキーを駆つてナイケ・コルへの登路を索め、午後三時半初めて此の五六〇〇米のコルに立ち、吾々にとつて第一の鍵の謎が解かれた。スキーで此の高度に達したのも一つの記録であらう。

途中彼等はC・2、ナイケ・コル間の五三〇〇米の地点にC・3の予定地を選んだ。此の一日一行は氷河上の登高で蒸風呂に閉じ込められた以上の想像に絶する暑さを初めて経験させられた。此の日から登山の終了した六月二日迄の約四十日間、一行中の誰かしらは好天の日である限り此の氷河地帯の何処かでこの焦熱地獄の苦しみを味わされる事になつた。

此処にナイケ・コル迄の状態は略々判明したので、後は前進根拠地となるべきナイケ・コルのC・4建設、その為のC・1、C・2、C・3への荷上げと其等キャンプの整備、登路の固定等順次遅滞なき行動が必要となつた。それ等の行動はB・Cと連絡を続けつつ複雑な運行が開始された。

此の頃、ナイケ・コルが意外に遠く、其の上部氷瀑地帯、ノース・コル等の状態が依然不明であつたので、未だ確定的な登攀計画を樹立する段階には到達しなかつた。天候は大分落付き始めたかに見えたが、根本的打合せを必要と

した為全員一応二十五日にB・Cに集結する事になった。時間的に惜しい気もせぬではなかつたが、全員第一次の高度馴化を経て小休養をとりつゝ根本的な登攀計画を樹てる意味に於てあながち無駄ではなかつた事と思う。

二十六日のB・Cは隊員、シエルパ、ポーター合同の運動会に賑わつた。隊員では竹節、加藤(喜)、シエルパではアンナプルナの勇者サルキー、エヴェレストのゲンディ等砲丸投げや走巾跳びに仲々の元氣を見せた。年寄組では私も亦運動神経のにぶいガルツェンやパンシー等と巾跳びを競つた。

B・Cに到着早々の頃、加藤(泰)が食堂の煙突建設工事に映画のスローモーション宣敷く、息を切らして居た光景も夢の様な話で、この頃は皆第一次の馴化を経て平地に於けると変らぬ程の元氣になつて居た。

廿六日から順次所定の行動が開始された。卅日には村山隊に依つてナイケ・コルにC・4が建設され、之が強化の為に各天幕間の複雑頻繁な輸送と整理が続けられた。

五月に入り、三日には加藤(喜)隊に依つて電話線がC・4の一五〇米程下の小さな口を開けたクレバスの傍迄延ばされたが、電線不足の為此処が電話線のターミナルになつたのは残念であつた。電話器は氷河上、スキ一の両杖に固定され防水袋をかぶせられた。吹雪の時等此処迄電話をかけに下りてくる隊員の労苦が想像された。此処を吾々は公衆電話と称した。

携帯無線電話は強力な印度放送や地形的条件等に邪魔されて頼る頼りない状態だつたのでC・4、建設迄有線電話はB・CとC・3の間を連結し非常に役に立つた。一度C・1とB・C間が雪崩で切断されたが直ちに修理された。が、隊員シエルパの大半がB・C以上に遷つてからは、途中の電話器設置場所等の監視が充分でなかつた為後半用をなさなくなつたのは残念であつた。

四日の朝、高木、田口、辰沼、加藤(喜)、山田、村木、山崎、石坂の八隊員、ガルツェン以下十名のシエルパと三名のポーター、合計二十一名という大勢の人間が此の高度五六〇〇米のコルに初めて顔を揃えた。氷の家イグルー

が作られ、十数張のオレンジ色や緑色の天幕が並び、氷雪の天界に美しい小部落が現出した。

約束通り、全印度放送からの日本隊向けの気象通報は一日から毎夕六時正確に開始されて居た。その放送は優雅な印度音楽に始まり、次に英国のエヴェレスト隊向、スイスのダウラギリ隊と続き、最後に吾々マナスル隊向という順序だったので聞き洩らす恐れが少なかったのは幸いであつた。調子の好い時は東京からの海外放送を、其後出来た水の壁に囲まれた食堂内で隊員が揃つて聞く事も出来た。

此の頃、B・Cとこのナイケ・コルの前進根拠地たるC・4の間には最下部のモレーンから氷河上を縫つて赤、黄、緑といった竹竿に結んだ標識旗が、約五十米間隔に蜿蜒と続いて立ち並んで居るのは壯観であつた。余程の猛吹雪でもなければ、この旗の列に沿つて踏みならされた路を迷う事はなかつた。そして毎日欠かす事のないポーターから成る忠実な輸送隊は、B・C及C・4の二つの根拠地間に於ける月余に亘る食糧物資の流れの役目を果す重要な動脈となつた。

### ノース・コルへの道

第一目標たるナイケ・コルの基地が出来上ると引続いて第二目標たるノース・コルへの登路探索が必要であつた。が、其処には始めから心配して居た複雑なクレバスとセラックスを織り込んだ危険にして厄介極まる氷瀑地帯が行途を阻んで居た。

五月三日、高木、田口、竹節、山崎、石坂、ガルトツェン等の偵察隊を皮切りにこのアイス・フォール突破に果敢な口火が切られた。加藤(喜)、村木、山田、他に残余のシェルパが其の後からサポートする。

直ぐ眼の前に見える黒岩に達するのにもまだるつこく感じる程の時間がかかる。此の黒岩の急崖に固定綱がかけられ、その頂を越えて尾根上五九〇〇米の地点にC・5が建設され、更にアイス・フォールの中間六一〇〇米の出張り



才六キャンプよりピナクルを望む



にC・6が設営された。

其の間の偵察隊の労苦は並大抵ではなかつたろう。ナイケ・コルから彼等の姿が点々と嬰粒せつぶこの如く少さく、虫の這う様に右に左にのろのろ氷瀑の間を攀じてゆくのが好く見える。ぼつかりと巨大な口を開け、氷河底部の岩床を露呈させて居る崩壊地帯の下を左へ巻いてノース・コルへ続く雪原へ出る登路は断念した様だ。その巨大な割目の氷壁の高さは恐らく丸ビルの数倍もあるうか。屢々何百何千屯とも知れぬ氷塊が崩れ落ちる危険の前に、當時隊員やシェルパから成る輸送隊の通る登路としては到底無理な地形であろう。登路は之を避けて急な氷雪の大きなクローアルを直登し、懸念して居た北峰のつけ根へ続く急な氷谷へ入る事なしに、六六〇〇米の辺から急に左に巻いてノース・コルへ続く雪原への途上にC・7の地点を発見した。

此の頃、偵察隊の行動はC・4から望遠鏡を通して終始熱心に見守られて居た。何度も方向を変えて行きつ戻りつが繰返されて居る光景がどんなに吾々の胸を痛めたか？ 一時は此の登路も断念させられるのじやないかとさえ案じられた。

それ迄に隊員の或者は小さなクレバスに落ち、或は又雪崩に腰の辺迄埋められた事もあつたが幸いにして何れも大事に至らずに済んだ。

兎に角、懸案の難関アイス・フォール地帯が突破され、五月十一日、ノース・コル下の六六〇〇米にC・7が設置され、高木、田口、山田、ガルツェン、サルキ、ラクパの六名が此処に泊つた。そしてノース・コルへの偵察が急がれた。が、十二日の偵察でコルは七〇〇〇米より高い事が想像され、其辺の高度に頂上攻撃の最後の前進基地を設け、其処に相当期間滞在する事の可否に就て疑念が持たれた。と言うのは、大体人間の高度馴化の限度が六五〇〇米から六六〇〇米(C・7の高度)であつて、七〇〇〇米からの高度に長く滞留する事は折角馴化した体力が精神力と共にどしどし減退して来ると言う従来の方考に依るものであつた。同時にその時の偵察の様様では、ノース・コル

附近には雪崩や強風に対する安全な場所を得る事が仲々困難であると思われた。そしてC・7ならば一応の前進根拠地としての役に立つのではないかと言う稍々消極的な考え方も持たれたのであつた。

十三日のC・7には高木、田口、加藤(喜)、山田、村木の外シエルパのガルツェン、サルキ、ラクバ、アンテンバ、ミンマシータ、アングワといった強力な面々が揃つた。

然し此の時、食糧担当の山田から高所食糧カウシレボの余裕が一週間分程の残量であるという驚くべき報告がなされた。燃料のメタの不足も此の不安を加重した。勿論綿密な計算の許に行動は続けられて居たのだが、兵站線が意外に伸びた事、日程のずれ、C・4迄のポーターの増員等色々計算外のファクターが悪く重なり合ひ、計画に多少の齟齬を来たした事は否めなかつたかも知れない。天幕の数が殖え、人員の移動、食糧の配置等が複雑になると、色々な数字の完全な把握は当時天幕間の通信連絡が困難を増してきた此の高所では想像外に難しい事態に陥る。その上一日でも天候が狂つたなら計画は相当な影響を蒙る事になる。

此の状態では充分な日時をかけてノース・コルに前進基地を設ける余裕はなくなつた。隊としては此の短い期間に出来る丈の事を試みる事になつた。即ち偵察隊中から攻撃メンバーを選んでラッシ・アタックをかける事も考えられた。此の事あるを予想して居た訳ではないが、吾々は始めから余りに縛られ過ぎた計画にこだわる事なく、時に応じ伸縮性ある行動をとり度いという考えは持つて居た。

此の頃、食料燃料の再検討の為、早速責任者たる加藤(泰)はC・4から急遽B・Cに下つた。そしてB・Cから現地補給に依る食糧の荷上げが迅速に実行に遷される為B・Cの老パンシーと綿密な打合せが行われた。同時にC・3以上にダンブされて居た高所食糧ハイシレボはどしどしC・4以上に運ばれる事になつた。

十五日、快晴を利用してC・7の高木、田口、加藤(喜)、村木はガルツェン以下六名のシエルパを連れて上方に向つた。深雪とクレバス、雪崩の危険と高度という悪条件と闘い乍ら七一〇〇米の稍々不安定な地点に三つの天幕を張

つてC・8を設置した。高木登攀隊長は去年クレバスへ落ちた時の額の古創の痛みの為不眠が続き途中からC・7へ下つた。既に雪は降り始めガスがかゝり、C・8には三人のサーブが残り、シエルパはガルツェン、サルキを残して他は逃げる様にC・7へ下つて行つた。

十六日、快晴、調子の悪いガルツェン、村木を残して田口、加藤(喜)、サルキが問題のプラトールへの登路偵察に向つたが、降雪に前進を阻まれてC・8に引返した。此の日標識旗を樹てる事をしなかつた為に視界の効かなくなつた濃霧中を辛うじて天幕に帰りつけたのは幸運であつた。

此の夜、C・8には加藤(喜)の外、下から再び上つて来た高木に山田を加えてサーブが三名、サルキ、ラクパ、アンテンバ、ミンマシータの四名のシエルパが泊り、田口、村木、ガルツェン、アングワはC・7に下つた。

十七日、快晴乍ら強い西風に吹かれつゝシエルパ隊に続いて高木、加藤(喜)、山田のパーティが深雪を漕いでプラトールに向う。プラトールへの登路に就ては色々論議されたが結局プラトールの右端の岩峰左寄の急な岩と雪の斜面を直登する事になつた。が、腰迄のラッセルといつた状態では午後三時に漸くプラトールへの半分程の地点に達し得たのみであつた。此処で加藤、山田は他の連中を帰えし、雪洞を掘つて一夜を明かす事になつた。そして翌日サポート隊が攻撃隊に続いて天幕其他をプラトールに運び上げる事になつた。高度約七三五〇米。ヒマラヤに於ける雪洞露営の数少ない例の一記録とならう。

彼等の日本の積雪期に於ける長年の経験と自信があつて始めてなし得た大胆な行動である。かゝる悪条件の高処で悠々と眼り得る彼等の体力は敬服に値する。然し翌十八日は非常な強風で雪を交え、急斜面には雪崩が発生し始め、プラトールを覗う等到底不可能な状態であつた。強風の程度はC・8への標識旗の多数が吹きちぎられ竹竿のみ残つて居るといふ凄まじさであつた。そしてプラトール奪取の企ては見事失敗に終つた。

## 頂上への残された機会

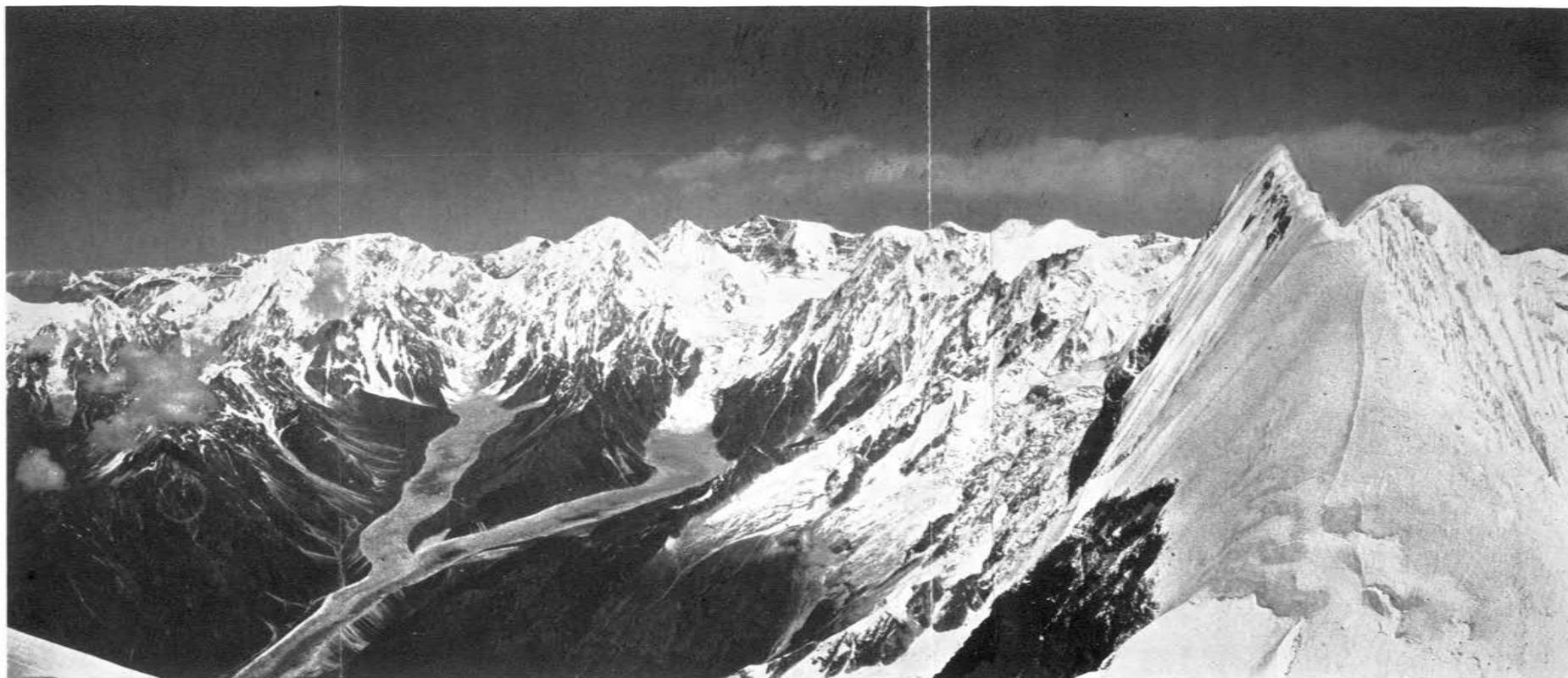
此頃、高所に居た頼りとするシェルパが続々と参つて来た。先ず頭目<sup>チヤイ</sup>のガルツェンが弱り、辰沼の勸告に依り若いニマツェリンと共にB・Cに下ろした。アンナブルナの勇者サルキも胃を痛め隊員附添いの下にC・4に下ろす。其他のシェルパにも弱つて意気の上らぬ者が続出して来た。

食糧問題は一応加藤(泰)が慎重に検討の結果、不足分はどしどし現地補給のものをB・Cから上げる事に依り或程度解決のめどがついた。燃料の石油やメタは各天幕の残量をかき集めたが節約しても相当心細い状態にあつた。が、兎に角不満足乍ら第二次攻撃の爲十日間は充分賄う事の出来る準備が出来上つた。

十九日、総ての情勢から判断して、高所天幕で非常に疲れて居る全員を一応C・4に下ろし、充分な休養の後、一挙に攻撃に移る事の得策なる事が決定された。此の指令が全天幕に伝えられ、二十二日には全隊員シェルパと共にC・4に帰投、休養する事になつた。此の休養は非常に効果があつた。そして全員見違える様な元氣にたち還り、二十五日を期して第二次の登攀を開始される事になつた。

かくて、登攀隊員とサポート隊は順次高所キャンプに移動を開始し、二十九日にはノース・コルのC・8には高木、加藤(泰)、山田、山崎、石坂の外ガルツェンを始め五名のシェルパが入る事が出来た。

最初吾々の第一次頂上攻撃の予定は五月十八日であつた。それから見ると既に十日余りも遅れて居る。遅くも五月中には頂上攻撃を終了し度かつた。というのは、モンソーンの襲来が統計上平均六月上旬であつたからだ。然し乍ら幸いな事に此の年は五月の下旬になつても毎日少く共午前中は快晴が続いた。此の事が色々な悪条件にも拘らず第二次攻撃を可能ならしめた原因となつた事は否めない。若し始め心配して居た様に、五月中に天候が崩れ始めたならば、吾々は恐らく二度目に集結したC・4から早々に引上げねばならぬ状態にたち到つたらう。天候が荒れて退路が



7300米附近より見た西藏の山々



遮断される危険も充分考慮に入れる必要があつたからである。過去にも幾多の遠征隊がそういった悲劇に見舞われて居る例がある。

事実、オール・インディア・ラジオは二十日を過ぎる頃からモンスーンの近接を報じ始めた。

二十七、八日の予報は、「モンスーンがアンダマン海より発達しつゝある」と報じた。廿九日には、更に「セイロン南部に発生したモンスーンがアンダマン方面のものと合流するだろう」と報じた。三十日には、「アンダマン海の南東モンスーンはエヴェレスト地域に迄発展しつゝある」と報じ、同時に次の様な興味ある放送を続けた。即ち、「ナムチエバザールから全印放送への報告に依れば、英国エヴェレスト登山隊は頂上への最後の攻撃を待機中である。二回の企てに失敗した彼等は更に好天を期して攻撃を試みるであろう。彼等の到達した最高地点は二七五〇〇呎であり、撤収は六月七日の予定」と。此の放送のあつた前日の二十九日に英国隊はエヴェレストの頂を極めて居るのだ。

三十日は快晴だつたが強風に暴れた。折角此処迄頑張つた高木登攀隊長が古創の痛みの再発と不眠とで、残念乍らC・7へ下るの止むなきに到つた。それにサーダーのガルツェンが又高山病にやられて高木に従つた。手痛い打撃である。

此の日はプラトリーへ登る予定日だつた。B・Cでは十八倍の望遠鏡に早朝からしがみついて、プラトリーの斜面に一点の動きも見逃すまいと凝視が続けられたが、遂に何等の行動をもレンズに捉えられぬまゝ、午後は雲の為に視界を遮られて了つた。

その日の午後四時、B・Cに突然竹節・依田の二人が姿を現わした。二十九日、彼等はC・8に登り着いたが、其処は少しでも燃料、食糧等を節約せねばならぬ状態にあつた。二人は未だ体力の余裕を残し乍らさし迫つた其時の事情を察知し、其処に滞留する事を断念してC・4に下つたのである。報道班としては登攀のクライマックスたるべき

頂上攻撃の模様を捉える責任もあつた筈である。が、それを断念したのも攻撃隊に飽く迄協力すべき一つの立派な犠牲的行為であつた。

二人は下りの途中々々、双眼鏡でC・8からプラトールへの攻撃隊の動きを注意深く観察したが、何等得る処がなかつたという心細い情報を齎らした。

B・Cでの三十一日の朝が来た。快晴でプラトールへの急斜面は丸見えだつたが、強力な望遠鏡にも拘らず、其処に攻撃隊の動きを発見する事は出来なかつた。午後には例の通り雲が捲き上り視界は閉ざされた。かくて焦慮の裡に迎えた其の日の夕、C・4の村山からぶちのめす様な悲報が届いた。C・7の加藤(泰)からのリレーされた二十九日付の報告である。曰く「攻撃隊は昨三十日烈風の為C・8から行動出来ず、三十一日プラトールへ登るのが限界ならん。C・9建設は不可能の模様、即ち登頂は絶望の如し」と。成程あらゆる四囲の情況は確かに好くはない。C・8から下では登頂の意欲が投げられたのではないかと思われる暗い空気が感じられた。其の夜食堂の中で、私は竹節と向い合つて言葉もなく暗然たる数刻を持て余した。

そのまゝ、高所からの詳細は得られぬうち、一日も過ぎ二日の午後を迎えた。望遠鏡に依る観測は依然として続けられ、シエルパやポーター達に迄賞金がかけられ、プラトールへの人間の動きを探し求めさせたが之も総べて徒勞に終つた。

その午後二時を過ぎた頃、突然、マナスルの裏側を廻りラルキヤ峠を越して科学班の中尾、川喜田の二人が数頭の犂牛に荷をつけてB・Cの天幕村に現われた。三月二十八日パンチラナ峠で吾々本隊と別れてから二ヶ月余振りである。六月初め、B・Cで落ち合うというスケジュール通りであつた。そして意外な報告が齎らされた。その報告に依る感激のにじみ出る生々しい情景を中尾が「マナスル」に寄せた記述から借りる事にしよう。

『五月三十日、ビムタコーチに達し、人夫を再びヤクに代えた。マナスル登山隊に関しても、少しは情報が得られ

た。日本人隊がラルキヤ・パンジャンを越して、こちらに向つているといいうわさには判断に迷つた。登つてゐる姿が見えないかと、何度も何度も双眼鏡を通して、ノース・コルのあたりを見て、なかなか見えなかつた。しかし三十一日の十時ごろ川喜田がまず最初にノース・コルから登つて行く人影を、双眼鏡で発見した。一同は大騒ぎになつて、一つの双眼鏡を奪いあつてのぞいて見た。見ていると首の痛くなるような高いところに、人影が点々とならんで、間隔をおいて見ると、少しずつ登つてゐるのが見える。パンチ・マナ・パンジャンで別れて以来二ヶ月以上たつて、友だちを雲のきれまの雪の上に見るのは、目がしらのあつくなるような光景だつた。

六月一日、十一時ラルキヤ頂上を過ぎ、一時過ぎには昨年(五二年)キャンプした地点迄来た。途中何度も何度も双眼鏡で、マナスルの登路を見た。アイス・フォールの中段には、一時間以上も、横に長くならんだたくさんの人影が見えたが、しかし、ノース・コルの上にはなにも見えなかつた。ちようど二時頃双眼鏡で見た時、プラトリーの右端の岩壁の上に三人の人影が、浮き出てきた。下へ降りるらしい。ひとりずつ黒い岩の中に消えて見えなくなつた。十分もたたない間に全くわからなくなつてしまつた。それは最後の攻撃をした加藤(喜)、山田、石坂の三隊員が姿をあらわしたのだつた。しかし、その時の私には、場所と時間と人影の意味がよくわからなかつたが、本隊はプラトリーの上迄は確実に到達したことを知つて喜んだ。』

私達の将に消えようとする希望の灯が再び燃え上り、欲びに變つた。登頂したかもしれないぞと。

三十一日のC・8は快晴に明けた。風もなかつた。八時四十分、加藤(喜)、山田、石坂の登攀隊員に続いて山崎の率いる六名のシェルパのサポート隊が天幕を出発した。充分馴化した一行は、天候、雪の状態共、前回と比較にならぬ好条件に恵まれてぐんぐんと高度を増した。間もなく七日の雪洞の地点七三五〇米に達した。雪洞は跡かたもなく、入口に使用した天幕も吹き飛んで了つて居た。

此辺から斜面は愈々急になり、雪層の厚さが減り、数十糶の雪の下に所々ボロボロのストラブが現われ、荷を背負つたシエルパには危険の度を増して来た。そしてプラトローへ百米の辺から平均傾斜も五〇度程になり、危険を感じたので、シエルパに代つて隊員がラッセルをする。あと三十米程でプラトローに達するといふ時、アン・テンバがスリップした。引きづられて落ちて行つたグンデイが、流石は剛の者、最後の岩にアイゼンをひつかけて止まつた。恐怖におびえたシエルパ達は早速上から下ろされた固定綱によつて一人一人収容されて全員プラトローの突端に達した。

蒼氷の上に二人用ミード天幕が張られた。アイス・ピトンがペッグとなつた。七五〇〇米の第九天幕である。兎に角、マナスル遠征隊にとつて、凡ゆるファクターの綜合された終極に於て追つめられた、頂上への最後の機会が与えられ、此処が頂上への唯一のスプリング・ボードとしての存在となつた。

高度にやられて酔払ひの様な症状を呈して居る山崎が、暫くの休養をとる間下降の方法が講じられる。サポート隊は元気を回復した山崎とグンデイのザイル・パーティに分けられた。時間は既に四時を廻つて居る。下りの最初の悪場に四十米のフィックスが下ろされ、サポート隊は加藤、山田の見送る中を最後の岩から一人一人その姿を消していつた。

然し、二百米も降つた処で、又ラクパとアン・ノルブがスリップして最後の山崎を引きたおし、三人が落ちていつた。幸い山崎の適切なピッケルに依るチェックが効を奏して止まる事が出来た。シエルパ二人の重量で、山崎は腹部を引きちぎられる思いだつたと述懐して居る。

山崎以下のサポート隊は薄暗くなつて全員無事乍ら、極度の消耗状態の裡にC・8に帰着した。

C・9の気温は午後六時にマイナス二十五度、夜間の最低は三十二度迄下つたが、天候は概して静穏であつた。此の夜、三人の隊員はこの狭い天幕で窮屈な一夜を送つた。七五〇〇米の高度である。彼等は前日の夕食にアルファ米の雑炊をたらふく喰べた。その翌朝、彼等はオバルティンとアルファ米の雑炊を摂り、更にオートミール迄喰つて居

る。この高度で驚くべき食欲である。石坂のみ昨夕以来の吐き気で食欲がなかった。

私は今、一九五〇年のフランスのアンナプルナ隊の事を思い出して居る。六月二日、隊長のエルゾグとラシュナルは、サーダのアン・ターケイとサルキに助けられて最後の第五天幕を七五〇〇米に張った。場所も高度もマナスルと同じ様なプラトローに相当した地点で、其処から頂上迄長い雪の斜面が続いて居るのだ。然しその斜面は平均四十度と彼は記述して居る。

彼等の天幕は其の晩激しい風に襲われたが、翌三日は風もピツタリとおさまった。温度の記述がないので其の程度は解らないが、余程寒かつたらしい。前夜、彼等は漸く御茶を沸かし、錠剤を呑んだ丈だ。が三日の朝は食欲は勿論の事、御茶を沸す元氣もなかつた。そして二人はザイルは要らないと言って、一疋の重量の軽減にさえ感謝して、残り五七五米の長い氷雪の斜面に向つたのである。

マナスル隊の第九天幕出發迄の状態に比較して、勿論客観的条件に色々な相違があると思われるが、其処に興味深い問題が包蔵されて居る様に思われる。

六月一日は風もなく静かな朝だつた。天幕の窮屈さに充分な睡眠はとれなかつたが、三人は兎に角、天幕内での息の切れる仕事、完全武装を完了するのに相当の時間をとられ、出發は午前七時になつた。

彼等の其の時の服装は、綿の上着、ラクダシャツ、厚手フラノ地Yシャツ、厚手スエーター、羽毛服、防風衣。足には薄手靴下二枚、シープ・スキン靴下、厚手靴下二枚、皮靴、オーバー・シューズ。

そして、山田、石坂、加藤の順にアンザイレンして登高が開始された。蒼氷の斜面が続き、ピツケルの石突ははね返えされ、新しいアイゼンの爪のみが頼りになる。赤旗は雪上に建てる様な訳に行かず、僅か所々にある氷の割目に差込んで進む。

頂上迄続く広大なプラトローは三段階に分かれ、蒼氷と氷上をわずかに蔽つたスカブラの原である。クレバスの裂け目は最大の中が三〇糎位のもので、之が縦横に口を開けて居る。(私は、プラトローは傾斜が緩くとも相当なクレバスは存在して居るだろうと想像していた。カナダ・ロッキーの山々には頂上附近が平らな広い氷原で蔽われて居るのを

屢々見た。そしてそれ等の氷面にはクレバスが大きな口を開けて居るのを望見した事があるからだ。そして此のプラトリーの辺りは、晴れた日、いつも物凄い雪煙が駈け下りて居るのがB・Cから好く見えて居た。その速さは恐らく人の立つて居られぬ程度のものであろう。又、そのプラトリーの西端には幾つもの雪煙がまつすぐに高く下から吹き上げられて居る日が多かつた。

彼等はスカブラと粉雪のラッセルに苦しめられた。此の辺での歩行速度は第一回攻撃時のC・7への登りと同じ程度だつたと加藤は記述して居るが、そうだとすると、肉體条件は可なり好く馴化されて居たものと思われる。然し彼が、この七六〇〇米辺から熱病の後の様な気だるさを感じ始め、高度の限界に来たのではないかと思つて居る事は最も強い隊員の一人であつた彼の経験として注目すべき事柄である。

昼食は氷の上でビスケットと紅茶がとられた。石坂は一番不調の様で、休止毎に身体を投げ出して休んだ。前夜来の不眠、食慾不振に相当祟られた結果であらう。

正午、第三段階にかゝる少し手前七七五〇米に達して休息する。この頃既に、毎日の様に決つた天候変化の様相を呈し始めて居た。西藏方面に雲が捲き上り、プラトリー西南端に沿つて雪煙が上り始めた。此の高度で吹雪に変わり、視界が効かなくなつた場合の結果は想像に余りがある。

此処から頂上への時間は五、六時間と判断された。うまく頂上へ達し得てもC・9へ降りつけるのは恐らく午後十時を過ぎるだろう。其の間体力が続き、好天氣が持続されるといふ条件は絶対に必要な訳である。たとえC・9に降りつけたとしても、其の時サポート隊が彼等を迎えるべくC・9へは入つて居るかどうかの確実性に就ては何とも言えない。一寸した風雪の変化は総ての条件を一変して了う。悪条件の数々を備えたプラトリーへの急斜面の雪や氷の状態が、より悪化した場合は致命的な問題となる。沉んや、登攀隊或はサポート隊の中で一人でも動けぬ者が出来た場合、あの急斜面を降ろす事は難事中的の難事であらう。隊全体が最悪の事態に迫込まれる事は必定であらう。

頂上は目の前に見える。遠征隊としては、頂上攻撃は此の機を逸しては再び得られぬ追いつめられた条件下にある事を彼等は好く了解して居る。加藤と山田はもう少し先迄行つてみようと言合つた。が、あおむけにぶつ倒れて休んで居る石坂を見て登攀隊の限度を此処迄と判断した。そして負けぬ気の石坂の「先へ行こう」とのけなげな提案をしりぞけ頂上への耐えられぬ未練をたち切つて此処からの寧ろ勇敢な退去の決心をした。私は今もつて彼等のその決断は立派なものと思つて居る。

私は今此処で、再びアンナプルナ登頂時の光景を頭に浮べて居る。頂上に近づきつゝあつた時、凍傷に感覚を失つたラシユナルが「もし俺が引返ししたら、どうする？」とエルゾーグに訴えたのに対し、「一人でつづけるぞ！」とエルゾーグは答えた。そしてラシユナルの「よし、それじゃ俺も一緒に行くぞ！」と言う果敢な答に依つて二人の登高は続けられ、遂に登頂の栄冠が二人の頭に輝いた。この時のエルゾーグの率直な心理描写が私の胸を強く打つ。然し、あの条件下の彼等の行動に対して賛成も出来ないし否定も出来ない。たとえ終極に於て、凍傷によりエルゾーグが両手の指を失うという、あの悲惨な犠牲が伴つたとしても、兎に角彼等はあの大きな困難な仕事を勇敢になし遂げたのだ。人類最初の八千米級峯に登つたのだ。

加藤達は頂上に残す為に持参した国旗を其処の氷上にピトンで留めた。それを山田が写真で撮す。そして三人は黙つたまま帰路についた。二時三十分、プラトリーの端にポツンと寂しく残された第九天幕は再び昨夜の主人達を迎えた。彼等は最後の御茶にコ、アを沸した。そして三時には例の急斜面を降り出して居たが、それは死の苦しみであり、下降は仲々はかどらなかつた。

此の三人がプラトリーの突端に立つた時、遙か十キロ程隔つたラルキヤ峠の路から科学班の中尾達の望遠鏡に依つて此の姿が捉えられたのだ。又、C・4に居た隊員達も勿論この下降の状況を見逃す筈はなかつた。が、その下降が余り遅いので、三人の内の誰かが凍傷か何かの故障を起して降り悩んで居るのではないかと、皆はらはらし乍らこの光景を見守つて居たのだ、急斜面を降り切つた加藤達は、熱い御茶を持つて途中迄出迎えた山崎達のサポート隊に助け

られ、綿の如く疲れては居たが、無事C・8の天幕に入つた。

### 登攀を終了して

遂にマナスルも六月一日を以て決定的な登攀を終了した。予定の計画に従つてB・C以上の各高所キャンプも驚くべきスピードで撤収が行われ、三日には全隊員が四月十三日以来実に五十一日目に一人の病人も負傷者もなく、既に完全な春の景観を呈したB・Cに再び元氣な顔を揃える事が出来た。その中には二ヶ月余振りて本隊に合流した科学班の中尾、川喜田の二人の顔も見出された。

別人の様に陽焼けした顔を伸びた鬚に埋めた隊員も、シェルパも、一段と逞ましさを加え、男の中の男といった頼母しさである。昨日迄の激しくきびしい氷雪の住居から、今は鮮やかな緑一色の春の佇まいの中に、彼等は甘く豊富な空気を心のまゝ吸える幸福に酔つて居るかの如く見えた。そして十幾張の天幕も再びその各々の主人達を迎え、B・Cは忽ち活気を呈し、唯一の社交場麓酒亭からは絶え間ない談笑の声が聞えた。

振り返つてみると、B・C建設以来順次高所キャンプが設置されていつたが、マナスルへの登路は意外に長く、従つて多くの隊員は可なり長い間高所に滞在する事になつた。

此処に極めて大ざつぱではあるが、各隊員及シェルパ達のB・C(三八五〇米)以上に滞泊した日数表を掲げてみよう。勿論、日本山岳会、毎日新聞共刊の「マナスル」に記述されている詳細な運行表を見れば、各人の動きも猶明瞭に解るが、此の表を見る丈でも本文の側面からの或種の説明役として興趣があると思う。

又此の頃吾々より少し先にカトマンズを出発してエヴェレストを攻撃中の英国隊のキャンプの進行、登高の速度等をマナスル隊に比較してグラフを作製して見た。時間のずれと所の違い、それに隊の規模、経験の相違といったものを考慮に入れても、其処に何等か考えさせられるものがある様な気がする。

結局、登頂は逸した。が、登攀の全期間中各隊員及シエルパ共、その与えられた任務を好く忠実に果した。結果から見れば、勿論あくもしたら、こうもしたらと言える事もあるが、之は過ぎ去つた事への繰り言で、当時の時間的切迫の下に、食糧物資の欠乏を克服して、吾々としては大体に於て悔いのない登攀をしたつもりである。

高木登攀隊長は、終始、田口と共に彼等のアルプスでの氷の経験を生かし、村山、加藤、山田、村木等の中堅隊員を扶けてマナスル氷河に安全な登路を拓き、更に一番問題とされた完全に未知の領域であつた氷瀑地帯を突破して、マナスル登山の一つのキーポイントたるC・7、C・8の建設に迄漕ぎつけてくれた。

他の隊員達も、日本の冬山に於ける経験にものを言わせ、加藤、山田、石坂の強引な体力は時宜を得た高度馴化の好機を逸せず最高点に迄到達した。

山崎はシエルパ隊を率いてプラトーに達し、最後に残された困難な攻撃隊サポートの役を見事果した。

最初から攻撃隊員の有力候補であつた村木は第一次偵察攻撃に不運にも調子悪くC・8で脱落したが、最后迄C・7以上に頑張つて全般のサポート、連絡の為に働いた。又、彼は隊中随一の機械知識の所有者で、彼なくしては隊の凡ゆる機械類の操作、修理等に重大な故障を来した事であろう。

加藤泰安の器用さはいつも幕営居住地を快適なものにしてくれた。そして登攀後半期には前進根拠地たるC・4に頑張り、再度B・Cへ往復し、危胎に瀕したかに憂慮された食糧事情を見事解決して隊員の不安を除去し、最後の登攀の仕事完了させた。

辰沼も亦C・4を本拠として活躍し、当時続々として参つてゆくシエルパ達に温かく診療の手を差延べ、その為B・Cへの往復も厭わず、攻撃時には加藤(泰)と共にC・7に迄登つて全隊員シエルパ達の保健の為に尽した。

報道と写真という特殊の任務を持たされた竹節と依田とは、高所にあつても他人の休養する時猶厄介な仕事を片付けねばならなかつた。

殊に竹節は私の次に年長者たるに拘らず、体力は強く依田と共にC・8以上に達し得る充分な余力があつたと思われたが、攻撃隊の食糧を喰い込む事を恐れて其処から下りるといふ謙虚さを示した。又、全隊員中一番のヒマラヤ経験者たる竹節の言は、屢々色々な意味で傾聴さるべきものが多かつた。

シエルパに就ては、時に、個人に依つては或はその行動に不満を感じさせられた場合もあつた様だが、かゝる困難な条件下の高所では、肉体的精神的に極度にその発刺さを失うのは当然あり得る事で、當時平地に於ける如く万全を望む方が無理かも知れない。が、兎に角、彼等としては全体として先ず立派な働きを示して呉れた。彼等の協力なくしては勿論、吾々所期の目的は到底達し得られなかつたろう事は疑いない。

ポーターも徹底的に好く働いて呉れた。B・Cの西藏人ポーター約五名は、毎朝七時には天幕を出て、急坂を攀じ標高差一一五〇米のC・2への荷上を二ヶ月近く続けた。又、C・4に常置された三人のポーターは、連日、悪天候の日も黙々とC・2からリレーされた食糧等の荷上げを繰返し、好天の日はあの速い然も炒りつけられる様な焦熱地獄の氷河の往復に厭な顔一つ見せなかつた。此等ラツカロ、セメント、ヘイボンなる綽名の三人のポーターこそシエルパに劣らぬ今次遠征隊にとつての殊勲者に値すべく、その献身的な働きにはいつも頭の下る思いであつた。

私達の登山は未完成にこそ終つたが、隊員は終始、シエルパ、ポーターの協力に依つて遠征隊としては先ず最高限度に近い成果を得たものと思つて居る。その意味に於て、少く共私としては、悔いのない登山を完了し得た事と満足に感じて居る。そしてこの登山に依つて得られた凡ゆる貴重な経験の下に、次の機会にこそマナスル登頂への自信ある期待が各隊員達の胸にも深く刻み込まれたに違いないと思つた。

六月二日の夕刻、B・Cの食堂麓酒亭では、下りて来た許りの攻撃隊員加藤(喜)を中心に、プラトーの上、頂上への状態、七七五〇米の引返地点に第十天幕を張つた場合の登頂可能性等に就て熱心な討論が行われ、終いに、残念ではあつたがあつたの迫込まれた悪条件下に好くあれ丈やれた、好かつた好かつたと皆で喜び合つて居た時、カトマンズ

放送はエヴェレストが五月二十九日に登頂された事を報じた。一瞬皆シェンとした。通訳のサガールは最初之を信じなかつた。というのは、前章でも述べた様に、三十日のA・I・Rは、英国隊の二回に亘る攻撃失敗を報じて来て居るのだ。然し続いてキャッチしたカトマンズ放送は之を確認し次の様に報じて居る。

「英国エヴェレスト遠征隊は世界最高峯への勝利を獲得した。遠征隊長のハント大佐はこのメッセージを直接カトマンズの英国大使館に送達し、そしてこの勝利の報道は直ちにカトマンズからラジオに依つて放送された。在カトマンズの英国大使は、このメッセージをロンドンの外務省に送り、其后全世界に伝えられた。五月二十九日、頂上に到達したのはヒラリー氏で彼は次の三国の国旗を建てた。ネパール・英国・印度」と。

ヒマラヤの——地球上の最高峯に登られたのだ、遂に長年の夢が実現されたのだ。一種形容の出来ない寂しい感が誰の心をも打つたに違いない。然し此の事実こそ、一九二一年以来九回に亘つて撓ゆまぬ精進を続けて来た英国隊に贈られた輝く勝利の栄冠であつた。それに値すべき当然の榮譽である。私は早速カトマンズの英国隊宛に御祝のメッセージを送る事を提案し、一番早い飛脚に之を托す事になつた。

マナスルはエヴェレストに較べれば高度も低く、登攀も遙かに容易であるかも知れない。それにしても矢張りヒマラヤのジャイアントの一つではある。私達のマナスルへの挑戦は去年は偵察の程度であり、今年漸く第一回の本格的な登攀を試みた許りである。未練をいえば切りがないが、七七五〇米に達した丈でも満足すべきであらう。一瞬にして、エヴェレスト登頂の報に羨望？の念が隠されて居たかも知れぬ寂しい感に打たれたとしたならば恥しい極みである。英国の人達が幾多の犠牲をも顧みず、三十余年に亘り極めて当り前の様にあの大きい困難な仕事を繰返して来た不屈の精神には只々敬服の外ない。過去多くの先人先輩達の貴重な経験を受け継ぎ、漸く成就した彼等の偉業に対し心からなる謙虚さを以て御祝の辞を送る気持になつた。そしてその私達の言葉は簡単ではあつたが、「エヴェレストの見事な登頂を心から御祝い申上げる」という意味であつたと記憶して居る。これに対し、その後七月に入つて私

達がカルカッタに帰り着いた時、其処にはハント隊長から次の様なメッセージが私達を待つて居た。

「御祝電有難う。見事なマナスル攻撃を御祝い申上げる。貴隊員の御健康を祈る」と。  
率直な、然し山を愛する者に通じる温い心のこもつた言葉であつた。

### B・Cの撤収——帰路へ

六月八日、撤収の日が来た。シェルパもポーターも久し振りに故郷へ帰れる事になつたので皆賑やかに、又甲斐甲斐しく働き働いた。

二ヶ月間に亘つて私達の温い憩いの家となつた此処サマのベース・キャンプには流石に去り難い愛着の念が残る。すつかり春を取り戻した周囲まわらの樹も草も、鮮やかな緑に染まり、聞き慣れた小鳥達の歌声は今朝も私達に快い朝の音楽を奏でゝ呉れた。

モンsoonも到々此辺の谷や峯に迄にやつて来たのか、早朝から氷雨にしぐれ、見上げる氷河も途中から上は濃い雲に蔽われてマナスルは遂に姿を見せて呉れなかつた。遙か高いその雲の奥に手を振つて私達は最後の別れを惜しんだ。だが、誰も心の中では、来年は又やつて来るよとつぶやいて居た事だろ。

科学班の中尾と川喜田は又此度で私達本隊と別れる事になつた。彼等はブリガンダキの谷から西藏境の奥地へ更に長い旅を続けるのだ。彼等の「御元気で」という声に送られて私達はラルキヤ峠への道へ向つた。秩父あたりの山で、では又、といった位のあつさりした別れ方であつた。こんな辺境の土地で手を振つて呉れる彼等の顔を再び見られるのは、二三ヶ月の後何千キロも離れた東京でと思うと流石に別れが惜しまれた。科学班に新に加えられたシェルパのラクパも、長い間苦勞を共にした仲間と手を握り合つて流石に別れが辛い様に見えた。

翌日、焚木もない荒涼たる天幕場を立つた私達のキャラバンは、五二〇〇米のラルキヤ峠への、だらだら登りの道

を辿つて居た。既にモンズーンに入つたらしい前日から空は意外にからりと霽れ、峠路の途中から十軒を距てたラルキャ氷河の奥にマナスルがその北面の全貌を余す所なく見せて呉れ、ナイケ・コルから氷瀑地帯、プラトールから頂上へと、その氷の面は朝の陽光にキラキラと輝いて居た。プラトールの突端——それは攻撃隊が登つた地点からピナクル近く迄に達する実に広い地域——からの急斜面を十条に余る雪崩の痕が平行して、氷雪面は其処丈雪崩特有のにぶい白色の条となり、C・7の高度辺迄落ちて居るのが肉眼にも認められた。

攻撃隊はプラトールに登る為に其の急斜面に三つの登路を考えて居た。が、そのどのルートも余程の幸運に恵まれぬ限り、此等の雪崩のどれかにたたき落される運命に逢着したかも知れない公算が多分にある。私達は、好い時に登攀を終了したものとその幸運に感謝した。

マナスルの北側を西に迂回して越えるラルキャ・バンジャンは長い骨の折れる峠であつた。峠の上では寒い氷雨を交えた風に震え、殆んど休息する事もなしに急いでマルシャンデイの側の急な路を降りて行つた。

百名程のポーターを連れたキャラバンは段々とその隊列が伸び、先頭と殿りとは三時間もの間隔を置いて、ビムタコーチに着いた。その日の行程は、夜が明けると間もなくの早立ちだつたのに、殿りの連中を天幕場に迎えたのは夜のとほりもすつかり下り切つた八時過ぎであつた。

その翌朝も吾々は快晴に恵まれた。マナスルの北西面が直ぐ急角度に仰がれる、ティルマンの写真で始めて見たあの姿である。然し実物は恐ろしく高く、且、巨大な氷壁をめぐらし、北峯から南へノース・コルが深く切れ込み、攻撃隊の登つたプラトールへの急斜面が好く見える。その斜面は、写真で見ると、下から仰いで居るのでかなり緩やかな角度的に見えるが、肉眼には実際に近い急な角度が感じとられる。攻撃隊の連中が、プラトール近くは五〇度程の急傾斜だと言つて居る事が成程と頷かれる。

彼等が実際に登つたルートの左側に考えられた別の二つのルートも、此処から見ると何れも同じ様な急斜面である事が始めて解る。プラトー自体は、傾斜の度合は明瞭に解らぬが、その氷の斜面は出鱈目に広く長く、兎に角頂上への道には何か薄気味悪い手剛さを隠して居る様に思われる。

何度も双眼鏡を通し、又肉眼で観察を繰返えすサマヤラルキヤ側から見たのとまるで山貌を異にして居る。巨大な四角い砦ほらの様でもある。真平まんなに見える中の広いてつべんの左端に、七八五九米のピナクルが小さな耳の様にちよつぴりとして居る。そのピナクルはサマ側から見ると主峯と間違えられる程高く大きく見えるのだ。真中辺の遙か奥に頂上が極めて小さな突起になつて見える。砦のマルシアンディ側は切りそいだ様な二千米からの氷の斜面となつて落ち込んで居る。このビムタコーチの側からノース・コル或はプラトーへ直接取付こうという勇氣のある者は先ず少ないだろう。

マナスルの最後の印象はこんな姿に依つて私達の頭の中に深く刻み込まれた。そして私は、振り返り振り返り、又いつ会えるか知れないマナスルに最後の別れの挨拶を送り、キャラバンの殿りとなつて此のビムタコーチの部落を后にした。

六月十日、ビムタコーチを立つたキャラバンは十一日間の旅を続け、廿日、ネパール第三の都会ポカラに到着した。

此の旅はマナスルの西側をズード・コーラに沿つて下り、トンジェという部落からマルシアンディの本谷を南下し、クデイを経て更に南に向い、タルガード・バザールでカトマンズからのポカラ街道に出るのが本筋であつた。が、途中でスイスの地質学者ドクター、ハーゲンに遇い、彼の奨めて途中のクデイから西に山越えの近道をとリ、三日許り節約してポカラに出る事が出来た。モンズーンは既にやつて来て、屢々劇しい雨に悩まされたが、ブリガンダキに

較べて危険地帯は少ないので、雨に濡れる事さえ厭わなければ大した事もなかつた。

ハーゲン先生の教えて呉れた道は、近い事は近いが峠が多く、登つては降りて相当なものであつた。

ポカラでのカトマンズ行き定期飛行便を早くキヤッチする為、途中十二日、トンジエから田口、加藤(泰)、村山、加藤(喜)を一日先行させてポカラに向わしめた。

相当強行軍が続いたが、登攀は済んだし気分はのんびりしたもので極めて楽しい旅であつた。

下りるに従つて田圃が多くなり、街道らしいものは皆犠牲にされて細い畦道と變り、そんな道許りまる一日も歩かせられた事がある。丁度田植時で、部落の女達が着飾つて唄をうたい乍ら賑やかに苗を植付けて居る光景は、長閑にひなびて、丁度日本の田舎の田植時を思い起させる。

ポカラの町の入口で自転車を見て驚き、店屋から洩れるラジオに突然文明の声を聞いた思ひであつた。とつっきの反物屋にパンジャビーらしい逞ましい鬚面の男が坐つて居た。それが通り過ぎる私に話かけた。「今日は、何処へいらつしやいますか？」と流暢な日本語なのに胆をつぶした。尤も、其他の言葉は余り解らない様だつたが、聞いてみると、第二次大戦の時、ビルマからシンガポールへ行き、日本軍との折衝の機会があつたらしい。

町は街道に沿つて、だからと三哩程も長く伸びた宿場町である。人口は一万前後とかで、街道の両側は反物、雑貨、食糧品を商う店が多かつた。

町の中央辺の練兵場になつて居る芝生の広場が私達の天幕場になつて居り、其処で先発隊の田口達に迎えられた。

其の、到着の六月廿日から、翌月の七日迄私達はモンスーン中の暑い十七日間を無聊と不安、焦慮に悩まされ乍ら、練兵場と飛行場での天幕生活を余儀なくされる事になつた。

此処で飛行機に乗り込めば一時間もかゝらぬうちにカトマンズへ歸れるのだ。それが、当てにして居た週三回の定期便が突如、何の前触れもなく停止されて了つたのだ。

其の間の苦勞談、腹立たしい、又滑稽な挿話も数々あるが此処にはくどくど記述する余裕もないので省略するが、兎に角吾々の努力の結果はポカラの知事邸からカトマンズ王宮への無電再開に成功し、吾々の島流しの窮状はニューデリーの日本大使館、カルカツタの日本総領事館に詳報された。そして日本でも毎日新聞本社及外務省も動き出し漸くの事で総べての連絡がとれ、遠征隊はポカラから救出される事になった。

七月七日、天幕の周囲に騒ぎが起つた。飛行機だという声だ。成程それらしい音響が聞える。が、今迄に何度も空耳に欺まされてはがっかりしているのだ。それでも余りに騒々しいので天幕から顔を出してみると。今度は本當だつた。双発が一機既に着陸姿勢で吾々の眼の前に突込んで来る所だつた。

飛行機からは機長と、迎えのダルシャンが下りて来た。シャツ一枚にズボン、サンダルという輕装の彼と固い握手が交わされる。短い会話の間に、此の飛行機がチャーターされて此処に飛んでくる迄の苦心慘胆たる物語りに就て説明を聞かされる。こちら側の苦勞も並大抵ではなかつたものの、今飛行機を目の前にしては今迄の不滿も不幸も一度にふつとんで了う。天幕場は戦場の様な騒ぎに包まれたが、毎日無駄に繰返された天幕の撤収、荷物の計量等の經驗がものを言つて忽ち荷物は積み込まれ、隊員シェルパ二十六名が機上の人となる。

予め決められてはいたものゝ、一屯半の荷物の番人に残されるパンシーとサガールの顔は流石に半べその態であつた。

此の日風はなく、飛行場の吹き流しはだらりと垂れ下つて居た。そしてその胴腹にはHELLELという文字がはつきりと読みとられる。正に、私達にとつて此の飛行場は地獄的存在でもあつた。此処へ飛んでくるのを厭がる飛行士が、この吹き流しを見て、成程なああと感心するという。実はこの吹き流しは、SHELLEL石油会社がインド・ヒマラヤ航空会社へ寄贈したもので、偶然いつの頃からか、Sの部分か吹きちぎれてHELLELの部分丈が残つて居たのだ。

私達にとつて、生涯忘れ得ないだらう此のポカラ飛行場も直ぐ雲の下に見えなくなつた。私達隊員は、スイスのダ

ウラギ隊から貰つたキングジョーの栓をあけ、御祝いの廻りし呑みを始めた。始めての飛行機に定めしはしやぎ廻るだろうと想像して居たシエルパ達は私達の前に一列に向い合つたまゝ極めておとなしく寧ろ緊張そのものの趣きであつた。一番年少のチビが、丁度幼児が菓子屋のショーウインドウへ鼻を押しつける様な格好で窓外の景色をぬすみ見して居るのは可愛かつた。

其の時、操縦室から近着のステーツマン紙が廻されて来た。七月三日、遂にナンガバルバットがドイツ、オースタリー隊に依つて登られた記事が大きく出て居た。八千米級の第三番目の登頂である。何故か私達は、B・Cで聞いたエヴェレスト登頂の時の様な感激が起らなかつた。

飛行機が旋回を始め、下からカトマンズの飛行場がゲンゲンと持ち上つて来つゝあつた。

ことわり。マナスル遠征に関する報告は日本山岳会及毎日新聞社共著に依る「マナスル」にまとめられて居るが、当時執筆した各隊員は甚だ多忙を極めて居た最中で、充分意を尽し得なかつた憾みがあつたかも知れない。編輯者の意向で余り専門的になり過ぎない様、一般大衆にも解り易くという気持ちに制約されて居たので止むを得なかつたと思う。

然し今から考えてみるとあの忙がしい最中好くあれ丈まとめられたものとも思つて居る。

今度、「山岳」編輯委員から改めて一九五三年のマナスルに就て書けとの御依頼だつたが、限られた紙数で、加之私自身個人的に充分な時間が得られない事から此処に記述した報告とも紀行ともつかぬ様なものを書き上げて了つて誠に恥しい思いをして居る。山岳の様な雑誌に寄稿するものだつたらもつと丹念に充分検討した専門的な報告をすべきだと思ふ。然し私のそんな希望を充たそうとするならばそれこそ膨大なものにならざるを得ない。不本意乍ら今回の私の稿は、私の主観の赴くがまゝに可なり見当外れの記述に終つて居る部分が多いかも知れない。此点題目に対して会員諸兄の失望をかう場合も多々あるうと思われるが御宥恕を得て置き度い次第である。



# 科学班の旅

## 中尾佐助

まえがき

一九五三年マナスル登山隊の科学班として、川喜田二郎君とわたくしが指名されたとき、二人にとつての最大問題は、調査ルートを決定的なことだつた。京都に同じく家を持つた二人は度々会合して意見を交換したり、諸先輩ともいろいろ相談した。しかし結局ネパールへ出発のため、二人が京都を出発した時には、未だ最終的に確定するまでにいたつていなかった。

問題点はいろいろあつた。川喜田君はネパールを、生物界や人類社会学的諸特徴で、地理的区分をすることが第一任務だつた。そのためには調査ルートは広いほど良いわけである。また一方、社会学的調査では、旅行中の観察の持つ意味を吟味し、その背景となる事情を深く知るために、少くも一つの村に一ヶ月以上の滞在を必要としていた。わたくしは昨年の踏査隊に植物学担当として参加したが、ポストモンソンの時期の關係上、資料的に見て不満足な結果を得たに過ぎなかつた。それで今年こそはそれを取りかえそうという一念に燃えていた。とにかく、今年はモンソンの雨が降りだしてから、ヒマラヤの高山帯で採集することが至上命令のような気がした。

これらの事情を満足させる計画の結論は、モンsoon襲来と共に山から去る登山隊より科学班は一―二ヶ月間ネパ

ール滞在を延長することだつた。三田隊長はこの事情をよく了解されたが、費用の増加分については一つの問題であつた。しかし日本出発の二日前になつて、農林省から種苗導入費の補助金額が決定し、その半額を現地費に使うことができることになり、やつと科学班の全行程と、活動力が確保されるにいたつた。

### 一、ポカラ目ざして

三月二七日、科学班は本隊と共に、カトマンズの宿舎、シヤハ氏邸から出発した。隊員の川喜田君とわたくし、それにカルカッタのネパール領事館から同行した通訳のヤチンドラ・ラル・シヤルマ君と、人夫一七名、そのうえ、人夫頭として、昨年 の踏査隊に随行して、今西隊長の小姓役を務めたキシナ・バハドール少年が、われわれ科学班を構成した。

翌日パンチマネ峠の上で、本隊の人々と二ヶ月後のサマのベースキャンプの再会を約しつつ、固い握手を交して、いよいよ科学班は独立行動に移つた。未だ眼下に見えるカトマンズ盆地は、緑一色にうめられている。ネパール国内で殆んど唯一の水稲と麦作の二毛作地帯になつているこの盆地は、いま丁度小麦が穂を出して、穂揃いの美しさである。われわれの道は右に向つた尾根すじに沿ひ、カカニの森へと登つていく。新緑につつまれたシイマ (*Schinus molle*) の木立ちを過ぎると間もなく暖帯性の潤葉樹林に入つてくる。その中には今を盛りと咲きほこるシヤクナゲ (*Rhododendron arboreum*) が、梢を血のような赤い花でうめているのが混つてきた。道ばたの岩の上には白花の蘭 (*Coelogyne cristata*) が群がつて咲き匂い、わたしたちの前途を祝福している。昨年の秋から冬へかけての旅で、わたくしを無表情な枝葉でむかえた草木は、南国の春の高温にせきたてられ、モンスーンの雨も待ちきれず、乾いた土や球莖から無数に延びあがつて花を咲かせたり、その支度をしている。いまわたしは春のヒマラヤ山中に入つた。

カカニの岡はネパールヒマラヤの歴史と切つても切れない縁がある。そこには古く英国のカトマンヅ大使館の立てた避暑のバンガローが今にも残っているばかりでなく、ネパールヒマラヤの殆んど全部が一望のもとに見られる。北に向つて目を向ければ東からエベレスト、ガウリサンカル山群、ジューガルヒマール山群、その西のランタンヒマールとゴサインターンは前山のためよく見えないが、その次に位するガネシユーヒマール山群の圧倒的な姿、更に西につづくマナスル、ヒマルチュリーの姿、アンナプルナ連峰、ダウラギリと白き神々の座は果しなく続いていく。この絶好なヒマラヤ観望地は当然印度測量局の初期のネパールヒマラヤ測量地として大きな役割を果たした。出版されたものから見ると、実際の測量には、カカニの岡から指呼の間にあるすぐ西続きのカウリの岡が使用された模様で、この地からのヒマラヤ連峰の見取図で、われわれは一つ一つのピークの名前と高度を知ることができる。

われわれはこのバンガローに一泊して、翌朝の大観を楽しんだ後、カカニの岡の最高地を占める森林の調査に赴いた。この岡の最高地点は二二八五米で、美しい残存林におおわれている。この高さはヒマラヤ主脈を形成するグレイト・ヒマラヤン・レンジの南斜面に位するレッサー・ヒマラヤン・レンジの最高峰の一つともみられる山として記憶するのも興味がある。八〇〇〇米を越すグレイト・ヒマラヤン・レンジが無数の河川によつて横断されているのに対し、二〇〇〇米そこそこのレッサー・ヒマラヤン・レンジは、ネパールではたつた四本の川、サブトコシ、バグマティ、ガンダキ、カルナリだけで切られている。わたしたちが調査に出かけたカカニの森林はレッサー・ヒマラヤンの唯一のタイプとして貴重なものであつた。

バンガローからだらだらした尾根をしばらく東に向つて上つていく。初めは未だ人家に近く、家畜の食害がひどく、灌木が多い。その中には十二月頃小型の白花を開くツバキ (*Camelia kishi*) 食用になる赤い小型の実をならすヤマモモ (*Myrica esculenta*) などの葉の硬い常緑樹が目につくが、間もなく深い森林に入つていく。やや寒い感じの森林でそれまで無数に見られた着生蘭類は殆んど無くなり、林床に枯葉が敷き、下草も少なくなる。カシ類 (*Quer-*

*cus lanuginosa*) や青黒い葉を持つシリブカガシ (*Lithocarpus spicata*) が多くなり、頂上附近では小型の硬い葉を持つカシ (*Quercus semicarpifolia*) が優占してゐる。一休みして帰途につこうとした時、枝の間に、赤黒い色をしたウマノスズグサ (*Aristolochia Nakaoi* Maekawa sp. nov.) の花がぶら下つてゐるのを発見した。見れば花も若葉も全身密毛におほわれてゐる。この標本を日本で研究した結果、この年の新種発見の第一号となり、幸先きよき出発になつた。しかしウマノスズグサ類では、昆虫の整理が終つた時、わたくしは結局不運であつたことが一年半後に判つてきた。蝶でも一番大型で美しいアゲハチョウの類が沢山調査された結果、その食物として重要なウマノスズグサ類に、もつと沢山の種類がいろ／＼の高度に分布してゐる筈だといふ結論になつた。しかしわたしは外の種類のウマノスズグサは遂に一枝も標本に作る事ができなかった。

カカニの岡から下つた後、ボカラに到るまでの間には大小たくさん峠や低い河谷がある。しかしカトンチエ・バザールの尾根を除いてはいずれも一五〇〇米に達する場所はなく、一番低いところは、マデイコーラ河畔のシサガート・バザールで、高度五二〇米となつてゐる。これらの地域は気候的にはいずれも水稻地帯に属してをり、民族も混じ、ヒンズー教の影響が強い、ネパールの文化地帯である。その行程の半ば以上は、昨年のモンスーンの末期に行進した途のこととて、前途に何の不安もなく、行進を続けることができた。低い河谷の兩岸には、赤い地肌をしたラテイトの土壌があらわれ、それをかこんでサラ (*Shorea robusta*) の林が薄白い花を今を盛りと咲かしてゐる。道端のチョーターラに植えられたインドボダイジュ (*Ficus religiosa*) は新梢をのびし、薄紅の新葉が枝先に並び、きまつて隣りに並ぶバンヤン (*Ficus bengalensis*) が、三〇度を越す乾いた日中にすすしい木蔭を提供してゐる。モンスーンの頃には、水ずかりの田のあぜを、くねくねと曲りながら伝つて進んだ道は、今は乾いた稲の刈り跡の中を真直に横断していく。熱帯性の鳥が高く樹蔭で呼んでゐる。プレモンsoonの濁つた空気は印度平野から果しなく押しよせ、ヒマラヤの低地をくまなくつつんでゐる。草も木も、虫も人も何となくいらだたしい気分、雨を望みながら、身も

だえせんばかりである。わたくしにとつても、この旅は心の中に一つの満されないものがつきまとつていた。それはこの低地の、毎日道端に見る植物が、余りにもなじみが薄いものばかりで埋められていることだった。マンゴーやバナナ、椰子 (*Phoenix humilis*) やタロノキ (*Pandanus furcatus* var. *indica*) が目につくのみならず路傍の草、一本一本までが殆んど熱帯印度を連想させるものばかりだった。日本の歴史に育ぐまれた情緒の故か、その優美さをわたくしたちが受けとつていたような温帯性の親しみのあるものは絶えて現われてこない。わたくしにとつて新奇なものは次から次へ次へと出てくるが、それらの仲間に関する知識が欠乏している為か、強い興味はなかなか起つてこなかった。しかし植物の分布区の境といふ問題について考える時は、この低地の植物がわたくしの興味をひかなかつたということ事態が、何より雄弁にインド——マレイ系の植物群と、ヒマラヤの温帯以高に分布する日華系の植物群がよく區別できるもので、その分布区もよく分かれたれていることを示すのだろう。

ポカラ平野の東の境、デオラリーの峠で、マナスル——ヒマルチュリ山群を春がすみの中に見て別れを告げ、すぐにアンナプルナ連峰がつつたつポカラの町に着いたのは、暑い四月十三日の午後早くだった。

## 二、カリ・ガンダキの旅

ポカラから、カリ・ガンダキへ出るには二つの峠を越さねばならない。手前の峠は一七〇〇米、後の峠は二八〇〇米近くある。低地の旅にあきあきしたわれわれは、喜んで四月十八日にポカラの町から、西へ向つて行進を始めた。歩きはじめると、その日のうちから、今までの低地旅行と様子が変わってきた。もうサラの木や、シーマは殆んど現れず、もつとつめたい空気に耐えられる樹木が勢を増してきはじめた。部落は意外なところに大きな集落があるが、何となくしんかんとしている。外来者は例がないらしく、われわれは今までより強く、見えがくれしながら監視されているようだ。最初の峠までくるとツクチャに根拠をおくタカリ族の隊商の馬に出遇つた。草の上に腰をおろしている

と旅商人の気安さで近づいて座りこんで話しはじめた。うすら寒い北風が吹きおろしてくると、草を食べていた馬が二―三步うごく。馬の首にかけた風鈴が鈍い音をたてて風の音に混じつて聞えてくる。この音はチベット人のヤクの群れからも聞く音だ、そして蒙古の草原を歩いてくるラクダの列からも響いてくる音だ。冷い北風が吹く乾いた高アジアを象徴する音だ。いまわれわれはここで、ヒンズーの祠から鳴つてくるわめくような鐘の声に別れをつけ、高アジアの風物の中に入りつつある。それは四―五日の後、カリ・ガンダキの中流で、まぎれもない現実となつて、われわれをつつんできた。

二つめの峠は二八〇〇米近いので、ここで始めてヒマラヤの温帯の早春に出遇ふことができた。桃色や真紅の花が咲きみだれた喬木性シヤクナゲ(*Rhododendron arboreum*)の純林も終る頃、白花のモクレン(*Magnolia Campbellii*)も咲きはじめていた。地上にはネコノメサウ、クサイチゴ、スマレ、イチゲの類が木蔭に咲きはじめており、ウワミズザクラ(*Prunus cornuta*)も細長い花序を出している。カトマンズを出発して以来の最大の採集はこの日であり、またこの日から、いわば本格的な植物採集が始まつたとも言えよう。この峠から、一直線にカリ・ガンダキに下る前のファラテイのキャンプの朝は、始めて雲の衣をくまなく脱いだダウラギリの姿を真正面から見ることができた。

カリ・ガンダキに沿ふてツクチャに近づくにつれて、風物も人も一変しはじめた。河床はガサを越すと急に広くなり、川面には日中砂を巻いて強風が吹き下してくる。風景は乾燥して茶色になり、北へ上れば上るほど、日一日とその度が劇しくなる。部落は灌漑のできるオアシスだけにあり、茶色の世界の中の唯一の緑の園になつている。家はチベット式の平屋根で、ラマ教の祈りの旗タルチョーが寒い風にはためいている。しかしツクチャを中心とするタカリ族の商業活動は意外に盛んで、ミュールやゾーパの群はひつきりなしに通つている。われわれはまさにチベット式の風物と、商業活動の中心に入つてきたのだ。

ツクチャ附近の乾燥地の森林は、ネズ(*Juniperus Wallichiana*)を主とし、それにキュープレッスス(*Cupressus*)

*truncosa*) が混つて、木立ちのやゝ開いたものになつてゐる。新らしい森林型、それは毎日、毎日が新らしい楽しみであつた。この谷には遂に見出されなかつたが、すぐ西のカルナリーの谷まで西から分布してきてゐるヒマラヤシダーは、きつとこんなような場所に生えているに相違あるまい。この谷で西方に続く乾燥森林型の東の極限が一つたしかめられたことになつた。

### 三、ケハ・ルンパ行き

四月二八日、カリ・ガンダキ河畔、ムクテナートへの分岐点カグベニーへ到着した。この河一帯の乾燥地帯に深く印象づけられたわれわれは、更に劇しく乾燥した高所への熱望が強くおこつてきた。昨年英国のウイリヤムスの率いる植物探検隊が西ネパールに入り、その行程の東端は、チャルカボトガオンまで達している。カグベニーからチャルカボトガオンまでは、五二〇〇米の峠を一つ越せば達せられる。しかしカグベニーから急行しても、そこまで一週間ばかりそうだ。その上、帰途にも異なる途を選べば、更に北方のムスタン近くへ出る氷河越えの途しか無い。そしてこの一週路では、二十五日乃至一ヶ月を予定せねばならない。一方われわれはサマのベースキャンプへ到着の日は定められていたので、カグベニーから五月十五日迄には東へ向つて出発する予定であつた。とにかく予定日数の許す限り西方へ、チャルカボトガオンの方向へと突進してみようということにうつた。しかしこの附近一帯の植物の状態や、ルートの高高度から判定すると、途中で薪に困難しそうである。われわれには燃料用のアルコールも、油類も一滴も無かつた。荷物は四頭のヤクに積み、別の一頭に上等の薪をカクベニーから積みこんだ。

五月二日、われわれは五頭のヤクを連れて出発した。ヤク使いはリンジンと云う、立派な若者で、少年の助手を連れている。最初の日はカリ・ガンダキからいきなり一〇〇〇米直登して、三八〇〇米まで登ると、そこに巨大な洞があつた。その床は多年の羊の糞が厚く堆積し、ほこりっぽい平地になつてゐる。洞の前には小流があり、メギの類

(*Berberis aristata*, *B. angulosa*) が生い茂り、ダケカンバ (*Betula utilis*) が葉を出す前に、細長い花穂をいつぱいぶら下げて、盛んに花粉を飛ばしていた。雪どけの水辺には一寸タンポポに似た黄色のツシラゴ (*Tussilago*) が咲き始め、この高地にもようやく春が訪れたことを示していた。

ダウラガリの北に続く山々は、ツクチャピークの北方で、山系は東西に並びツアルチエ (六五二八米) を含む無名の山系になる。この山系にはツアルチエの外は、雪線以上のものは数座に過ぎないが、そこがダウラガリの間は、フランス隊の努力にもかかわらず、今日までもつとも不明な地域として残されている。この山系 (ツアルチエ・ヒマールと略称したい) の北側は一直線に並び、巨大な断層崖の如く屹立して、急斜面をなして東に向つて流れるケハルンパの谷に落ちこんでいる。われわれはこの斜面を東の端から四〇〇〇米附近を上下しながら縦断していつた。五月の始めのこととて、到るところに残雪が縞をなしてのこり、その末端からは水が流れ出している。雪の消えた黒い土の上には、丈五分にも足らぬ小型のサクラソウ (*Prilula dimutissima*) が点々と咲き始めている。

ツアルチエから北へ流れ出す氷河は末端が岩屑におおわれ、間もなく消失すると共に名はツアルチエルンパと呼ばれる急流になる。この河岸の斜面に張つた斜いたテントに一泊すると、翌日はケハルンパの本流まで下つて、川を渡つて北側に移つた。地図に示されたケハルンパ南沿ひのルートは山崩れのため極めて危険になつていて、ヤクをつれては到底通ることではできないという。新しく開かれた北側の道は五二〇〇米の峠を越さねばならない。われわれのヤク使いリンジンの称するところによると、この北側の峠越しのルートは、彼自身でつけた道だと云う。この男は時々機敏な性質だし、われわれの持つている文明の利器も驚いていず、すぐ上手に使いこなしてしまふ。体も強く山慣れもしていて、まず最上の登山案内人といつたかつこうの男だ。彼が峠の手前の最後の草地で、ヤクのため一日休養を求めたので、ネズの森林限界の四〇六〇米で一日滞在になつた。この辺のヤクは濃厚飼料を食うことを知らず、草しか食べない。旅行中は夕刻荷を解いて放すと、群れをつくつて勝手に夜中草を食べている。ヤクは草を食べなが

ら、高い方へ高い方へと登つていき、朝ヤクを集める時になると、五〇〇米以上勝手に登つてしまつてゐることはザラである。四〇〇〇米もある場所で、朝出発前にこんな高所まで登つたヤクを見つけてつれてくるのは大仕事で、ヤク使いの助手のつらい仕事である。ヤク発見の便宜のため、夕刻ヤクを放す時は、宿泊地の対岸の斜面に追い出すのが通常で、翌朝群れをまず目で確かめてから連れに行くのである。首につけた風鈴ぐらいではとてもだめだ。われわれはそんな目にあわなかつたが、雲でもかかつていたら多分ヤクの群れを集めることができず、一日滞在のうきめにあうこともあるだろう。

ケハルンパの北側の山腹には、代表的な乾燥植物が発達している。刺の生えた灌木類が散在して、淋しい風景になる。ムレスズメ類が多く、その中でも黄色の花が咲く (*Caragana brevispina*) がその代表種であるほかにヒョウタンボク類 (*Lonisera rubicola*)、灌木性ヨモギ類 (*Artemisia sacrorum*) などが目立ってくる。こうした灌木類はもと北方の高アジアの特徴を示す種類に近くなり、タマリスクに近緑の *Myricaria germanica* なども現れてくる。われわれは植物区系上新らたに中央アジア区系の場所に踏みこんで来たことになる。

われわれの到達した最西のキャンプはチゼルンパ(ケハルンパの支流)のふちにのぞむ平地に五月六日張られた。高さは四八〇〇米で、河水は日中でも半分氷つている。昨年の踏査行でアンナプルナやチョルー、マナスルの偵察の時に使はれたミードテントが九尺ほど離れて向ひあひに張られ、その間にシートで仮小屋を作り料理場に供した。カクベニーからはるばる運んできた薪はここで始めて使用することになった。ヤクは枯草もろくろくなくないところであらうついている。その夜から吹雪になり、そのうえ、始めての高さのため、山酔いをおこす者もあり、次の日一日は何の活動も出来なかつた。

五月八日、テントから四〇〇〇米ばかり斜面を登り、五二〇〇米の峠、テイゼラについた。通訳のシャルマ君は山酔いで動けず、テントキーパーとして残つた。川喜田君とわたくしはリンジンを連れて峠へ登つた。彼は出発前にもら

つた軍手に勢ひをつけられて、元氣よくわれわれと共に歩いた。峠の上に出た時、雲は上りはじめ、時々四方の山がちらりちらりと現れた。ダウラギリ、チューレンヒマールは目前のツアルチエ附近の連峰にさえぎられたのか、あるいは雲霞にさえぎられたのか見えない。西に向つた谷は広くゆるやかになり、ケハルンパの谷と、カルナリの支流、ベエリイの最源流との間はラプツエシエルマと呼ばれる広大な平地になつてゐるのが眼下に見える。チャルカボトガオンはこの谷を下ればあと二日で達せられる。しかしいまわれわれはそこまで行く日数が残されていない。雲の間間を見て写真を撮つて引きかえすほかはない。キャンプの薪は今日でもう終る。あとはカゲベニーへ引きかえすばかりだ。テイゼルンパの河岸までもどると、雪がわずか半日の日光で消えている。雪の下から花が出てきた。全く苔のように平たく、葉も鱗片状だが、根は大きくて深く、群がつて薄桃色の花が咲いている。アンドロサーセの類 (*Androsace selago*) だつた。

帰路はこのケハルンパの谷筋で唯一の人家サンゲダに一日滞在して調査した。この村は三七〇〇米あつて、畑作灌漑をやつて、麦を作つてゐる。もう青く一面芽を出して生長を始めている。ここがわれわれの出遇つた農耕の最高限界だつた。そこはソバも作るが、そのソバは日本のソバと違ふ種に属するダツタンソバ (*Fagopyrum tataricum*) であつた。

#### 四、本隊への合流

カゲベニーからマナスル登山隊のベースキャンプのあるサマへの途は、グレート・ヒマラヤン・レンジの北側の、所謂ラダーク・レンジとの間の谷を東へ約十二日間の行程である。この間には五〇〇〇米以上の峠が二つある。一つはムクチナートの峠 (ニサンゴ・バンジャン) と、今一つはラルキヤ・バンジャンである。この高さはすでにテイゼラで一度経験したので、大した苦痛はない筈だ。そのうえ昨年マンナグボット以西は歩いてゐるので総て安心なも

のだ。しかし障害は意外なところからおこり、マナングボットとブラガの村との争ひのため最大の苦心が払われねばならなかつた。

カリガンダキの乾燥した谷から、湿潤のブリガンダキの谷へと移るこの旅行は、その意味に於て、最も興味の深いものだつた。ニサンゴ・バンジャンを越してマナングボットに近ずいた時、あたりの植物影観は、未だ未だ乾燥地帯に属していることがよく判つた。カリの谷と較べると、ここは五葉のマツ (*Pinus Roxburghii*) がやや多いだけ、本質的に大したちがいはない。昨年このあたりに来た時は秋枯れになつてしたが、いまは春である。昨年心のこりしたものが、今度は花が咲きはじめている。そのなかでも、去年チョルーへ登る途中の、ネズ (*Juniperus Wallichiana*) の大木の間キャンブした時、川岸で採つて、その香りをヤギの肉にそへて味つたフキの花を採ることができたのは嬉しかつた。このフキはヒマラヤに従来分布しない属と考へられていたもので、新しい種になつた (*Petasites himalaicus Kitamura sp. nov.*)。

乾燥地と湿潤地と判然移り変わるのには、ピサンとチャメの間で、水河遺跡問題で論議されたいわいるツルツル岩の下あたりである。ここを下ると急に植物の種類が変り、暗い針葉樹が卓越してくる。その下木も豊富になり黄色い花のソケイ類 (*Jasminum spp*) やライラック類 (*Syringa emadi*) の花、*Piptantus*, *Desmodium* の荳科や、*Viburnum n. sp.*, *Coloneaster spp.* のように、昨年秋赤い果実ばかりを見たものが今はいずれも白い花が咲き出している。楽しい旅行だが、先を急いで枝途を出して採集に赴く暇がないのが、後にまで残つた心のこりであつた。

トンヂェを過ぎてドウド・コーラの流域に入ると、湿潤となつたことは一目瞭然になる。常緑のカシ類が現れ、続いてツガ (*Tsuga dumosa*) が多い暗い森林が出現し、着生のシダ類やサルオガセが木の枝からぶらさがつている。同時にチベット式の平屋根はなくなり、切妻の板ぶきの傾斜屋根が現れてくる。われわれはもう何度も極端から極端へと変る氣候の地を旅行したことになる。ヒマラヤでも、こんどのわれわれの行程ほどその変化のはげしい場所は、

他に一寸類例が無いといつてもよいだろう。暑熱のサラの生えた低地、湿潤なカシの温帯林、乾いたネズの疎開林、極乾の刺のある灌木原、そして寒冷な高山植物帯から、いま湿つた針葉樹林へと、わずかな距離で変つたのである。まことにヒマラヤの気候は一言に説明しがたい。極端な表現を用ふれば、世界の総ての型の気候が、唯一つの例外を除いては、ヒマラヤに見出されると言へるだろう。この例外とは地中海性気候、即ち冬雨が多く、夏乾燥する気候である。これだけはモンスーンの猛威の前には、如何に地形の複雑なヒマラヤといえども、ネパールあたりではどうしてもできない型である。

## 五、ツムジエ村

六月八日、登山隊がサマからラルキャバンジャン越し西廻りの帰還についた日、われわれもサマを離れて東へ行進を始めた。サマに滞在中は今までの採集品の整理に追われてマナスルそのものの植物採集がいろ／＼不満足に終つたことは残念であつた。しかしいろ／＼小さいことで面白いことが判つた。例へばベースキャンプのテントのまわりにいくらでも咲いている黄色いスマイルは全く新しい種類で、*Viola Manasensis Maekawa sp. nov.*、いわばマナスルスマイルと名づけられた。

われわれの目標はシアール・コーラの上流の適当な部落に落ちつき、そこで川喜田君はその村内の詳密調査を一ヶ月以上にわたつてやり、わたくしはその間に附近の植物採集をやる予定であつた。われわれがスリング・ヒマールの南の山腹をよじて、だんだんシアール・コーラに近づくにつれて以外なことが判つてきた。今までグレート・ヒマールの北側にいる、チベット人と一概に言われたチベット風の生活をする連中が、彼等に言わせれば純粋なチベット人でなく、タカリとか、ラマグルンとか言ふ別の階級に属していた。しかしこのシアール・コーラのチベット人は純粋なチベット人、即ちブテア族であつた。しかし事實は皮肉なものだ、われわれが結局選び出して一ヶ月半の根拠地

にしたツムジの村には、チベットの象徴のようなヤクが居らず、かえつて今まで見てきたラマゲルンの方が、ヤクをたくさん飼っている。しかし川喜田君の詳細な調査の結果は、やはり純粋チベット人の村は、それだけに安心していままでのチベット学の上に大きく新しい事実を付け加えることができた。

ツムジェの村に六月十四日到着した。丁度この日から本格的なモンスーンに入った。もう一日中晴天の日は全くない。村は約三二〇〇米の高度で、目の下は深く約一〇〇〇米もシアル・コーラの川におちこみ、時々雲の晴間から望みあげると肩の痛くなるような急な斜面の上にスリンギーヒマールの峰々が上方に並んでいる。村は今麦刈りの最中で、穂だけ剪みとつたハダカムギが続々とわれわれの宿舎になつていたバルー老人の家に持ちこまれる。時たまの日射にわたくしが、標本用の新聞紙の乾燥をしようと思ふと、その場所は麦の乾燥のために予定されている。屋根の上へおけば風で吹きとびやすい。モンスーンになると新聞紙を乾かすことだけでも大苦勞である。

ツムジェの村は余りに急な斜面の上につた村であるので、附近に植物採集に日帰りで出かけるところが少ないのは一つの欠点だつた。しかし東の隣村カールとの間にあるバンゲー・コーラは四〇〇〇米近くまでさかのぼることができ、絶好な採集地の一つになつた。この谷には約三五〇〇米のところ大きな洞があつた。湿つた陰気な穴だが、それだけに附近には草木がよく茂っている。その洞の出口の辺は長い葡萄莖のあるキシムシロが垂れ下つている。始めてここに来た時はその花が固いつばみだつた。このバンゲー・コーラには、一ヶ月半の間に三回にわたつておとずれそのうす黄色の花を得ることができた。それは *Potentilla eriocarpa* var. *major* Kitamura var. *nov.* といふ面白いものであつた。またこの洞の附近に黄花の非常に小型のツツジが咲いていた。このツツジも新しい種類であつたが、残念ながら一九五〇年のティルマン隊によつて採集された標本が、わたくしが日本に帰りついた頃発表されてしまつていた。( *Rhododendron Loundesii* ) このバンゲー・コーラでは外にたくさん新しい種類が出てきた。 *Nardostachys gracilis* Kitamura sp. nov. *Cremathodium nepalensis* Kitamura sp. nov. などのほか、北半球の北部

に広く分布するチドリソウ (*Gymnadenia conopsea* R. Br.) という意外のものまで現われてきた。

村の上方の急斜面をした森林限界以上の牧野は、家畜の食害が非常にはげしく、植物相は貧弱だった。稀に採られた面白いもの、例えば美しい碧色の花の *Cyananthus nepalensis* Kiamura sp. nov. などは、家畜の食はないハイネズの株の間から伸びあがつたものだった。ともかく家畜が横行しているネパールヒマラヤの高山帯の植物採集は、家畜の入らない場所を目ざすのが成功の秘訣らしい。

## 六、タブレ・ヒマールへ

六月二十五日、シアル・コーラの最奥の山山へ採集に赴いた。モンスーン最中の旅行とて、どれだけ雨に降られるのか判らないが、ともかくジットしてはおられない。川喜田君は、民族調査のため通訳と共にツムジェの村に残った。

シアル・コーラはチヨガン (三一五〇米) から谷が広くゆるやかになり、大きなU字谷になる。この谷には農耕地がひらけ樹林は少ない。その辺に來ると谷の両側の岩壁にも針葉樹が少なくなり、おもにカラマツ (*Larix griffithiana*) が比較的目立ってくる。ところによつてはダケカンバ (*Betula utilis*) も谷をうめている。いまは夏麦の穂が出そろい、そのなかに緋色のケシがポツポツと咲き出している。モンスーンの雨を受けて、草も木も勢いよく枝をのびし、畑の間の道はしばしばぬかるんでいる。さながら画にみる北欧の田舎の光景だ。畑のふちには石垣が並び、それにそつて草の花が一齊に咲き出している。ゆつたりとした行進をつづけ、二八日には最北の東西に並ぶタブレヒマールの中腹カルン (四一〇〇米) に達した。

わたしのこの旅行の間にはニュージランド隊の単独行をしている人たちと幾度も会つたり分かれたりしたが、そのなかでも、マックカラム君とは何度も出遇ひ、彼もテントのない時はわたくしの隊のテントに泊つたりした。そし

てあちこちから花を集めてきて、わたくしに渡してくれた。そのなかにはあとでわたくしも採つたが、新しいシホガマの類もあつた。カルンのテント地では、今までわたくしが採らなかつた *Podophyllum emodi* をポーターのブテアが採つてきて、その若い果実を食べよとすすめてきた。こんなものが食べられるとは想像もしなかつたが、食べてみると一風変つたさわやかな味がある。ヒマラヤ山中で食べられる植物は、量的に多いものは比較的少ないが、風味といふ点ではなかなか逸品がある。巨大なメコノプシス (*Meconopsis paniculata*) の若莖、撒形科の一種の莖 (*Helicium sp.*)、ダイオウ (*Renn spiciforme*) などはいずれも生のままそれぞれの持ちあちの風味が棄てがたいものがある。チベット人は日本人や中国人ほど野菜食いでなく、肉や乳になじんでいるだけに、蔬菜の生食を好み、その時になると西欧風の趣味を発揮している。

シアル・コーラはカルンをつけねとしてT字形に分かれ、東の支流と西の支流になる。東の支流はムラダゼンチュウと呼び、西の支流をチエイゲエチュウと呼んでおり、夫々の先にチベットと接するムラダゼン峠とタブレ峠がある。わたくしは先ず西の支流へ向つた。タブレヒマールの南面に位するこの附近にはハヒネズの類 (*Juniperus squamata*, *J. communis*) などが山腹をうめ、日本アルプスのハヒマツのばつこぶりにそつくりである。このハヒネズの中に丈の高いエーデルワイス (*Leontopodium Makianum Kitamura sp. nov.*) が咲き出している。榎会長の名を記念したこのエーデルワイスは、大輪の苞を持ち、出遇つた時が未だ時季も早いせいか、大変青白いような感じの花であつた。

西むきの谷の最後のキャンプは広いカルカの平地で、たくさん牛が群らがつていることから三回にわたつて雪線の近くまで採集に出た。もう百年近く昔から、ヒマラヤの高山植物について一つのことわざがある。『ヒマラヤでは、雪線以上の場所が大きい山ほど、その雪線の下にある高山植物の種類が多い』と言われている。しかしこのキャンプから採集に出たタブレ・ヒマールはこの条件からまさに反対である。それにもかかわらずわたくしの収獲は非常に豊

富であつた。けれどもその時何とはなく、いまのこの時期に、マナスルで採集をしたらどんなものだろう。或は昨年おとずれたヒマルチュリの下のカルタル湖から採集に出たらどんなに面白いだろうかと、深く考えさせられた。

東への支流と峠へ向つた旅行では、収獲は主として地理学的で、植物学的につけ加えることは大してなかつた。七月五日、ツムジエに帰着するときには、用意した五〇〇枚の新聞紙が殆んど全部ふさがつてしまつていた。その途中での紙の交換と、乾燥は最も難しい仕事であつた。行動と採集のテンポは、何時もそのために慎重にコントロールされねばならなかつた。多分この新聞紙量の三―四倍がこのタプレヒマル採集行に適量であつただろう。もしそれだけの新聞紙を持てば、そのため専用のポーターが一名増すことになる。こんな計算をたてていくと、そこに簡単に見える押花造りの眞の苦心のありかが出てくるものである。

## 七、ガネシュ・ヒマールへ

ツムジエの村は、シアル・コーラをへだてて東にガネシュ・ヒマールに対してゐる。雲が切れるとガネシュの主峰が大きい三角形のピラミッド形になつて目の前につつたつてゐる。われわれが日本を出発した時には、ガネシュヒマールは、いまわれわれの対してゐる西半分が、全く未知であつた。ティルマンは一九四九年東の端からチリメ・コーラ沿ひにこの山群に分け入つたが、連日の雨にたたられて、非常な困難のち退却してゐる。われわれは残された西半分を調べてみることに大きな熱意を持つてゐた。しかしわれわれがツムジエに近づくにつれて、噂に聞いていたニュージールランド隊のガネシュ・ヒマール入りは段々事実になつた。そこはもうブランク地帯でなくなつていつたのだつた。われわれの夢の一つが破れてしまつた。しかしここまで来て全然ガネシュ・ヒマールに触れずに帰ることはできない。ガネシュ・ヒマールはツムジエの村から見ると、今までのどこともちがつた特色がある。それは山腹がびつしりと隙間もなく密林におおわれていることだつた。それは恐らくモンスーンに眞正面に対する、ヒマラヤの前列を

なした山形からきたものだろう。唯一の登路トロ・ゴンパ・コーラはツムジエから見たところ、青深い一直線のV字谷になつて、曲りこんでいる。その奥にあるものはやはり未だにわたくしにとつて魅力であつた。そこへ行けば、たつぷりと水を含んだ深い森林の典型に遇うことができるだろう。やはりそこは依然として、わたくしの義務としても一度訪ねねばならない。

七月九日、再びツムジエの村からガネシュ・ヒマールへ出発した。前回のタブレ・ヒマール行の時と同じく、川喜田君は村に残つて調査を続けた。期待した湿つた気候は期待以上の雨降りの連続で行程は進まない。タブレ・ヒマールへ赴いた時には、モンスーン中でも、これほど雨に遇ふことが少ないかと不思議に思ふ程だったが、ガネシュ・ヒマールでは徹底的に雨に降られた。晴れたのはわずか半日で、あとは低く垂れこめた雲か、雨の連続であつた。

しかしこの雨を受けて、草木はすく／＼と伸びている。あらゆる草木が葉を広く開いて、莖は高く茂つている。森林の下草のありさまは、日本で言えば上高地の徳沢辺の七月頃の雨の日の行進の印象を連想させる。咲いている花も日本のオタカラコウのような菊科の黄花が咲く *Ligularia spp.* とか、それを小型にした *Crematohodium spp.* などが目につく。一米近いメコノプシス (*Meconopsis nepalensis*) も、長大なトロ・ゴンパ氷河のモレインの間に咲き出している。この種はガネシュ・ヒマールのすぐ東のゴサインクンデで始めネパール人の巡礼者が採集して、学界に知られた種類であるが、その標本が果実だけで、花が無かつたために、長い間、花の色が疑問になつていたものである。ここに見る花は長い花序に多数着生し、花の色は赤味の強い紫色である。また三〇〇〇米附近の日光にさらされた露岩の上には、すでに暑い気温にさらされながら、サクラソウのうちでは珍らしく晩咲きの桃色の花、*Primula Shanul* がたく／＼開いている。これは長い間のネパールの鎖国時代に印度で訓練を受けたネパール人のシャルマ氏が、英国人に代つて採集した記念に名づけられたものである。

このガネシュ調査の頃から、そろそろ科学班の会計状態が困難なことが明らかになつてきた。旅行の費用というも

のは、なか／＼予め計算するのに難しいものだが、こんどの食いちがいの大きい原因は、ポーターの数を十五人として予算をたてたのに、実際は十七人になり、その数がいつまでたつても少しもへらないことだつた。わたくしはガネシユ・ヒマールの採集がすんだら、スリング・ヒマールへ北側からサルプチュエーに沿つて上り、高山帯まで登る計画をたてたが、それは費用の関係で遂に不可能に終つた。この地域はニュージールランド隊からの情報によれば、非常に花が多いと言われている。しかしそこではガードナー隊員が入念な採集をやつた模様だから、数年後にはその結果が明らかになるだろう。

#### 八、カトマンズへの帰還

七月二六日、いよいよツムシェの村に別れを告げて、科学班は一路カトマンズへ向けて帰還の途についた。まつすぐにシアール・コーラの河岸まで千米を一気に下ると、もう様子が大分変る。そこから急斜面を細い道でトラバースしていくのである。そこは余りの急斜面とて、森林はろくろく発達していないが、岩壁の着生植物は豊富である。毎日霧雨の降る中を前進していく。長い間わたくしの植物標本作りの助手は、ブラーマン出のナンナ・プラサドだつたが、彼の仕事のほんとうの困難はこの時から始まつた。われわれの旅は費用と天候と砂糖、タバコ等の物資欠乏に追われて、毎日ようしやなく続けられた。その間にも毎日新しい採集品が追加される。所持品は全部満つぽくなり、乾燥用新聞紙もその例外でない。テント地についてもおちついて紙を交換することがだん／＼困難になつた。しかし彼はねばり強い性格を発揮して、くりかえし半濡りの紙で交換をして乾燥をはかつた。この頃の標本を後程取り出してみても、その変色の具合や、葉のおち加減に、彼の努力のあとがちみ出ていることがわかる。

ブリガンダッキーの本流に到着した後は、乾季と雨季の道の悪さのちがひをうんと味あわされる破目となつたが、それはジャガートの下手から、川沿ひでなく、東岸の長い高巻きをはじめた時頂点に達した。川底の一一〇〇米から

再び二〇〇米まで登つて、再び喬木性シヤクナゲの地帯に入つた時、そこは山ビルの地獄であつた。この地獄の中を上下しながら一路南へと下つていく。もうこの辺の住民はグルン族が主であるが、まだ畑作で、冬麦、夏のトウモロコシ、シコクビエなどと、牛の乳で生活している。

八月三日 マージガオン（一七〇〇米）から以下で始めて水田の中を歩くようになった。その翌日どうやらなつかしのアルガート・バザールに到着して、無事にブリガンダキーの下降を終つた。

アルガート・バザールからカトマンズまでの旅は、われわれにとつては調査の復習にあつていた。この低地になると、モンスーンの雨は長い時間の霧雨でなく、だん／＼時間の短かい豪雨に変つてきた。この途を前進していつた時、いま帰つてくる時と較べて、今度は何に慣れ親しんでおり、また前に見すごした何物が見えたかが、われわれの生長ぶりの尺度になるわけである。その意味では油断のならない行程であつた。

低地におりてきてから、やつと今まで失敗続きだつたわたくしの課題の一つドロソフィラの採集に成功した。硝子の管瓶の中に腐りかかつたバナナを置いて、途々それを飼ひ、繁殖させながら行進していた。しかしタデイ・コーラの岸で船待ちを日光直射の下で半日やつた時、日蔭のない川岸に置かれたわたくしのサブリュツクの中に包んであつたドロソフィラは、折角第一代が孵化したものがあつたのに、卵や幼生共、全部暑さの為死滅してしまつた。いたしかたなく、再びカカニの岡の登りぎわから改めて採集を始めて、カトマンズを離れる迄に、やつとのことで一〇本ばかりの瓶にドロソフィラを飼ひこむことができた。

八月十四日、やつとカトマンズに到着して、旅行中の調査の最後の整理と、標本の梱包をした。今年度わたくしが主力をそそいだ暗葉標本は結局三箱約四〇〇〇枚で、種類数は丁度一〇〇〇種ばかりであり、そのうち新種は三五種ばかりあつた。ほかに栽培植物の種子など一箱、また淡水藻類で一新種四新変種、蘚類で一新種、地衣類で三新種などがあつた。

## 調査ノートとところどころ

川喜田二郎

中尾君の紀行のあとをうけて、科学班の旅から、私の見聞の二・三のトピックを加えてみよう。

### 仏教の分布

ネパールの二大宗教といえば、ヒンズー教と仏教とであるが、昨一九五四年の遠征がラマ教徒のため阻まれて以来、あるいは日本人たちには、仏教の一タイプたるラマ教のことばかりが大うつしに印象づけられたかもしれない。これはいろ／＼な意味で注意を要する。実はネパール人民の大多数はヒンズー教徒なのである。しかも大ヒマラヤの一線を境に、簡単にいえば南側がヒンズー教徒で、北側がラマ教徒という風に、かなりはつきりその分布が分れている。少くも私たちの歩いたカリガンダキ、ブリガンダキなどの谷すじではその印象をうけた。

ここで問題になるのは、首府カトマンズのある、いわゆるネパール・ヴァレーの場合である。この盆地ばかりは、ヒマラヤの南側にあるにも拘わらず、仏教がヒンズー教と分ちがたく混合しているようで、いわば異例とさええみられよう。そうしてこの盆地は全ネパール中で、また異例に早熟な文化の花を咲かせてきたところである。今なお、この

盆地ほどまとまつて美しく二毛作が行われ、沢山の住民が密集し、そうしてネパール中から多くの富が集められているところはないだろう。その上に中央政府があつて立派な町があり、インテリが沢山あつまつているところもない。日本のヒマラーヤ遠征隊は、全く或る意味で、このカトマンズ盆地の人々の声援の上に成立してきたことになる。もちろんとりわけ首府の中央政府の人々の。

端的にいつて、われわれはそれらの人々が大部分またヒンヅー教徒であることを認識し、ヒンヅー教ないしその教徒に対しても相当の理解と敬意とを払うことを忘れがちではないかと危懼する。カトマンズ盆地ではヒンヅー教と仏教とが混合しているとはいへ、それはやはり或る程度色分けられるようである。そしてヒンヅー教の勢力の方がずつと強いらしい。カトマンズ郊外の仏教寺院ソヤムブナートにいるアムリタナダ師などは、近年衰退をつづけてきたこの国の仏教を慨歎している。

そこで方程式はどうなるか。第一は、われわれが仏教徒であるからといつて、ヒンヅー教に対して礼儀としても余り冷淡なあるいはそれ以上にマイナスの態度では、ネパールにおける登山も學術調査も、将来において首府の人たちの精神的支援を損うおそれがないとはいえない。また峡谷部にさしかかるまではヒンヅー教徒の世界を旅するのである。

### 低地人と高地人

ヒンヅー教徒たちはヒマラーヤの南、総じて海拔高度の低い所に住んでいた。ラマ教徒たちはこの逆である。ところで、むづかしい宗教々義や儀礼の話などはぬきにして、ともかくこの両教徒、あるいはもつと広くいつて低地人と高地人とは、生活文化のいろ／＼の点でよほどちがったところがある。そのちがいの中でも氣質のちがいは、遠征の場合など注意を要するよう思う。宗教のちがいななどというとかかびつたり来ないが、宗教と絡みあつてい

文化のちがいが、特に氣質のちがいとなると、旅するものにはもつと切実である。ところが氣質などというものは、學術調査の対象として最も難かしいものの一つだろう。ともかく、乱暴にいつてしまうと、たとえば低地人は、良くいえば温順で教養がある。悪くいえば文弱でひねくれていて、しかも權威に服従する傾向がある。高地人は悪くいえば粗暴で個人の自立性が強く、温順しない傾向がある。良くいえば虚心坦懐、卒直で意気に感ずる。こういつた氣質のちがいだけならまだよいが、それはまたとりもなおさず、「何がよいことで何が悪いことか。」という人世觀の価値評價のちがいと絡み合っているようだ。

われわれはその上に日本人という、これまた特殊の文化の型、その価値評價の基準を身につけている。この三者が共々に旅をするのだから面白い。たとえば旦那衆のネパール人觀をきいてみると、それが私などには参考資料のひとつにもなる。某君は高地人が好きで低地人は余り好かない。その理由は前記美德惡徳の対照に記した通りであつた。某君は低地人の方が高地人より良いという。その理由は温順でポーターとして使い良いというところに、もつと具体的に、ポーター賃銀の駄引きを高地人ほしくないというところにあつた。が、低地人たちが数人を高地人と混ぜてポーターや通訳に使つたわれわれは、この両者の間のいがみ合いにも弱らされたのである。われわれの評価基準を以て片づけ去る前に、冷静な虚心坦懐な觀察ぶりをこのヒンヅー教徒の低地人とラマ教徒の高地人にひとしく向けるなら、實際問題にも人間科学のためにも、得るところが多いだろう。

### ラマ・グルンの話

ところで余り簡単にネパール人を二つにわけすぎた。実は低地と高地の中間に、もつともヒマラーヤ民族というにふさわしい連中がいる。グルン族などがその最たるものである。彼らはポーターとして最も良いように思われた。峻峻な山岳にすんで身体は強い。一般高地人のようにタバコもひどくねだらなしいし、それほど不潔でもなく賃銀のかけ

ひきもひどくない。まさに、良くいえば、低地人と高地人との美德をある程度併せている感もある。グルカ兵の主力は彼らとみえて、時々彼らの家にグルカ連隊時代の記念写真がかけてあつた。ところが、二大宗教文化のひろがりにはさみ打ちを喰つているせいも、低地部寄りのグルン族は、ヒンヅー風の文化が大分浸みこんでいるようである。他方高地部のグルン族は、ラマ教を信奉するだけでなく、服装もチベット風、言葉もチベット語に巧みで、なかにはグルン語を殆んど忘れているものもある。言葉の生活は、低地部グルンはグルン語とネパール語、高地部グルンはグルン語とチベット語という二重生活である。土地の人たちは彼ら高地部のそれをラマ・グルンと呼んでいる。ラマ・グルンは、シアル・コーラを除くブリガンダキ上流と、マルシャンディール上流とを本拠としている。サマの住民も、チベット族 Bhotia よりもラマ・グルンの方が多し筈である。あのチベット式平屋根家屋の密集するマナンポットの住民もラマ・グルンである。

しかし彼らは北方のチベットからひろがつてきたラマ教に同化されてのみ仏教徒になつたのだろうか。もちろんそれが主であろう。しかしラマ・グルンと限らないなら、グルン族の間に、ジャングリ Jangri と呼ばれるシャーマンのようなものがあること、それと結びついた固有信仰のあることは確かである。しかし、更に一九五四年ガネツシュ遠征の帰途、ガネツシュ・ヒマールの南面をトラバースした竹節作太氏の話をきくと、彼らの少くも若干は、チベットのラマ教とは別個に、やはり仏教をとり入れていた疑いがある。地理的關係を考えると、カトマンズ盆地辺から波及したネパール仏教をとり入れていた疑いがある。

こう考えると、カトマンズというところは面白味を増す。カトマンズは低地ネパールでは例外的に高い盆地である。低い所から次第にヒンヅー教に蚕食されて、このような高地部に残つたネパール仏教の、最も南に突出した残存がすなわちカトマンズ盆地の仏教だというのが臆説的な見方である。

## タカリ族の話

ラマ・グルンばかりではない。ティルマン氏によつても竹節作太氏によつても、トリスリ・ガンダキを挟んでランタン・ヒマールの辺にはラマ・タマンというのがある。やはり二大文化の挟み打ちを喰つて、チベット人化した高地部のタマン族たちのことを指しているのである。ラマ・タマンがグルン族の東に分布するに對して、同様な地位におかれて西側にいるのは、カリ・ガンダキ中流峡谷部のタカリ族 Takali あるいはタック族 Tak と呼ばれる民族である。彼らにもラマ教徒とヒンヅー教徒とがいて、おうむね峡谷部を境に住み場所が分れている。しかしまた、彼らの上流階級はヒンヅー教徒色が強く、中流下流階級はラマ教徒色が強い。

この民族について知つておくことは、將來ダウラギリ山塊、それ以北の山塊、あるいはアンナプルナ山塊に登山や調査の行われる時には、便宜もある。彼らは幾つかの特筆すべき点をもつてゐる。第一はグルン族などちがつて、部族的団結統制がよくとれてゐること。第二にカリ・ガンダキの通商を一手に握り、地方的政治力も強いこと。第三に、現在ネパールで殆んど独占的と評されるくらい商業的勢力をもつてゐること、あたかもインドにおけるマリワリ族にもたとえられるという。ポクラの町も彼らの商業的勢力下に牛耳られてゐるばかりでなく、最近にはタカリ族は中央政府からタバコの専売権を得たことがあるとさえいわれる。第四に、彼らが少数であるにも拘わらず、かくもエナージェチックな發展をしている裏には、單なる商業没頭だけでなく、彼ら自身の部族的生活の改革運動を全面的に推進しているという面白い物語り（恐らく事實である）のあることである。

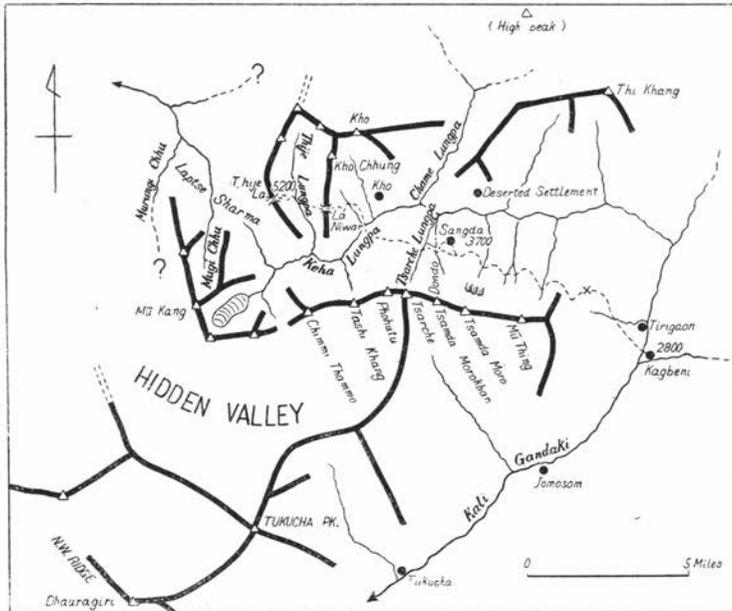
第五に、このタカリ族はまた、日本人と古くから御縁がある。すなわち河口慧海師の第一回チベット入りの時に、カトマンズ近郊ポドナートの支那<sup>チベット</sup>ラマの紹介で、トゥクチャのスツバ(郡長)のハルカマンという人の世話になつてゐる。このハルカマンは、今度の調査でタカリ族の最も有力な商人階級セルチャンド一族の先々代の首長であることが

判つてゐる。当時河口師のチベット入りは勿論、ネパール入りもまた秘密入国であつた。ハルカマンは河口師を日本人とは知らずに世話したのであるが、その河口師がチベット脱出後、自分と交際したラッサの人々が罪に問われてゐる噂を黙視するに忍びず、ネパール国王を通じて彼らの放免をダライ・ラマに乞うため、日本人としての身を明かして再びカトマンズ入りをしている。カトマンズの宮廷で、彼は再びハルカマンに会い、互いにびつくりするという面白い一くだりがある。当時ハルカマンは既にチベットのラッサに商用で赴いたり、ネパール政府の宮廷に出入りしていたりするわけで、タカリ族の商業活動が当時すでに今日の礎を築いていたことを思わせる。

#### ダウラギリ北方の地形と地名

われわれがカグベニからティジェ・ラ Thje La へ往復した路もまた河口師の名と共に記憶さるべきものである。師はカリ・ガンダキ源流、チベット国境に間もないツァーランという寒村で長滞在した後、カグベニの下流マルパアから、われわれと同じ西行路に登つてゐる。途中の非常な隔絶村サンゲダの名も記され、村に三泊している。それからケハルンパを直接に溯行したかティジェ・ラを越えたかは判らないが、途中ターシータン Tashihang (栄光溪) という谷の名を記している。この地名をわれわれは採集しなかつたが、その記述地点のすぐ南に屹つターシーカン Tashi Khang というピークを記録してゐるから、話は良く合致する。彼は谷沿いに旧道によつてチャルカポトガオン (トルポともいう由) に越えたらしい。

インド測量部の八マイル対一インチ地図は、ヒマラーヤ主嶺以北、特に主要道路沿い以外では、かなり地形の誤りがある。ダウラギリおよびアンナプルナを狙つたフランス隊の記事が、これを遺憾なく例示する。だから、ダウラギリ北方に当るこの辺りの地形も、スケッチにせよ今後の参考にはなる。第一図はティジェ・ラ近傍の地形の想像的なスケッチである。フランス隊の地図も併せ参考とした。ツアルチェという山と、ムーカンという山が、このあたり

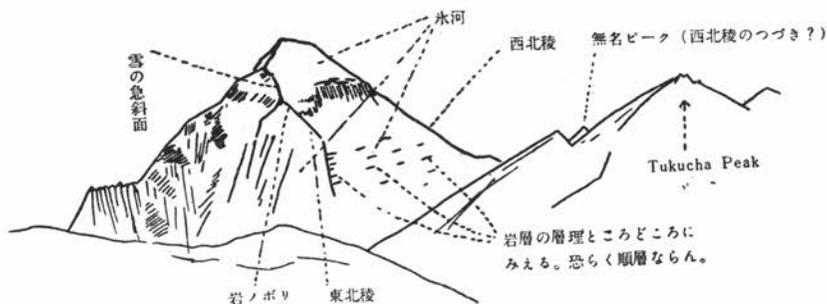


第1図 ティジェ・ラ附近地形概念図

で最も目ぼしい山で、高度はいずれも六三〇〇米前後かと推定する。ムーカンは秀麗なだけでなく、ティジェ・ラから望んだところ、登りやすそうな山である。ティジェ・ラとムーカンとの間には、かなり広大な高原(約五〇〇〇米近くあるう)ラプツェ・シャルマがある。チャルカボトガオンに越える道は、このラプツェ・シャルマ高原を横切つてゆく。

ツアルチエはムーカんにくらべ、かなり屹立して、手強い山であろう。これらの山々はそれだけでもヒマラーヤの登山家に楽しい登高の対象になるであろうが、その上にこの両山を連ねるピークまたは峠に立てば、フランス隊以来謎であるダウラギリ北方の地形が一目瞭然になると思う。フランス隊のいわゆる「隠された谷」Hidden Valley の正体も明らかとなるう。これはトポグラフィーカルな貢献となるだけでなく、ダウラギリ登路に接近するルートにヒントを与えるかもしれない。

というのは、わたくしの眺めたところ、この山の見込みありそうな登路は、まず第一に西北稜であり、それについてフランス隊の試みた東北稜である。フランス隊は



第2図 ムクチナートから見たダウラギリ。(双眼鏡によるスケッチ)

東側からしては東北稜の主稜にとりつくことにも失敗している。しかしフランス隊の最初の意図は、西北稜と東北稜との間、つまり北面直下の谷にベースキャンプを置くにあつたわけで、それができなかったのは、全く地図の誤りに負う。つまり地図上にトウクチャから溯つて北面直下に喰いこんだ谷などは、実際にはありはしない。われわれの観察でも、ダウラギリからトウクチャ・ピークを経てツアルチェまでの間は、いかなる谷によつてもリツヂがぶち切られていないようであつた。

エルゾグの記事は、文学的にすぎて、また最後の偵察行には他のメンバーが行つていたので、この北面直下を上からどの程度観察したのか判らない。しかし附図には、北面直下から出た大氷河が、西から南へまわり、ダウラギリ西側の溪谷の源頭をなしているように描いてある。もしその地図通りだとすると、西北稜はこの氷河に足もとをけずられて、とても峻峻なものとなつているだろう。ムクチナートから双眼鏡で仔細に遠望したところでは、第二図のスケッチの通りである。西北稜は、少なくとも東北稜の鞍部越しに望まれたところでは、甚だスムーズな傾斜の尾根で、傾斜も東北稜よりゆるやかなことは確かである。露岩のみえるような絶壁やアイスフォールのようなものに遮られているところはどこにもない。(東北稜も、そのプロフィールをほぼ完全に他所から眺めることができた。かなり長そうな尾根である。)

われわれと同じシーズンにダウラギリをねらつたスイス隊は、カリ・ガンダキに入らずに、ダウラギリ南方を迂廻して西側の谷を北上溯行している。アンドレ・ロ

ツシュ氏のヒマラヤン・ジャーナル(一九五四年)の記事では、七千数百米まで登った同隊は、絶望的な氷壁にぶつかつて引きかえしている。スイス隊が西北稜をねらつたこと、その情報を東北側から西北稜を眺めたフランス隊に負うていたろうことは、充分察しがつく。だからこそ南から迂廻して西から西北稜にとりつくことを狙つたのであろう。しかしその麓に達するまでのアプローチは並大抵のものではなかつたらしい。トラベラーとして眺めただけでも、ダウラギリ登攀の鏈を握るのは、西北稜にとりつけるかどうにかかると思う。スイス隊はそれに失敗したが、それは上記スケッチには隠れている西北稜の下部が余りに険峻だつたからである。その結果彼らは北面を直登せざるを得なくなり、頂上に近い北面の岩壁帯の右端まで登つたが、ついに西北稜へ今一步の所を阻まれたのである。なお同隊の北面の写真では、左端の滑らかな尾根が東北稜である。東北稜の可能性についてはロツシュ氏は詳しくは触れていない。スイス隊の行きづまつた岩壁地点でダイナマイトで短距離の足がかりをつくつて西北稜に出る以外、この山の登られる見込みはないといつている。

私の今の印象では、北方から「隠された谷」に入り、そこからダウラギリ北面直下に入れないとしても、その西北山郡を窺つてみることは、小エキスペジションの一興味ではないか。この辺にも、ムーカン峰あたりをうろつく面白味のひとつが残されている。河口師は、チャルカボトガオンへ越える路のどこか(恐らくラプツェ・シャルマ高原辺)からダウラギリ峰を望み見ている。「隠された谷」に北方から入るには、恐らく万年雪のない鞍部がラプツェ・シャルマの南方にあるかと思うが、確実にはいえない。ティジェ・ラの頂きでは、ダウラギリの写真をとろうと大分ねばつたが、雲はついに晴れなかつた。

なおケハルンパ北方の地形も、上記のインド測量部地図はかなりひどく間違つている。

インド測量部の地名の綴は、ヒマラーヤ以北のチベット風地帯では、現地人の発音とかなりちがう場合が多い。全体的にみて、チベット語または土着民族の言語と、ネパール語と、両方の地名をもつ場合には、たいていネパール語の地名を採っている。現地ではそんなネパール語地名は殆んど現地住民からきかないことも多い。

もつとも同じ村落に二つも名があることは珍らしくない。大体ネパール語とチベット語とは、それぞれ低地部と高地部における国際語的性格があるから、多くの民族が自分たちの言語の他にこれらを用いておれば、地名に二種あつたつて不思議でもない。

次に、発音癖が、ネパール語ないしヒンズー語系統の場合とチベット語の場合とでちがつている。簡単な例では、チベット人たちがツァ行やザ行で発音するのを、低地人たちはどうしてもチャ行やジャ行でききとる傾向がある。われわれの滞在したツムジェ村を、通訳はどうしてもチュムジェと呼んでしまう。地図上でチャルカボトガオンとなっているのは、河口師あたりはツアルカとしている。どうせ現地発音を正確にききとることは至難のことではあるが、なるべく正確たらんと努力し、かつなるべく現地名によるのが現代の正統的な教養であり、また新地名をつけ加えることになる場合には発表者の責任も重いということは、ヒマラーヤ旅行者も当然心得ておくべきことであろう。余りに杜撰な綴りで書かれたものをもつて、プライオリティを云々されては耐らない。この点、英国王立地学協会辺りの地名委員会のシステムなども誰かは知つておくとういと思ふ。

## 山 の 名

カグベニ西北の二〇三三四峰は、カグベニ村民によれば、ティーカン Thi Khang とよぶ。ケハルンパ上流の山名は前図の通り。ムクチナート背後の峠は、ムクチナートの近辺の村人によれば、ニサンゴ・ラ Nisango La であり、この峠の北にそぼ立つ高峰はプーラン・ラプツェ Puran Laptsé、同じく峠の南の高峰はヤカワ Yakawa とよんだ。

アンナプルナⅢ峰をマナングボット近くできいたら、マナング・カン、つまり「マナングの山」というだけで、別名もないようであつた。大体チベット語の山名は貧弱で、しかもピークのみを指さず、その辺一帯の土地そのものを合めて呼ぶことも多い。

ティルマン氏によつてヒムルン・ヒマールと呼ばれているビムタコーチ源流の山々は、ラルキャ・ラのすぐ北にそびえる高峰をチョウ・ラナ Chou Lana といひ、これから西へつらなるリツジの中で特に目立つ切り尖つた高峰（多分二三三八〇フィート峰）はパンガル Phangar（あるいはプランガル Prangar?）といひ、更に西側の水河の源頭あたり、パンガルから西南南辺に当りそうな高峰はニムロン Nimlung とときく。いずれもビムタコーチで傭つた男からきいた名である。ヒムルン Himlung という名は、ニムルンというのとどちらかが聞きそこなつていられるかもしれない。北部につらなるのは、ティルマンではチェオ・ヒマール Cheo Hinal となつてゐるが、チョウ・ラナの名がそれを思わせるのみである。ティルマンは四マイル一インチ地図（インドでは秘扱いになつてゐるので、われわれは使用できなかつた。一九五二年の探査隊はネパール政府から借用してゐる）を使つてゐるようであるから、それにヒムルン・ヒマール等の名が出てゐるのかどうか。

サマ下流にある、地図上ではバルチャム Barham となつてゐる村も、村人らはバルツァム Bhartsam と呼んでゐる。だいたい h は、インド式スペリングではアスピレーションをあらわすように使つてゐるから、ネパールの地図でも Thangja と綴つてある村（マルシャンディー上流）などは、サンジャと呼ばずにトンジョと読まず心算で書いてあるのである。尤もこの村の現地発音は私の耳にはどうしてもトンジョでなくトンゾ Thonzo であつた。ネパールの人が英語で「そう思います。」 I think so. というのが、日本人の耳にはシンクといわずにティンクときこえて耳ざわりに感じた人は多いであらう。さてそのバルツァムの北にある二〇七九五フィート峰は、ローの村人によればプランガル Prangar といひ、ガブシャの村人によれば、マ Ma という。この場合の Pra の r は、極めて短かく軽い

て、Pa-あるいは Pha-と書きぞこねることは多いであろう。しかしこの種の r は、チベット語では多い。なおツムジエの村人は pra, tra を、いづれも大岩を意味する語として用いた。

ツムジエ近傍におけるガネツシュ・ヒマールの山名は、最高峰を含んでそれから西へ連なる一群をルンブー Lun-  
gbu と呼び、地図上のラムブー Lampu 及びそれ以北の一群をカンダン Khang Dhang と呼んでいる。ルンブーが  
父母で、カンダンを兄弟姉妹と見立てている。それゆえ、地図のランブー峰は、名前が低地人風に幾分歪んでいる上  
に、峰をとりちがえて名づけたのだと思う。ガネツシュ主峰が実はルンブーなのである。なお彼らは、背後にそびえ  
るスリンギ・ヒマールをチャムレ Chhamle と呼ぶ。

### ヤクの習性

カグベニのヤク使いから聞いた話。ヤクはチベット語でヤクといわずヤ Ya という。この発音は短かい。ただ「ヤク  
の肉」yak sha などと次の語が来る時にのみ k があらわれる。牝ヤクは dino、牡ヤクは pohā とよび、ya はま  
たヤク一般の他に去勢された牡ヤクにも使う。牛一般は phalang というが、去勢牝牛は loho、牝牛は phalang と  
いう。去勢されない牝牛はやはり phalang という。しかし仔牛は一歳、二歳、三歳、四歳のがそれぞれ phib, dhuo,  
shepa, thuchik という。この仔の場合の呼び名は、ヤクの場合も共通であった。

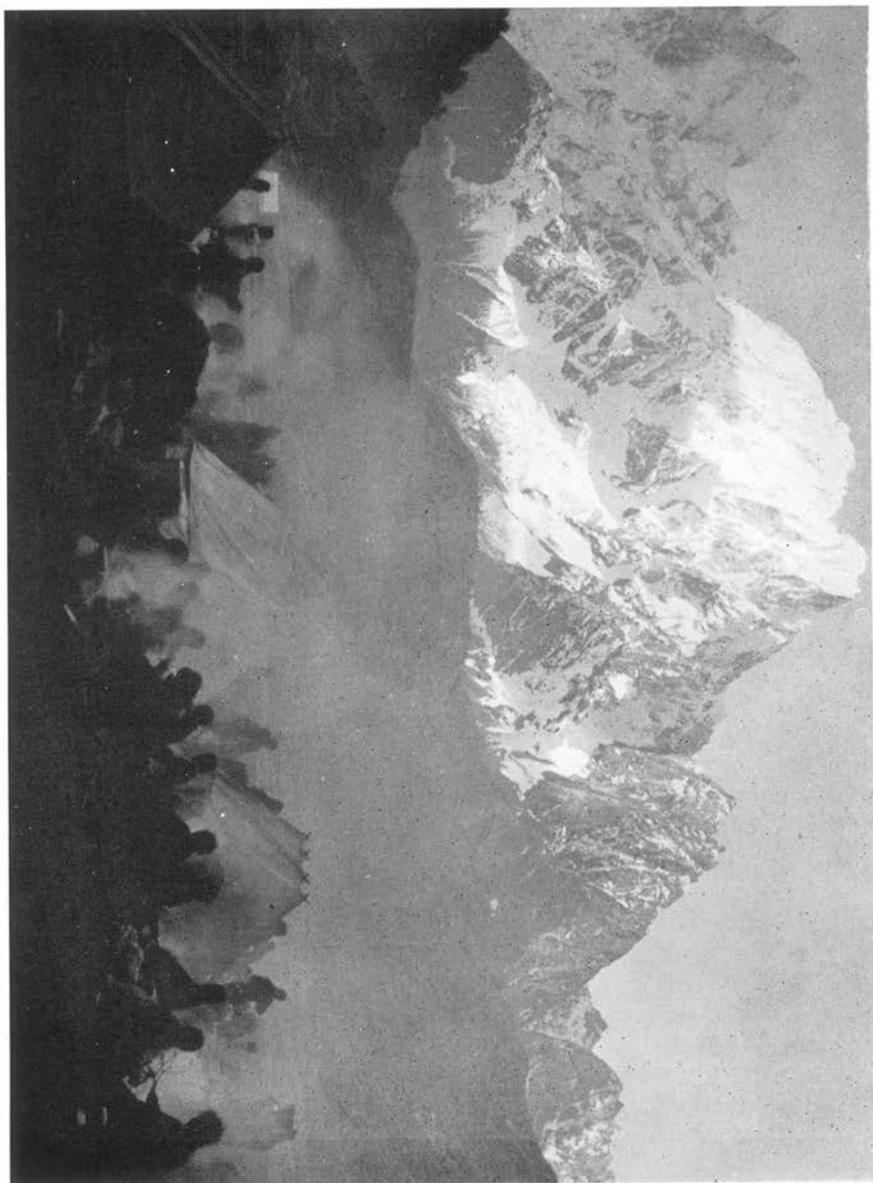
ヤクと牛の雑種はゾウ zo といい、牡ゾウと牝ゾウはそれぞれ zopa, mamzo といっていた。父がヤクで母が牛の  
ゾウは pham-zo であり、その逆は dim-zo。すなわち、いずれも母になつた方の家畜の名が修飾語として使われて  
いる。これはあながち無意味でもないかもしれない。というのは、ディムゾウの方が高地に適し、パムゾウの方が低  
地に適するという話だから。またパムゾウの方が数は多いが、ディムゾウよりも悪く、値段も安いという。ゾウパは  
大体全部去勢されている。しかし、たとえ去勢されていなくても、生殖力は持たない（ゾウ同志で）という。マムゾ

ウと牝牛との雜種は langdol といい、マムゾウとヤクとの雜種は tholdu という。

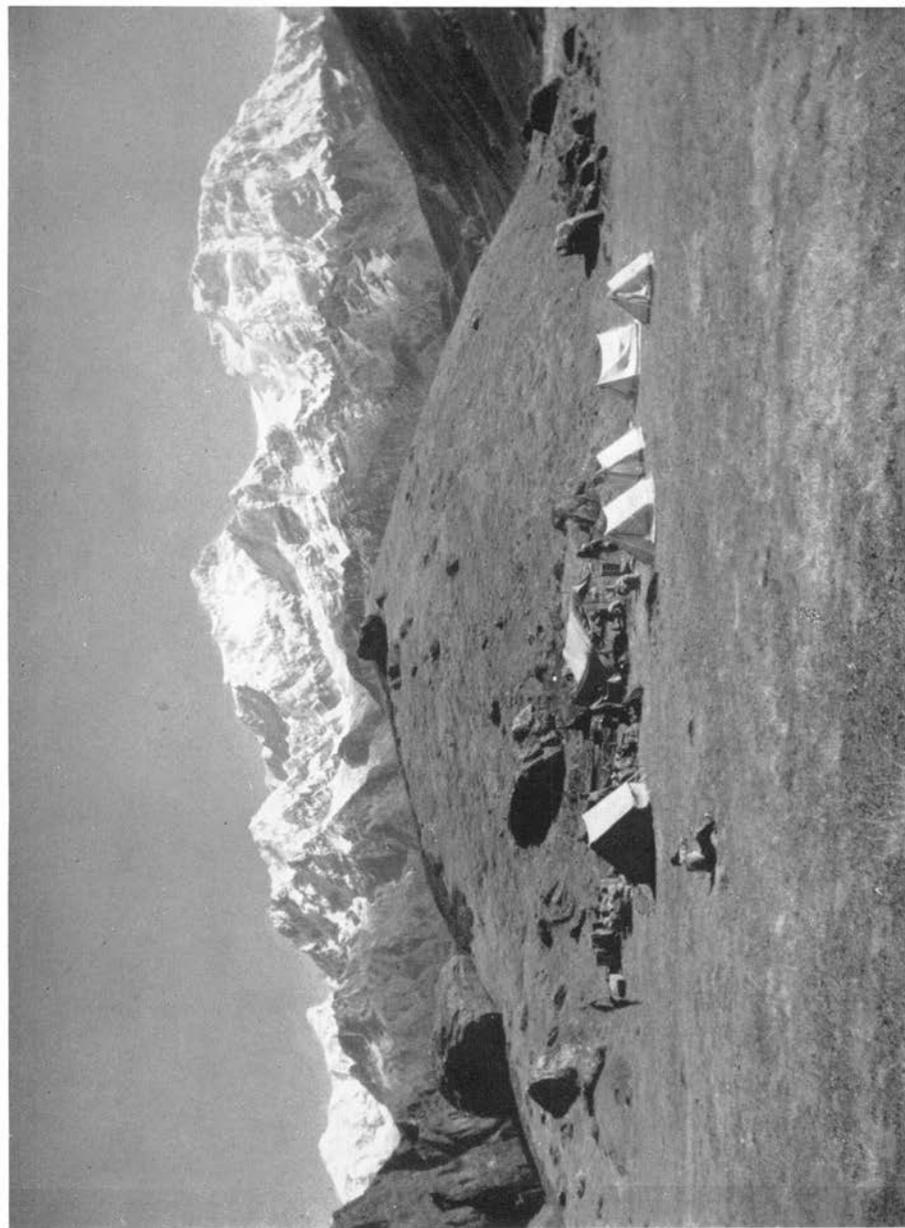
ゾウバとヤクとは同じチームで働くことができる。ヤクは放つておいても七—八マイル以上遠くへは行かない。他所からヤクを買つて来る場合、最大限四歳以下なら、馴らすことによつて遠くへ行かなくなる。それ以上経つてゐると、もとの棲み処へ戻つてしまう。ヤクの群にはリーダーがいることが多い。リーダーは牝で、去勢してあると否とを問わない。しかしヤクの殆んどは去勢する。というのは、去勢しないヤクは、輸送の時、しばらく行くと動かなくなるからである。リーダーのヤクは特殊訓練を受けていて、値段も高い。ヤクは、たとえば四、五頭の群に新しく四、五頭を加えると、その二群はいつしよにならず、別行動をとる。三年位はどうしてもいつしよにならぬ。ヤクのリーダーが歩けば歩き、ねむればねむり、起きれば起きるという風に、他のヤクはリーダーに従う。

ゾウバがヤクとちがうのは、まづ飼料の条件で、ゾウバは舎飼いし、ヤクは戸外に放牧する。ヤクは冬には水を汲山飲む。草が乾いているからである。雨の多い緑草のシーズンには、二、三日飲まず食わずで過すことができる。ヤクにはマスタード・オイルや糖蜜を与えることがあるが、それも全然やらぬ場合から、一年に一度あるいは一カ月に一度といつた場合までまたがつている。与えればヤクのためにはよい。その他には濃厚飼料は全然やらない。塩は時々与える。現にわれわれのティジェ・ラへの旅につれてゆく直前には、われわれのヤク使いはヤクに塩をやつたそうで、だから旅行中にはやつていないと答えた。カグベニに帰つたらまた塩をやるという。ヤクは塩がほしくて衣服までかじることがある。チベットやチャルカポトガオンの方では、野外で塩を求めて足りているが、カグベニ近辺では塩をやらねばならない。

ヤクが餌を食う回数は一日三回である。第一回は夜明け一時間前。次いで日光の射すと共にねむり、午前もおそく風が吹きはじめた時に起きて餌を食う。またねむり、夕方にもう一度食べて、夜はねむる。日中用役に使われると二食になつてゐる。吹雪の時には、ヤクは風に従つて行き、雪の少ない所をえらぶ。弱い仔のヤクは時々深い雪のため



ピュタコーチの朝



ナムバンチャン南麓のキャンプよりマナスルP29を望む

飼料不足で死ぬ。ふつうのヤクはかなりの日数を雪で閉じこめられても、林の中その他に避難場を求めてジツとしていて、それから木でも食べて生きられる。

ヤクの垂直的な行動範囲は、カリ・ガンダキの河筋では最低に下つてもレテ Late (海拔二四四〇米)より上流に限られるが、ゾウバはダナ Dana (一四二〇米)まで使える。以上が彼らの話である。尤も、それはぎりぎりの辺らしくて、われわれがゾウバのかなり混りだしたのに気づいたのはトゥクチャ (二五五〇米)から上で、カゲベニ (二八〇〇米)では多くみた。しかしカゲベニでは、まだヤクを使用し、かつ放牧さす適地としては低すぎるようで、附近の高地に放牧しているらしい。マナンボット上流で見た放牧現地は四〇〇〇米余であつた。まず三五〇〇米以上がヤクの安定的な世界であるうか。三二〇〇米のツムジュ村は、ゾウバが安定的な村であつた。

## 附記

一九五四年のマナスル登山隊は堀田彌一氏を隊長として、谷口現吉、加藤喜一郎、山田二郎、村木庸益、大塚博美、松田雄一、松沢幸雄、日下田実、村山雅美、辰沼広吉、山崎英雄、竹節作太、依田孝喜の十三名をもつて編成され、三月六日羽田出発、三月十四日にネパールの首都カトマンズに集結し、三月廿一日同地を出発、順調に行進をつづけて最終部落のサマに向つたところ、ローの部落に於て、サマ部落を主とした附近五部落住民の我が登山隊に対するマナスル登山阻止という全く予期しなかつた障害に遭遇した。登山隊は一応ニヤツクの部落まで転退し、村山隊長並びにデイリー通訳は現地各方面への折衝をなし事態の打開を計つたが現地の反感は強く、更に危険な事態の発生も察知されたので、遂にマナスル登山を断念するの已むなきに至つた。ここに於て全隊員協議の結果、ガネツシユ・ヒマールに目標を変更することとし、その登山許可方をネパール政府に要請、諒解を求むると共に此の旨を本会に請訓して来た。この報に接し本会は役員会をヒマラヤ委員会と合同にて開催し協議の結果、ガネツシユ・ヒマールに登山目標変更の已むなきを承認し、毎日新聞社も亦これを諒承、既定の援助継続の旨を本会に伝達された。幸いネパール政府よりもサマに於ける不測の事態発生に対し遺憾の意を表すると共にガネツシユ・ヒマールへの登山目標変更を許可する旨の回答を受けましたので、本会は登山隊に対し慎重に新目標に向うことを訓令した。遺憾ながらガネツシユ、ヒマール登山は踏査に終り、六月十九日帰国した。ここに一九五四年マナスル登山隊は毎日新聞社並びに国民各位よりの多大の援助、激励を受け、前二回にわたる踏査、登山の資料にもつき万全を期してマナスル山頂に向つたが、前記の事情により次期遠征に希望を託するの已むなきに立ち至つた次第である。一九五四年の堀田隊の報告は本誌次号に掲載の予定である。(編者)

## アンナブルナ・一九五三年

### 京都大学学士山岳会

#### 国境ノートンワへ

京都帝国大学白頭山遠征隊の報告書の巻頭に、今西錦司博士は「何故冬季の白頭山に遠征を試みたのか。この無難な問いが屢々我々を悩ます。我々にしてみれば白頭山を試みなくてはならなくなつたから、というのが正直なところである」と、述べているが、それから二十年近く経過した。アンナブルナ遠征隊は、今更こゝに述べるまでもなく、AACK（京都大学学士山岳会）年来の宿望の一端が、実を結んだということであつて、今西博士の言を借りればヒマラヤを試みなくてはならなくなつた」から、というのがほんとうの気持である。

ヒマラヤ遠征は、AACKが一九三一年結成されて以来、会自体としての大きな目的の一つであつた。一九三二年のカブルー計画、一九三八年のK<sub>2</sub>計画をはじめ、しばしばヒマラヤ計画が立てられた。とくに一九三六年から七年にかけては、伊藤愿氏がインドへ派遣されて、K<sub>2</sub>計画の実現につとめるまでに到つたのであるが、不幸にして、これらの計画はいずれも実現をみなかつた。しかし、われわれのヒマラヤへの熱情は、ますます高まる一方で、その間、白頭山をはじめ、大興安嶺、蒙古、小興安嶺、樺太、知床半島へ遠征隊をおくり、遠征に対する経験を積んできたので

ある。一九五一年、会員西堀榮三郎博士が、会長木原均教授に同道して渡印し、さらにネパールに入国して、同国政府と交渉の結果、ネパール入国の難関は解決され、ネパール・ヒマラヤへの計画は、実現可能の問題として浮び上ってきたのである。

アンナプルナ遠征計画が、AACKによつて具体化されたのは、一九五三年五月になつてからであつた。もちろんヒマラヤ遠征は、それ以前から会員の一人々によつて、計画されていたが、五月十五日、AACKの会合において、正式にアンナプルナ第二峰（七九三七米）の計画が採りあげられ、ついで十九日には京大生物誌研究会の協力が得られることに決定し、こゝに遠征計画は実行の段階にはいつたのである。そこで直ちに、木原均会長を委員長とするヒマラヤ委員会が結成され、実行機関として、四手井綱彦教授を中心とした総務会が活動を開始した。

計画は最初から登山を目的にした軽装備の小パーティとし、隊員は若い会員により構成するという方針がたてられた。その結果、今西寿雄が隊長に推薦された。そして六月十四日AACK総会当日、ヒマラヤ委員会にて隊員選衛の結果、一九名の希望者の中から、つぎの七名が決定し、アンナプルナ遠征隊は即日編成されたのである。

隊長 今西寿雄(38) 農卒

隊員 藤平正夫(28) 経卒 氣象担当

伊藤洋平(30) 医卒 医療、渉外、写真担当

舟橋明賢(28) 法卒 マネージャー担当

藤村良(26) 農卒 食料、植物担当

脇坂誠(27) 農卒 装備、動物担当

立平宣雄(28) 法卒 報道担当

このうち、脇坂は後日追加され、また後援新聞社の希望により、立平が隊員兼特派員として報道の任を受けもつこ

とになった。

遠征決行の時期については、ヒマラヤのブレ・モンズーンとポスト・モンズーンの何れを選ぶかについて、議論の余地は充分あつたが、計画の第一目的は、好機を逃さずヒマラヤ登山を実践することであつた。入国、外貨、資金、登攀時期等の問題を充分考えあわせ、すべてのことを緻密な順序正しい計画に従つて、処理してゆくのが、大きな遠征の場合には本来の正しい方法であろう。しかし、われわれはチャンス逃してはならなかつた。日時が切迫し、すべてのことに無理があるのを知りながらも、敢えて一九五三年ポスト・モンズーンに決行することにしたのは、この機会を逃さず、とにかくヒマラヤ遠征を実践するという行動主義の建前からであつた。

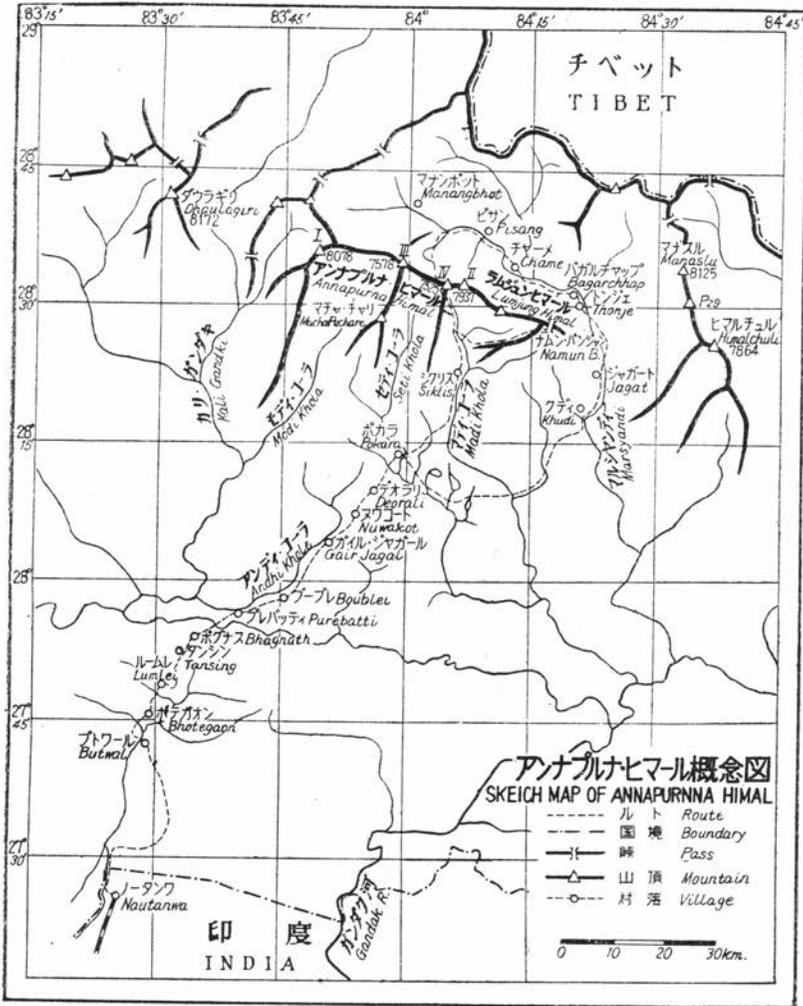
いよいよ、準備の段階となると、それこそ大変なさわぎであつた。隊員はもちろんのこと、京阪神及び東京在住の会員、京大山岳部員、京都の高校山岳部員諸君の応援を得て、資金調達、装備、食料の準備、対外交渉等、遠征本部は不眠不休の活動であつた。遠征隊出発までの時間的余裕が少ないため、すべての準備は並行して行わねばならず、人手はいくらあつても足りなかつた。とくに隊員の三名が東京に勤務をもつているため、京都と東京、双方の連絡は毎日定時に、或は不定時に電話連絡を行つたのであるが、やはり、ときに意志の疎通をかき、連絡が圓滑にゆかない場合もあつた。とくに東京では手不足で、学習院の山岳部員諸君の夜を徹しての応援によつて、準備が進められたのであつた。

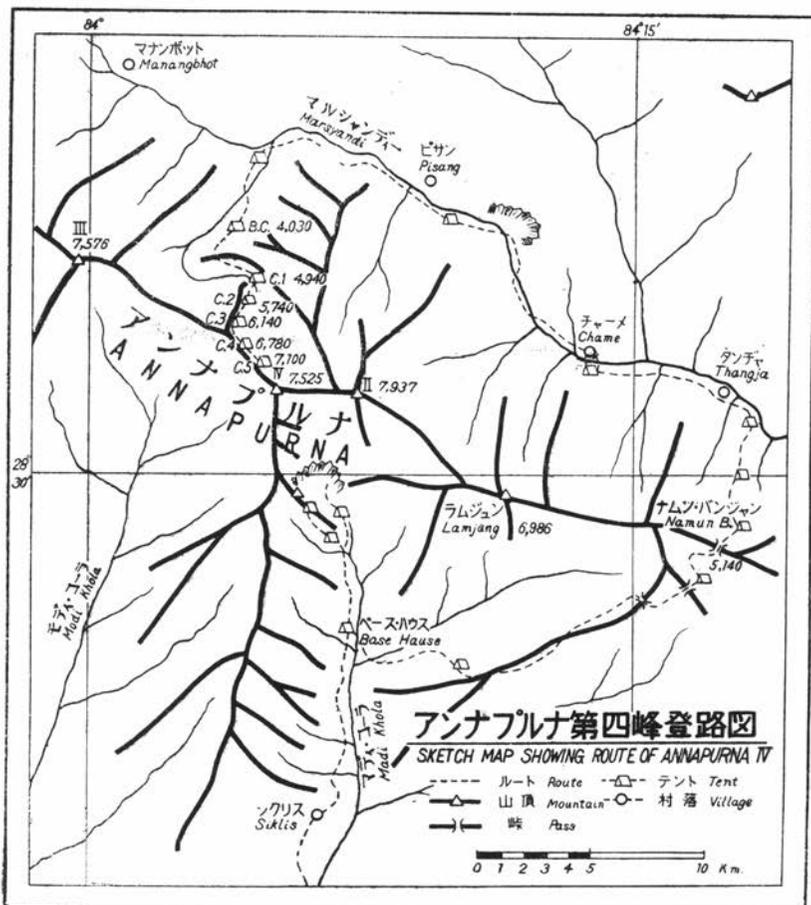
装備、食料を発注したのは七月中旬、低地旅行用のものは、七月下旬二艘の荷として、大阪商船銀光丸でインドへ向けて送り出した。登攀用のものは、八月中旬東京に集荷し、梱包ののち、空路カルカタへ向けて発送した(約二艘)。かくして約一ヶ月半の文字通り火事場さわぎの観を呈した準備を終えて、一段落ののち、関西在住の隊員は、八月二十五日夜、多数の会員、友人等の見送りを受けて、東京へ出発した。東京には、まだ多くの仕事が残つてゐた。これは本隊が出発する日までつづいた。

先発隊の伊藤、舟橋が羽田をたつたのは八月三十日、吹きぶりの夜であつた。つづいて本隊の今西、藤平、藤村、脇坂、立平は九月五日、そのあとを追つた。カルカッタでは、先発隊がネパールの皇太子秘書ダルシャン氏と会い、政府との打ち合せをすませていた。またダージリンからヘンダーソン夫人も出て来て、シエルパの選定が終つていた。西堀博士いらいのネパール政府とヘンダーソン夫人の好意によるものと感謝にたえない。

契約したシエルパは、ガルツェン(サーダー)、タンドウ、ダワ・トンダップ、ダ・ナムギヤル、パサン・ダワ、ゲンディ、アン・ニマの七名である。ヘンダーソン夫人は、このシエルパ達は一九五三年のエヴェレストで、最も活躍した優秀な連中を主力としたもので、これ以上のシエルパは集められないと太鼓判をおしてくれた。彼等は夫人の言葉通り、隊員なみに活躍したのである。

ガルツェン(40)は、エヴェレストへ二回、そのほかカラコラム、カンチ、ヌン・クン、ガルワール、アンナブルナ第四峰、三度にわたるマナスル隊のサーダーである。タンドウ(50)はガンゴトリ、チョ・オユーの経験をもち、五三年エヴェレスト隊のクックとして、二四、六〇〇呎まで登つてゐる。ダワ・トンダップ(48)はナンガ・バルバットの生き残りであり、エヴェレストへ五回、K<sub>2</sub>へ二回、アンナブルナ第一峰、カンチ、トリズルと歴戦の勇士である。五三年エヴェレストでは二六、〇〇〇呎まで。ダ・ナムギヤル(34)はアンナブルナ第四峰、ナンダ・デヴィ、エヴェレストへ二回、五三年エヴェレストでは二七、三〇〇呎まで。ティルマンも讃辞をおくつてゐるが、最もよく働いたシエルパである。パサン・ダワ(30)はアンナブルナ第四峰、ガンゴトリ、五三年エヴェレストでは二六、〇〇〇呎まで。ゲンディ(29)はチョウ・カンバ、エヴェレスト、マナスルへ。アン・ニマ(22)は一番の若手であり、エヴェレストへ二回、五三年には第九キャンプの二七、九〇〇呎まで達している。若くて、むちがあるから気をつけてくれのとどこであつたが、ゲンディと共に愛嬌者で、隊員に可愛がられたシエルパである。ガルツェン、ダ・ナムギヤル、パサン・ダワの三名は五〇年のティルマン隊に参加し、アンナブルナ第四峰の経験者であつた。また全員がエヴェレスト





隊に参加し、ガルツェン、ゲンディを除いた五名は、五三年のエヴェレスト隊では高所で活躍した連中であつた。

カルカタにおいては、日本総領事館の児玉氏の御世話により、ネパール領事館、通関手続、東京銀行、鉄道輸送の準備、氣象台との打ち合せ、燃料や食糧の買物等は、すべて予定通り完了したのである。が只一つ、低地用の貨物を積んだ船の入港が予定日より、一日、一日と延びるので、これを待つため数日を空費した。日時の関係上、今西、伊藤、藤村、立平の四名は、空路輸送した荷（高所用）とともに先発し、藤平が船の到着を待つて、後発することになり、九月十二日夜カルカタを出発した。インドでは、すべて予定通り、ことが運ばないのが普通なのである。釈迦の説教場で名高いベナレスに、三時間おくれて到着。災害のため列車は迂回路をとり、ゴラクプルを経て、一日おかれて十四日の夜おそく、ノータンワに着く。国境の駅には、リエゾンのデイリー君、シエルパが顔じゆう、ほころばせて迎えてくれた。日一日と深まつていた焦慮もどこへやら、信州のとある駅で山案内に迎えられたような、懐しい故郷に帰つたような感じであつた。駅の待合室で夜を明かす。

### ボカラへの途

あくる朝、シエルパはわれわれの前に整列して、デイリーがサーダーから順次彼等を紹介した。これがシエルパとの正式の対面であつた。警察と税関での手続きをすませて、午後ジープとトラックで泥道をプトワールに走る。国境には標識の石の塔が立つていた。ここから、玉石の敷いた割合よい道になつた。ネパール側はサインしたのみでフリーパス、ネパール政府の好意は、この辺疆の地までとどいていた。雲の切れ目に、前山からぐんと高く、待望久しかつたアンナプルナ山群が白銀を輝かせ、私達の夢の世界であつたヒマラヤは現実に近い。やがて湿地帯をすぎ、タライの森林地帯にはいる。一帯はマラリアの巣であるらしい。植物を専攻する藤村は、タライ地帯に非常な関心をもつていて、帰りには是非歩いてみたいらしい。

四時間ばかりで玉石でガラガラ道の、山の宿場といった感じのプトワールに着き、ディリーが準備してくれた宿舎にはいる。恒例のお祭りが近づいていて、必要なポーターを集めるのはむつかしいらしい。またグルカ兵が休暇をとつて、ぞくぞくと帰つていく。彼等は人夫賃を奮発していくので、自然と予定の人夫賃ではおさまりそうもない。どちらを向いても、いいことは一つもなさそうだ。

あくる日、宿舎は戦場と化した。伊藤ドクターは患者の診療に汗だく。これもポーターを集めるための重要な労働である。藤村は後発隊に残してやる装備の入れ替えに半狂乱である。シエルパは慣れたもので、藤村の指図通り、次から次へと梱包が出来上る。われわれ先発隊には、トラベル用の食料も装備もないので、ここで調達する。あつらえむきに降つた雨水を集めて、立平はフィルムスの現像に一苦労。京都への報告、後発隊への連絡、家族への通信を書き終えたのは夜半の二時であつた。

九月十七日。いよいよ本式の旅が始まつた。村はずれのティノ・コーラに、スコットランドの会社銘のある立派な吊橋がかかつていた。一行はサーブ四名。シエルパはガルツェン、タンドウ、ダ・ナムギヤル、パサン・ダワの四名。ディリーの従者ミン、ポーター七十一名、総勢八十名である。後発隊のため、ディリーとシエルパ三名を残す。右岸の部落でポーターが食料を買入れ、ナワコット峠への急坂にかかる。峠にかかる頃から、雨が降つてきた。魚釣り用の三角帽をかぶり、胴らんを腰に、藤村はこうもり傘をさして、得意そうに歩いていたが、ナイロンの合羽を着て汗を流している隊員よりは、気持ちよさそうであつた。

ナワコット峠には茶店が二軒あつて、甘いお茶を売っていた。ポカラ方面からの旅人、またグルカ帰郷兵など人通りがたえない。峠を下り、再び、ティノ・コーラの吊橋を渡つてボテガウンに着く。民家の二階を借りる。日本からのインド、パキスタン向き放送が雑音もなく、きれいないつてくる。

ルームレへの道は遠く、五〇万の地図では見当がつかない。地図にないコーラを溯る。ラニ・バース峠を越え

て、シシネ・コーラを北に向つて溯る。シシネといふトゲのある植物が、やたらに生えているところから生れた名であらう。青々としたタンボが続き、藤村は亜熱帯的農耕地帯の調査をしたいのだが、ガルツェンの通訳では、一向に通じそうもない。この低地帯は日本人が歩いていけないので、デイリーがおればと、くやしがる。赫岩の露出した坂路を汗だくで登り、モシャル峠を越えて、ルームレに下る途中、日本語の話せるグルカ兵に出遇う。戦時中、シンガポールにいて、東京にも行つたことがあると話し出し、今西をつかまへて、「お前は支那人か」とには、恐れいつた。実りの時期は楽しいものである。想像していた程の暑さでもないし、パイヤが実り、バナナが店頭にならんで食欲をみたしてくれる。しかし、一行は完全な現地食なので、まだそれに馴れず、日本での準備で弱っているからだを低地旅行中に、とりもどす筈であつたのに、あてがはずれた格好である。しかし、夕食につくつてくれた瓜の酢のものは、食欲をそそるに充分であつた。ルームレに着くや、ポーターの一団が帰るといひだした。ミンは、盛んに説得している。ルームレの顔役がいうには、日当が少ないとのこと。五ルピーも出しているのに、これ以上とられてはたまらない。

翌朝になつてみると、騒ぎ出した連中も、ちやんと荷をかついでいた。ヌヤパテ・コーラを何度か渉り、山峽が開けて、なだらかな緑の丘の中腹にタンシンの町があらわれた。流れから分れて、平坦な道をたどる。立派な墓のある、小高い丘を右手にみて、タンシンへ続く尾根筋を登る。附近の山容、部落は日本のそれと殆んど変らない。ネパール人もそうである。只植物の種類が異なるくらいである。カシの林がつづいて、セミがない。ブトワールで買ひ求めた印度製品のズックの靴は粗悪で、すでに口を開けていた。靴を求めがてら、町を見物すべく、菩提樹に涼をとつていたポーターと別れる。急坂を登ると、町の入口に立派な運動場があつて、フットボールのボールが立つていた。煉瓦造りの三階建の商店が石畳みの坂道の両側に建ちならび、要所には水道もあつた。薬局の主人は、人口八、〇〇〇といつていた。裏の丘に出ると、町は一望のもとに眺められ、中央には白堊の行政府が聳えていた。

町はずれの傾斜のある牧場を歩いてみると、眼前が開けて、ヒマル・チュリーが雲の切れ目から視界に入った。牧場から尾根筋を下つて、一、三〇〇米の峠に出る時分には、アンナプルナ第一、三峰があらわれ、マチャ・プチャリも見えだした。あのヒマラヤの峰までは直線距離で九〇料もある。やがてボグナソに着く頃には、ダウラギリ、マナスルも姿をあらわし、夕闇の中に、待望久しきアンナプルナ第二峰が、優美な姿を見せた。ヒマラヤ広しといえども、こうした素晴らしい展望台は少ないだろう。目的の山、第二峰はここから見たところ、可能性があるように思われた。後発隊はすでに、カルカッタを発つた筈だが、果してどの辺に在ることだろうか。連中がベース・キャンプに着くまでに偵察を完了するため、必要な食料や燃料を先発隊の手許にとどくよう手配せよと置手紙をする。

尾根筋のボグナソを発ち、峠を越えてカリ・ガンダキの本流にでる。われわれの通つた道で、最後となつた立派なワイヤ製の吊橋の下を青粘土色をした濁流が、兩岸いつばいに滔々と流れていた。河を左方に眺め、山腹を絡む。三〇度をこえた暑さにも、水筒のお茶のみで我慢する。ちよつとした高台に、堀のある立派な家が幾棟も建つていた。藤村が近づこうとしたら、ガルツェンがあわてて制止する。手ぶり足まねで、どうやらレブラの収容所らしいということがわかる。プトワールから二日目で数名のポーターがマラリヤにやられ、カトマンズからディリーが連れてきたポーターの中にも、高熱を出してだるそうに、ふらりふらりといってくるものもいたが、ここまでくるとポーターも落ち着いてきたらしく、不平をこぼすものもいなくなつた。

プレバッティを早朝に発ち、上り下りの多い急坂を、あえぎながら進むポーターの歩度は一向に伸びない。やがて、カリ・ガンダキの支流の綺麗に澄んだアンディ・コーラが眼に入る。ネパールに来て、始めての透き通るような水であつた。一、一八〇米の峠の向う側に奇怪な格好をしたダウラギリ、アンナプルナ山群、なかでも第二峰は最も優美な姿である。マナスル三山（われわれはマナスル、ピーク29、ヒマル・チュリーをかく呼んでいた）も、右手はるかに見渡せる。十七日、十八日は降雨があつたが、その後快晴つづきである。

ブーブレを発つて、まもなく葬いの行列に遇う。二人が白い布で包んだ担架をかつぎ、先頭の一人はホラ貝を吹いて、行進していった。いつもにこにこ顔で、われわれの中食やカメラをかついでいた、茶目つけたつぷりのラッカルが熱を出して、さしもの頑丈な彼もおくれ勝ちであつた。マラリヤにやられたのである。平坦な登り道をアンディ・コーラ沿いに進む。よごれたポーターにも、何となく親しみがわいてきたようだ。ガイルジャガールに一泊。アンディ・コーラを涉つて、プトリケーという明るい川沿いの部落で中食をとる。

ポカラもまぢかになつてきた。第一段階の旅は終りに近づき、気もかるい。ヌワコートへの急な坂道で爆音を聞く。谷間から頭をあげると紺碧の空に銀翼がキラキラと輝く。カトマンズ——シムラ——ポカラ——パイロワ（ノータンワの近くの町）の空路が開かれたのである。後発隊はこれを利用して、ポカラまで来るかも知れない。ヌワコートの町は案外に小さく、丘陵地帯の片田舎といつたものであつた。一、八二〇米の峠を越え、デオラリの部落にはいる。猟銃をかついだ連中が、ひつきりなしに通る。新しい鑑札を貰うためらしい。

九月二十四日。ポカラへの日、プトワールを發つてから八日目。後発隊のことを気にしながらも、やつとここまでこぎつけた。プトワールのポーターはポカラまでの契約であつた。彼等もふる里が恋しいのであろう。いつもだつたら、追いつ追われつのノロノロ歩きであるのだが、今日に限つて、われわれが峠で写真を撮つている間に姿を消してしまつた。ポカラの飛行場で、後発隊にあえるかもしれないという、あわい望みも無駄だつたことが分つた。ポカラの町の真中にある広場にテントを張る。マナスル隊のキャンプ跡が残つていた。ここで日本人がキャンプしていたのだと思うと懐しい。アンナプルナ第二、四峰が、手にとるように見える。

#### マデイ・コーラを探る

ポカラ県知事ポーラン・シン氏は、警官を八方に走らせ、ポーター集めに協力してくれる。二十六日、後発隊がま

もなく到着するからと、ポーターの件をくれぐれも頼んで、やつとのことでは出発出来たのは昼前であつた。ポカラの郊外で、セティ・コーラの支流に出る。僅か一コース（一コースは二マイルということであつた）でビザプルという右岸の牧草地にテントを張る。夕八時頃から夕立があり、サーブ達のナイロン・テントは、まるで龍宮のようであつた。ビザプルからマディ・コーラへの抜け道の登りにかかる。アンナプルナは、だんだん近づいてくる。人里離れた、カシ類、シダ類の多い森を進む。こんな田舎道でも、土民が崩れただんだん道を石敷に補修していた。落葉の多い、じめじめした山道で糸のような細い動物、ヒルが現れる。いつのまにか、靴にくらいついていて、深く切れこんだ、マディ・コーラの濁流の見える分水嶺に出る。こんな細道にも、まだ植えてまもないピーパル・ツウリーとバシヤン・ツウリーが仲よく、休息所にならんでいた。

タプランで、ポーターがもめたが、ミンの説得で十人換えたのみで出発できた。ポカラ県知事がつけてくれた警官も、こんなことには、関係がないといわんばかりで役に立たない。タプランから一気に、マディ・コーラの河原に下る。巨石の転々とする間を縫つて、一軒も溯つたところから、再びシクリスへの段々畑のある斜面をへつる。対岸の急斜面にも、畑と部落が点在していた。ここまでくると、すでに稲田もなくなり、ヒエが実つていた。マディの小さな支流には、水車小舎があつて、石臼でガタン、ゴトンと、玉蜀黍をひいていた。やがてマディ・コーラの最終部落シクリスに着く。部落の有力者を集めて、ポーターを集めるよう交渉する。交渉はなかなか困難なようだ。伊藤ドクターは「現在はその余裕もないが、下山したならば村の患者を全部診てやる。そして薬もうんと与えるから」と、説得これ務めている。翌日、マディ・コーラを偵察する予定していたところ、朝から雨で休養する。モンズーンも、まだはつきり明け切らないらしい。村人はマディの奥地は、ここ二ヶ月許り誰も入っていないといい、あるいは牧人が少しは入っているかも知れないという。ナムン・パンジャンの様子を問い糺したが、今は通れないだろう、七月頃がいいだろうとかいうが、一向に当てになりそうもない。

翌朝、われわれが出発準備をしていると、二人の娘が盛装して、太鼓にあわして、門出を祈つてくれた。早く出発したいという気持を無視した悠長な踊りであつた。ラムジュン・ヒマールの白銀を頭上にして、シクリスを離れて間もなく、ヒルの大軍におそわれる。というとおおげさだが、道ばたの草にひつついたヒルが好餌とばかりに、ポーターの足に吸いつく。何時の間にか、隊員もやられていた。ネパール語でヒルをツガという。アンペラで小舎掛けした一軒家に辿りつくと、ポーターが動こうとしない。これから先は泊り場がなく、ツガが多くて駄目だという。今まで大いに活躍していたミンも、このシクリス・ポーターには歯が立たない。ガルツェンも、こんなポーターは始めてだとあきれ返るのみである。見たところ、頑丈そうな連中であるが、少し歩いては苦しくもなさそうなのに休む。仕方なくキャンブする。

朝の出発も手間どつて、容易に動かない。道はずつと、マディの右岸をへつていた。伊藤は「ヒル払い」だと、洒落ながら先頭を進む。相変らずのツガに、むしり取るのが面倒なので、そのまま歩いていたら、昼休みに靴をぬいてみると、二十幾つもの跡が真赤に染つていた。ジャングルでは、日本猿に似た猿が枝から枝へと、たわむれていた。われわれの通るのに気づいて、どこかに隠れてしまつた。ラムジュン・ヒマールが、ぐつとせまつて、アンナプルナ第二峰のピラミッドが見えがくれする。この谷間に入つてから気になつていたことだが、南面はどうも様子がおかしい。悪い予感がしてならない。じめじめした岩壁の棧道を修理しながら進むので、はかどらない。

午後になつて間もなく、またもポーターが動かなくなり、勝手に岩小舎に、泊り場の仕度をしている。まつたく、翻弄された形である。ガルツェンとミンを攻めたてたが、らちが明かない。今日も、とうとうポーターのいいなりになつてしまつた。小雨がぱらつく。

十月二日。二、〇〇〇米を幾らも出ていない。鬱蒼たる潤葉樹林帯なのだが、しかも、正面のラムジュンの岩壁が大きくせまつてくる。氷河なんて、思いもよらない状態である。伊藤にダ・ナムギャルをつけて先行させる。僅か、

二時間でマディの支流の一本橋を渡る。河原の上の台地に一軒家があつて、狩人が住んでいた。ポーターはどうとう一歩も動かなくなつた。日当をはずむからと、ガルトゥエンに交差させるも、問題にならない。何だか分らないが、猛獣がいるとか、いないとか。高度は二、二三〇米である。シクリスから三日かかつたのであるが、実際は丸一日の行程である。要するに、賃金をうまくせしめようとする彼等の策にひつかつたという訳である。これ以来、われわれの仲間ではシクリスという言葉は「ずるい」ということの代名詞として通用するようになった。やがて、偵察から帰つてきた伊藤の話によると、ここから先は道がなくなり、ジャングルで、川筋には滝が連続して、重なつてゐること。

とりあえず、ここをアンナプルナへの道をさぐるための一つの根拠地として、「ベース・ハウス」と命名する。シクリスのポーターには油断するな、ということと、現在地の状況を後発隊に伝えるべく、ミンとカトマンズ・ポーターを伝令にポカラへ向け出発させる。

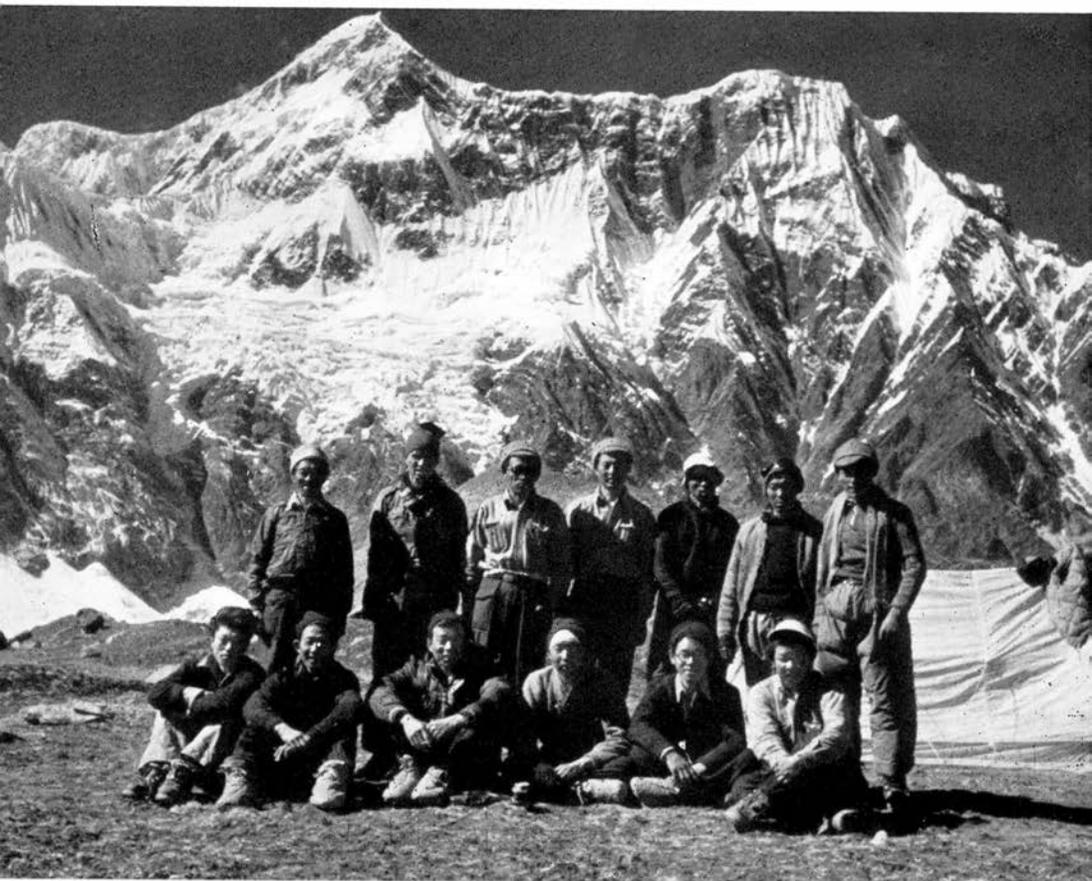
翌日、今西、伊藤はガルトゥエン、ダ・ナムギャルと、カトマンズ・ポーターを連れて、二日分の食料をもつて、マディ・コーラを溯る。藤村はバサン・ダワとともに、マディの支流に入り、側面より探る。草をなぎながら、道をつけて進む。苔むした薄暗いジャングル地帯は、まったく薄気味悪く、先頭のダ・ナムギャルは時々、かけ声をかけている。狩人から猛獣でも出てくると聞いたのであろうか。やがて、右手のマディ・コーラの突き当りに、層石をかぶつた雪溪が現れる。支流を渉り、本流に出てモレーンの上にテントを張る。高度計は二、七二〇米を指していた。ポーターをベース・ハウスに帰し、ガスに蔽われた雪溪を、今西と伊藤が登つていつた。クレバスが、幾つか大きな口をあけていた。この雪溪は、この高さから考えてみても、残雪というのではなくて、アンナプルナとラムジュンの氷河から落ちた氷雪の堆積である。その長さは一、〇〇〇米はある。雪溪の奥はアンナプルナとラムジュンの岩壁のすそであつて、シュルンドになつてゐた。雪溪の源頭に立つて、ガスの晴れるのを待つたが、ますます深くなる一

方なのでキャンプに帰る。シクリスから進むにつれて、不吉な予感が適中したようである。どうやら南面は絶望らしい。二人は、無言のままシェラーフにもぐる。夜中に物凄い雪崩の音に目を覚ます。煙草を吸つて、気を静めようとするが、これから先のが気にかかつて寝つかれない。

翌朝、今西はガルツェンを連れて、再び、雪溪の源頭からアンザイレンして、シュルンドをさき、左岸の岩壁を攀じる。そして谷へ下り、三、一九〇米のところまで登りつめたが、正面に約二、〇〇〇米はあると思われる尖峰が立ち、その左右が大障壁となつて、二人を取り巻いている。丁度私達は漏斗の底に位置していることになる。アンナブルナ第二、四峰の氷河が尖峰により左右に振り分けられて、何段かの氷瀑となつて落ちてくる。私達は三十分許りしか、そこに滞在しなかつたが、氷河の雪崩は何回か、氷瀑となつて落ちてきた。危険きわまりないところにいるわけだ。しかも尙、背にしている岩壁はラムジュンであり、雪崩のあとがありありとついている。ガルツェンは早くここを去りたいらしく、もじもじしている。二人はキャンプに引きあげ、ベース・ハウスに帰る。

ちよとど、燃料や食糧をもつて、後発隊のダワ・トンダツプとグンディが屈強なポーターをつれて到着していた。カルカッタを一週間おくれて発つたとのこと。伊藤が写したフィルムを調べていると、第四峰南稜より雪溪の源頭に終つているリツヂに切れ目があり、あるいは氷河が、この切れ目から西の方へ流れているのではないかと思われるので、後発隊が到着するまでに、もう一度、このリツヂの末端となつて二子岩に登つて、徹底的な調査をすることにする。二子岩というのは、雪溪の西側のリツヂの末端に二つの尖峰が聳えていたので、かく命名したのである。

このベース・ハウスの一軒家に、狩猟のため、マルシャンディのトンシェから、きていたポリテイマンという狩人を案内人として、今西、藤村はガルツェンとダワ・トンダツプを連れて、三日間の予定で二子岩に向う。伊藤もシェルパ二名をつれて、藤村が溯つた谷を二日ばかりで、つめて氷河の落ち口を調べてみることにする。五日、マディ・コーラの雪溪の末端の右岸に、流れ込んでいる支流を溯つてテントを張る。一帯はシャクナゲの密生地、十数米の



アンニマ

パサン・ダワ

ダ・ナムギル

グンデイ

ガルツェン

タンドウ

ダワ・トンダブ

伊藤

藤村

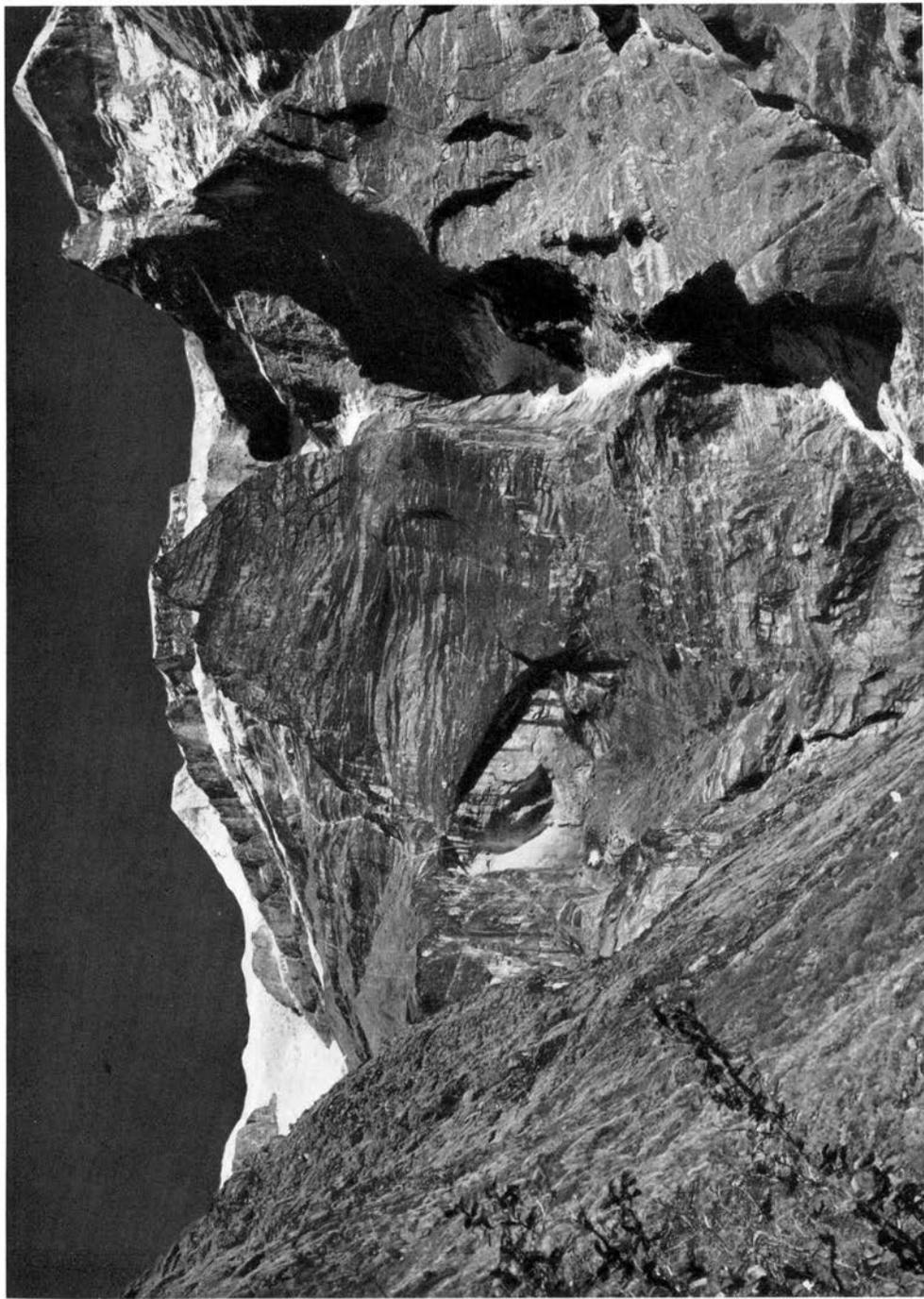
藤平

今西

舟橋

脇坂

アンナブルナ II 峰  
↓



アンナブルナ II 峰南面の障壁上半部（二子岩の東斜面3730米地点より）

巨木ぞろいであつた。午後、二人はポリティマンを案内として、二子岩への道をつける。さすがは、狩人である。ククリを振りまわりして、スルスルと登つて行く。大障壁が一眺のうちに見渡せる二子岩の東の棚にでる。新しい雪崩が、漏斗の口から流れ出て、雪溪の源頭に堆積していた。ここから下るまぎわに、ラムジュンから大きな雪崩が、四回、今西とガルツェンが漏斗の底にいた地点に、ごうごうと落ちてきた。この雪崩は三分間も続いていた。このことを、キャンプに下つてガルツェンに話したら、ベリー・ラッキーだと喜んでいた。

翌日、テントを払つて二子岩への急坂を登り、森林地帯をぬけて草付きの岩壁をよじる。湖葉樹林帯から、直ぐに岩峰になつていて、南面の植物分布は型破りである。僅かに、対岸の山腹三、〇〇〇米のあたりに、針葉樹がチラホラと見られるのみ。三、二六〇米のところではじめて白樺が現れる。ポリティマンは、岩峰の中腹の湧水のあるところに案内する。草付きの小さな棚にテントを張つて、障壁をみて帰つてくると、伊藤からの伝令が到着していた。伝令はラツカルとほかの一名。よくもやつてきたものである。

(一) 第四峰南稜から、派生したリツヂは二子岩まで続いて、切れ目がない。

(二) 後発隊が、六日ベース・ハウスに到着した。

ことを知らせてくれる。偵察隊は明日、二子岩へ登つて、漏斗の上部を調べて、ベース・ハウスに下るとしたためて、伝令を帰す。

七日早朝より、キャンプにダワ・トンダップを残して、二子岩の岩壁を北側ヘトラパスして、三、七三〇米の地点に達す。第四峰からの氷河が、南稜に沿つて障壁の頭に続いているのが手にとるように見える。この氷河は二子岩への岩稜にさえぎられて、障壁の頭から東の方へ水瀑となつて、間断なく落ちていく。この障壁に囲まれた漏斗は何度眺めても、どうにもならないようだ。新しい出発のことを考えながら、カルカッタで別れて、二十五日ぶりに全隊員が会えるのを楽しみにベース・ハウスに下る。

二回に亘つた四つのパーティの偵察は、次の如き点から登高不可能と断ぜざるを得ないと、結論づけることが出来る。即ち、

(一) マディ・コーラの上流部は、西側の第四峰南稜から二子岩に続く岩壁と、東側のラムジュン・ヒマールの岩壁に囲まれた大障壁に、とり巻かれて漏斗状となり、氷河の末端から漏斗の底まで、約一、五〇〇米の高度差がある。

(二) 第四峰南稜からの支稜が二子岩に続き、この支稜には——希望的観測をしていた——切れ目がない。

(三) 唯一のルートとして、マディの本流より漏斗の底に入り、中央尖峰の西側の岩壁を攀じて、第四峰からの南稜側面の氷河に取りつくルートが考えられる。このルートとして、漏斗の底の入口で、ラムジュン・ヒマールからの氷瀑にさらされ、更に奥に入れば中央尖峰の両側のアンナプルナ氷河からの氷瀑にさらされる。二、七二〇米の地点から、一気に氷河の末端まで——岩壁中にはキャンプ・サイトが見当らない——登らねばならぬ。

後発隊は、やつとのことで船荷を受け取り、九月十九日先発隊より一週間おくれてカルカッタを出発。ノータンワで空路ポカラまで飛べるかどうかを交渉したが、要領を得ないので、陸路先発隊のあとを追う。五日目先発隊からの求めに応じて、燃料と食糧をもたせてダワ・トンダップとゲンディを急行させる。プトワールから、ポカラ、シクリスを経て十三日かかつて——先発隊より三日間節約して——南面のベース・ハウスに到着した。追撃に追撃を重ねてきた舟橋マネージャーの心労は、察するに余りあるものであつた。

かくして、十月七日、隊員の久し振りの邂逅の喜びも束の間、われわれは、転進の準備をしなければならなかつた。南面が登高不可能の場合には、A A C Kからあの山、この山と指示は受けていたが、その決定は隊長に一任されていた。「アンナプルナを目標にしてやつてきたわれわれは、やはり初期の目的通り、アンナプルナを指すべきで

ある」と、舟橋が提案する。隊員の想いは同じであつた。一も二もなく、アンナブルナ第四峰（七、五二五米）を北面から攻撃しようと決定した。

このようにして、希望と不安の入りまざつた気持で歩き続け、南面の大障壁に頭をうち、いま新しい勇氣と、希望をもつてマルシャンディへ廻ろうとしている。手をやいたシクリスのポーターは果して、ナムン・バンジャンへ荷を運ぶであろうか。北面へ廻る体制を次の如く、ととのえることにした。

(一) アンナブルナ第四峰を、北面よりアタックするには二十日間でも十分である。(南面からの第二峰の計画として四十日を予定していた)

(二) キャンプの数は、六ヶ所で足りる。(第二峰の計画として八ヶ所を予定していた)

(三) ポーター募集の関係上、本隊と輸送隊の二隊に分ける。本隊は今西、藤平、伊藤、舟橋、脇坂、立平にシェルパ全員。輸送隊は藤村、ディリー、ミンの三名とする。

(四) 本隊は第三キャンプを張るまでの必要な装備と食糧をもつて、ナムン・バンジャンを越えて、マルシャンディに出る。

(五) 輸送隊は残りの全装備を携行して、一旦ポカラに引きあげ、不必要なものをポカラに残し、クティを経てマルシャンディを溯つて本隊を追う。

(六) 輸送隊は本隊の五日後には、北面のベース・キャンプに到着するであろう。

これらのことが決定されるや、ベース・ハウスは全梱包が開かれ、戦場と化した。しかし、これらの準備も一にポーターの募集如何にかかつている。ディリーの任務は重大であり、彼の手腕に待つこと大である。

ナムン・バンジャン越え

転進の準備を始めてから、二日目の午後になつて、ようやくポーターが九十一名集つた。この中から、ナムン・バンジャン越えのポーターを出来るだけ多く選ばなければならない。貧乏旅行のわれわれも、峠までの日当を奮発したので、三十数名参加するという。

十月十日。朝になつて、結局本隊に参加するシクリス・ポーターは二十八名となつた。カトマンズとポカラのポーター九名、計三十七名。ポカラへ向う藤村と北面での再会を約して、マディ・コーラと別れを告げる。これだけのポーターでは不足なので、シエルパもサーブも二、三十疋の荷をかつぐ。マディ・コーラと、濁流の渦巻く支流の丸木橋を渡つて、峠への尾根へと湿つぽい急坂を登る。森林のある中腹に、牛と山羊を飼っている山小舎があつた。よくもこんなところにまで人が住めるものだと感心させられる。二、七〇〇米あたりからシャクナゲの密林となる。春ならば、きつと綺麗なことだろうと想像しながら、五日の雨のとき降つたであろう木蔭にちらばつている窠をふみながら進む。

はじめはポーターを追い越したりして元氣だつたサーブ達も、荷がこたえて可成りへばつてきた。このサーブを京都シエルパと称した。ヒマラヤの前山でのこうしたサーブ達の姿は珍らしいことであろう。やがて灌木帯となり牧草が多くなる。骨組だけ残つた数軒の小舎跡のある台地にキャンプする。木蔭のない草地なのに、シメジメと湿つたところであつた。春ともなれば遊牧の民が登つてくるのであろう。薪がきれいに積み重ねてあつた。高度計は三、五七〇米を指していた。附近はシャクナゲの群落で、夕方になるとぐんと気温が下つて来た。四時頃には雲が散つて、アンナプルナ、ラムジュン、はるかにダウラギリも姿を現わした。

明くれば南面に朝の光が映えて美しい。シャクナゲの疎林を登りつめ、峠への尾根筋に出る。マディ・コーラがキラキラとうねつていたが、やがて雲海に消えてしまつた。四、〇〇〇米で灌木もなくなり、岩と草の山肌になつた。朝からしばらくの間、ポーターと共に歩いてきたが、いつの間にかその姿を見失つてしまつた。はるか尾根筋に一、

二度見かけたのみであつた。モンストーンも本格的に明けたのであろう。雲は上つてこない。とてつもなく長い尾根であつた。はるかに尾根の終るところに黒い岩肌の峠が見えた。此の峠が近くに見える頃から、私達の足はあやしくなつていた。カトマンズ・ポーターも重荷で、隊員と相前後しながら進んで行く。ラムジュン・ヒマールの支稜の峠に着いたときは、夕闇がせまり、黒い岩山の上に三日月がかかつていた。峠は四、七七〇米。今日は、重荷を負つて、長道を一、二〇〇米登つたことになる。峠を越えて、北斜面をトラバースするうちに、三日月も岩山のあなたに隠れて、暗闇となつた。相ついで峠をこえてくる隊員は、疲労甚だしく、嘔吐を催し、岩小舎を見つけて、カトマンズ・ポーターと共にシユラーフにもぐり込んだ。ポーター達はナムン・パンジャンの麓まで行つたのである。

朝早く、ラツカルを伝令に出したところ、タンドウが茶と食物をもつて、とんできた。やつと生気をとりもどし、二つ目の峠をこえて、ナムン・パンジャンの手前のカール・ポードンに下る。橙色のテントが、マナスルを背景として美しく映えていた。キャンプのうしろに小さい丘があつて、その向う側の緑の池が綺麗な水を湛えていた。小一時間でキャンプに着く。まことに快適なキャンプ・サイトである。

シクリス・ポーターはシクリスから一日行程のベース・ハウスまで三日かゝつたのである。ところが、このナムン・パンジャンの麓まで、三日は充分かかるであろうところを、二日で踏破し、尙元氣一杯でケロリとしている。彼等は頑丈な体軀をもつており、金儲けの上手な連中であつた。さて、いよいよお祭りが明日に迫り、今日はどうしても山を下らねばならないという。しかし、彼等はどこまでも商売上手である。更に日当を奮発して、峠の手前の雪のところまで荷上げさせることに成功する。パサン・ダワを総指揮官として、十時頃から出発させる。一行は休養。

あくる日、シクリスのポーター達はお祭りの酒代を、たんまり稼いで、山を下つて行つた。われわれは四、三六〇米のキャンプを引き払つて、手の切れるような冷い小川を涉り、峠への急坂にかゝる。京都シエルパは、カトマンズ

・ポーターと相前後して残雪をふみ、峠のすぐ下のデポーを通つて、一時半にナムン・バンジャンに立つことが出来た。シクリス・ポーターは雪の上を数百米歩いて、荷をデポーしていた。苦難の道であつた峠越えも、やつとその頂きに達したのである。六日以来の快晴つゞきで、終日雲が見られない。マナスルの巨峰が目に見え入る。北方には、柔らかい感じのする西藏国境の山々が、はてしなく続いていた。高度計は五、一四〇米を指す。地図には五、七八五米となつてゐるが、雪線の状態から見ても、高度計の指針は正しいものと思われる。峠から三六〇米下つてキャンプする。この峠でも頭痛を覚え、嘔吐を催した。隊員はシェルパのさし出す食べ物には眼もくれず、横になつたままであつた。

雪を溶かすラヂエースの音に眼がさめる。サーダーのガルツェンにポーターを一名つけて、ポーター募集にトンジエへ先発させる。苦しい身体に鞭打つて、峠の反対側の荷をとりに出掛ける。三回も往復したシェルパもあつた。午後、ポーターが上つてくるまで、一步でも先へと思い、サーブのみで、荷をおろすべく出発しようとする、ダ・ナムギヤルはポーター三名をつれて、ついて来た。お前達は休めと言つたが、聞こうとしなかつた。立派なシェルパに違ひはないが、隊員の気持ち、シェルパに通じたのである。

翌日一部の荷を残して、全員四、〇〇〇米まで下る。岩山から灌木帯となつてゐた。夕方チベツタン・ポーターが、にこにこ顔でガヤガヤとキャンブに着いた。ネパール人とは、すっかり違つた厚い布地の服をまとい、フェルトの靴をはいていた。何処となくバター臭い感じであつたが、親しみの持てる連中であつた。クツクのタンドウが、水筒を頭上高くかかげて、「ロクシユ、ロクシユ」と、叫びながら飛んで来た。極端に切りつめた食糧はすでに欠乏して、甘いのみものも一日一回になつてゐた。久しぶりの笑い顔で夕食を共にして、伊藤ドクターに疲労恢復の手当を受ける。

峠の下の台地と、カール・ポードンに残して来た荷をポーターにとりにやる。ここで隊員は本来のサーブにかえつ

た。ナムン・バンジャン越えの無理がこたえてか、落葉に足をとられながら、秋深くなつた森林をやつとのことでマルシャンディ沿いのティモンに辿り着く。マナスル偵察隊が、こゝを通つたのかと思ふと感慨が一入深い。つらい峠越えに、不平一つ言わず、苦勞を共にしてくれたカトマンズ・ポーターに山羊を一頭買つてやる。

こゝでゾーパ四頭、ポニー一頭を備つて、カラン、コロンのんびりした旅が、マルシャンディの左岸に沿つて始まつた。ポカラからついて来たポーターは、峠越えに参つたのである。マルシャンディを下つて行つた。平坦な道が続く。何時ふり返つても、マナスル三山がクッキリと谷間に屏風のように突立つていた。部落の様子も、ネパール側とすつかり變つた石積みの部落タンジャを通る。コスモスが可憐な花をつけていた。ナウル・コーラの出合の絶壁のすそに、クーパルの部落が見え、家々にはラマ教の長い白旗がはためき、森林の焼跡にはヒモゲイトが真赤に染つていた。チャーメの入口の橋のたもとにテントを張る。チャーメで左岸に渡り、マニと言う石の門をくゞる。門の上には赤、白、黒と彩色をほどこしたケルンが積んであつた。石積みの二階建は綺麗に積み上げられ、窓枠にはこまかい彫刻がほどこしてあつた。再び右岸に出ると、支流の谷間にラムジュンの白い尖峰が現われる。風強く、マナスルでは雪煙をあげている。素晴らしく大きなテラテラの岩壁を右手にして、疎林の山道を辿る。対岸に、テラテラ岩の北端のガリーの見える池のほとりにキャンプする。パサン・ダワは誰かはつきりしないが、サーブとこのガリーを攀じて、カンカブーという山を試登したといつていた。多分ティルマンとである。日が蔭ると、とても寒く、焚火を囲んで夕食をとる。隊員の調子は未だ回復していない。伊藤ドクターは、毎晩ポーターの治療とサーブの注射と施薬に忙しい。

ピサンの村外れで、アンナプルナ第二峰の北面の三角の尖峰が現れた。物凄く切り立つた尾根が左右に出ている。三、五七〇米のほこりつぽい峠で、眺望は一変して広々とした荒涼たる地形となる。マルシャンディの奥地の山々が現われ、第一峰の北側の水壁が谷の奥まで続いている。広いマルシャンディの河岸段丘を進み、支流の橋を渡ると、

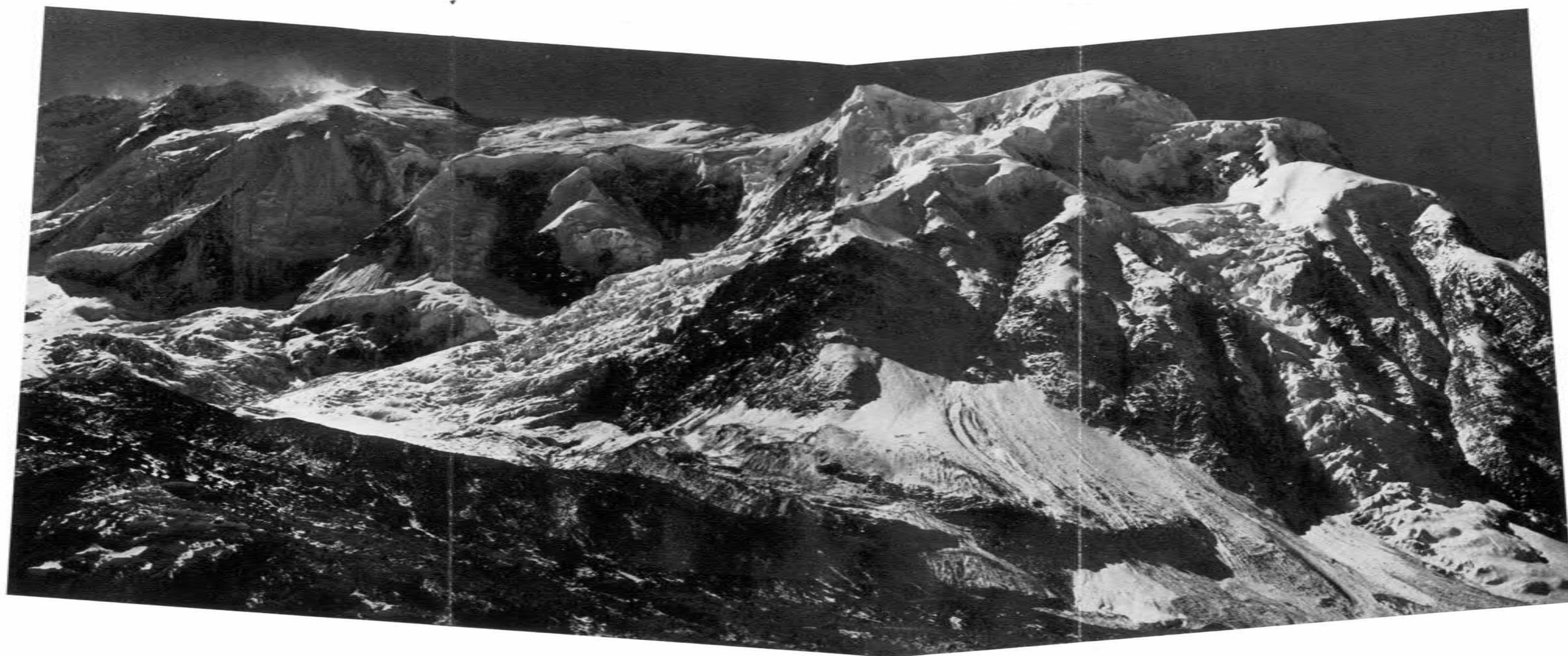
足跡があちこちについていたので、うろろしながら、ひよいと左方を眺めると、広い谷間にアンナブルナの素晴らしい稜線が目に入った。緑の池のほとりの疎林にテントを張つた。こゝはマナスル偵察隊のベース・キャンプとなつたところである。こゝをレークサイド・ホテルと名付ける。そんな感じのするところであつた。

#### アンナブルナ第四峰へ

ベース・キャンプを森林限界まであげることにして、サブジィ・コーラの谷間をつめる。土地のものはこの谷をサブチャと呼んでいた。サブジィを右岸に渡り、起伏の多いモレーンのような谷間の尾根筋を登る。第三峰の山すのバッドランドの対岸、森林の終つたところにベース・キャンプを張る。高度は四、〇三〇米であつた。ベース・キャンプとはいうものの、ここは食糧買い出しの中継地としてテント一張りをおき、実際のベース・キャンプは第一キャンプ（マナスル偵察隊のスペシャル・キャンプ）におくことにする。ベース・キャンプで一日の休養をとり、どうやら隊員の調子も元通りになつた。疲労の回復は若い者程早いようである。ポーターに第一キャンプまで薪をあげさせる。ベース・キャンプは正面にすどく切り立つた第三峰から第四峰に続く稜線にとり囲まれていた。夕方から夜へかけて、雪崩が盛んである。今日は風も弱く、雪煙も殆ど立つていないようだ。

十月二十二日。一点の雲もない紺碧の空、全くの快晴。南面のベース・ハウスを登つて以来、ずっと続いている。マルシャンディを歩きながら、最も気にしていた偏西風も、真近くせまつているようである。それまでの小康状態をうまく掴まねばならない。モレーンで出来た二子山の急斜面を登り、二つのこぶの間の潤れた沢に出る。正面の岩の上に、色のあせた小旗がひらめいていた。マナスル偵察隊が残していつたものであろう。ティルマンのスペシャル・キャンプ跡を通つて、上の台地に出て、第一キャンプ（四、九四〇米）とする。裏側の谷に雪解けの水が流れていた。全員ベース・キャンプに下り、翌日輸送隊との連絡のため、カトマンズ・ポーターを一名残して、荷上げを完了す

アンナブルナIV峰



オーキャンプより見上げたアンナブルナIV峰



る。この第一キャンプからは第四峰、第二峰が手にとるようである。ティルマンが、アンナプルナ・ヒマールの北面での唯一のルートと断定した第三峰と第四峰の中央から出ている北尾根のルートを目の前にして、プトワール出発以来、三十七日目にやつと、われわれの夢を実現出来るのだと思うと、苦しいナムン・パンジャン越えも、楽しい想い出となる。舟橋はトランスポートの計画に夢中である。

ティルマンは隊員五名、シエルパ四名の隊で、ベース・キャンプから七〇〇封度の荷で済ませている。われわれは七名、シエルパ七名である。トランスポートの日数を減らすため、チベット・ポーター三名を加えて八名を第一キャンプに常置する。極力荷を少なくするようにしたが、第二キャンプへの荷は五二〇斤となつた。

十月二十四日。数日前から、手持ちの砂糖が残り少なくなつたと、いいながらも、タンドウはうまいお茶を出してくれる。さすがはエヴェレスト隊に仕込まれた名クックである。ポスト・モンズーンは実に天気がいいんだと語つていた今西博士の言葉を想い起す位、毎日快晴である。アタック・パーティとなるべき藤平、舟橋、脇坂とダ・ナムギヤル、ゲンディ、アン・ニマの元気な連中が、第二キャンプへの荷上げを兼ねて、道付けに出発する。

この北尾根は、アンナプルナの主稜線とのジャンクシヨンのドームに達するまでに、三ヶ所の悪場がある。第一は、モレーンから氷河を涉つて、稜線に取りつく岩壁であり、右側の氷のクローアールが唯一の登路であろう。しかし、このクローアールのすぐ右に、もう一つのクローアールがあつて、その上方、尾根筋に突き出した雪庇があつて今にも雪崩れそうな状態にあつた。若しもこれが崩れると、危険この上ない。第二は、北尾根の中間あたりの最も瘦せたところに、立ちふさがつている氷壁である。テラテラのバンドが横にのびていて、果して登れるか、どうか判断がつかない。第三の悪場は、主稜のドーム直下にある小さいドームが急斜面となり、その頭が雪崩路のようである。これを、アイス・キャップと呼んだ。

第一キャンプからモレーンを越えて、東西に走っている第四峰からの、岩層におおわれた氷河に出る。巾は一軒近

くもあろうか。これを横断して岩石の軋々とした斜面を攀じて、大きな軋石の上に出る。高度計は五、一四〇米。丁度、ナムン・バンジャンと同じ高さである。この高さが北面の雪線であろう。アイゼンをつけて、アンザイレンし、岩壁を左手に、右方へ雪の斜面を斜めに登る。クローアールには水の滝が幾つか、かゝつていた。二つ目の滝の上は今西博士隊のフィックス・ロープが残つていた。ひつぱるとハーケンが抜けたので、新しく打ち直す。クローアールではワボーがさらさらと落ちて来て気味悪い。クローアールから岩壁の右リッヂに出て、更に五〇米のナイロンを固定する。昨年のナイロンは全然変化していかないようであつた。雪のついた岩場を攀じて、岩壁の頭に出る。

今西博士隊の第一キャンプである。キャンプ・サイトを掘りかえしてみると、食糧が山のように出てきた。オニシライス、クラッカーから、蜂蜜、ジャム、バターに至るまで二十種類ばかり。ほかにメタ、ローソク、プリムス・ストープもあつた。藤村輸送隊が間もなく着く筈であるが、砂糖のたりなくなつたいま、まことに有難い品々である。喜んで頂戴することしよう。荷をデボーして第一キャンプに下る。

翌日、立平、ガルツェン、タンドウの三名を残し、ポーター四名をつれて、第一キャンプを発つ。ガルツェンはピサンのキャンプで、脇坂がやつていた体操を真似て、足を捻挫してしまつたので、当分使いものにならない。昨日心配していた雪庇から、雪崩が出たのであろう。氷崖が大きく割れていた。クローアールで、更に四〇米のロープを固定し、デボーに第二キャンプを張る。今日も雪煙なく、快晴。北方のチベタン・サイドは一片の雲もみられない。アンナプルナの南面では、おそらく雲海であろう。第二キャンプ（五、六〇〇米）は格好の地であつた。今西、脇坂、ダ・ナムギャルは、こゝにとどまり、他のものは下山する。藤村は今日あたり、ベース・キャンプに到着する予定なのだが、いまだにテントが増えていないようだ。

十月二十六日。日照時間の少なくなつたポスト・モンsoonではあるが、稜線上の第二キャンプは日の出は早いようである。が主稜線のため、蔭るのもまた早い。六時半には第三峰に雪煙が上つていた。昨夜半より今西は、頭痛を

覚えたが大したことない。三名は最も難関と思われる第二の悪場であるバンド状をした氷壁に向う。尾根の西斜面をジグザグに稜線へ出る。胸あたりまで、もぐるところもあつた。一時間ばかりでティルマンの第一キャンプの跡を発見する。雪を掘るとラヂースが出て来た。氷壁の近くまで登つたが、

(一) 氷壁は垂直に近く、登路を開設するのに可成りの時間を要する。

(二) この氷壁は北面にしているので、朝陽しかあたらず、十一時には日が蔭る。

(三) 現在の第二キャンプの位置では、予定の五つのキャンプを、一つ増さねばならないかもしれない。

という理由のもとに、現在の第二キャンプをティルマンのキャンプ・サイトまであげるのが得策のようである。ダワ・トンダップ、バサン・ダワ、ポーター四名、第二キャンプへ荷上げする。

十月二十七日。第二キャンプを上狭い台地にあげる。藤平、伊藤、グンディ、アン・ニマがポーター二名と、ともに登つてきた。今日も十時頃まで、第二峰と第三峰に雪煙があがつていた。午後、再び荷上げをして、伊藤はポーターと下山する。トランスポートの指揮官である舟橋は、第一キャンプにあつて、藤村が到着しないので、やきもきしているとのことだつた。この二日間、充分な睡眠がとれないらしい。第三キャンプを建設すれば、それ以上のテントがなくなつてしまうのである。はるかなるマナスルの山麓は雲海に包まれ、アンナプルナ第二峰にも、夕陽が映えて美しい。夕方突風が吹き出した。シェルパに夕食の時間は、五時だと言つておいたが、三時すぎると炊事をしてもいいかと請求する。マギー・スープはどの隊員にも好評で、砂糖の不足を、掘り出しもののオバルチンでおぎなう。藤平が頭痛をうつたえる。両側のアイス・フォールから、不気味な雪崩の音が聞える。

今日もベース・キャンプには、テントが増えていないようだ。藤村一人で、苦労しているのだろうと気にかゝる。ところが藤村は、この日ベース・キャンプに無事到着したことが、あとになって分つた。舟橋は伝令と共に、ベース・キャンプに飛んでいつたとのことであつた。新しい第二キャンプは五、七四〇米である。

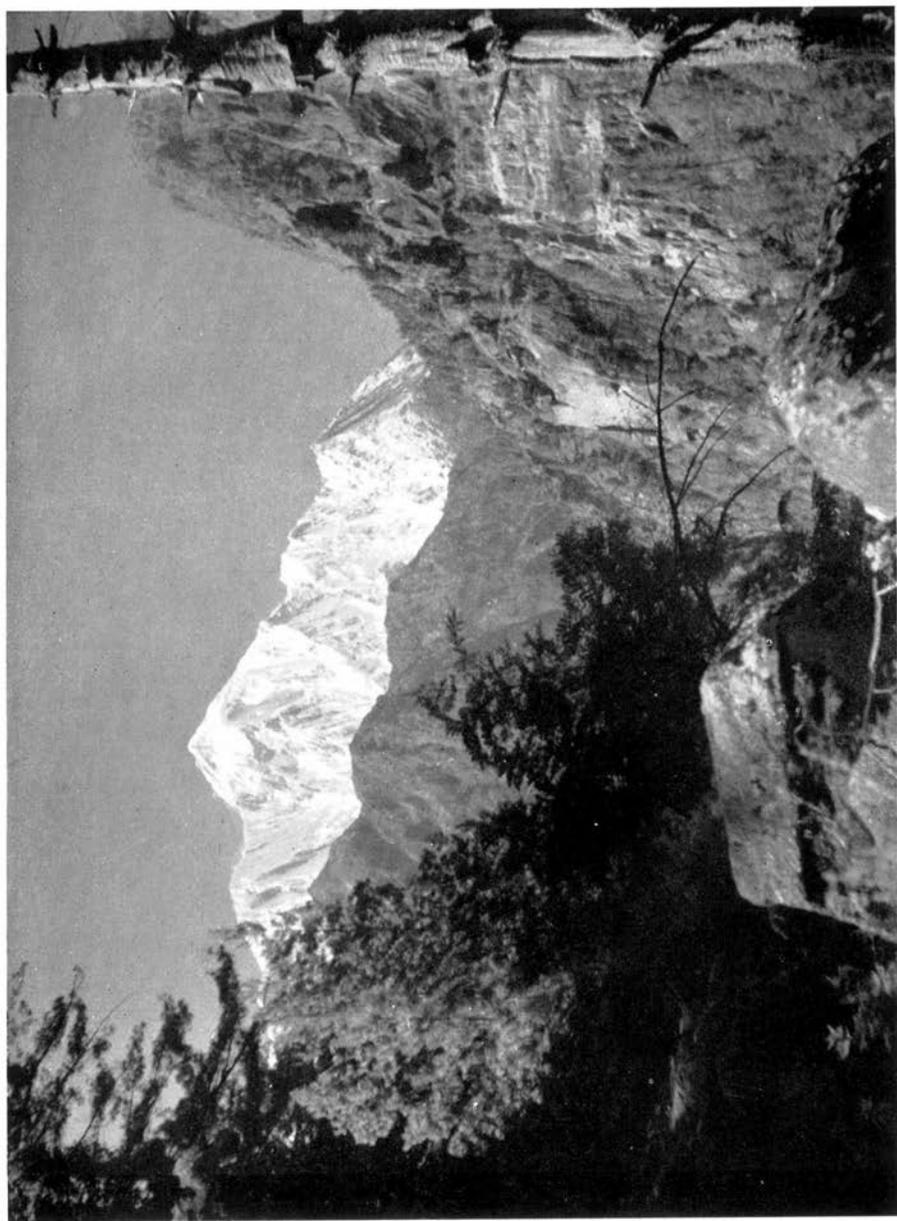
十月二十八日。脇坂、グンデイ、アン・ニマに、氷壁直下までの荷上げを頼み、今西、藤平、ダ・ナムギャルは氷壁に向う。問題の氷壁の東側は第四峰の斜面に続いているが、すつぽりとアイス・フォールとなつて落ちてゐる。西側はオーバーハングになつていて、問題とならない。結局、ルートは痩せ尾根の正面の中六、七米の間を登らねばならない。氷壁の高さは二十数米はあるう。

ダ・ナムギャルは、右のリッジの泡立つた部分を二、三步登つてみたが、軟雪で仕末が悪い。彼はティルマンのときより悪いという。今西、先ず氷壁に取つ組む。七つ、八つ、ステップを切つて、中段にロープを固定する。これだけに一時間もかゝつたであらう。ダ・ナムギャルと交代する。彼は大きなバケツを振り直して進む。ジッヘルしている藤平は日蔭で、寒くてしょうがないので、「早くおりろ」と叫ぶが、一向に応じない。彼はティルマンと共に通つていたので、この仕事は「私がやるべきである」と、言わんばかりに、かじりついて離れない。ランベールに貰つたフェルトの靴をはいて、ランベールのサインの入つたピッケルを振つてゐる。彼の動作は堅実そのものである。僅かに棚となつてゐる中段を、左上方にハーケンを数本打つてトラバースする。まことに、一流のクライマーといつて差支えないだらう。

一時をすぎると、気温はぐつと下つて、寒くてしょうがない。ジッヘルしているものは耐えられない。ダ・ナムギャルをおろして、下ろうとしてゐるとき、主稜線の北斜面から雪崩が発生して、アイス・フォールを横断して、北尾根へむくむくと上つて、第二キャンプを蔽つてしまつた。われわれの経験した最も大きなものであつた。第二キャンプにいた連中は、テントが吹つとんでしまひそうな状態だつたとのこと。何の気なしにベース・キャンプの方を見てゐると、橙色のテントが一張、新らしく張られていた。目を第一キャンプに移すと、こゝにも二張りの新しいテントが立つていた。第一キャンプから、伊藤、ダワ・トンダップ、パサン・ダワ、ポーター二名が上つて来た。伊藤、パサン・ダワ、第二に泊る。夜になつて、風はひどくテントをゆさぶる。

オスキソフ直下の氷壁より見上げたアソナルナIV峰





マルシャンディとナウル・コーラの出合よりアアンナブルナII峰東面を眺む

十月二十九日。朝から、再び今西、藤平、ダ・ナムギャルは氷壁に取つ組む。ダ・ナムギャルの闘志はたぐいのないものである。氷壁の中段のトラバースに二時間を要したが、稜線に出るところで行き詰まつてしまった。藤平が交代して、稜線に出るところのオーバーハンゲに挑み、ピトンを一本、二本と打ち続ける。足下はアンナプルナの氷河へすぼんと落ちていて、六、〇五〇米でのアルバイトは想像に絶するものがある。ちようど、氷壁の下の荷上げに來ていた伊藤がジッヘルを手伝う。更に今西、交代するが、果して、このオーバーハンゲを突破出来るか、甚だ疑問である。藤平の打つたピトンを手がかりにして、ピトンを打つが、はね返される。足場を確かにしようと、ピッケルをふるうが、片手では二、三度振りあげると、もうあとが続かない。やつとのことで打つたピトンの縮まるのを見とけて、伊藤のジッヘルに身体を託して、ピトンを打ち続ける。二日間の苦勞の甲斐あつて、オーバーハンゲを乗りこえたときの爽快さは、今なお忘れられないものである。かくして、三本のロープが完全に固定された。

このときばかりは、氷壁を突破出来た喜びと、登頂への希望に胸ふくらませて、第二キャンプへ下つていった。伊藤、脇坂、グンデイ、アン・ニマ、パサン・ダワは氷壁の下まで荷上げ。舟橋はダワ・トンダツプとポーター七名に、輸送隊の荷をかつがせて、登つてきた。ポーター五名を第一キャンプに下山させる。今日は祝福された日であつた。たゞ、心配なことは、藤村がアクリマチゼーション出来て、主力と歩調を合せ得るか、どうかということであつた。

十月三十日。早くも、十一月の聲がかゝろうとする日、今西、舟橋、脇坂はダ・ナムギャル、タワ・トンダツプ、グンデイ、アン・ニマとチベツタン・ポーター二名をつれて、第三キャンプを建設する。今西が氷壁の上に出たとき、パシツと異様な音がした。ダ・ナムギャルが登つて來て西側が危険だという。更に雪の斜面に、ダ・ナムギャルのピッケルをピンにしてロープを固定する。荷を釣り上げるのに一時間半ばかりかゝり、氷壁から一〇〇米のところ、アイス・キャップの麓の台地にテントを張る。アイス・キャップからはキャンプ近くまで、雪崩の跡が残つていた。こ

こも第二と同じく、日が蔭るのが早く、十二時半には太陽は主稜線にかくれてしまった。実はこの第三キャンプを、アイス・キャップの上に張りたかつたが、氷壁の荷上げに時間を要するので、あきらめた。

マナスルと第三峰では雪煙が上つていたが、十時には静まった。第二キャンプとは違って、風当りもきつい。高度計は六、一四〇米を指していた。ハンドレベルでチョルーをのぞいたが(チョルーは六、二〇〇米)それよりも六〇米高。ガルツェンがポーター二名とともに、第一キャンプより一気に登つてきた。ダワ・トンダップ、ゲンディ、アン・ニマ、ポーター二名、第二へ下る。夕方より風吹き出し、テントをあおる。

十月三十一日。七時には太陽が昇つたが、夜来の風はやまない。ここでは、西藏国境の山々が低くなつて見え、第二峰は逆に高くなつたように思われた。南面で見えた雪稜とは違い、岩と氷の急なりツデとなつていた。

舟橋、脇坂、ダナムギャル、パサン・ダワの四名は荷上げを兼ねて、第四キャンプへの道付けに向う。アイス・キャップを避けて、東側の斜面を登る。第一キャンプからは、アイス・キャップを直登しなければと考えていたが、うまくトラバース出来そうである。ダナムギャルに、今日は休んではどうかと勧めたが、彼は依然として闘志をもやしていた。私が案内役とばかりにトップを進む。雪は適度に締り、歩き易い。約一、〇〇〇米トラバースして、クレバスの手前でアンザイレンして、主稜のドームとアイス・キャップの間から、急になつたドームの東斜面を登る。苦しくなつて来た呼吸に、ヒマラヤの高度を感じつゝ、クレバスを越え、ドームへの急斜面に、五〇米のロープを固定する。ドームの斜面を第四峰の方に向う。一步毎に高度はあがる。雪質はますますしまつて、主稜線は近いようだ。やがて主稜線の北斜面にでると、クラストして、大きなスカブラとなつていた。時々ボコン、ボコンと、足をとられる。澄みきつた空に第四峰の岩峰が、手にとるように近くなる。第四キャンプの位置をきめ、下る。天候が許せば、頂上はわれわれのものだと、勇んで帰つてきた。

藤平、伊藤、ガルツェン、ダワ・トンダップ、ゲンディ、アン・ニマは第三キャンプに登つてくる。ポーター四名

は氷壁の下まで荷上げ。また、第一キャンプからポーター三名、第二に荷上げする。

前進ベースとなつた第三キャンプに、今西をはじめとして隊員集結し、最後の作戦をねる。明一日に第四キャンプへ、二日は第五キャンプを、そして三日には、天候が許されれば、コンティシヨンのよいものが二名、第四峰の頂上を窺うことにする。伊藤は第三キャンプに待機して、医師の役目を果さなければならぬ。第二キャンプへの道付けをした舟橋は輸送隊が着くや、第二、第三キャンプへ荷上げし、今日も第四キャンプへの道付けをして、隊の主導的な役目を果したが、連日のアルバイトに疲労し、明日は休養して、登頂隊のあとを追うことにする。酸素ポンベを第三キャンプまであげたが、登頂には使用しないことにする。

十一月一日。いよいよ、大詰めに近づいてきた。成功しようと、しまいにかゝわらず、うまくいつても一回しかアタック出来ないであろう。一気呵成に頂上を目指す今西、藤平、脇坂とガルツェン、ダワ・トンダップ、ダ・ナムギャル、パサン・ダワ、グンデイ、アン・ニマの隊列は第三キャンプをあとにして、主稜線へと向う。

十一月になつて、頂上に向つた隊の例は多くはなからう。偏西風は日と共に、また高さと共に強まっている。クレバスを幾つか避け、あるいは越えて、フィックス・ロープのある急斜面にかゝる。太陽は蔭つて肌寒い。トップのカタイングした氷片が、逆光にきらめきながらとんでくる。高さがだんだん身にこたえ、五十歩も歩けば、一息つかなければならぬ。中食にビスケットを二つ、三つかじる。これ以上は食べたくない。ティルマンが張つたというところから、五〇〇米ばかりさきに第四キャンプを建設する。風の冷たさは、北尾根とは問題にならない。テントを張りおえて、ダワ・トンダップ、パサン・ダワ第三キャンプへ下る。高度は六、七八〇米。夕七時の気温は零下十八度であつた。夕食のオニシライス、鶏肉はうまく、結構一人前食べる。第二キャンプにいたポーター三名は氷壁下まで荷上げて第一に下る。第一キャンプの藤村は、姿勢いかんと第二キャンプに登る。

十一月二日。第四キャンプでは、頭痛もなく充分な睡眠がとれた。オニシライスの雑炊とコンビーフで朝食をすま

せたが、隊員は疲れているようで、出発の準備に手間どる。われわれは、ここで完全武装——綿下着、ラクダシヤツとズボン下、フラノ地のカッターシヤツ、厚手のセーター、サージのズボン、羽毛服、防風衣、薄手の手袋一枚、厚手二枚、厚手の靴下二枚。内側に羊の毛皮をはったビブラム靴、羽毛とズックのオーバーシューズ——をした。北尾根とは違って、主稜線ともなれば、南西面からの強風をじかに受けなければならぬ。目指す第四峰は、間近かに聳え、数時間もあれば、登れそうな錯覚におちいる。頂上までに三つのこぶと、頂上の北側の直下に、小さな岩峰が聳えている。一つ一つのこぶのことを考えて見ると、やはり相当なものだ。

脇坂は出発まもなく、隊列からはなれ勝ちである。ベース・キャンプを出発いらい、十二日目であるが、われわれの中で一番若く、また最も頑健であつた彼には、一日の休養も与えてやる事が出来なかつた。何の不服もいわず、隊の命令に従つた。ヒマラヤでは無理なことであるが、それほどに先を急いでいた。彼の荷を分けて持ち、第四キャンプに帰す。そこにはサーダーのガルツェンが待機していた。サーダーは捻挫がいて、第四キャンプまでやつてきたが、山では一向に積極性を示さない。あるとき、サーダーをやめたら、クックをするんだと言つていたが、正にその通りで、山へ登ろうというような意志はなさそうである。

やがて第一のこぶにかゝる。藤平と今西、ダ・ナムギャル、グンディとアン・ニマで、アンザイレンする。稜線上に、クレバスが幾つか口をあけて、青氷となつていた。クレバスを縫つて、稜線を左巻きに登る。このこぶの手前で南面をのぞくことが出来た。一面の雲海のなかに、マチャ・プチャリがするどく聳えて第三峰へ続き、この二つのピークの間の遙か、かなたに、第一峰であろうと思われる巨塊が、澄みきつた空に続いていた。あたり一面の水と岩の世界であり、ヒマラヤのきびしい姿であろう。第二のこぶは急斜面であつた。十疋とふんでいた荷は十五疋を越えていた。ステップ・カッティングしながら、右巻きに一步一步登る。この頃から風が強くなつてきて、第二峰のピラミッドは近づくほどに、ますます急峻になつてくる。登攀は困難なようである。しかも第四峰から二マイルにわたつ

て、七、〇〇〇米を越えた稜線がだらだらと続いている。

「ヒマラヤは、遠くから眺めていると、登れそうに見えるが、近づくと容易なものではない」と、もらしたティルマンの言葉は、ヒマラヤをよく言い現わしている。歩度は遅々としてのびない。三つ目のこぶを越して、第五キャンプを建設したかったが、風がますます強くなってきたのと、シェルパを第四キャンプへ帰さねばならなかったため、こぶの下に三人用のテントを張る。高度は七、一〇〇米。風を避けるため、テント位置を掘り下げて、風上にブロックを積みあげる。強風の中で、この作業は容易でなかつた。直ちにグンディとアン・ニマを第四に降す。

夕食は今西も藤平も、オニシライスに肉を煮こんだのを食器に半分平らげた。マナスル隊から高所では下痢すると聞いていたが、その心配もなく、むしろ反対の症状のようであつた。明日の頂上攻撃にそなえて、スープとお茶をテルモスに準備する。いよいよ明日だと思つくと、神経が高ぶつて何時までも寝つかれない。舟橋はダワ・トンダップと共に第四へ荷上げする。立平はわれわれの登高も大詰めになり、登頂の様子いかんと、二名のポーターをつれて第二キャンプへ登つてきた。かくして、頂上を目指すわれわれの態勢はととのつた。第五キャンプには今西、藤平、ダ・ナムギャル。第四には脇坂、ガルツェン、グンディ、アン・ニマ。第三には伊藤、舟橋、ダワ・トンダップ、パサン・ダワ。第二には藤村、立平、ポーター二名。第一にはタンドウとポーター五名。ベース・キャンプにはデイリーとミンに、ポーター一名であつた。

十一月三日。気にしていた風は吹き募る一方で、物凄くほえている。テントは今にも破れそうに、バタバタあおられる。頭が少し痛む。今日こそはと、半ば緊張し、楽しみにしていた攻撃は、どうやらむつかしいようだ。

十月末から、ひしひしと押し寄せていた冬は一足先きに訪れたのであろう。昨日までとは、まるで違つた風の狂いようである。こうしたことを、ずつと前から予知し、ベース・キャンプ建設の日からラッシュ・タクティクにより、予定通りの登高をすすめ、ようやくここまでやつて来たのである。ダ・ナムギャルは、今日まで一日の休養もなく、

積極的に動いている。しかも、なおテントを上上の台地まであげようと提案する。彼の登頂への意欲はまことに驚くべきである。だが、この別世界のような荒天のなかで、どれだけのことが出来ようというのだ。三人は横になつたまま、うつら、うつらと一日をすごす。夜に入つて、風は一段と強暴さを増し、数分毎に猛烈な突風がテントをバタバタゆさぶる。遂にテントの一角に穴があく。藤平は修理に懸命である。

十一月四日。ふと眼がさめる。テントのあたりは、相変らず物凄。一隅がぼつと明るい。時計は一時半を指している。こんなに早く夜が明ける筈がない。よく見ると、風下の一角が大きくさけているらしい。今西は雨隣の藤平とダ・ナムギヤルをたたき起す。いまや、破局の運命にあるにも拘らず、一体どんな事態に追いつめられているのか、ピンとこない。破れつつあるテントを修理しようという気持ちも起つてこない。たつた一つの安住の世界であるテントがなくなつていくではないか。

「おい、藤平、靴をはけ。出発だ。」

突風がほえることに、テントは風下から裂けていく。必要なものをルックにつめて、風上に防風壁のように並べて、藤平を真中にして、ルックを背にうづくまる。ダ・ナムギヤルの手がおかしらしい。藤平は彼の指を口に入れて温めてやつている。藤平も今西のものもをたたく。今西の足指も少し冷い。長い長い夜が、ようやく白んできたころには、テントの布地が殆んどなくなり、デュラルミンの支柱のみが残つていた。北斗七星がきらきら、またたいいていたのが、今もなほ險に残つている。時々睡魔におそわれる。さすがの風も、日の出とともに幾分は弱まつたらしい。が立ち上れない。かつて、遠見尾根で吹雪にやられて、まんじりともせず、テントの四隅で一夜を明かしたことが思い出されたが、とても比較にはならない。ただ風速の衰えることをのみ期待しつつ、長い時間が過ぎていった。十時頃になつて、ようやく立てるようになった。キャンプ跡にちらかつたカステラをあけて、食べようとしたが、のどを通らない。

さあ、下降だ。ダ・ナムギャル、藤平、今西の順にアンザイレンして降り出す。雪片を混じえた風が頬を打つて痛い。五分毎位に突風が襲う。そのたびに吹きとばされぬよう、風上に頭を向けて、立ち止まる。何回こんなことを繰り返さねばならないのだろう。下降は、遅々として捗らない。スカブラに足をとられ、よろめく。アイゼンの締具が悪く、外れてスリッパする。起き上つて、アイゼンを付け直すのが精一杯である。こんなことが命とりにならないとも限らない。第二のこぶの急斜面では慎重に確保しながら下る。やがて第四キャンプが眼に入る。そこには脇坂とアン・ニマがいた。ガルツェンとグンディは三人が退却するのを見て、下つて行つたということだつた。ここには全員が収容出来ないのだ。第四でも風のため、テントが一張り倒されていた。

藤平と脇坂を第四キャンプに残し、ダ・ナムギャル、アン・ニマ、今西の順にアンザイレンして、第四をあとにしたのは四時であつた。主稜線上のドームをトラバースして急坂にかゝる頃には日も暮れて、更に悪いことに雪がちらついてきた。トップのダ・ナムギャルがクレバスの上に積つた雪につまづいて倒れる。さしも、慎重な彼も疲労甚しいのであらう。雪はますます降り募る。アイス・キャップの上に来たらしい。暗闇で、道しるべの赤旗も発見出来ず、下りすぎでは、アイス・フォールに落ち込む危険があるので、ジグ・ザグの途をとる。われわれの連呼がやつと第三キャンプにとどいたのであらう。灯りが点々と登ってくる。懐しい舟橋の音が聞える。舟橋の肩にすがつて、やつとの思いで第三キャンプに辿り着いたのは八時であつた。ダ・ナムギャルも二週間の奮闘に疲れ果てて、キャンプに着くや崩れるようにのびてしまつた。シェルパの出してくれた暖かい飲みもの、第一キャンプから上げてくれた、タンドウの丹精こめた柔かい羊肉。これほど美味いと思つたことは後にも、先にもなかつた。よく考えてみれば、昨夜から丸一日何も口にしていない。朝の一時半から風と雪、寒さと疲労に十八時間闘つてきたのである。

第三キャンプで、主稜線に登つていつた連中を、心配していた伊藤、舟橋は、第四峰から主稜線にかけて雪煙が物凄く、山全体がわき立つていたという。この三日間最も悪いコンディションの真只中へ突入していつた結果になつた

のである。伊藤はシエルバに治療することはないか、と声をかけたが、「ツウマロー」と、いつたのみで寝てしまった。

十一月五日。昨夜来の雪はテントをすつかり埋めてしまった。第四キャンプに残っている藤平と脇坂を、迎えに出発の仕度をととのえた舟橋に、ダ・ナムギヤルが「サーブ」と、いいながら手指をさし出した。一面に水泡が出来ている。伊藤ドクターは昨夜何故だまつていたのかと、不機嫌である。指八本が凍傷にやられ、そのうちの一本は、かなりの重傷であつた。だが彼の活躍は素晴らしいものであつた。氷壁の開設をはじめとして、連日第一線に立つての積極的な行動はシエルバとしてだけでなく、彼は立派なクライマーであるといつても、過言ではあるまい。サーダーのガルツェンはトラベルに役立つが、さて登高という段階になると、その大要はよくのみこんではいるが、全く要領のいい男であつた。

舟橋はダワ・トンダップ、パサン・ダワ、グンディの三名をつれて第四キャンプに向つた。新雪に蔽われたルートに、ステップを切り乍らテントに近づく。シエルバ達は何故かテントに近ようとしなない。ダワ・トンダップは、かつてナンガ・パルバットの悲劇を目撃した一人で、恐らくそんな情景を想像していたのであろう。舟橋が声をかけると、応答があつた。藤平がテントから這い出してきて、時間のすぎるのも知らずに眠つていたという。彼は自分で手当をしていたが、左の耳たぶと右手指を凍傷にやられていた。脇坂は疲労と高山病のため、食欲がなくなつていた。舟橋とグンディが脇坂を助け、藤平は二人のシエルバとアンザイレンして下る。固定ロープのある急斜面で、脇坂をおろすのに苦労する。第三キャンプに着いたのは夕暗のせまる頃であつた。

藤村は登高に必要な荷をもつて、人のいやがるマルシャンディ廻りの重責を果したのである。彼自身もヒマラヤまで来て、こんな仕事に終始しようとは、夢にも思つていなかったであらう。これをベース・キャンプで受け継いだ舟橋は、矢つぎ早やに荷上げして、一日の蹉跌もなく、第五キャンプが建設されたのであつた。彼を頂上攻撃の隊員と

考えていたのであるが、隊のため犬馬の労をとり、第四への道を開き、第三キャンプでがんばつていてくれた。しかも全行程中、最も苦難の多かつた退却に際して、彼の示した行動は、彼ならではの人間性の発露であつた。苦しさが増すにつれて、チームワークということは最も重視され、必要となつてくる問題である。われわれは、その一人一人をとりあげてみると、欠点の多い人間であつた。だが、われわれ七名は感情的な争いは、只の一回もやつたことがなかつた。ということは、お互いがよく相手の欠点を理解しあつていたと、いうことなのである。初対面のものであれば、争いになるような事柄でも、この仲間では何でもなかつた。今西のみは、ゼネレーションが違つていたが、他の隊員は、夫々続いたゼネレーションの連中であつた。仲間を理解するということは、相手の欠点をそのまま許してやるということではなからうか。

伊藤は凍傷にかかつたダ・ナムギャルとアン・ニマをつれて第一キャンプに下る。明けて六日、夜来の烈しい風は収まらず、主稜線は雪煙が凄い。烈風の静まるのを待つて、第三キャンプを撤収する。第一キャンプから登つて来た藤村と、舟橋、脇坂を第二に残し、他は第一キャンプに下る。七日には、早朝よりアン・ニマと四人のポーターを第二キャンプ撤収にあげる。全員第一キャンプに集結。いままで、緊張していた隊員の気持も、何ヶ月振りに、自分にかえることが出来た。

われわれの登高速度は、さして早いとはいえないが、ティルマンのそれよりも、スピーディであつた。これは天候にも左右されるのだから、一概に比較出来ない。またキャンプの位置も、ティルマンの場合と殆んど変らない。この結果をえたことの大きな原因として、五、二〇〇米のナムン・バンジャン越えの苦闘があげられる。これを要するにヒマラヤのベテランの足跡と、大差ない登高が出来たという事は、いろいろの条件の差はあるが、欧米人に比して、なんら劣るものでないといえるのではないだろうか。既にマナスルでも立派な成果があげられている。

今年のポスト・モンズーンが例年にくらべ、どんな状態にあつたか。未経験のわれわれには知るべくもないが、風

という問題を別にして考えてみると、思いもよらない、よい天気が毎日のように続いたのである。ポスト・モンソンの気象状態は、藤平がカルカタ気象台を何回か訪れ、マル博士から問ひ糺し、判断したところは次のようである。

モンソンの時期については「来るべきときに来た」のであるが、その状態がアブノーマルであつた。モンsoon前には強烈な偏西風が、何回か通り抜けるのであるが、この回数が少なかつたことである。之に関連して、上記の偏西風がモンsoon中の東風に変るモンsoon直前の移行期の好天が、例年に比し、頗る長かつたことである。英国のエヴェレスト隊が輝かしい成功をおさめた原因の一つとして、此の好天を巧みにつかんだということが挙げられる。

モンsoonの終末はアンナプルナ地方では十月五日か六日であつて、ベンガル地方では十日頃であつた。もちろんモンsoonの湿気はまだ残つていて、アンナプルナ第二峰南面偵察中、小雨や霧に遭遇したのは正にそれである。六月上旬に始まつたモンsoonが九月末に弱まり、十月上旬に完全に明け切ると、北から南下して来る西風がいままで吹いていた東風にとつてかわる。この移行期が大体十月上旬から中旬にかけてであり、登頂を狙うには絶好の機会なのである。そのうちに、漸次西風が強くなり、冬の寒気が迫つてくる。この西風が一月頃になると最高潮に達し、平均秒速五〇米になる。これがジェット・ストリームとか、ウエスタン・ディスターバンズと呼ばれるもので、二万呎から三万呎に存在する強風帯である。これがあくる年の三、四月に漸次弱くなり、モンsoon前の移行期に入るのである。

一九五二年秋のスイス隊の失敗の原因は想像に絶した烈風と、それに伴う骨をさすような寒気であつたことは周知の通りである。ランベールは十一月十九日、サウス・コルに第八キャンプを建設し、二十日、八、一〇〇米に達したとき、烈風と寒さのため、一步も踏みだすことが出来なかつたとか。もちろん小康期間が何回かあるわけで、その回数が冬になるに従つて少くなり、その期間の風速も強くなる。スイス隊のときは、ジェット・ストリームの中心が四

万呎の高度で北緯二七度半に沿つて西から東へ吹いていた。エヴェレストは二八度五分である。つまりエヴェレストの真上、一万呎の高さのところに、中心が腰を据えていたわけである。

ところで、われわれの場合残念なことに、風速計を高所キャンプに揚げ得なかつたのと、またアンナブルナの主稜ドームまでは風から保護されていたので、風についてのデータはないが、ネパール近接の観測所であげた気球によつて得た、カルカッタ気象台の予報によると次のようである。十月二十五日から月末までは、二二、〇〇〇呎の高度で平均風速一五―二五米であるが、第五キャンプにいた十一月三、四日は二五、〇〇〇呎で三五米となつている。気温も零下二五度であつた。つまり、十月二十七日頃から偏西風がはじまり、テントが吹き破られた三日の夜、最高となり、八、九日再び、二六、〇〇〇呎で三五米の最高となつて、この強風は十二月に至つて、漸く一五米に鎮まつたのである。

南面偵察中は前述の如く、モンスーンの湿気が残つていたため、小雨にあつたが、十月十日頃から雲の少い快晴が毎日続いた。北面のマルシャンディに入つて、登高を続ける間、三峰とドームの間の低いコルを雲が南面から越えて来たのは二、三回で、十一月四日には降雪をみたのである。降雪は第三キャンプで五〇糎、第一キャンプで一〇糎であつた。マルシャンディも、またずつと雲がなかつたが、四日、川沿いに昇つてきた雲はツルツル岩を蔽つたのである。これらのことから、第五キャンプを建設した前後が、偏西風の第一回目の最高調のときであつたことが分る。

たゞ一回の経験のみで、ポスト・モンスーンの優劣を云々することは、早計であるが、相手の山によつては、ポスト・モンスーンは捨てたものでないといえるのではないか。八、〇〇〇米を越えたジャイアントは無理であるとしても、七、五〇〇米或は八、〇〇〇米程度までの山であつてみれば、風が強いこと、日照時間の少いこと、気温の低下する等の不利な点はあるが、快晴の続くこと、雪質が歩行に楽なこと等、自然的条件に加えて、各国の遠征隊が少ないので、優秀なシェルパを集められるという大きな利点も見逃すわけにはいかない。

輸送の大任を負つた藤村は、十月十日、南面のマディ・コーラのベース・ハウスで、ナムン・バンジャンへ向う本隊を見送り、ディリーとミンを伴つてマディを下る。性格を知つたシクリスのポーターと、ポカラまで二ニルピーで契約する。まつたく、あきれた連中である。シクリスまで六時間で着いてしまつた。二日目は、今までの旅を通じて最も長く歩き続け、三日目の昼すぎ、ポカラに着く。直ちに県知事にあつて、余分の荷を保管して載くことにする。シエルパのいない旅は、食べものも完全にネパール式になつて、夕食を終つた口の中がひりひりして、息が出ない位であつた。

ディリーとミンを、ポーター集めに走らせたが、十五日からお祭りなので一人もよつてこない。気のりのしない連中を、三十五人やつとのことと集め、十六日ポカラを発つ。途中の部落では、お祭りのふるまい酒で、数名のポーターは酔つぱらつていた。予定地まで行くため、ミンを殿りにして、藤村はディリーと先行する。北面のベース・キャンプへ二週間で着く予定であつたが、お祭りに巻きこまれて、とんだ災難にあつてしまつた。疲れて、寝しずまつた泊り場の遠くから村人の歌声が聞えてくる。

雲一つないアンナプルナ第二峰を左手に、丘を越えてマディ・コーラを渉り、左岸を溯る。十数人の村人が集つて一尺たらずのグリーン・スネークを殺していた。藤村一人でも籤医者は繁昌する。丹毒、マラリヤ、足の骨折と。ミダン・コーラを渉り、マルシャンディを眼下に見おろすカブルガウンに宿泊する。ポーター二名逃亡し、マラリヤの四名を解雇して、グルンと交代させる。マルシャンディ沿いのクティに着いたのは二十日、こゝでも怠け者のポカラのポーターを解雇する。キャンプからみた月光を浴びたヒマル・チュリが印象的であつた。新しいポーターで道のりが捗る。毛布をかぶつたグルンが、ジェスチャーたつぷりに、ナムン・バンジャンの困難さを説明する。十一月も間

近に迫つたのに、まだ低地旅行が終らない。本隊はベース・キャンプに着いたのであろうか。マナングボートから塩をかついできた女に出あう。彼女達は四日前に本隊にあつたというので、ナムン・バンジャンを越えたのを知り、安心する。ある部落では、こぶをつけた女達がミカンをやるから、こぶとりの葉をくれという。

クティから三日目にスイスの地質学者ハーゲン博士にあう。ラルキャ峠を越えて、博士はマルシャンデイを下り、カトマンズへ帰るところであつた。ここで再びポーターをチベタンにかえる。タンジエへの道でポニーに乗つた男にあい、この男が本隊の荷を数日前、ベース・キャンプに運んでの帰りだということであつた。ヒマラヤの秋は美しい。二、三〇〇米あたりの潤葉樹林のカシが紅葉して、落葉しかけていた。ベース・キャンプからのポストランナーに出あい、本隊の様子を知る。首を長くして、藤村の着くのを待つているとのことであつた。タンジエを過ぎて、松林の中で、インドに出稼ぎにいく青年に行きあう。

二十七日。マルシャンデイと別れ、サブジイ・コーラを溯る。アンナプルナ主稜線の大きなドームがあらわれ、双眼鏡で探つてみると、やがてドームへの稜線上に足あとが見えた。「やつてるぞ」と、思わず叫ぶ。ディリーもミンもポーターのかしらも双眼鏡をうばいあう。いままで、不平を言つていたポーターも、美しいモミの林の中を走つて登つて行つた。モミの林をぬけ、ダケカンバの林もまばらになつた谷沿いの平地に、テントが張られていた。第三峰から、とてつもなく大きな雪崩が落ちていつた。ベース・キャンプで待機していたカトマンズ・ポーターに第一キャンプへ連絡させる。荷の整理も終つたころ、舟橋がおりにきた。二人は時の経つのも忘れて、山の話しに夢中だつた。

### 帰路につく —— むすび ——

十一月九日。二十名のチベタンを、マナングボートより集め、第一キャンプを引払い、ベース・キャンプにい

た、デイリーとともに、サブジイ・コーラを下り、レークサイドに一泊する。ティルマンがテントを張つたというチャーメの村外れで、ロクシュとシャンをしこたま買いこんで、われわれの旅での最大の酒宴をはる。キャンプ・フアイヤを囲んでの、チベタン、ネパリー、シエルパの踊り。なかでもチベタンの女達の踊りはエキゾチックで、印象的であつた。泊り場では藤平とダ・ナムギャルの凍傷の手に、伊藤ドクター得意の、微温湯療法が続けられていた。今西、脇坂は山で受けた足指の凍傷のため（爪がとれた程度）、スキー・ストックをたよりに、びつこをひきながら、毎日、隊のしんがりをつとめ、特に下り坂になつたときの二人のしんがめつ面は痛ましい。

足を痛めた脇坂は、それでも、とんぼ、ちようちようの採集をつづけていた。トンジエでポーターをグルンにかえクテイでマルシャンディと別れる。ポカラへの近道を三日間とぼし、十八日ポカラに着く。県知事ポラーン・シン氏の好意で、官邸前にテントを張る。

五日間待つて、藤平、舟橋、藤村、脇坂はカルカッタへ出る知事夫妻とともに、飛行機をチャーターして、ノートンワの近く、パイロワまで飛び、陸路二十七日カルカッタに出る。今西、伊藤、立平は空路カトマンズに出て、コララ首相をはじめ、遠征隊に種々の便宜を与えて戴いた方々を訪問し、カルカッタに出る。

永い間の願ひであつたヒマラヤ行も、一先ず終りをつげることとなつた。この計画を実行するに當つて、最も困つたことは、八、〇〇〇米の山へ登つた経験がないことであつた。準備期間の短かつたせいもあるが、軽装備という立前で始められたにも拘らず、装備、食糧の重量は、準備が進むにつれて、増えていつたのである。結論的にいつて、如何に立派な書物を読んでも、また経験者から聞いたところで、計画に当る者自体が、その経験がなかつたならば、立派な——その山を登るにふさわしい、最も経済的な——計画は、樹てられないものだということを知つた。その計画、規模が如何に大きくとも、その山に過ぎたるは及ばざるが如しである。今回のアンナプルナ試登が、その動機——ヒマラヤ遠征を實踐するという行動主義——からいつても、上述のことが分つた丈で、満足するものである。



細かくいえば、装備の一つ一つについて、或いは食糧について、記さねばならないことは数多い。が紙数は既に超過しているので、他の機会に譲りたい。

アンナプルナ遠征は、中部日本新聞社、京都新聞社、神戸新聞社の後援のもとに行われたのであるが、更に各方面からの支援を得、交渉、装備、食糧等の総てにわたって、物心両面から多大の援助をうけたのである。これらの後援者に対し、深甚の謝意を表したい。そして、この遠征を可能ならしめたネパール政府と日本政府に対して、最大の敬意をばらうものである。

# アコンカグア覚え書

関 根 吉 郎

## 一、エル・アコンカグアの意味

勿論 Aconcagua という山名は、先住民族の言語に由来している。ケチュア語で「岩の守り場」という意味であるとの説が、一つの通説で、山岳部隊のウガルテ少佐もこの説を主張した。而るに最近、アイマラ語の CON (雪) と KHAWA (山) に由来しているとの説がある。これだと明かに「雪の山」という意味である。私共には、この二つの説を批判することは出来ない。

アコンカグアという山は、ある方面から見ると、殆んど雪を被らず「岩の山」に見えるが、東面や南面は「雪の山」に見える。

## 二、標高の問題

山日記にも、我が国の学生用の地図にも、大体七〇三五米という標高が採用されている。一八九八年、アルゼンチ

アコンカグアの標高とその出典

1854 年	8610 米	Atlas de Chile, de Claudio Gay.
1872	6835	Plan topográfico de Chile, Por A. Pisis.
1899	7035	Andrés Allgemeiner.
1900	6834	Geografica, de Covtambert, Paris.
1900	7020	Atlas, de Justus Perthes, Gotha.
1902	7020	Geografica, de Santos Tornero, Valparaiso
1903	6970	Lexico de conversacion Meyer.
1906	6970	Diccionario Espasa, Barcelona.
1911	6960	Mapa escolar de Chile, Por Fuenzalida.
1923	6953	Lendeskunde von Chile, Por C. Martin.
1928	7010	Das Grosse Brockhaus.
1929	7010	Mapa para excursiones, de Kaltty Fickensher.
1931	7130	Nuevo Atlas Universal, de Agostini.
1939	7035	Instituto geográfico militar de la Argentina.
1940	7039	Petit Larousse illustré, Paris.
1941	7100	Mapa de Chile, por Alejandro Rios.
1941	7130	Diccionario enciclopédico Vastus, Buenos Aires.
1942	7000	Diccionario enciclopédico Ercilla, Santiago.

ンとチリー兩國の、国境委員会が、アコンカグアを測定した。その結果は、アルゼンチン側は七一三〇米、チリー側は、六九六〇米。一七〇米の差があつた。代表的な標高を示してみる。

### 三、アコンカグアの歴史

記録の上からでは、一八九七年一月十四日、フィッツゲラルド遠征隊の、登攀隊員の一人であつた、ツルブリッゲンが、頂上に登つたのが、初登頂とされている。その翌年には、マルティン・コンウェイが、前年の登頂を知らず、ボリヴィアのアンデスを登つた、その足でアコンカグアに登つた。

これらの成功は、現在でも、一般のルートとされている、オルコネス溪谷を溯るものであつて、少くとも、ベースキャンプとしては現在ブラサ・デ・ムーラスと呼ばれる、オルコネスの四二五〇米のモーレンが、最適のものと考えられる。

以後今日まで、幾十組の人々が頂上に到つていられると思われるが、そのルートは同じであり、亦季節からいつても、十二月——三月と、同地の夏期に限られている。

登山を対象にした場合の、アコンカグアの世評を総合すると、先ず、危険な山ということになつてゐる。その第一の理由として、天候の変わり易い山と云われる。第二に、極度に寒い山と定評がある。アルプスを除く山岳に於て、この山程、人の生命を奪つた山は他に見当るまい。勿論、多くの登山者があつたからではあるが、現在プエンテ・デル・インカにある共同墓地に、三十有余の十字架が立つてゐる。

最近になつて、この山が、高度の割に、気圧が低いことが注目され始めた。エルゾーグ一派のアンナプルナに成功した連中も、これを指摘したそうである。ラプラスの式から計算すると、七〇〇〇米として、大体水銀柱で三一五ミリである。当地の陸軍の人々も、本来その値であるべきだが、アコンカグアはどうもそうでない。今までの測定からみると、三〇〇〇——三〇五〇ミリ位になつてゐると語つた。早稻田遠征隊の登頂した、一九五三年一月二十六日、午後一時半では、零下六度で、二九八ミリであつた。これは勿論アコンカグアだけの問題でなく、アンデス山脈のヒマラ

ヤに比しての一つの特徴であつて、gなどにも、関係のある地球物理学の興味ある問題であろう。

もう一つこの機会に簡単に触れておくが、日本では、アコンカゲアを火山とする説が一般であるが、アルゼンチンでは、それを否定している。岩層からでも、その主要部分は水成岩より成つてゐることは明瞭であるが、頂上附近に火山岩も見つかるのであつて、一つの山塊の中に、火山噴火のあつたことも事実らしく、絶対に火山でないとは云いきれそうもない。

#### 四、早稲田大学山岳部の計画

早稲田山岳部が、八千米の登頂を夢みたのは、本計画より十五年前に溯る。事変から戦争、それから敗戦と、機会に恵まれざるを託つた部員は、その間百名に達したことであろう。敗戦後のドン底に於て、O・B連の強力な支持によつて、いち早く立直つた部は、今度こそ機会を逸してはならぬことを自覚した。而しながら、到達するには順序がある筈であつた。その上、戦後の貧弱な経済力、就中、外貨の不足を考えた時、スポーツだからと社会に甘えることは、快いことではなかつた。

バルトロ氷河を周る山に、最初の希望を向けていたのであつたが、アンデスに目標を変えていつた主な理由はこんなところにあつた。なげなしの外貨を多少なりとも使用するのであるし、国際的な信用という点からも、登山というスポーツが国内に於て理解されている程度からみても、必ず成功するという、自信をもつことが必要であつた。

日本の登山界は、一九三六年のナンダゴートの登頂以外には、何一つ経験のない社会であるから、自信のないこと夥しい。特に戦後の若い人々には、まったく自信がない。こういう連中は、成功すればすぐ有頂天になるが、反対に失敗すると忽ち投げ出す傾向がみえる。各方面から検討してみても、八千米の山だからといつて、別に恐れる点は見出し得なかつた。然しながら多少なりとも賭ける気味のあの計画は、この際、後のことを考えて慎しみたいと思つたの

である。

アンデスを目指しても、すぐ後に八千米の計画が続く性質のものであったから、将来延びそうな若い人々を、一人でも多く隊員に加えることが望ましかつた。講和条約締結をみない昭和二十六年（一九五一年）春のことである。

アンデスの一つの魅力は、日本人がまだ誰も登つておらず、何も知らないということであつた。手をつける段になつても、明瞭な地図もなく、写真も限られたものしか見当らなかつた。入国の査証などは、皆目見当がつかず、手を拱いて夢を追うばかりであつた。朝日新聞社、日本アルゼンチン協会の後援がなかつたら、恐らくこの計画も、当初に於て放棄せざるを得なかつたであらう。

事務的な計画の進展と共に、O・Bや学生の中より選ばれた隊員候補のトレーニングも全力を尽さねばならぬ。我が山岳部が大学に附属し、厳正なアマチュア・スポーツ精神を遵奉する以上、登ればいいんだらうという、相手を軽くみる精神を許すわけにはいかない。幸いしたか、或はつまずきであつたかは、計画を終つた今になつても、判断をし兼ねるが、一九五二年の正月、我々の準備がととのわぬまゝに、アルゼンチン体育連盟より、季節的に遅いから、計画を一年延期して欲しい旨の強硬な電報が私のもとに届いた。その頃漸く、当地の体育連盟との連絡もついたのであつた。地図も手に入つた。

具体案の骨子は大体次の点である。我が山岳部が、この十五年間に亘つて試みて来た登山の一特徴は、個人の力で解決されない山に対する登山方法の実施にあつた。力を加え合せたものでなければならぬという考え方である。横にひろがるチームワークでなく、力を縦につなぐチームワークの実践であつた。

然しこゝに、日本の山を対象にしているは絶対に一つの要素を欠くことになつた。高さの問題である。ヒマラヤ遠征の報告書から、高度馴化の問題も、その方法も、大体の見当をつけることは容易であつた。唯これを実際に体験することだけが残つていた。八千米以上の山岳に対して、大体七千米が、馴化の点から考えると、一つの段階のように



塚本

目下田

今村

浅山

關根

確井

1953年早稲田大学体育会山岳部アコンカグア遠征隊員



西方上空よりアコンカグアを望む

思える。この高さに体を馴らし、その結果をみれば、八千米という高さの予測は十分つくものと考えた。

頂上に立つということは、殆んど問題とならなかつた。どれだけ高い地点にキャンプを設け、そこに幾日間生活するかということが計画の主題であつた。アコンカグアが済めば、北方約二百軒のメルセダリオ、南方約百軒のトブンガト、この二つは、共に六七〇〇——六八〇〇米と測量されている山である。こういう山々も一緒に登りたい。

ヒマラヤ遠征と大きく異なる点は、アンデスの地方には、適当なポーターがない、それにシェルパに相当する人々もないことである。文献や、当地の連絡から、ムーラ（ら馬）を利用することの必要性を強調している。この一番都合よい方法は、陸軍山岳部隊の援助をうけることだと、指摘されていた。

一九五二年十月、出発を目前に控え、在亜日本人会を通じ、アルゼンチン体育連盟が本計画を全面的に後援する旨の通知を受取つた。

十月二十日、次の六名は東京を發つた。当初、十名を予定した隊員を六名にしたのは、専ら、経済的事情による。

隊長	関根吉郎	三七才
隊員	碓井弘	二七才
"	浅山貞郎	二六才
"	日下田実	二一才
"	塚本繁樹	二三才
"	今村俊輔	二〇才

この中、若い三名は学生である。

十月二十四日、神戸港を出帆する、大阪商船、長崎丸に乗船、南アフリカ経由、ブエノスアイレスに向つたのであつた。

## 五、アルゼンチン側の態度

こちらの計画としては、アルゼンチン滞在中の宿泊などは、日本人会の世話になりたい希望であつた。この旨をお願いしていたわけであるが、私共より前に、日本から柔道使節として、三名が講道館より派遣され、これらの人々に、日本人会としては尽してしまつたから、十分のお世話も致し兼ねるといふ要旨の手紙を船中で受取り、容易ならざる前途を想つた。

山の方は、体育連盟の後援は決定していたが、この方もどの程度のものかは、皆目見当が付かなかつた。丁度二ヶ月の船旅は無事に終つて、十二月二十三日、長崎丸はブエノスアイレスの港に入つた。

当日すぐ、スキー山岳協会会長、ハウテル氏に面会した。瘦身長軀、ドイツ人かと思つたが、スイスが故郷だと語つた。日本人会の人々も、体育連盟の後援は、相当大がかりの様子であると聞かされ、一安心する始末であつた。

クリスマスから年末と、役所が休みで、各方面の連絡がとれない。のんびりした国民であるから、ゆつくりブエノスで遊んでいきなさいと、少しもあわてない。それでも暮の二十九日には、体育連盟総裁バレンスウーラ博士を最高裁判所に訪ねることが出来た。博士は最高裁判所長官でもある。

その頃、隊員は、ブエノスアイレスのホテルを引揚げ、郊外ブルサコにある、日本人会の所有する協和園のグラウンドに移り、トレーニングをやつていた。二ヶ月の船旅は、トレーニング不足になり、日下田、塚本を除いては体重量加に悩まされた。

現在のアルゼンチン共和国は、どういう方面から眺めてみても、非常に若い、上を向いている国家だと云える。面積は広く、人口の少ない国である。青少年の育成に力を注ぐことは勿論である。スポーツの奨励も勿論怠つていない。この国の国技は、フットボール、日本でいうサッカーであろうと思われる。街で日本の子供がキャッチボールをやる

ように、ポールを蹴つている風景は珍しくない。どこへ行つても、フットボールのグラウンドがある。国外から、各種目の名選手を招聘して、若い人々に刺戟を与えるような企ても盛んに行われるようである。

アンデス山脈を西の国境に控えながら、登山は、極く近年に至るまで、この国のスポーツとしては、低調であつたらしい。それでも一九五一年の暮には、初めてアンナプルナに於て、八千米の山を勝ち取つた、エルゾーグ麾下の面を招き、ヒマラヤ遠征に備えている。

私共の計画は、アンデスを登りたいから出掛けたのであつて、始めからアルゼンチン側より招聘されたものではなかつた。それにも拘らず、ペロン大統領の格別の好意により、一九五二年一月一日より、正式に大統領の客として待遇されることになり、宿舎も、ブエノスアイレス空港に近い、エサイサのビザ・オリンピカに移された。

こゝに生活している間に、ハウテル会長は一人の軍人を伴つて宿舎を訪れた。紹介された軍人は、ウガルテ少佐といつて、メンドサから、ペロン大統領の命令で飛来したというのである。山岳部隊きつてのアコンカグアの権威であり、私共の登山に関して、いろいろの面倒をみるためにやつて来たというのである。こゝまで来て、漸くアルゼンチン側の、私共に対する援助というものがどういふ程度のものか、わかり始め、ひたすら感謝感激するばかりであつた。

## 六、ペロン大統領とスポーツ

ペロン大統領との会見は一月七日の午前八時「カサ・デ・ロサーダ」即ちバラ色の家と呼ばれる政庁に於て行われた。高木代理大使に導かれ、日本人会の役員諸氏と共に、一番奥の政務室に入つた。

先にも述べた通り、スポーツの盛んな国であるが、最近は特に、大統領が自ら先頭に立つてすべてのスポーツを奨励している様である。大統領も自ら、私もスポーツマンであると語り、亦、そう感じさせる明朗さが親しみ深い。人

の語るところによると、大統領は生粋の軍人であつて、陸軍大学卒業後、暫くイタリアの大使館付武官として、イタリアにいたことがある。その間、幾度かアルプスを訪れ、幾多の登山もし、スキーも身につけたことである。だから、いろいろスポーツを奨励してはいますが、大統領自身体験しているスポーツは、山とスキーだけなんです。こういう説が、もつともらしく語られているのである。

私共にとつては、大変具合のいいことであつた。事実、会見の折も、大統領は、登山に関し、特にアコンカグアに関し、並々ならぬ見識のあることを示された。

私共の面前で、ウガルテ少佐に対し、日本の登山隊が、無事アコンカグアを登るための万全の処置をとれと命じ、亦私共に向つては、ウガルテ少佐はアコンカグアに関しては、最高の権威者であるから、どうか少佐の意見を十分に参考にして、全員登頂して来ることを希望された。

現在、アコンカグアには、二ヶ所に避難小屋がある。上方の（アルゼンチンでは六七〇〇米といつてゐるが、頂上まで、標高差にして五〇〇米は十分あるから六五〇〇米位とするのが妥当と思うが、）にある小屋を、プレシデント・ペロン小屋、下方の小屋を亡くなつた夫人の名を冠して、エヴァ・ペロン小屋という。これも、アコンカグアに於て、多数の犠牲者の出ていることは、施設の不足が第一の原因であると、大統領自ら山岳部隊に命じて、建てたものと云われる。組立式の小さいものではあるが、世界最高の山岳施設であろう。

## 七、登山界の有様

組織の上から云うなら、日本と同じように体育連盟の一組織団体として、スキー・山岳協会がある。本部は云うまでもなく、主都ブエノスアイレスにある。この会長がハウテル氏である。

ブエノスからは山も見えず、こゝの人間は雪を知らない。山が好きだなんていう人間は殆んどいないといつてよか

ろう。実際に山に登る人間を、地域的に見ると、やはりアンデスの山麓地帯ということになる。それも大別すると、はつきりと二つに別けることが出来る。一つは、中部アルゼンチンのメンドサを中心とするもの。もう一つは、南部のバリロッチェ地方の山岳を対象とするものである。メンドサ市を中心とするアンデスは、その規模雄大で、北のメルセダリオから中央のアコンカグア、南部のトブンガトに至るまで、六千米を越す山岳を幾つかもつのであつて、馴化を要求される登山が対象となる。バリロッチェ地方の山岳は、高度は四千米内外まであり、湖水あり、針葉樹の林あり、且つ、岩と氷河の容貌は、アルプスを想わせる地方である。それであるから、スキー乃至岩登りが、この地方の対象となるわけである。現在メンドサには、スキー・山岳会メンドサ支部があり、傘下に九つの山岳会があると云われる。支部長はヒル氏であつた。バリロッチェにも支部があり、こゝにも、いくつかの山岳会がある由であるが、情報は得られなかつた。

アマチュアの登山は以上のような民間団体が代表するが、アルゼンチンの登山界というと、どうしても陸軍山岳部隊に言及せねばならぬように思える。イタリーの土産として、誕生し、その初代の連隊長だか、師団長だかを、ペロン自身が受持つたといわれる山岳部隊である。その司令部はメンドサにある。その頃の若い部下が、現在のウガルテ少佐である。山岳部隊というが、恐らく日本人には、一つの装飾品としか見えないであらう。戦争のための軍隊ではなく、全ゆる意味に於けるアンデス開拓がその使命なのであらうか。

一九五一年のフランス遠征隊の際は、山岳部隊に於て、ウガルテ少佐の後継者と目され、且つ、一九五四年に行われる予定の、ドゥラギリ―遠征隊の隊長を約束されている、イバニエス中尉が連絡将校の任に當つたのであつたが、思わしからざる結果に終つたため、私共の遠征には、大統領自ら、最高権威者ウガルテ少佐にその責任を命じたものと理解された。こういうわけで、山岳部隊は、ムーラ始め、兵隊という機動力を所有しているため、各国の遠征隊に協力し、スポーツとしての成功を助けるばかりでなく、他国との親善関係に大なる貢献をなしているようであつた。

アコンカグアだけを問題にしてみても、軍隊に關係のない人々も勿論少くないのであつて、ここの人々は、一般に民間人の助力をうけるか、或は、プエンテ・デル・インカの観光ホテルに頼るのである。こゝには登山用のムーラも数十頭用意してあり、パستنという有名な老人のガイドがいて、客の案内をしている。然し、こういう連中で、アコンカグアの頂上に立つ人は殆んどないらしい。多くは、ブラサ・デ・ムーラスのベースキャンプまでである。

ガイド。アルゼンチンではギヤーと呼ぶ。こういう職が、成立しているのかどうか、はつきりわからなかつた。私共の遠征隊には明かにギヤーとして、スキー・山岳協会より二名、軍より一名が派遣され、同伴した。三名の中、二名は金コンドル章の受賞者であつた。三名とも、メンドサに於て、立派に職をもっている人々であつて、ギヤーを職としているとは考えられない。登山に當つては、恐らく一日に数百ペソの報酬をうけるものであろう。

#### 八、中部アンデスの景観

ヒマラヤと比較した場合、火山を含む点も勿論異なるが、長さにして、中の狭いこと、ヒマラヤが概して、東西に延びた山脈であるが、アンデスは南北に連る点、こんな点が大きな差異であらう。中は狭いが、それでも、数本の褶曲山脈が重つている。

中部アンデスは、温帯に属するが、この景観をなす第一の条件は、水の少いことによるものではあるまいか。私はそう感じた。荒涼という形容が相応しい風景である。然しながらこの附近でも細かく観察すると、若干は明瞭な差異がみられる。

この附近の風は太平洋から吹く西風である。だから雪は全体に少いとは云つても、アルゼンチンの山々よりは、チリーの山の方が雪は遙かに多い。当然浸食作用も盛んに行われるのであろうか、チリーの山々の方が、鋭い山容を示し、アルゼンチンの特に、主脈より東側に並ぶ山々の如きは、雄大ではあるが実になだらかな女性的な姿である。そ

れも雪を被らず、赤茶けた膚であるから、甚だ殺風景に見える。

水が少いために、植物は至つて少い。メンドサ河に沿う、ラス・バイス（二六〇〇米）にも、柳とポブラを見ることは出来るが、それから先は灌木で、三五〇〇米で植物は無くなる。

アコンカゲアにしても、雪は思いの外少かつた。オルコネスの溪谷も、水は少く、ムーラで徒渉出来る。広い谷であるから、一見砂漠の感がある。この附近で一番大きい氷河と云われるオルコネス氷河は、クエルノの肩約五三〇〇米から、ブラサ・デ・ムーラスのすぐ下四二〇〇米までかゝつていて、雪線は四二〇〇米である。

アコンカゲアをオルコネスの入口から見ると、その南面が見えるわけであつて、一面氷に輝いているが、ブラサ・デ・ムーラスからみた、その西側は、殆んど雪もない。風上で雪はふき飛ばされ、東面に積ると云われる。事実、東面は一面氷の壁である。アコンカゲアのルートは、ブラサ・デ・ムーラスから、一旦北方に迂廻して、西側のクールアールを登るのであつて、途中、幾ヶ所か、氷を渡るが僅かな氷であつて、ピツケル・クランボンが無くても頂上に達し得る。

岩の質は、概して崩れ易い水成岩で、赤茶けた感じがする。

## 九、ムーラ（ら馬）

ムーラの利用も確かにアンデス登山の特徴である。こゝのムーラは、ムーラ・アルヘンティーナと云つている。牡馬と雌ロバとから出来る、一代雑種である。大きさは馬より小さいが、日本でみる荷車引の馬位の大きさである。

高度に非常に強い。山岳部隊の連中が乗ると、アコンカゲアに於ても、クールアールのすぐ下、恐らく、六七〇〇米位までは、ムーラを利用出来る。但し、雪乃至氷に対しては絶対に弱い。だから、極く小さな氷河を越すにも、ムーラをつれていると、その足場を刻むのに大変な労力を費さねばならない。軍隊は別であるが、ホテルなどからムー

ラを借りる場合、低地用が一日六十ペソ、プラサ・デ・ムーラスから上方に行く場合は一日、二百ペソという相場だと聞かされた。餌を含んだ料金である。

#### 十、プエンテ・デル・インカ附近

メンドサを起点として、アンデスを越し、チリーに通じる鉄道を、サン・マルティン鉄道と云う。アルゼンチンの鉄道は、有名な將軍の名が冠してあるが、このアンデス越えの鉄道には、一八一七年、やはりメンドサから、多数の兵を率いて、メンドサ河を溯り、ウスパジャータ峠を越し、チリーに攻め入り、チリーを解放した、ホセ・サンマルティン將軍の名に因んでいる。

国境から二ツ目の駅がプエンテ・デル・インカである。「インカの橋」というこの名は、ラス・クエバス川にこの名をもつ天然橋がかゝつてることによつて付けられた名である。「インカの橋」というのは炭酸塩などを主体とした天然橋であつて、私も「古代の橋」というような意味でつけられたものと考えていたが、インカ帝国がこの橋を渡つて攻めて来たことがあると云う、こういう史実に基いてこの名が出たと云うことであつた。

次の国境の駅は、ラス・クエバスと呼ばれたが、現在エヴァ・ペロンと亡くなつた大統領夫人の名に改められた。見窄らしい駅であつたが、国境の街が汚いのは国の恥という、夫人の一声で、面目を一新し、名前まで改められたといわれる。国境であるから、移民局、税関、警察、憲兵隊、観光ホテル、郵便局といった公共の建物があるが、一つの設計のもとに統一されている。標高は三〇五〇米、すぐ鉄道は国境のトンネルに入り、自動車道路は、三八〇〇米のウスパジャータ峠に通じる。峠には兩國の測候所があり、一九〇四年に建立されたキリスト救済像があつて有名である。インカはその次の駅であり、駅に標高二七二〇米とある。天然橋も有名だが、橋のたもとに温泉が出る。こんな点からか国営の観光ホテルがある。温泉とは云つても、日本の温泉とは大部趣が異なる。ルーマティズムや、皮膚病

に効能があると宣伝している。

冬はスキーも楽しめるそうだが、夏は、アコンカグアの登山口である。山岳部隊の宿舎がある。兩岸は、四五〇〇米程度の山が連つていて、一寸、細長い盆地のような景観がある。ところどころに放牧の牛なんかいて、甚だ牧歌的な雰囲気がただよっている。オルコネスの入口までは約三料。インカからはアコンカグアは見えない。鉄道は狭軌のアプト式である。貨車は毎日往復している。チリに輸出される牛が、おとなしく、小さな貨車に、牛ずめの姿を毎日見た。客車は週に二回通るだけで、急ぎの客はメンドサ・サンチャゴ間の飛行機を利用するわけだ。国境見物のバスは毎日幾台も、メンドサから通っている。

### 十一、ベースキャンプ附近

プエンテ・デル・インカからオルコネス溪谷を溯ること、約三十五料、氷河のモレーンによつて出来た台地である。量は少いが、いい水が出るのが、ベースキャンプ地としての条件を備えていることになる。プラサ・デ・ムーラス。ムーラの広場という意味である。標高は四二五〇米。東側は三千米近いアコンカグアの西壁である。赤茶けた、縞が横に走る岩壁には、殆んど雪らしいものは見当らぬ程である。北方は、氷河をまとつたクエルノ。名の示す通り、マッターホーンに似ている。この肩からオルコネス氷河は流れている。西側は、カトデラル。だから、プラサ・デ・ムーラとは谷底である。唯南側が、オルコネスの溪となつて続いているだけだ。九時をすぎないと陽が射してこない。

日中は、相当暖かいが、夜になると、気温も下り、流れは凍つてしまう。真夏でも雨は降らず、降れば雪である。一月十三日より二月三日までに三度雪が降つた。その量は極めて少く、僅か数センチに過ぎない。最低気温は零下十二度であつた。風は西である。

一月十三日、初めてこの地に着いた時、三十張近くの天幕があつて、私共を驚かした。その後も、入れ代り立ち代り入つて来た。その間にベースキャンプに來た外国遠征隊は、日本の他に、ブラジル、チリーがあつた。

## 十二、アルゼンチン登山界の登山観

私共の計画は先に述べた。アルゼンチン側の絶大なる後援の有様も既に触れておいた。それでは、彼の地の人々は山をどう考へているか。これも私共に接した人々から得られたところだけであるから、勿論全般に亘つていゝとは考へられないが、二、三の実例から考察してみよう。

この若い国では、登山は明確にスポーツである。宗教的登山などというものが、先行するわけでもなく、人間界からの逃避などという道家めいた思想も彼等には求むべくもない。やはり西洋人である。大統領がアコンカグアに小屋の建設を命じたのも、スポーツ施設としてであつた。

私共も勿論スポーツを目的としてアコンカグアに向つたのであつた。同じ、スポーツである筈なのに、考へ方に若干の相異があつて、興味深かつた。

アコンカグアは、一つの段階であるとするか、これを完全な目的と考へるかの相違とも云えるかも知れない。唯頂上を登ればよいというのと、出来るだけ、次の計画に添うように登るかとは、登り方に大きな差が出るのは当然であらう。

四二〇〇米に於ける馴化が一応終れば、次の六千米以上の馴化を行いたい希望は、当初より強かつたわけである。これに対して、アルゼンチン側は、ウガルテ少佐始め、殆んどすべての人が反対した。

そういう計画は無茶だと云つた。理由をただすと、六五〇〇米以上には、二泊することが第一無理だという。蛋白質が喉を通らない。それに睡眠もとれない。これでは衰弱する一方だ。こういう論法である。唯アコンカグアに登る

ということであつたなら、プレシデント・ペロンか、エヴァ・ペロンに一拍すれば、それで十分なのであるから、アルゼンチン側の人々の主張も、全然否定されることもないのだが、それだけでは、十分な馴化は行われぬし、一寸した天候の加減でも、登頂の機会を亡うことになりはしないか。

高度が問題になるわけだし、その上、天候の激変がこの山の特徴であり、登頂を阻む原因だとするなら、甚だ、つじつまの合わない論法である。私なんかは特にそう感じた。

ウガルテ少佐が示した計画の実例を述べると、ベースキャンプで、アサード（炙り肉）とビー（ブドー酒）で、みっちりエネルギーを蓄える。そうして、天候をみきわめ、エヴァ・ペロンか、その上の、プレシデント・ペロンまで進む。そこで一拍し、翌日登頂して、ベースキャンプに引返す。天候が悪く途中で引返すようなことがあつたら、再びベースキャンプで肉とブドー酒で、体力の回復を待つべきだ。甚だ楽天的な計画である。過去のアコンカグアはすべて、こういう計画であつたわけなのだ。

主峰と共に、南峰を登るような計画は土台無理である。私共は南峰も一緒に登りたい旨主張した。初めは無謀をせめた風に見えたが、次には、彼等は明かにあわて出した。

アルゼンチン側してみれば、ある程度、私共に対し、ブレイキをかけ、出来るだけ、事の起らないように構えるのが、当然のようにも思われた。特に大統領から、直接命令をうけたウガルテ少佐がその重い責任を果すためには、なるべくおだやかに、済めたかつたことであろう。あまり勝手なことを云えない立場であることを、私共も認めないわけにはいかなかつた。

行動にうつつてからも、彼等の示した配慮は、私共をまごつかせるというより、むしろ掣肘しているようにさえ見えた。ベースキャンプ以上で、一日キャンプすると、次の日は、ムーラを引きつれて、迎えに来るといつた始末であつた。これを納得させるのに、大変な時間と、労力が必要だつた。

軍人は、自らの責任上からか、仲々頑固で、こちらの主張をすぐのみ込むという具合にはいかなかった。然し、同行した、通訳やカメラマンの若い学生達は、私共の主張をよく理解して呉れた。むしろ直接話が出来たということも、一つの理由であつたかも知れない。

軍隊と民間人との間にも、若干の考え方の相異もあつた。面白いと思つたことを、こゝに記しておく。

メンドサに於て、ヒル会長（メンドサ支部長）と会談している時、ムーラの話が出た。ムーラを使用するのは、大変便利であるが、なるべく、使わずに済むところは使わずにすみたい。と希望を述べた。会長は私の言葉を非常に喜んだ。

その晩、私共のホテルで、ヒル会長とウガルテ少佐が、夜半過ぎまで、ムーラについて議論をしたというのである。

ウガルテ少佐は、使えるだけムーラを使うのが、得策ではないか。それが亦、登山を成功させる近道でもあると力説する。一方のヒル会長は、スポーツであるから、ムーラの使用は最小限度にとどめるべきだ。こういう主張なのである。要するにこれだけのことなのだが、数時間に及んで、何れも譲らず、明日またといつて別れた。こういうところがアルゼンチン気質というものである。

私は、翌日この話をきき、何となく、明るい気分になれた。

いろいろと意見のくい違いがあつたが、こちらの主張も出来るだけは通した。そうして無事、一月二十六日に全員主峰を登り、二十八日には、碓井、浅山、日下田、塚本の四名は南峰をも登つた。この成功を、彼等は極めて率直に賞めてくれた。

今後のアルゼンチンの登山方法を変えるであろうという説が流布されたのであるから、相当の影響を与えたことだけは事実であらう。

## 十三、アコンカグアのもつ困難さ

日本の山で練磨をつんだ人々にとつて、若し、アコンカグアがもつ特別の困難さがあるとしたら、それは一たい何であらうか。

天気のと云われ、天候の激変が何より恐ろしい。それに寒気である。アルゼンチンに着いてからも、幾度となく聞かされた言葉であつた。今か今かと待つたが、期待した天候は、遂に現れなかつた。雪も降つたが、一週間に一度の割合で、それも数センチより積らぬ。その度に、山岳部隊の将兵どもは、大げさに驚愕したが、若しそれが、彼等の本心であつたとしたら、実に甘いものである。日本の冬山を、一度でも体験していれば、決して驚くようなことはない。

寒気も、大して驚くには当たらない。零下三十度位は覚悟していたが、第一キャンプの零下十八度が最低であつた。寒気は大體、日本アルプスの冬を考えてみればよからう。

風も、毎秒七〇米の風が吹くという話であつたが、そうは感じなかつた。時速二〇〇キロなどと云つても、気圧が平地の半分以下であるから、感じ方は大分異なる。

やはり一番参つたのは、高度による気圧の低下と、酸素量の不足とであらう。四千米辺りに、大きな段階のあることは、いろいろな文献からでも、十分に察しのつくところであつた。二七〇〇米のプエンテ・デル・インカから、ムーラの背で、一挙に四二五〇米のプラサ・デ・ムーラスに到着してみても、この影響のあまりに大きいのに一驚した。頭痛、食慾不振、睡眠不足、はき氣、倦怠、こんな現象が見られた。この附近の馴化は顯著であつて、帰路には、平地と、すべての点に於て変らなかつた。

馴化の速度は、個人差が大きい。一番遅かつたのは碓井、今村であつたが、最後には、七〇〇〇米の馴化も完全に

出来た。この点に関しては、酸素の他に、気圧の影響もあるように思える。

外界の問題でなく、アコンカグアそのもののもつ困難さという点と最後の二〇〇米の登りであろう。アコンカグアは最後の二〇〇米で撃退されるとも云われている。こゝを彼等は「カナレター」と呼ぶ。クールアールと同義語らしい。こゝがもし氷か雪であつたら、アコンカグアは大変楽な登山が出来るであろう。約四十度の傾斜であるが、すべて浮石である。巾の広いガレである。僅かの刺戟にも、大きな岩が崩れ出す。イザという時に、とび移れる余裕がないと大変危険である。若しこゝで落石のため、怪我でもすると、そのまま生命を亡うことになるのではないだろうか。

日本の山とは、直接に比較出来ないけれども、日本アルプスの冬山を、十分体験している人にとつては、アコンカグアは別に恐ろしい山ではないだろう。

#### 十四、アコンカグアの頂上

頂上に達したのは、一九五二年一月二十六日午後一時半であつた。アルゼンチンはブラジルの時間を使用し、ブエノスアイレスに於て、一時間早いわけであるが、ブエノスアイレスと、アコンカグアでは更に四十分の時差があるので、結局、太陽に対しては正午少し前という時間であつた。

天幕（六五〇〇米の第二キャンプ）を出発したのが七時半であるから、六時間を要している。その頃は、相当の西風が吹いていたが、頂上に達する頃には、無風状態であつた。気温も零下六度。手袋を外しても大して寒くない状態であつた。

頂上も、浮石で出来ている。東西に長く、南北に狭い。リンク夫妻を吊う十字架がある。頂上には、ブリキ缶の中に、サイン帳が入っている。アルゼンチンの風習であるといつてよい。他の山頂にもあつた。横文字と日本語とを書

き付けて来た。こゝにもう一つ面白い風習がある。

自分の大切な品物を頂上に置いて来るのだというのである。愛児の写真であるとか、奥さんの大切にしているものだとか。私も、日本人の奥さんとピサ・オリンピカの使用人からは非頂上に置いて来てくれという品物を頼まれた。前に登つた人のものがサイン帳と一緒に、ブリキ缶に入っている。これを次の登山者がもつて下るのだそうである。そうすると、その人に幸福が来るというのだそうだ。

私の頼まれた品は、胸にかけていた十字架であつた。もつて降つたのは、奥さんと愛児の写真と、いくつかの手紙とであつた。

同行した、ブラジル隊が遅れたので、頂上に一時間半いた。不思議に感慨が湧いて来なかつた。これから更に千米高かつたらどうだろうかと言ひ合つたが、もう大して変りはなさそうだという位で、感じ方は鈍つていたのである。北のメルセダリオ、南のトブンガト下のプラサ・デ・ムーラス、すぐ近くの南峰。クエルノ北方の氷の海がギラギラ光る。

頂上に立つたのは、隊員六名の外、ギャー(ガイド)として派遣されて来たモントルネス、ミカン、アルメシガの三名、カメラマンのカルク、遅れてブラジルの二名も達し、十二名が頂上に集る記録を作つた。頂上の岩石は明らかに火山岩である。

## 十五、装 備、食 料

こゝ数年の高分子化学、金属材料などの進歩は著しいものがあるから、平素の生活をみても、全ゆる面で、こういう材料が食い込んで来ているのが目立つ。これを登山に応用することは、真に結構なことである。残念なことに、日本人は、新しいものを考え出すという段になると、未だ西洋人に遠く及ばない。生れつき貧乏性であつて、何

でもすぐ有難がるからである。とうとう最後まで、これは、とうとう目新しいものは何一つ出来なかつた。馴れていることが大切だという考え方も、私どもの山岳部では、一つの確信となつてゐる。食物もそうである。

装備も食料も、食料は主として、アルゼンチン側の提供であつたが、共に失敗と思われるものは無かつた。唯一つ、ガソリン焔炉とその使用法であつた。六〇〇〇米の第一キャンプで、風のため、天幕外で使用出来ず、天幕内で使用したため、酸素不足による、不完全燃焼のガス中毒にやられた。天幕内は絶対に無理であるから、焔炉用の小さい風除けを造るべきである。

もう一つ特に言うなら、私共の天幕は総て雪を対象とされていることである。雪のない山で、天幕を固定する方法が考慮されてなかつた。岩を集めるのも困難であるから、どうしても天幕の底がはたかれる。

雪の少ない山で、降る量は少かつた。だから雪とか、湿度に対して、日本の冬山のつもりで対策をしたのだったが、すべて、無駄という結果となり、若干の新しい試みも、その成否を決しかねるといつた有様であつた。反対に云うなら、唯アコンカグアを登るといふことだけであつたら、特殊な装備は必要ないといふことである。

## 十六、登頂後のこと

主峰に登つた翌日、即ち一月二十七日、私は一人下山し、ベースキャンプに待期していた、同行の学生に依頼し、ブエンテ・デル・インカより、ブエノスアイレス並びに、故国日本に成功の電報を打たせた。

そうすると、二十九日には、ペロン大統領から、祝電がベースキャンプに届くのであつた。兵隊がムーラを駆つて、一枚の電報をとどける。丁度、全隊員ベースキャンプに下山したところであつた。当初の計画では、南に転じて、トブンガーを登る計画であつたが、ウガルテ少佐のすゝめに従つて、アコンカグア一周の旅に出た。隊員六名の外は、少佐、下士官二名、兵二名の計十一名。彼等は一人も英語を解せず、従つて、こちらがカステジャーノを喋

り、理解するより、理解の途がないという、一見、無謀に近く、又、甚だ楽しい旅でもあつた。

エヴァ・ペロンの上方から、アコンカグアの東側に廻り、レリンチョー溪谷を、真東にラスクエバス溪谷に出るのである。アコンカグアの東面は、一面の氷で、西側とはまったく対蹠的であるが、谷そのものは、やはり、荒涼としている。植物は、オルコネスと同じく、三五〇〇米から姿を見せ、ワナコ（リヤーマ）が、群をなして棲息する。

三泊四日の旅を楽しく済し、二月七日、インカの宿舎に帰つた。

メンドサに下つてからは、連日の歓迎で、山に在る間よりも、むしろ疲れる位であつた。メンドサを発つ前日は、メンドサ・スキー山岳協会の送別祝賀会が、会のルームと、スポーツクラブで行われ、隊員並びに、参加者一同にメダルが授与された。

メンドサの東南約三〇〇キロの地点、リアル・デル・パードレには、移民の先駆者、星清蔵氏の果樹園始め、幾十家族の日本人が、専ら、果物造りをしている。星邸に四晩お世話になり、漸く寛いだ気分になれた。丁度カルナバルの祭りであつて、夜遅くまで、踊り狂い、男女互いに水をかけ合うすまじさも、旅の心を慰めた。

十九日、早朝、ブエノスアイレスに帰つた。日本大使館、日本人会ばかりでなく、外務省、国防省、陸軍省、文部省等に大臣を訪問、礼を述べた。この間、二十二日より、二十七日まで、大統領の客として、ブエノスの南、約四三〇軒のところに、エヴァ・ペロン救済基金によつて、新設された、チャパマラールの、避暑観光ホテルに招待され、宮本好氏が同伴して赴いた。

約二軒の芝生に、現在、官吏用、労働者用、学生用といつた具合に、別々に九つのホテルが海に面して点在している、極めて快適な避暑地である。骨休めという心づかいからであつたのであろうが、こゝでも、休養どころではなかつた。このホテルは、十二月から三月一杯、四ヶ月開くホテルであつて、一番立派な部屋で、食事付、邦貨で約六百円というから、如何に、社会保障制度がととのつてゐるか、想像出来るであらう。学生のホテルは全部無料とのこ

とであつた。

ホテルに於ても、亦海岸の砂の上に於ても、七十歳を越す老人から、漸く言葉を喋る子供に至るまで、さまざまの人々と交り、言葉を交す機会に恵れたことは、登山の成功にもまして有難いことであつた。この国の日本びいきはむしろ異状である。

最後に、アルゼンチン共和国が、私共のアコンカグア遠征に示した好意、数々あつたが、その最たるものは、大統領自ら示されたものであろう。ブエノスアイレスを発つて帰国につく三日前、即ち三月四日。大統領臨席の下に、アルゼンチン体育連盟本部に於て、私共に対する表彰式とでも云うべき式が行われた。その折、早稲田大学に対し、最高の名譽の象徴と云われる「サンマルティン刀のレプリカ」が贈られ、隊員には、金メダルが贈られたのであつたが、その式に於けるペロン大統領の挨拶の一節を記してみる。

……どうか、アルゼンチン並びにアルゼンチン国民は、日本に対して常に変わることのない友情と、尊敬とを抱くものであることを日本国民に伝えて下さい。また日本のスポーツマン諸君に、時折アルゼンチンを訪問するように伝えて頂きたい。我々は彼等を、最も歓迎すべき友人として迎えるであらう。

登山の成功は、もとより第一の目的であつたが、帰国も近づけば、すべてが、あまりにうまくいきすぎたという感じばかりであつた。一日も他国にあるとは感じられなかつた。もつと時間があれば、もつと各方面からこの国を見、更に多くの人々と交つて話をしたかつた。遠い国の人々の親切を身に泌みて感じ、早い別れを惜みながら、さんとす丸の客となつた。両親に手を引かれて見送りに来た、まだ学校にも行かぬ幼児が手を振っている。海岸で一緒に写真を撮つた人たちだつた。アコンカグアは随分不思議な力のある山である。

附記

早稲田大学アコンカグア遠征に対し、アルゼンチン共和国ペロン大統領閣下、並びに体育連盟、スキー・山岳協会の絶大な御後援に対し、厚く感謝の意を表すると共に、我が朝日新聞社、日本アルゼンチン協会、大阪商船株式会社の御協力に対しても、心から御礼申し上げます。

一九五四年度役員

会長	榎 有 恒	副会長	日高信六郎 松方 三 郎
理事	成瀬岩雄 渡辺公平 交野武一 小原勝郎 沼倉寛二郎		金坂一郎 初見一雄 外山義夫 吉阪隆正 折井健一
評議員	今村正二 干谷壮之助 舟橋明賢		沼井鉄太郎 岩永信雄 別宮貞俊 神谷 恭 三田幸夫
	辻 莊 一 早川種三 西堀栄三郎 島 田 巽 堀田彌一		竹節作太 村井米子 入沢文明 藤木九三 津田周二
	伊藤秀五郎 今西錦司 山崎春雄		藤島源太郎(越後) 伊藤彌十郎(福島) 中田勇吉(富山)
支部長 在職者	池田知幸(石川) 高山忠四郎(信濃) 三井松男(山梨)		織 田 収(山陰) 後藤幹次(山形) 大室貞一郎(静岡)
監 事	篠田軍治(関西)		石原憲治 加藤泰安

# 北海道の山小屋

伊藤 秀五郎

## 内 容

- 一、スキーヒュッテの誕生
- 二、山小屋建設の歴史的背景
- 三、北海道の山小屋の特色
- 四、山小屋を囲む風景
- 五、山小屋からのスキー登山
- 六、造材小屋と駅通

### 一、スキーヒュッテの誕生

#### パラダイスヒュッテ

近年はわが国の山小屋の作り方も、スウイスの山小屋の様式を採り入れたものが多くなつたが、わが国でスウイス式の登山小屋ないしはスキーヒュッテが最初に建てられたのは北海道であつた。大正十五年十一月に北大スキー部創立十五週年記念事業の一つとして建設された手稲山腹のパラダイスヒュッテが、わが国におけるヒュッテの草分である。何々ヒュッテの名をもつ山小屋も今では全国に数十あるようだが、山小屋の名前にヒュッテを冠したのもパラダイスヒュッテが最初であつた。山小屋という立派な言葉があるのに何ももつたいぶつてヒュッテという外国名前をつけるにも及ぶまいという人と、在来の石小屋やじじむさい板張りのウス暗い小屋と区別するために、ヒュッテとでもいわぬと気分が出ないという説に分かれたが、名前の適否はともかくとして、これはまさしく正真正銘のヒュッテ

であつた。当時北大スキー部員の間では、スウイス式の山小屋を一つ持ちたいというのが多年の宿望であつたから、これが達成された時のスキー部員の喜びが非常に大きかつたことはいふまでもないが、この山小屋の誕生は、また当時のわが国のスキー家や登山仲間にも相当大きな刺激となつたことも疑えない。

昭和三、四年以来全国各地にこのパラダイスヒュッテに範をとつた山小屋が急が増えたのも、スキー熱、登山熱が全国的に急速に上昇していったその頃の機運に促されたからではあるが、また一面たしかにこのヒュッテ第一号と、それにつづくこの近傍の第二、第三のヒュッテ建設が大きく影響したことも事実であらう。このパラダイスヒュッテの設計者は、当時札幌に住んでいたスウイスの建築家で日本でも上智大学をはじめ多くの大建築を作つたマックス・ヒンデル氏であつた。様式は三間に五間の二階建三十坪のブロック式、二階は三十のベットをもつ寝室、階下を食堂兼広間、炊事場、スキー置場等に当てた純スウイス風のもので、場所も手稲山腹標高五〇〇mの白樺の疎林の一角にある。三十年前のその頃は、まだ軽川駅から小屋までスキーが行列するというような時代ではなかつたから、一日二日のスキーを楽しむにはもつてこいの場所であつたし、ヒュッテとドイツ語で呼ぶのがびつたりするような姿と環境をもつていた。

パラダイスという名は、その頃スキー部員の間でこの辺のス

ロープをパラダイスと呼んでいたのをとることになつたのである。建設にも夏休みにスキー部員が山麓から用材をかつきげたり、地ならしを手伝つたり、苦心も一通りではなかつた代り、完成した時の喜びもまた大きかつたわけであらう。

#### ヘルヴェチアヒュッテ

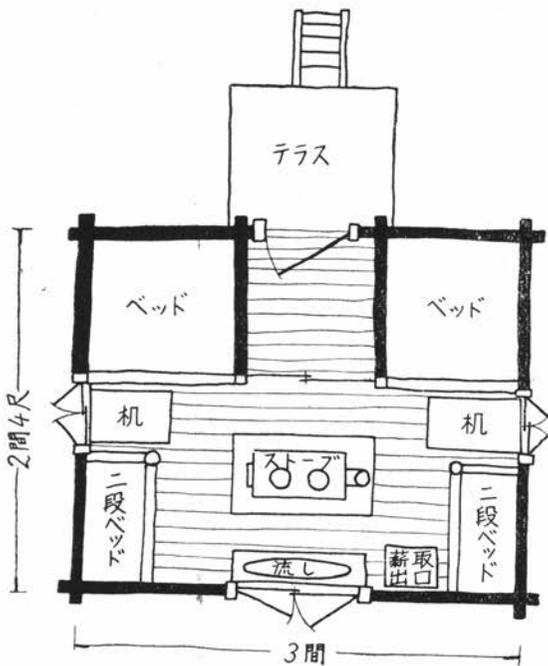
パラダイスヒュッテに続いて、翌昭和二年の八月には、またヒンデル氏設計の純スウイス式のスキーヒュッテが、こんどはもう少し奥深い定山溪と銭函の中間、小樽内川沿いの白樺林を選んで建設された。これは当時北大でドイツ語を教えていたスウイスの登山家であるケブラー博士と、ヒンデル氏と、北大の山崎春雄教授の三人が共同建設者で、三氏が日本の山を愛する若い人達のために、スウイスのクラブヒュッテの形と精神とを伝えるために建ててくれたものである。北大のスキー部は最初山岳スキーから出発したが、大正八、九年頃から競技をやることになり、私たち山の連中は大正十五年十一月に新たに山岳部を創立した。このヘルヴェチアヒュッテは数年後北大山岳部に寄贈され、そのクラブヒュッテとなつて現在に及んでいる。山崎さんが精しくその建設の経緯を書いた「ヘルヴェチアヒュッテの建設」(山とスキー、第七年、八十三号、昭和三年一月号)という報告の中で「ヘルヴェチアヒュッテはヒンデル君の心血を注いだ建築のうちで、恐らく同君が第一に指を屈するもので



はないかと思う」と述べているとおり、これは七坪半の、宿泊人員十二名という小さなヒュッテではあるが、スイスの山小屋の姿をそのまま移植しながらしかもその附近の白樺林の風景とじつによく調和した傑作である。たしかに建設主たちの意図は現在までにすでに十分果されたと思う。

ヒュッテの位置は陸地測量部の五万分一の間幅「鏡函」のほとんど中心、股下山の北を流れる沢の北岸にある。七八七・九mの三角点から東南に派出する尾根の六〇〇米と五六〇米の間にある小さな瘤がちょうどヒュッテの北に当たっている。札幌附近の山地では稀しい白樺の純林で、清潔で気品のある美しさはこの辺ではちよつと他に見出し難いほどである。しかしグブラー氏が最初に選んだ小屋の位置は、この地点からさらに一キロほど上流の美事な針葉樹が散在し、見る限り美しいスロープに取りかこまれ、しかもこの地方の山の王座である余市岳、臼井岳に接近しているところで、ヒュッテの位置としては最適だった。用材も六、七寸のトドマツ丸太を使う計画であつたが、惜しいことにこの附近で百数十本の若木を揃えることは、御料林の施業方針から無理であることが分つた。そこでヒンデル氏の提案で、用材は白樺とし、位置も現在のところが選定されたのである。白樺の用材として胸高の直径七、八寸のもの百四十本、材積にして百三十石と、屋根の桁材として一尺五寸径のトドマツ二本が使われた。小屋の大きさは三間に二間四尺、床は

地上約四尺の高さとし床下を薪置場に当てたのは、もちろん冬季の積雪を考慮してのことである。用材はすべて白樺であるが、床の一部にヤナギ、机にタモ、その他扉、流し等はトドマツの余りを使つてある。壁材は丸太を井桁に組み、上下面を落して五寸の厚さに揃え、壁の隙には苔をつめた。屋根は全部二重葺きで、下層は三尺桁、表は短い桁を使つて、二層間は相当の隙間をおいてある。



Helvetia Hütte

何しろ小さい小屋であるからどこにも無駄なところはない。入口は上下二枚になつた頑丈な扉で、この内側一坪がスキー・杖・靴などの置場、さらに二枚の引戸で室内と分けられている。室内は中央に長形の大型ストーブ（これはあまり燃えがよくない）、四隅が上下二段のベッドになつていて十二人の宿が出来る。室内の空間は広くないが、整頓すれば不便はない。正面に流し、右手に本や救急品や予備食料を入れる戸棚があり、左は床下への降り口となつている。正面に大きな窓、左右に小さな窓、その前に作りつけの机と腰掛がある。二隊以上が泊り合せた時は、譲り合つてよほど順序よく運ばないと、混雑して快適な小屋の気分が乱される。建設当初は柱にヒンデル氏自作のカツセー（金庫）があつて、使用者は料金を各自これに入れてくることになつてしたが、ある時この金庫が壊わされて中身が空になつていたことがある。あいた口が塞がらないというのはこのことである。最初は寝具として軍隊毛布を備えてあつたが、これもある時盗難にかつた。これは山登りやスキーのためにこの小屋を使用した者の仕事ではなかつたようだが、不愉快な出来事だつた。山の世界だけを清浄純潔にする手はない。山男の作法とか

山の法規とかそんな特別なものはないからだ。スイスの山小屋の清潔さ美しさも、つまるところスイス人の日常生活の延長に過ぎないのだ。だから日本の山小屋を快適なものに保つための名案など、今のところ誰も持ち合せてはいないだろう。しかし「アルプスと人」一本を備えて、ヒュッテというものはどんなふうに取り扱うべきものかを知らせることは無駄ではあるまい。

### 空沼小屋

ヘルヴェチアヒュッテは、開設第一年目の冬に内地から賓客を迎えることになった。その前年第一回の洋行から帰朝された秩父宮が、昭和三年の二月に二週間の御日程で北海道各地を視察され、その間約一週間をスキー登山にあてられることになり、日程の前半に札幌附近の山山、後半に青山温泉を中心とするニセコアンヌプリ連山を選ばれ、その間パラダイス、ヘルヴェチア両ヒュッテに各一泊されることになったからである。このスキー登山の御案内役を北大のスキー部と山岳部がさせて頂くことになり、殿下の一行は、渡辺八郎御用掛、スキー部長大野精七博士、渡辺さんと学習院時代の学友で当時北大に在職した故新庄魏教授、スキー部先輩の木原均博士、まだ学生で現役の部員だった小川玄一（現在北大教授スキー部長）、小栗元二、小森五作の三君と私、それにやはりスキー部の先輩でとくにこ

の辺の山に精しい松川五郎君が仙台からはるばる馳せ参ずるという賑やかな顔触れであった。ところが皇弟殿下はじめての北海道行啓というのですつかり固くなつた北海道庁当局は、事もあろうに責任上宮様の一行の前後に四、五十名の警察官スキー警備隊をつけるという名案を考え出した。客本位に考えずに万事自己の責任問題から割り出す利己主義が、ここでも一寸馬脚を露したわけだろう。熊取りの名人のアイヌでもお伴させるというのなら話は分るが、セーバー（サーベル）を下げたスキーの下手な警官では、事があつたら逆にこつちがセーバー（救助者）の役を務めることになるのだから、これは何としても御免を蒙るより手がなかつた。そこで山崎教授が幹旋役で道庁当局と交渉した結果、警備隊の警官の代りに当時大学院の学生であつた後藤一雄博士と大学の助手であつた故中野誠一君を隊長として、隊員には北大のスキー部山岳部のエキスパートを充てることになり、本隊の邪魔にならないようにその後方に四十五名のスキーヤーが見え隠れにお伴して、警官や一般スキーヤーから本隊を護衛するというものしい光景となつた。お蔭で私たちは、いつも人影のない新しい雪を滑り歩き、宮様も北海道の雪と山を十分にお楽しみになれたことと思う。私たちがヘルヴェチアに泊つた夜は、警備隊の一行は近くの造材小屋を使用し、パラダイスの時は軽川の旅館光風館を根城にした。ヘルヴ

エチアでは本隊だけで満員で、本隊の人員もそのためにはじめから制限されることになったわけだが、パラダイスの時も青山温泉などの時のような伺候者などという者はなく、本隊以外は宿泊も出入も許されなかつたので宮様もすつかりくつろがれて四方山話に花が咲いた。その時大野さんが、定山溪を中心としていくつかのスキーヒュッテを連絡するケッテンを作つて、二、三日ないし一週間位のスキーツーアが楽しめるようにしたいという計画を申上げたところ、殿下も至極御同感で、殿下御自身その何れか一つを建設したいという御希望を洩らされたのである。これが同年十二月に俗に宮様ヒュッテと呼ばれる空沼小屋建設の動機となつた。殿下の御依頼によつて、大野さんと山崎さんが中心となつて候補地に空沼岳の中腹万計沼附近を選び、設計は三度びヒンデル氏を頼むことになつた。そして九月二十八日に工事に着手し十二月十日に落成をみた。四間と、四間、三十二坪の二階建丸木小屋で、ヘルヴェチアヒュッテを一周り大きくしたといつたものだが、経費も十分かけ、用材その他の手配も順調に運び、設計もまたきわめて入念で精巧なこととは前二者を比べるとのびのびがある。

階下広間の構造はヘルヴェチアヒュッテと同巧で、中央にストープ、四隅にベット、その間に窓に向つて三方に食卓が据付になつてゐる。これに調理場、物置場、スキー置場、便所がそれぞれ一室をなしている。階上へは直立の梯子を用い、階上は

左右両側に七個ずつのベットを置き、中央に階下と通ずる広い穴をあけて暖気が上昇するように考案されている。このようにして北海道に建設された最初の三つのスキーヒュッテがいずれもマックス・ヒンデル氏の設計であることも奇しき因縁である。

## 二、山小屋建設の歴史的背景

スウィス式のヒュッテは北海道が先鞭をつけたが、一般の山小屋の歴史からみると北海道は若い。北海道に登山のための山小屋が最初に建設されたのは大正十年の羊蹄山九合目の石室（大正十五年改築）で、それにつづいて大正十三年に大雪山の黒岳と旭岳の石室ができた。いずれも北海道山岳会所属のものであつたが、冬季使用のことを考慮に入れず建てられたので、積雪などの関係で冬季の利用価値は少い。その次がパラダイスヒュッテ以下上述の三ヒュッテである。それ以来各地に続々と山小屋ができて、現在では北海道全体で七十ほどになつたが、大体冬季のスキー登山のための利用を目的として建てられたものか、本来は山林監視小屋、造材小屋であつて同時にスキー登山に利用されているものが多い。

横道にそれる感があるが、ここで一寸本州の登山小屋の歴史をさぐつてみよう。日本で最古の登山小屋はなんといつても富士山や月山の石室であろう。創設の年代は明かでないが、これらの山が大昔から僧侶や行者や講中の信仰の対象であり修練の

道場であつた。だから、すくなくとも数百年來あの山山の石室がそれらの登山者に使われてきたことは事実であらう。立山の室堂も二百年前の建設であるという。次に古いのが木曾御嶽六合目中小屋で、一八五〇年（嘉永三年）頃の創設とあるからちようど百年、黒口頂上小屋は一八八七年（明治二十年）の設立で六十余年を経過している。明治二十年代には小屋らしい小屋は大体こんなものであつたようだ。しかも昔から開けていた山に限られていたから、明治三十年代から末葉にかけて、小島さんや木暮さんなどによる近代的登山の草分時代には、立山の室堂を例外として日本アルプスや秩父連山に登山小屋と称するものは皆無であつた。利用できるものは、僅かに、嘉門治や喜作、玉衛門など獵師の作つていた獵師小屋か、炭焼小屋、杣小屋といつたような名ばかりの掘立小屋に過ぎなかつた。小島鳥水、岡野金次郎両氏が明治三十五年はじめて槍ヶ岳を登つた時にも槍沢の獵師小屋を使用したし、小暮さんたちの秩父や上越方面の初期の山行には、破れかかつた杣小屋で仮の夢を結んだり、炭焼小屋の跡に風雨をしのいだという例がざらにあつた。明治三十八年に日本山岳会が創設され、当時の古い先輩たちによつて未踏の高山が次々に踏破され、さらに大正年代にはいつて各大学に山岳部ができなどして、ようやく一般に登山熱が高まつてくるにつれて、日本アルプスはじめ各地に登山者のための登山小屋が作られるようになったのである。南北アルプスの重

要な登山小屋は、ほとんど大正十年から大正十四、五年にかけて建設されているのは、当時の登山界の要望に応えたもので、小屋建設の歴史はよくわが国登山の發展經過を物語つてゐるわけだ。昭和四、五年以後スキーヒュッテの建設が各地に目立つてきたのは、大正末期から急速に普及したスキーの發達の結果である。

このようにして、本州では現在までに數百の山小屋ができあがつたが、北海道には、昭和になるまでは山小屋というものはほとんどなかつたのである。これはやはり登山の發達と表裏の關係をなしている。松浦武四郎が、アイヌを案内に未開の山野を跋涉した蝦夷時代はともかくとして、明治初葉の開拓使時代におけるケプロンの地理調査、ライマンの沿岸測量、神保小虎博士の地質調査などの近代科学的調査によつて、北海道地理の全般的輪郭が明かになり、これについて道庁林務課および帝室林野局の山林調査や、陸地測量部の測量調査など、主として官庁の調査によつて次第に北海道山岳地帯の地理が解明されたが、陸測五万の石狩岳附近一帯が出版されたのが大正十四年で、それまでは道庁発行の正確を欠く二十万分の一地図が登山の唯一の指針であつた。大正七年にそのころ旭川師範に在職した小泉秀雄氏の大雪山を中心とする「北海道中央高地の地学的研究」（山岳、第十二号、二、三号）が出て、この地域の様子が一般に紹介されて山岳人の注目をひいた。これは長らく北海

道中央高地の唯一の文獻として貴重な案内書の役割をつとめたものである。小泉氏などが北海道の登山の草分である。大正九年の夏に慶応山岳部の大島亮吉、田中三晴両君が、永年測量に従事して中央高地の山岳に精しい成田嘉吉、高橋浅市両名を案内者として、カウシナイからトムラウシ岳をへて石狩岳をきわめ石狩川を下つた登山は、北海道の山登りにエポックを作つた画期的なものであつた。このころからようやく北大の山仲間も冬山と同様に北海道の夏山と本格的に取組むようになった。

このように夏山が盛んになつたのはだいたい大正十一年以後であるが、内地と異つて冬山の方はもつと前から登られていた。これはスキーが早く北海道に輸入され、しかも地の利をえた北大を中心としてその本格的研究がすすみ、新生面をもつたスキー登山が内地よりも一歩先んじて北海道で盛んに行われたからである。北海道がスキーヒュッテに先鞭をつけることになつたのもそのためである。

北海道で初めてスキーが行われたのは明治四十四年（一九一一年）二月であつた。北大の講師ハンス・コラー氏が、学生に紹介する目的で故国スイスから一台もつてきたのをモデルにして学生がスキーを作り、コラー氏にズダルスキーの本を講述してもらつて指導をうけたのが始まりであつた。これはおそらくわが国での最初のスキーイングであつたろう。コラーさんは大正十二年札幌で病歿されるまで自身でスキーをやることはほ

とどなかつたが、スキーの最初の紹介者であつたわけだ。ヒンデル氏はコラー夫人の令兄である。ところが偶然にもコラー氏のスキー輸入と時を同じくして、ノールウエー公使杉浦虎一氏が陸軍省に二台送つて来た。そこで陸軍ではスキーの使用法を習うため、山岳スキー術の創始者ともいふべきズダルスキーの高弟であつたオーストリア・ハンガリーのテオドル・フォン・レルヒ少佐を招き、当時長岡外史將軍が師団長をしていた高田師団でスキーの講習を行つた。これが明治四十五年（大正元年）一月で、わが国に正式にスキー術が紹介された最初である。レルヒ氏は高田師団で講習ののち旭川においても軍隊に講習した。その時に習つた札幌聯隊の將校から、前にコラーさんから教つた学生六名が約十日間講習をうけ、三月三十日に藻岩山（五三三m）に最初のスキー登山を試みた。それから北大を中心にしてスキーが全道にひろまつていつた。また本州では高田がスキーの発祥地になつたのはいうまでもない。レルヒ氏の伝えたのは中欧に発達した山岳スキーであつたので、柳沢秀雄氏や角倉邦彦博士らを中心にならず山岳スキーが盛んになつたわけである。それからのち毎年次々に新しい山がスキーで登頂されるようになった。すなわち大正二年に手稲山、六年羊蹄山、七年奥手稲、砥石山、八年イワヲ、ニセコ、チセヌプリの三山と百松沢山、九年キモベツ岳、十勝岳、十年昆布岳、無意根岳、余市岳、芦別岳、十一年には遂に北海道の最高峯旭岳と黒岳の

初登山に成功した。この時代に活躍した主な人達は六鹿一彦、福地茂二郎、板倉勝宣、加納一郎、松川五郎、板橋敬一、後藤一雄の諸君で、旭岳の初登山は板倉以下の五名、黒岳の方はやはり板倉、加納、板橋の三君によつてなされたものであつた。

これまでが大体北海道スキー登山の開拓時代で、登山小屋のない時代なので主として山麓の造材小屋を根拠地として行われたのである。この十一年ごろから山スキーも競技の方も飛躍的に盛んになつて来て、遂に大正十五年パラダイスヒュッテの実現となつたことは前述のとおりである。またスキー登山の方は野營の研究も進歩し、大正十二年からは夏スキーが盛んに使用されて春の山岳縦走が行われ、未踏の高山が次々と登頂され、多年の懸案であつた冬季の石狩スキー登山が昭和三年二月に成功したので、北海道スキー登山史に一時期を画することになつた。それ以後は山岳人の興味は夏冬とも日高山脈に集中されるようになった。

このようなわけでわが国のスキーはリリエンフェルト式のスキーから始まつたが、大正六年海外留学から帰朝した北大の遠藤吉三郎博士がフィットフェルト縮具とともにノールウエー式スキー術を伝え、つづいて木原均博士をはじめ広田戸七郎、緒方直光、稲積猶、南波初太郎君などによつて大正八年ごろからスキージャンピングの組織的研究がはじめられ、十一年十二月にわが国で最初のシャンツェが三角山に創設された。一方デ

イスタンスレースの方は大正十一年ごろから北大の岡村源太郎君、小川玄一君、早大の高橋昂君などの努力によつて本格的な研究が進められた。ついでながら、以上の諸君のほか当時北大スキー部の技術の発達には中野誠一、平塚直秀両君の理論的研究があつて力のあつたことも書きそえておきたい。

### 三、北海道の山小屋の特色

日本山岳会から発行の「山日記」をみると北海道の山小屋は六十以上あるから、それらを全部ここに書くわけにはいかない。私が北海道の山や平原を盛んに歩いていたころはまだほとんど山小屋のない時代であつたし、私の知つている小屋は割に少いが、ここには前述の三つのヒュッテを合せて十ほどを選んで簡単な紹介をすることにした。奥手稲山の家、ニセコ山の家、十勝岳の白銀荘、勝岳荘、大雪山方面の勇駒別温泉の仰岳荘、愛山溪の愛山荘などであるが、これらが大体北海道の山小屋の代表的なものでその他もこれに似たものだからである。またこれらの小屋は北海道の主要なスキー地、すなわち①ニセコアンヌプリ、②札幌附近、③十勝岳、④大雪山の四箇所にあるもので、これらの小屋を使用すれば北海道の主なスキー地をすべて楽しむことができるからである。このほかに大雪山には黒岳と旭岳に石室小屋があるが、夏は繁昌するが冬は使用できない。私も黒岳小屋で積雪期に一週間暮したことがあるが、小屋

の位置が悪くて雪下に深く埋まってしまうから非常に不便で利用価値に乏しい。

ここに挙げた十の小屋には石室は一つもなく、全部五〇〇mから一〇〇〇mまでの森林地帯にあつて木造である。構造からいつて二種に大別できる。すなわちヘルヴェチアヒュッテや空沼小屋式の丸太組のものと、勇駒別小屋や愛山溪小屋のように普通の板張りの日本風の小屋である。奥手稲とニセコの山の家は何れも鉄道局の経営で大きさも大きく、大体ヒュッテ風の造りで堅牢な建築である。

勇駒別の仰岳荘小屋と愛山溪の愛山荘とは北海道林務部の所屬で、前者は森林監視小屋、後者は造林小屋であるが、立派なスキー小屋としても使われる。ユコマンベツの方は昭和十五年の建設で、二階建二十九坪、収容人員三十名、番人が常住している。愛山溪の方は昭和二十三年創設の新しいもので、十五坪の平屋で収容人員は十五名、温泉がとりいれてある。このほかに北海道には各所に常設または仮設の造材小屋があつて登山やスキー旅行のために利用されている。

ここに挙げた十の山小屋は、位置からいつて、高山中腹の森林地帯にあつて背景が雄大なものと、中級山岳の山腹や山頂の森林地帯にあつて軽いスキーの山旅に向くものに分けられる。白銀荘、勝岳荘はいずれも十勝岳の中腹一、〇〇〇mにあるヘルヴェチア式の丸太造りで林野庁に所屬し、上富良野駅か

らおよそ二十四キロ、吹上温泉の間近にあつて温泉を利用できる便がある。どちらも昭和七年の建設で収容人員は十五名、番人が常住する十勝岳や上ホロカメツトク山、富良野岳などの登山根拠地で、各山頂に達するコースも色々あつて訓練されたスキー家にとつてはまさに地上の樂園である。勇駒別小屋も標高九四〇mのユコマンベツ上流にあつて旭岳登山の根拠地であり、愛山溪小屋の方も標高九〇〇m、愛別岳、比布岳、北鎮岳など大雪山群の雄峯を間近にひかえた好適地で、少し長く滞在して高山のスキー登山をするには白銀、勝岳二荘と共にもつとも恵まれた位置にある。中央高地の雄大な斜面に描くスラロームを楽しもうというなら愛山溪などは或は最良のスキーヒュッテかもしれない。

他の六つの小屋はみな中級山岳にあるもので、その環境も相似たものがある。このうちニセコ山の家だけ飛び離れているが他の五つは札幌、定山溪周辺の山にあるもので、奥手稲山の家(八二〇m)を除けばすべて北大所屬のブロックヒュッテであり、パラダイスヒュッテは軽川から一日で往復できる距離にあるが、他は一泊を必要とする。無意根小屋は一〇二〇m、空沼小屋は九二〇mの森林地で、前者は昭和六年に建設された北大スキー部所屬のもので空沼小屋よりすこし小さく二階建二十六坪、十五、六名は宿泊できる。最近、無意根小屋とヘルヴェチアヒュッテの中間、白井川の右股に白井小屋というのができ

た。建坪千坪、定員十二、三名の小さい小屋だが、二十七年に道庁林務部が建てたもので、二十九年一月から札幌医科大学の管理に移り、燃料を備えて冬季の使用も可能となつた。これでパラダイスヒュッテに始まつたヒュッテの連絡網が一応完成したわけである。

さて以上の山小屋に共通の特色をあげれば、第一にこれらの山小屋はすべて森林地帯にある。標高も五〇〇mから一〇〇〇mまでで、それ以上に出るところはない。第二に附近がスキーゲレンデとして良好なところに限られているから、スキーツアーには都合がよく、利用率も高い。第三には大体に中級山岳の手近なところに多いから、気軽に山小屋生活を経験できる。第四に概して美しい環境にあり、構造も快適なものが多く、四季を通じ、ただ小屋の生活を楽しむだけにも大いに利用価値がある。概括してみるとざつとこんなことがいえると思う。しかし北海道には高山の山頂や鞍部など森林帯を抜けた高みにある小屋が甚だしい。夏山でも冬山でも、中央高地の山々や日高山脈を、相当の日数をかけて登るような本格的な山登りの立場からいうと、そういう所にある小屋こそもつとも有効なものであり、または是非あつてほしいものである。いままでは大雪山方面にそういう小屋が一つもなかつた。これは気象観測その他の学術的研究にも必要な施設であろう。幸い今年の国体を機会に、忠別岳と白雲岳に登山小屋が作られることになつた。現在では利

用者はまだ少いかもしれないが、石狩岳、ニベソツ山群や日高山脈には南アルプス程度に登山小屋を作るべきであろう。今のところ営業として成立つことは考えられないから、林野庁や道庁方面の理解と斡旋にまつ外はあるまいが、北海道の山登りのためにその実現を望んでやまない。

#### 四、山小屋を囲む風景

前に書いたように北海道の山小屋は山腹の森林地帯にある。ここに挙げた十の山小屋も皆そうで、ニセコ山の家だけが唯一の例外である。ニセコからチセスプリの辺りは、伐採と山火事のためかと思うが、針葉樹林というものがきわめて少い。白樺などの広葉樹も数は少く、全山ネマガリササに覆われていて、冬は頂上から山の裾までさえぎるもののない銀白のスキーゲレンデになるからだ。しかしほかの小屋は皆トドマツやエゾマツの樹林に暖かくかこまれている。これがこれらの山小屋の大きな魅力だ。まことに常緑樹というものは不思議なものだ。常緑樹にかこまれた家には何か暖かいぬくもりを感じるが、原野や丘陵地のむき出しの家からはさびざむとした冷気が迫ってくる。北海道の農村風景が時に耐え難いほどの淋しい感じを与え、そのもの、それをとりかこむ木立に大きな関係があると思う。試みにその眼のとどく限り果しなくつづく原野や、ひろびろとして風溜りのない高原風な丘陵地帯に散在する十勝や北見地方の



空沼小屋



十勝岳白銀荘



奥手稲山の家



無意根小屋

典型的な農村を歩いてみよう。

本州なら部落を囲む丘はこんもりとした杉林か、松林か、ナラや、クヌギの雑木林だが、北海道の農村の背景となる丘陵は切株のまばらに立つたササ山である。二―三尺か四―五尺の高さに切株が残っているのは、伐木はほとんど積雪期に行われるためにその土地の積雪量だけ雪の中に切株が残ることになるからだ。所によつてはササの代りにカヤの原も少くない。そういう丘にまばらに生えている木といえば伐木や山火事の跡に自生したたけの低いカシワか若い白樺などであつて、本州のように一つの谷ごとにまとまつた感じはなく、さえぎるものない同じような風景が丘から丘へと果しなくつづいている。開拓地では植林もまだあまり進んではいない。それに本州の農村には必ず鎮守さまがあつて、きまつて森にかこまれている。それは日本の伝統的な風景の一つであるが、北海道の農村には鎮守の森はない。農家を囲む木立にしてもそうである。本州であれば杉の森があり、竹藪があり、シイヤツバキなどが家を囲んで雨風を除け、どこことなくあたたかい感じがするが、北海道の農家はむきだしであり、裸である。そして家の附近に植えてある木はたいていひよる長いポプラか、冬にはすつかり坊主になる落葉松だ。寒風がどこまでも吹き抜けるのである。

もしこのような風景の中にぽつんと小屋が立つていたらどうだろう。私自身はそういう風景も実はきらいではないのだが、

しかしこれはまさしく淋しい小屋になることは間違いない。森林帯を抜けた高山の鞍部や頂上にある山小屋、日本アルプスのものはだいたいそうであるが、そういう山上の人里離れた小屋とはまた違った意味の淋しさ、いわば人間的淋しさともいつたような感じがでるのではないか。これに反して林の中の家、ことに大きな針葉樹にとりかこまれた山小屋には暖かさや落着きがある。どこまでも風の吹きぬける丘の裸の家には見られないことだ。この対照的な感じは、じつさいに風当りが強いかどうかという自然的現象よりは、むしろ心理的なものかもしれない。しかしとにかくこの暖かさを感じるという事実は、一般のスキー家を対象とする山小屋としては、間違いなく大きな魅力の一つである。

こういうことがいけばんはつきり分るのは、十勝岳中腹の山小屋や大雪山麓の小屋である。北海道の冬山の美しさは針葉樹の美しさともいえるほど、トドマツやエゾマツの雪の斜面は美しい。札幌から近い山山でも私たちはこの美しさを十分に味わえるが、もう少し雄大な山岳美を求めるとすれば、十勝岳の吹上温泉を中心にする山岳スキー地に勝るところはない。ここはスキー地としていまでは全国に知れわたっているが私が板橋敬一、田口鎮雄、佐々木政吉、藤江永次、岩森秀夫君たちとはじめてスキーでここを訪れた大正十一年、二年ごろは、まだ硫黄鉱山がある時代で、温泉も客室は二つだけの小さなものだった

た。大正十五年の爆発で鉢山は塵鉢となり、押し出したデブリのために初心者向きのゲレンデが荒れてしまったが、この温泉を中心として、上ホロカメットク山から北に十勝岳、南にフラノ岳とひろがる山岳一帯が、稀にみる山岳スキーの好適地と分つてから山仲間が多く押しかけるようになり、昭和三年にここが北大山岳部の冬季合宿になつてから、急に有名になつた。しかし戦時中、旅館はとりこわされて、今は浴場だけがこつている。白銀荘、勝岳荘の二つのヒュッテはこの温泉に近い森の一角を占めている。札幌附近の小屋とは違つてここは寒さも相当なものだし、冬はある日が多い。しかしもし一日でも快晴に恵まれるならば、たとえ一週間吹雪に閉じこめられ滞在しても後悔しないだろう。晴れた日の十勝岳や上ホロからの山岳展望とこの辺りの森林帯の雪質とがまたとなくいいからだ。ニベソツ、ウペペサンケから石狩岳へかけた奥地の高山、指呼の間にあるオプタテシケから大雪山への切り立つた銀白の連嶺、南には遠く黒々と雄大なすそをはつた日高山脈の山々が、あおく鋭くすみとおつた大気を通して映しだされる。それに雪質は申分のない粉雪で、これだけは他のスキー地よりは断然いい。零下十度の澄みきつた大気の中をキラキラとまばゆく針葉樹林を舞う粉雪は、たしかに地上のもつとも美しいものの一つだろう。輝やかしい目にまがう微細な雪片、力学的な美と詩的な感覺的な美とがこれほどにもピッタリと一つに結晶したものはあ

るまい。こういう最上の雪質をここでは大体三月いっぱい享楽できるのである。

山岳展望は十勝岳方面に劣るかもしれないが、大雪山麓の小屋も十勝岳の小屋とはほ同様の自然環境をもっている。しかもスロープが大きい点では大雪山の方が勝つているといえるかもしれない。

札幌附近の小屋には、もちろんこうした第一級の山岳を背景とする雄大な景観はない。しかし冬ばかりではなく、春も秋も四季を通じて変化のある山小屋生活を楽しめるという長所がある。ヘルヴェチアヒュッテに行くには二つの道がある。函館本線の銭函から登るのと、反対側の定山溪温泉からはいる道である。どちらからも軽い一日行程であるが、強行すれば銭函、定山溪間を一日で抜けることもできる。この道は昔イワナ釣りのかようさやかな小みちだつた。あるときはササ原を、あるときは白樺の林の中を、またあるときはヤナギやクルミの多い溪近くの斜面をぬいながら、ところどころ踏み跡が消えてはまた先のやぶ蔭にあらわれてくるというような谷沿いの小みちであつた。近年小樽から朝里岳の下を通つて定山溪へ抜ける道路ができて、ヘルヴェチアのすぐそばを通っている、私は銭函から海を背にして登つて行く峠道が好きである。春がいい。また白井岳や余市岳にはたつぷり厚雪が残つていて、真冬の鋭さはないが時折は吹雪もおとずれ、その合間には肌を焼くような春の山

上の強烈な太陽が、ザラメになつた雪の粒からキラキラ照りかえすところのことだ。峠のあたりはもうまだら雪も残りすくなく、人のたけをこす根曲笹が大方はうなじを上げて春の陽はまばゆく輝いている。秋の笹の音はさびしくもの悲しいが、風にそよぐ春の山の笹の響は楽しいものだ。四月の終りか五月のはじめの一日、短い夏スキーを肩にして磯の香の高い町をはなれる。桜桃や林檎などをまわりにうえた農家のちらほらする畑地がつきると、しばらくの間はカラマツ林の間を上る。痛いほど眼にしみる鮮かなうすみどりのカラマツの若芽は、春の山の前奏曲だ。この山すそのカラマツ林をぬけるとやがて山腹をぬう急な峠道だ。うす空色のエンゴサクやキバナノアマナ、マイズルソウなどの山草が可憐な姿で路ばたを飾るひそやかな林道である。先の知れた気楽な旅とあれば急ぐにも及ばない。連れがあればもちろんだが、ひとりの時もゆつくりのぼる。しかし二時間ほどしてようやく峠の頂上にたどりつくと、シャツ一枚で一息というところだ。

私はこころ辺りのなだらかな起伏をもつた広い笹原の景色が好きである。それよりもつと私たちの目を楽しませてくれるのは、海を越えたはるか彼方に真白く屏風のように立ち並んだ増毛山塊、暑寒別岳から雄冬山につづく山山だ。晴れた五月の一日、もう平地はすっかり春のうららかなよそおいのころ、小樽から銭函あたりを北上する汽車の窓から海をへだててながめた

この暑寒別の山山ほど印象深いものはない。あくまで白いのだ。それが深い藍色の五月の北海の空に実にくつきりと朝日に輝いて肩ちかく迫ってくるのである。これはたしかに北イタリヤの平原から眺めるアルプスにも比すべき新鮮な眺望だ。こんな都会の近くの平凡な低い丘からぞうさなく見られる山の風景ではあるが、少し大げさな方を見れば、見るたびごとに心のときめきを禁じえないほど、いつも新しい感情をよびましてくるすがすがしい山の姿である。秋の北の海はさびしくわびしい。この辺の海岸の砂丘もいしれぬ哀調をおびた色彩にぬれ、波と風の沈うつな瞑想曲をかなでる。しかしあの雪白の連山を背景とした五月の海はながい暗い冬からの解放の喜悅におどつているようだ。峠道の草むらにねころんでこの春の明るい海と山、土と木の芽、青い笹と白い樺との織りなす自然のパステル画を、海を渡つて峠の笹原の上を吹く五月の風を大きく胸一ぱい吸いながら、思うままに眺めることはまたとない楽しみだつた。それからまたスキーとルックサックを肩にしてながい溪の道を下りて行く。もうこのころは早春の歌をさえずる小鳥たちの影も多い。一―二箇所で丸木橋を渡りなどするゆるい上り下りの山みちを、時には口ずさむスウィスの山の歌などのこだまを楽しみながら二時間ほど歩くと、急に白樺の若木の純林が立ちはだかるように前方に現われてくる。目の覚めるような緑の若芽が美しい絹の網のようにすけ、降りそそぐ春の陽

光がまだら織りの木影を地面に写している。この白樺林はこの辺でもめずらしいほど美しい。色も形も少しも濁りを交ええない純潔な感じだ。純白な若芽が揃つてローソクを並べたように直立しているからだ。この愛すべき白樺林の一角に、ひどく小さいが、しやれたスウィス好みの丸木小屋がいぶしのかかつた銀色に隠見するというわけだ。はじめの訪問者は思わずほほえましくなるような童話風の可憐な姿だが、近よつてみると意外に頑丈な骨組みに驚くだろう。そしてどことなく犯しがたい気品を感じするだろう。これはたしかに本物のヒュッテだ。ヘルヴェチアという名のおりスウィスの小屋をここに移したという感じだ。いやこの環境にこれほど調和した作品もめずらしい。ここでは四囲の自然と小屋の建物とそしてそこに遊ぶ人間とがすつかり融けあつてしまふのだ。

くつろいだ一夜の翌日はまず白井岳から余市岳（一四八八m）にかけて春のスキーを思う存分たのしんでくる。四月はまだ小屋の附近にも雪があるが、五月になつて小屋の近くは消えて地肌を現わしているときでも、少し奥の沢はまだ残雪に埋まつている。白井岳のスロープは恐らく札幌附近の山ではいちばん大きく美しいものだろう。上の方は白樺の疎林、それに末広がり針葉樹の長いスロープが続いている。冬はこらも吹雪く日が多く、吹雪けばなかなか手強いから、白井岳や余市岳の登頂は天気都合でむずかしいこともあるが、春も四月となればのん

きなものだ。余市岳から無意根山（一四六〇m）への縦走も、無意根小屋を使えば楽にできる。札幌附近の春の山歩きとしてはこの辺が一番面白いところだろう。しかし余市岳から引返してヘルヴェチアヒュッテの静かな生活をもう二三日たのしむのも悪くない。

私はパリでデュラーの林の絵をみてこの小屋をとりかこむ白樺林を思い出した。帰つてからまたこの小屋に行つてみて私の連想がけつして突飛な見当はずれでなかつたことを知つた。そのときは秋であつたが、少し黄ばんだ葉の間を、秋の陽光が斜めに細く糸のように射しこんでいるあの白樺林のなかにふたたび歩み入つたときに、私は思わずこんどはデュラーのやはり白樺の林を描いたらしいその秋の絵を思いだしたからである。この辺は秋もいいのだ。いやほんとうは私は秋の方が好きなのである。山の木はさまざまに色づき、しかもまだ雪には遠い秋の晴れた日が好きだ。春の木立はみずみずしく、見るからに爽しいけれども、北海道の秋の気はきびしいくらいに澄んでいて、林の中はどことなく枯淡な色と匂いにつつまれ、貧しい心にもなにか深く意味のある思想が閃めくような錯覚を、無意識のうちに感じるからかもしれない。秋にはよく雨に降り込められることがあるが、静かな秋の雨の日の小屋の一日も悪くないものだ。町のなかの雨はかえつてわびしいものだが、こんな静かな山のなかの林の雨の音にはどこかしら詩的な情趣がある。

それも少しせいたくにストーブの薪をたいて、親しい山友達と何ということもなくたどりとめもない話などに過すひとは、ことさらに楽しい思出となるものだ。日高山脈あたりの、あるいはもつと遠くスイスやヒマラヤの地図をひろげて、山や峠や山小屋などの姿を紙上に描くだけでも小屋の一日は結構たつてしまふ。雨の上つた日の朝の風景はまた格別だ。これは高山の山頂の小屋などでは味えないこのような山小屋の有難さだろう。春は春、秋は秋で、林を満してあふれ出す光と影の交錯が格別なのだ。それはいわば寒さに凍えた小鳥が生きかえつた時のような喜びにあふれた色だ。あおい光と白い木肌と、春ならばこの黄みどり、秋ならば枯葉色をほかしたうす黄オレンジ、その光と色の諧調がそのまま美しい自然の交響詩だ。春と秋と冬と、少くともそれぞれの季節に一度はこの小屋を訪れなくては、あのスイスのひとりの芸術家とひとりの登山家が遠く故郷の美しい山に想いを馳せながら、どんなに深い友情をこめて、私たち日本の山を愛する若人たちにこの小屋を作つてくれたか、その作品の意味は分らないだろう。

### 五、山小屋からのスキー登山

ニセコ山の家はニセコアンヌプリ（一三〇八m）とイワオヌプリ（一一五四m、岩雄登とも硫黄山ともいう）との鞍部、七五〇mのところ、スキーヒュッテとしては絶好の場所であ

る。鉄道局の経営で、狩太駅から十キロ、馬糞の便がある。昭和十一年十二月開設。寝具燃料はもちろん、電灯、電話も通じ、温泉浴室も完備し、収容人員は特別室の四名を入れて四十四名、番人も常住し食事事も賄つてくれるからヒュッテというよりはホテルと呼ぶ方が当てよう。ここからは目のまえに聳えているニセコは、スキーで登り二時間あまり、チセヌプリ（一一三四m）へもワイスホルン（一〇四五m）へも三時間ほどで達する。目国内岳（一二〇二m）に行くには途中新見温泉に一泊を要する。スキー滑走には大して向いていないが目国内岳から岩内岳（一〇八五m）を経て岩内に降ることもできる。この辺の山は夏はひどい笹山だが、冬には一変して美事なスキーゲレンデになる。針葉樹に乏しいが、スキーのためのスロープとしては申分ない山山である。また附近いたるところに初心者向きの斜面も散在する。この辺一帯の山はスキー地としては札幌附近に次いで古くから知られている。それは青山温泉というスキー登山及び練習のための好適地があつたからである。

青山温泉は昆布駅から約五キロ、ニセコアンヌプリの溪流にのぞみ、今では二〇〇名近く収容できる旅館であるが、大正八年二月に北大スキー部員がニセコ登山の帰路ここに泊り、この附近一帯の地形と温泉の位置がスキー地として良いことが分つたので、翌年からここをスキー部の合宿所に選んでからひろく全国に知られることになつた。ニセコに山の家ができるまでは

この温泉がこの地方のスキー登山の中心であつた。ついでにこの辺の山のスキー初登頂の年月を誌してみると、ニセコは大正八年に八合目まで登山、大正十一年十二月に初登頂。チセも第一回は大正八年に試みられ、大正十年十二月スキー合宿に初めて登頂された。メクンナイ岳とイワナイ岳は共に大正十二年の三月に初登頂された。この時は青山温泉から岩雄鉱山に一泊、その次の日に二つの山頂をへて岩内町にくだつたのである。

札幌附近には中級の山が多い。豊平川の上流を囲む山岳、この辺の樹林帯の上限である一三〇〇mを越すものに余市岳、白井岳、無意根山、漁岳があり、一〇〇〇m級では百松沢山、鳥帽子岳、迷沢山、手稲山、奥手稲、遙山、朝里岳、天狗岳、喜茂別岳、空沼岳、狭薄岳、札幌岳等がある。とくに困難な山はない。すこし山に馴れたスキー家にとつてはこの辺の山は尾根でも沢でも歩けないところはない。今では小屋も多くなり、指導標もあり、地理もすつかり明るくなつたから、どこでも縦横無尽に歩き廻れるといつてもよいだろう。天狗のような岩山を除けばどれも立派なスキーゲレンデである。前に挙げた小屋から近い山の名を書いてみると、パラダイスヒュッテ及び奥手稲山の家からは手稲、奥手稲、遙山、ヘルヴェチアからは白井、朝里、余市、奥手稲、遙山等、無意根小屋からは無意根、喜茂別、空沼小屋から空沼、狭薄、札幌、漁の諸山である。少し欲張つてこれらの小屋と定山溪温泉を結ぶ連絡コースを辿れ

ば、ひどい悪天候に見舞われない限り大体一週間から十日間の日程でこれらの山山のすべてを登ることが出来る。

十勝岳の小屋からは前述の十勝岳、上ホロカメツトク山、富良野岳の外、美瑛岳の一日往復も可能である。

勇駒別小屋からは旭岳が唯一の山だが、もし足が揃つた一行で天候さえ良ければ旭岳から北鎮岳をかけて愛山溪温泉へ抜けるコースは面白いと思う。その逆ももちろんいいが、これはどつちも本格的な登山の心構えが必要で、よほど慎重にやらないと失敗する。愛山溪から黒岳を越して層雲別温泉へ降るのも同様である。これはもちろん冬の話で、五月頃の春の山歩きとなればこれらのコースは楽な一日行程である。本文は案内記ではないから、登山コースのことはこの位にしておこう。とにかくこれらの山小屋が完成したために面白い山登りを比較的困難なく楽しめることは間違いない。

## 六、造材小屋と駅通

さて以上の小屋はいずれも北海道の主要なスキーゲレンデのものであるが、この外に夕張岳、芦別岳方面にはいくつかの官設の巡視小屋や休泊小屋があつて登山者には便宜を与えているし、また音更川上流の山山や日高山脈の登山には民間の造材小屋が大きな利便を与えてくれる。昭和三年一月に私たちが石狩岳に登つた時は、造材小屋の利用できるものがなく、前年の夏

に石狩川上流二箇所に分れたらちの手で一冬のあいだ雪に耐える仮小屋を造つて使用したし、その後は日高山脈その他にテントを用いたスキー登山も数多く行われた。しかしまたこれらの造材小屋が北海道のスキー登山史上で果した役割はきわめて大きかつた。大正十一年一月の板倉氏一行の旭岳スキー初登山もユコマベツ上流の造材小屋を根拠にして二回目の試みに成功したものであつた。

またこれとは別に増毛方面の武好アヲクや北見峠のような交通不便な山地には、駅遞という昔の名残が十八、九年まではところどころに残つていた。これは元來官設の遞送中継所で、内地でいえば奥地の峠の茶屋といつたようなものに相当するが、旅客のための宿もするので登山者やスキー旅行者にとつて捨てがたい宿泊所ともなつていた。恐らく人間の心理以上に変化に富んだ風と雲と雪とそして太陽の、微妙な音響や光や影やささやきなどをものとも純粹な形で味えるのは、山の斜面が縦横無尽にスキーの跡で刻まれた繁華なスキー地や、どこもかしこも人間に埋まつた温泉や完備した山小屋近くの便利なスキーゲレンデではなくて、かえつて昔ながらの古風な駅遞がいまだに用を便するような辺鄙な山地や高原を、気のあつた友達と、あるいははたつたひとりで歩きまわつているときかもしれないのである。少くとも暖かく楽しいヒュッテンレーベンでは味わえない別の自然と人生の味を、そういう片田舎の漠としてとらえがたいよう

な平原や高原の雪野原が私たちに知らせてくれるであろう。私は山登りやスキーのために作られた小屋の恩恵ばかりを、時には感傷に過ぎるくらいあまり書きすぎたようだから、私の愛する北海道の、最も特色のある、そのくせ多くの人から忘れられ、あるいは見逃がされている淋しい原野や山のためにも、少しは肩を持つておかなければすまないような気がするのである。じつさい若いころの私はどれほど多くの時間をあの荒涼とした北の原野と山とで送つたかもしれないからだ。あるときは重い荷を背負い、あるときは身軽ないでたちで、あるときは親しい山仲間と、あるときはたつたひとりで、まるでそこが自分の育つた懐かしい生れ故郷でもあるかのように。そしていまになつては笑止なくらいそれらの山野に心を傾けたものだ。しかしそのことをいままもすこしも後悔はしない。おそらくそのことだけが、私の貧しい人生にとつてなんのわだかまりもなく悦しく回想できるわずかの頁だからだ。よしんば人間に対する信頼と愛情を全く失う時があつても、ときに優しくときに厳しく、ときに明るく、ときに暗くあの素朴な北海道の自然の唱う歌が、私の記憶から消え去ることはないだろう。風よ、わが精神の形成者よ、と歌つた古い詩人の心を私に訓えてくれたのもじつにあの茫莫とした山と平原のなかの旅であつた。それがここに短いながら私の感懐の一端を書きとめて、本文の結語に代える所以である。

(一九五四・六・二〇)

附 表 北 海 道 の 山 小 屋 一 覧 表

名 称	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	ニセコ山の 家	パラダイス ヒュッテ	ヘルヴェチ アヒュッテ	奥手稲山の 家	無意根小屋	空沼小屋	白 銀 庄	岳 勝 庄	岳 庄	勇 岳 別 庄
所 属	札幌鉄道局	北海道大学	北海道大学	札幌鉄道局	北海道大学	北海道大学	林 野 庁	林 野 庁	北海道林務 課	北海道林務 課
建 坪	76 坪	30 坪	7.5 坪	22.5 坪	26.6 坪	32 坪	18.5 坪	34 坪	29 坪	15 坪
位 置	蛇田郡狩太 村ニセコア ンベツ	札幌郡手稲 町手稲山中 股北西面	札幌郡豊平 町小樽内川 股下北東北 面	豊平町夕田 沢上流	豊平町イ ノ岳北東面	豊平町空沼 岳北面	高知郡上ノ ラノ科十勝 岳中股	同 前	上川郡東川 村ユコアベ ツ上流	上川郡上川 村ボツ川上 流
海 抜 高	750 m	500 m	500 m	820 m	1020 m	920 m	1030 m	1020 m	940 m	900 m
収 容 力	44 名	30 名	12 名	46 名	15 名	30 名	15 名	60 名	70 名	15 名
宿 泊 料 金	一般 120円 特別 200円	100 円	100 円	80 円 休憩 30 円	100 円	100 円	150 円	150 円	100 円	100 円
申 込 先	各駅 交通公社	北大 厚生課	北大 山岳部	各 駅 交通公社	北大 厚生課	北大 厚生課	富良野 野 署	同 前	旭 川 林 署	同 前
番 人 在 住 期 間	常 住	不 在	不 在	12月15日 ～4月14日	不 在	不 在	定 住	常 住	常 住	常 住
開 設 年 月	昭11年12月	大15年11月	昭2年8月	昭7年12月	昭6年	昭3年12月	昭7年	昭7年	昭15年12月	昭23年10月
交 通	函館本線狩 太駅マ ノ便マ リ	軽川駅より	銭函駅より 定山溪駅より	銭函駅より	定山溪駅より	定山溪鉄道 石切山・藤 沢	富良野線 上富良野駅 より24 km	同 前	旭川より ハスオ リ	石北線 安足間駅より
設 備	①②③	③	②③	①②③	③	③	①②③	③	①②③	①②③

(注) ① 寝具、② 炊事具、③ 燃料

# ハントの「エヴェレスト登頂」をめぐって

松 方 三 郎

ハントの「エヴェレスト登頂」について何か書くのがぼくの任務であつたが、考えて見ると「山岳」の読者に対してこの本の紹介をする必要はない。日本訳でも一万部以上も出ている事実からすれば山登りに関心をもつほどの人は、既にこの本を一読も再読もしているに相違ないからだ。それに、こうした書物は、全体をよく読みこなすべき性質のもので、本の方は棚に上げておいて、要約や紹介で要領を得ようというのはいさし虫がよすぎるとも考える。だからここには多少趣きをかえて、ハントの「登頂」が出たのを機会に、過去のエヴェレスト文献について若干の回顧をすると同時に、この「登頂」に関連した雑感を幾つか書いて見ようと思う。

過去の文献を回顧するのは、一九五三年以前に、幾つかの遠征隊によつて積み上げられて来た、業績を識る上にこれこそ正統な方法と考えるからだ、ハントがどれほど、一九二一年以来の多くの人々の努力と苦心とによつて持帰られた各方面の経験を高く評価しているかは、「登頂」を読めばすぐわかるので

ある。たとえばハントは「登頂」の最後の章の「反省」の中  
で、

この積み上げられた経験のピラミッドこそ、その成果に対して欠くことのできないものであつた。つまり、そのピラミッドがある高さに達した時に、はじめて、登頂ということ  
が、それにふさわしい登山隊の力の範囲内の問題となり得たのである。……：昨年冬、われわれが再び攻撃の準備をしたときは、彼らの積み上げた経験が、そういう高さまで達していた。

と書いている。

ところで文献回顧は、当然のことながらまず一九二一年の遠征報告に溯らなければならない。

× × ×

エヴェレストについての報告書、それに関連した記録の類を数えあげるならば、相当な数になる。しかし、何といつても、それ等の数多くの記録の基礎になるものはハワード・ビューリー

の名で出てゐる、一九二一年の第一回の踏査隊の記録である。

登頂の試みそのものからいつて、この一九二一年の踏査はすべてその後の試みの出発点であり、基盤をなしているのだから、これは当然といえば当然のことだが、ヒマラヤの探険や登山の中で、エヴェレストへの試みが、どんな地位を占めてゐるかを明かにするという点でも、この第一回の遠征の記録は重要な意味をもつてゐる。

序文はヒマラヤの開山、サー・フランシス・ヤングハズバンドが書き、ここで一九二一年の隊を派遣するまでの経緯などを述べてゐるが世界の最高峰としてのエヴェレストの発見についての挿話もこの序文の中に詳しく書かれてゐる。

ヤングハズバンドはその頃は地学協会の会長で、エヴェレスト委員会を構成した六人の委員の一人として、地学協会を代表してゐたのみならず委員会の議長であつた。アルパイン・クラブの側からは最初はノーマン・コリー、フアラール、ミードの三人が出てゐた。コリーは一八九五年にマムメリーやブルースとナングバルバットを試みてゐるのだから、彼もヒマラヤ草分けの一人だが、その頃はアルパイン・クラブの会長であり、その資格でエヴェレスト委員会にも出てゐたのであるが、そのコリーがやはりこの最初の報告書の中に、第一回の踏査の成果について、一つの章をうけもつて書いている。このコリーの章は、第一回の踏査の結果を検討してゐるだけでなく第二回すなわち、一九二

二年の遠征隊を出すに至つた経緯をも説明してゐるのだが、ヤングハズバンドの序文にしても、コリーの検討にしても、今日読み返して見ると、一面においては、この三十余年の間に、随分変わったものだと思ふ節も多々あると同時に、今日読んで一向に古さびてゐない生々としたものをも感じるのである。思うにエヴェレストの研究者はもとよりのことだが、ヒマラヤの研究者、またヒマラヤへ遠征を試みようとする人は、何としてもまずこのハワード・ビュリーの最初の一冊をよくこなして次に進まなければなるまい。

これは一九五三年の登頂の成功の意味を正しく識るために必要なことだし、ヒマラヤでの遠征の性格を正しくつかむためにも、さらにまた、一つの遠征隊の報告というもののスタイルを学ぶ上にも、この最初の一冊は、古典的入門書として長く価値をもつに相違ない。

内容主体をなす探険報告は隊長のハワード・ビュリーと登山隊のレイ・マロリーが分担し、ハワード・ビュリーは全般的な報告を、マロリーの方はエヴェレストそのものにかかつてからの現地踏査の報告を書いている。そしてこれにウオラストンの書いた自然誌の一章が加えられてこの三編で本文が出来上つてゐる。附録は測量、写真測量、地質報告、科学機器、収集動植物表の五節に分れてゐる。何としても、最初の踏査隊のことで、地図から作つてかかろうというのだから、この隊の苦心の程も

察せられるが、さらに驚くべきことは、この隊が実に多くの収獲をもたらしていることだ。

この報告は多分二五志で出たものだが、そのほかに、二百部限定の大型版が出ている。版が大きく背中が白の皮づくりになつていて、紙も別すきだから、正に豪華版だが、内容は写真版も、本文も、並製と同じもので別に組みかえたり、製版しなおしたりしたものではない。しかし、これだけの立派なものを出そうという気持の裏には、エヴェレストを何としてでも登ろうという当時の意気込、また、必ず登つて見せるという確信があつたことは争われない。

やりとげるのには、十二回くらいはやつて見ることになるかも知れない。しかし、結局成功することは確かだ。

一九二四年の報告のどこかに、こんな言葉が引用されている。マロリーとアーヴィンを失つた時に、こんな言葉を特に思い出したのである。「エ・ダズン」といつたのはもちろんやかましい意味で十二回といつたのではなく、十回やそこらは、という気持だつたのだから成功した一九五三年の試みは十一回目の試みなのだから莫然といつたとしても、結果から見ても、見当は間違つていない。しかし、とにかく、この言葉からしても、頂上には必ず登れるという気持は、あるいは登つて見せるという意気込は最初から——三十年前から——あつたに相違ないのである。豪華版を手にして感じることは、その出来上りが堂々と

して、立派だということもさりながら、やはり、この意気込、打込みかたにただならぬものがある、という点である。そしてその気魄がその後の三十余年の間に、前後九回の遠征隊をおし出しているのである。

三十年の間に多くの先輩は過去の人になつた。エヴェレスト委員会も全部顔触れがやつてしまつた。(エヴェレスト遠征！というよりはヒマラヤ探険の守本尊というべきサー・フランシス・ヤングハズバンドその人も一九四二年には七十九歳で亡くなつている。)しかもエヴェレスト登頂の試みは、一九五三年に ついに成功するまで、たゆみなく続けられたのだ。風雪にたえながら、一つの仕事を続けて行くことが容易なことでないことは判りきつたことだが、この場合の難しさは代が入替りながら一つの仕事を続けて行くところにあり、またいつも、仕事が一人や二人の仕事ではなくて多くの人の協力によつてはじめて出来ることだといふ点だ。そしてこれに成功するためには、最初に決めた方向づけがよほど正確であることが必要であるし、最初にたたきこんだ推進力がよほど力のあるものであることが必要だ。こんな点でも、一九二一年の第一回遠征隊の業績は、十二分に検討される値打があるし、当時の周囲の事情は、よく吟味される値打がある。

一九二一年の報告と一九五三年の報告との間に、七つ報告が

出ている。

一九二二年の報告はブルースの「エヴェレスト攻撃」だが、ブルースは一八九三年にエヴェレスト遠征を提案したその張本人である。ヒマラヤについては彼こそはヤングハズバンドに次ぐ先達であり、印度との因縁の深さにおいても、ヤングハズバンドに次ぐものだといいついでいい。エヴェレスト遠征も、これはいよいよ真打が出た形となつたが、この第二回の遠征には、病氣のために第一回に参加出来なかつたジョージ・フィンチも加つており、隊員構成から見ても登山隊として一段と充実したものであつた。二万五千フィート以上のところでは人間は生きて行けないかも知れないなどといつていたのに、この遠征隊は酸素の補給なくしても人間は二万七千フィートの高さにたえうることを証明し、二万五千フィート以上の高さで夜営できることまで証明した。これはヒマラヤの登山史の上では特筆大書すべき発見だつた。前年の踏査隊の発見した登頂ルートも、見当は間違つていたことがわかつた。こんな点で、一九二二年の報告は、一口にいえば、大きな希望をもつて結ばれたものだが、今日のシエルパのように、特定現地の人夫を、予め訓練して、それを山の上での活動に参加させるということは、隊長ブルースの持論であり、この一九二二年の隊からそれが本格的に採用されている。シエルパを登山隊の要員に活用する方式も、このブルース隊から始まつたといつてよい。

一九二二年の報告については、それが日本の登山界に相当な影響を与えたということも附加えてよいかと思う。つまりそれが出たころ日本では横さんの帰朝を迎えて、冬山への関心が急激に高まり、そろそろヒマラヤの夢なども語り合い出していたのである。だからそのころ大学の山岳部にいたり、山岳部を卒業したりした年代の者ならば、——そしてその連中が、その頃の日本の冬期登山の中心でもあつたあの報告の四六ページに出ている隊員達の写真などを見ると、今でも興奮するのである。巻頭にグラヴィアで出ている第二登頂隊が下つてくるころの写真や、カヴァーにつかつた酸素マスクをつけて登つている写真なども、エヴェレストの写真の中では立派に古典的なものとなつてしまつたが、今日五十代の人々にはどれもこれも忘れ得ない図なのである。

この報告では全般的な報告を、例によつて隊長のブルースが書き、第一次の攻撃から第三次の攻撃までをそれぞれ、マロリー、フィンチ、マロリーの順で書いている。注目すべき点は附録の中で、チベットの自然の色彩について特に一節を与えて書いていることだ。筆者はゾマウエルだが、彼は高度順応、チベットの文化についてそれぞれの報告を書いて、そのほかに節を別にして色彩について報告しているのである。たとえばマカルは極く薄い黄土（オーカー）色の巨大な岩のピラミッドだとか、エヴェレストは二千七百フィートあたりから下は薄い黄褐

色（アンバー・ブラウン）だが、それから上になると、淡黄色の珪石層が横に走っている。などといった報告をしているのである。山に登るだけでなく、その山について、できるだけ多くの知識を得てきて広く分かちたいという気持は、自分自身が山についてどれほど深く研究し、また識りたく思っているかということ、大いに左右されるものだが、その意味でも、この報告が、チベットの色彩について、特に取上げている点を、ほくは非常に興味深く見るのである。自然誌の担当はロングスタフだが、動植物を論じている短い章の中に、一行が野生動物の収集にどれほど心を配っているかがよく出ているのも興味が深い。信仰から動物を殺さないという地方では、うっかり生きものを殺したりしては、二度と遠征隊はその土地に足を入れることが出来ない。隊長のブルースは、こんな点については極めて厳格だったということが、このロングスタフの報告の中に出ている。

× × ×

一九二四年の遠征報告は「エヴェレストへの戦い」という題で、隊長ノートンの名で出ている。マロリーとアーヴィンとを失った悲劇的な遠征の報告ではあるが、この遠征はこれまでの経験にさらに多くのものを加えた点で、収穫の極めて大きかったものであり、その報告も、一段と堂々たるものだ。

高度順応についても大いに自信を深め、ルートについてもか

なり見通しを持つて、今度こそはと心に期して臨んだこの年の遠征が、思いもかけぬ不幸な結果をもたらした事実は、何としてもヒマラヤに志を持つすべての人の心を厳しくしめつけた感がある。山はいよいよ真向から抵抗を示し出したかと思われた。正にこれは一つの戦いだとの感を深くしたのである。ことに山にもかからぬうちに隊長のブルース代将が病気のために隊の探険指揮をノートンに譲るのやむなきに立至るといつた不運があり、はじめから苦戦の色が濃厚だった。それにもかかわらず、ブルースに代つたノートンが美事に頭領としての手腕を発揮して、この隊が一糸乱れずに進退したという事実は、ヒマラヤ遠征の将来にたしかに一つの大きな可能性を開いた。英国からすれば、ヒマラヤ遠征では、ブルースはいわば取つておきの切札だったのだが、この切札が倒れてもよきリーダーを得れば、遠征隊は立派に行動するのだということを証明したことは、大きなプラスであつた。時代はヒングストン、ストラット、ロングスタフの時代から、さらに一つ新しい世代に移りつつあることを事実で物語つたのが、一九二四年の遠征だったといつてもよいかも知れない。今日までいわゆるヒマラヤ級として許されていた一群の先輩のほかに、まだまだ、人材はあるということになれば遠征の前途は洋々たるものがある。事実また英国のヒマラヤ遠征隊は、常に新しい、より若い人材を生み、育てながら、次から次へとバトンを渡して来ているのである。

報告の内容は大きく分けて三つの部分に分れている。第一部は記録的部分、第二部はマロリーの手紙を収録した部分で、第三部がこれまでの附録にあたる科学報告その他の部分となつてゐる。そしてこの巻で初めて地質および水河という節が独立し、酸素の問題がやはり独立の節として取扱われ、隊の組織の問題について詳しく触れている。準備の問題、人夫の問題、貨銀の問題がそれぞれ取上げられ、高地募營のやり方などについても報告が出ている。酸素問題や高度順応について新しい経験に基づく報告が載つてゐることはいうまでもない。エヴェレスト遠征も三度の試みによつて大体落着くところに落着いたといつてよいのであろうか、一九二四年の報告は、それまでの総ての経験を集大成し、その後の遠征への新しい基盤を提供した観がある。

それにしても隊長ブルースの予期しない事故のため、遠征の中途から重大な責任を負わされ、しかも山にかかつてからは、二八、二二六フィートという頂上直下のクローアールに迫つたノートンの偉らさはどんな讃辞を呈しても過分だとはいえない。その馬力にも驚くのではないが、何よりも人間的の偉らさに打たれるのである。惜しいことにこのノートンも昨年十一月三日亡くなつてしまつた。晩年は身体の具合が悪くて、中将で軍人の方も退いていたが、太平洋戦争の直前には香港の総督として近所まで来ていたこともあつた。日本が香港に攻め込ん

だ時に、ノートンはもう他に転じていたと聞いて胸をなでおろしたことだつたが、それに後は彼の名を聞くことも少く、この数年は専ら田舎住いといつた様子だつた。ヴェッターホルンのアルフレッド・ウィルスからすると孫に当り、奥さんはパストールだから夫婦とも山の方では名家の出だつた。ハントの「エヴェレスト登山」を読まれた方は、ハントがノートンの意見を極めて重く見て、最後のキャンプをうんと高いところまで上げなければならぬ、と決心した一節を憶えているに相違ない。ハント等にしては、先輩として意見を聞くエヴェレスタは、誰よりもまずノートンとロングスタフの二人だつたように見える。一八八四年生れだから七十になつたばかりだ。惜しい人を亡くしたものである。

一九二四年の報告はサマヴェルの写生が八枚色刷で入つてゐる点でも特長がある。この前の報告でチベットの色彩について語つたそのサマヴェルが、今度は、自分のスケッチで、実物の標本を示したわけだ。(ぼくはロンドンで彼のスケッチ展を見たことがあるが、今から考えれば話にならないような僅かなものを惜しんでいたら長蛇を逸した。水彩やパステルで、いずれもエヴェレスト遠征中の作品なのだつた。彼は多分これ売つて、印度で始めた施療病院の基金にでもしようとしたのであつたらう。ぼくにとつては生涯忘れられない痛恨事である。)

× × ×

一九二四年の遠征からかなり長い雌伏の時代が続いて、英国が四回目の遠征を出したのは一九三三年のことだったが、これだけ時間が経つと、何うしても、登場人物にも大きな変化が起らざるを得ない。可成振出しにもどつたといつた形でもある。

遠征の報告にしても、一応は歴史的の回顧をした上で始めなければならぬ。この点で、このラトレッジの「エヴェレスト・一九三三年」は、多少ハントの「登頂」と共通したものである。出版所がアーノルドからホッダー・アンド・スタウトンに移つた事情は別として、写真は総グラヴィアになり、本の作り方にもこれまでと變つたものがある。地図なども一段とよくなつてゐるが、総じていよいよまた、覚悟を新にして、このエヴェレストにぶつかつていくのだといつた意気込を感じさせるものがあるのである。

遠征としては、この年の試みは一九二四年の結果に加えるものは多くはなかつた。最も高く登つたスマイス達でも、ノートの達した高さを越えてはいない。しかし一つの記録としてはまことに楽しい記録となつてゐる。これは著者であるラトレッジの筆の力に帰すべきこともちろんだが、はるかに多く、彼の人柄によるというべきかも知れない。

遠征の中での特記すべき事柄は最後の段階でのスマイスの活躍や、ロングランドが八人のポーターをひきつれながら暴風の中をキャンプ六から五へと下つたことなどだろうが、今日から

見て何よりも興味のあるのは「回顧と展望」というエヴェレスト登頂の問題を論じている章である。一口にいえば、エヴェレストの問題解決の鍵はここに全部説明されてゐるといつてもいいのであつて、問題は、それだけのことをやつた時に、果して天候に恵まれるかどうかという切りつめたところに来てゐることがよくわかるのである。一九三三年の隊は実力としてはこれまででない水準に達してゐたといつてもよいかも知れない。しかも天気運は甚だよくなかつた。

第六キャンプから上に登つて、最後には一人になつて頂上のピラミッドの下のクローアールを渡つていつたスマイスの体験した不思議な経験なども、これまでのどのエヴェレストのどの文献にも出て来ていない物語だ。鬼気迫るとでもいうのか、暖い火の傍で読んでも、背中の寒い思いがする。それはたゞ恐ろしいとかいうのではない。それ程の高さが人の身心にどんな恐るべき重圧を与えるかを考へて、身の毛のよだつ思いがするといふことなのだ。

この報告も重要な科学方面の報告がつてゐるが、医学、植物誌、地質などの項目とならべて気象について独立の節を与へて觀察ならびに資料を載せてあるのを記しておく必要がある。他のいろいろの問題については、一つ一つ解決の見当がついていつて残るところはこの気象の問題一つになりつつある事情を、そのまま反映しているようにも見える。装備や輸送につい

ても独立の節を設けてあるが、この一九三三年の報告は、いよいよここでエヴェレストについての十余年間の経験をまとめ上げたといつた形で、現実のヒマラヤ登山という面からすれば、一九五三年のハントの著述を別にするならば、この一九三三年の報告とノートンの一九二四年の報告の二つは何としても徹底的に勉強しなければならぬものだといつてよいだろう。

× × ×

一九三三年の遠征が終つた時、すぐ続いて次の遠征を出したという希望は極めて強かつたようだがチベット側の態度がはつきりせず、一九三五年にようやく入国の許可が来た時には、モンズーン以前の遠征は、時間の関係から、もう出せなくなつてゐた。そこでヒマラヤ委員会はとりあえず小規模の遠征隊を出し、本格的な隊は一九三六年に出す方針をきめ、シプトンを選長に選んで、その隊の編成を委ねたのであつた。従つて、一九三五年の遠征は内容的には一九三三年の延長、または繰返えしてはないが、エヴェレスト遠征隊として数え上げる場合は当然これも一つの隊として入れて勘定しなければならぬ。

この隊の主要任務はエヴェレスト登頂ではなかつた。もちろん登れば登つていいにきまつてゐるが、第一の任務はモンズーン期間中の積雪状況を見ること、第二の任務は西側または西尾根からの登頂の可能性を見とけるといふ、この二つであつた。ドイツ隊のカンチエンジュンガなどの経験からして季節的

に、案外他の時期でも可能ではないかという考え方もあり、他方、これまでのノース・コルからのルートは何度も試みてゐるうちになかなか容易ならぬものだということもわかつて新しいルートの問題も出ていたからなのである。報告としては次の一九三六年の隊の報告の中の一章としてまとめてあるから、独立した形で出ていないだけで、欠けているわけではない。この踏査隊は軽装備の小遠征形式をとつて極めて身軽に動いてゐるという点で特筆すべきものだが、この点で、このシプトン隊は一九三八年のティルマン隊の前驅をなすものだといつていい。踏査隊と称しながら、この隊は二万フット以上の頂上を二十六も登つてゐる。しかもその内の二十四は初登頂だといふのだから美事な業績といわなければならない。

× × ×

一九三六年の報告はふたたびラトレッジの筆になる。題して「エヴェレスト・未完成のアドヴェンチュア」。経験という点では十二分の蓄積ができ、隊員としても優秀な腕をそろえ、あとは天候次第と思つて乗込んだその遠征隊が、その天候の点で慘憺たる目に遭つてゐるのだから、エヴェレストも恐ろしい山である。事実天氣運に恵まれなかつたことでは、この一九三六年の隊ほど不運な隊はこれまでになかつた。そして一たび氣運に見離されると、どんな強豪をそろえても齒がたたないといふのを、この遠征ほど厳しく示したものはない。

しかも報告としては、これが立派なものになつてゐることは、こうした遠征が、必ずしも、最後の登頂の目的を達するかどうかということによつて、その評価が、決るのではなく、隊員の質と水準とによつては、失敗した遠征もやはり立派な業績たりうることを反映するものだろう。山を知る人は、必ずそうした観点から、このまことに不運であつた隊の報告を読むと思ふし、また、この報告の半分を占める「反省」の章と科学報告の部分は、これだけでもヒマラヤ遠征の知識として大いに熟読する値打があるといつていい。気象、健康、生理、酸素、無電、採集と節の見出しを一見しただけでも、内容が報告ごとに移り変つてゐることもわかるし、遠征のたびごとに何か新しい資料なり観察なりが加つてゐる以上、見逃していくわけにはいかない。ところでラトレツジの「反省」の章は、問題の遠征の規模の問題について論じているのだからこの問題についての彼の見方は是非読んでおかなければならない。一口にいえばラトレツジは極端な大遠征を主張してゐるわけではないが、一九三六年程度の規模のものが、エヴェレストについては、最も適当なものだと考えてゐるのである。小規模の遠征は行動も復活だし経費もかからないし、いろいろの利点はあるが、それにもかかわらず、一つの目的をもつ遠征隊であれば、出来れば一人ではなくて二人のドクターがいるのが望ましいし、登頂隊員にして、万一の場合の予備員は持つべきであらうし、隊員の負担を

軽くして、最後までその精力を温存するためには、運送の仕事にはやはりそれ専門のトランスポート・オフィサーがいるべきだし、食物にしても、人によつては現地食だけでは無理なので、適当に按配しなければならぬというのがラトレツジの考えだ。一九三五年のシブトン隊の経験や一九三八年のティルマン隊の成績その他の各国小型遠征隊の目覚ましい業績にもかかわらず、このラトレツジの考え方は、大体において今日なお正統派的な立場を与えられていることは、現に一九五三年のハント隊が、その方式を踏襲してゐることもわかる。

× × ×

一九三八年の遠征はチベット側からする最後の試みとなつたものだ。この遠征は、隊長に選ばれたティルマンが思う存分小型遠征隊方式をとり、徹底的に小數精銳主義をとつたとともに特別な意味がある。

「馬の姿を見れば、その途端に旅人は歩けなくなつてしまふ」といふのはティルマンがこの本の冒頭に掲げているベンガルのことわざだが、ティルマンは美事に、彼自身の哲学をもつて、この一九三八年の遠征隊を編成し、動かしてゐる。たゞこの年も、一九三六年と同じように、天候の点では非常に運がなく、登頂隊は膝を没するような深雪に悩まされてゐる。従つて登山の上での優れた腕前を示したという以上に特筆すべきものがない。問題が段々狭められてきて、最後は、如何にして、頂上の

ピラミッドをどうして登るかだけの問題となつたと思つたら、今度は、そのピラミッドの足下にとりつくこと自体がなか／＼の大問題となつてしまつた。そしてその原因が、天候とあつては、如何なる精鋭も何とも出来ない。

しかし、それにもかゝらず、この報告がエヴェレスト文獻の中で極めて重要な地位を占めるのは、前にも述べたように、この遠征がこれまでのエヴェレスト遠征の伝統をすてゝ、敢然として小型遠征方式をとつたためである。これについてはティルマンが、この報告の序文において、その主張を開陳しているが、彼はこゝでシプトンと意見を同じくし、ラトレツジの考へ方に批判的であることをはつきりさせている。附録の第一についでいる地学協会での討論記録も、大いにこの問題を論じていて、甚だ痛快なものだ。ティルマンの議論をこの席で小型遠征隊論者の急先鋒でシプトンが大いに支持していることはもちろんだ。軽装、小數精銳主義論については、多少感情的なものもあり、また、その人の個人的傾向もこれに関係なしとはいへないが、何としてもこれまでのやり方を大名行列扱いして、こきおろしているのは痛快極らないし、これを将来のヒマラヤ遠征隊の姿を予言しているのだと見れば、おそらくは、これは正しい見方だといふのであろう。のみならず一方にはドイツ隊にむいても、またシプトンやティルマン自身にしても、こうした小型遠征で、立派な成果をあげているのだから、これはたゞ

の思いつきではなく、どうしても検討しなければならぬ事柄なのである。たゞ、多少とも年上の人達からすると、彼等がことごとくにドクター無用論を唱え、科学班排撃をやるのが、極論で、何としても不必要だということであつたらしい。しかしまた一方には、その頃の英国の事情には、到底大がりの遠征を出す余裕がなかつたという事実も考慮に入れておく必要がある。青年党の過激論だと危ぶみながらも、こうした別の事情から、シプトン・ティルマン式のやり方について、真面目な関心をみんなが払つたことも争えないように思うのである。

一九三八年の遠征は、内容的にはそんな型破りのものだったが、報告書も、うんと軽快になり、一挙に一六〇ページという小型のものになつた。出版元もケムブリッジ大学出版部に移されているが、一九三八年の報告が十年後の一九四八年によく本になつているところなども、当時の厳しい世の中の情勢を反映しているようで感慨が深い。

× × ×  
ハントはその「登頂」の第二章「問題」の中で、エヴェレストの問題を三つに大きく分けている。第一が高度の問題、第二が天候の状態、第三が山登りそのものゝ難しさ、というわけだ。高度の問題については永年の経験から、人間の高度順応力が相当なものであることはわかつたが、それにしても酸素の補給なしで二万九千フィートの高さに達しうるや否や疑問であ

つた。一九二四年にノートンが達した以上の高さには誰も登つていないからだ。従つて問題解決の方向は勢い酸素補給の方法の研究に集中せざるを得ない。天候については、最初考えていたよりも、問題は遙かに難しいことが、遠征を重ねれば重ねるほどわかつて来た。従つてことに気象に関しては、やはり、結局は運を天にまかすほかないというのが実状だった。第三の山の難しさについては、既に一九三五年の遠征隊が出たころから、論議があつた。つまり、最後の一千フィートは、最初考えていたよりも難物らしいということだった。従つて、出来れば、別の方面からのルートを探してみようという気持は出て来ていた。そしてこの点を追求することが、一九三五年の遠征隊の大きな任務となつたのであつた。たゞ、考えられていた西からのルートは現地で見たとこゝろでは期待に副うものではなかつた。従つて、この第三の問題については、残された途は、今までに現実には踏査していない、エヴェレスト南面にあたつて見ることもだつた。もつとも問題の南側はチベット国境の尾根筋に出れば見えるのであるから、マロリーなども北側から見ているので、その判定では、これまた一通りの難物ではないということだつたが、今となつては別の可能なルートを探すとすると、何としてもこの南面はネパール領からのものになるのであつた。たゞ、ネパールの政情は、この踏査を長く不可能にしていたのである。

第二次の世界戦争が終つた時の事情は以上のようなものであつた。しかも、戦後におけるヒマラヤの北側の政情の変化は、も早やチベットを廻つての遠征を再開することも出来ないような悲観すべき事態に立至つた。この時にネパールが国境を開放したということは、正にエヴェレスト遠征の前途に新生面を開いたものだつた。そして一九五一年のシプトンの踏査隊が、はじめてエヴェレストの南側のクーンブ氷河をさかのぼつて、その源流に踏込んだのである。甚だ可能性が少いと見られていたこの南側で、このシプトンの隊がアイスフォールを乗切つてウェスタン・クームの突端までの道を拓いて登つたという事実は世界登山界の大ニュースであつた。それに、南側から見たところでは、サウス・コルまでのルートも全然不可能なものとは考えられないという報告であつた。こうして、一九五二年のスイス隊の春秋両度の南からする試みとなり、最後に一九五三年のハント隊の登頂となつたのである。

シプトンの踏査隊については一つの報告が出ている。しかしそれはこれまでのものとは全く違つた、写真を主とするもので、本文はむしろその写真を説明するためのものゝようにさえ見える。難しい科学報告のようなものは一切なくて、記述もあつさりしたものだ。エヴェレストの問題も、最後のピークを登るかどうか、といつたいよく限定されたものになつた以上、議論は無用だということだろう。スイス隊の両度の試みは、一

九五二年のことで、極く近いことだから、そしていよく益々山登り一本といつた遠征だから、こゝでは触れないでもよいと思うが、こうしてエヴェレスト遠征の報告を一つ一つ眺めていると、一九五三年の遠征までに、どれだけの努力が積み重ねられ、そして、そのたびごとに、その努力の結果の経験知識が、如何に着実に記録としてのこされていつているかがわかるのであるが、三十余年にわたつて繰返えされたこのエヴェレストを目指しての遠征は、その一つ一つとしても遠征のモデルでありかつ全体としても正しい遠征のやりかたの見本を示すと同時に、その結果をその度に着実にまとめていつて、次の隊へとバトンを渡していつたやり方も、一つの模範的なやり方だといつていゝだろう。

ハント隊の位置は、こうしたエヴェレストのためにさへげられた長い間の、沢山の人の執心と努力とをよく理解することによつて、はじめて正しく識ることが出来るのである。そしてこのことは、ハント自身がくどいほど、その本の中で、くりかえしていることなのだ。

× × ×

ところで、ハントの「エヴェレスト登頂」は英国でもアメリカでも、いわゆるベストセラーになつたということだ、ベストセラーという点、ある意味では、ハントの「登頂」は、山登りに関心をもつものからすれば、実に面白い本だが、そして、た

とえ多少重く感じても、勉強するつもりで読まなければならぬと思うような本だが、まつたくの山に無縁の人に、これが如何に読まれるかは、大いに問題だろう。日本でもそうだし、この点では、英米でも同じだろうと思つていたが、英国やアメリカではこれがベストセラーになつたと聞かされると、やはり、これは読書界の相違から来るといわなければならぬ。

しかし日本版も、或る意味では非常な成功であつた。日本版の「エヴェレスト登頂」が四月末に並版が出て以来、並版と特製本とをあわせて三版一万数千部というものが消化されたということだ。山の仲間からいへばこのくらい売れるのは当然だといゝたいところだが、出版元の友人筋としては、すこぶるこれは意外とするところだつたらしい。イレクトロ・シエルなどと聞いても素人には一向わからないが、写真製版の原版は、わざわざ英国の版元から送られて来て、それで日本版の挿画を印刷したのだから、この点でも一つの特筆すべき事件だつた。色刷などは、アメリカ版などよりは優れている。ほかの国の訳本を手にしていないからわからないが、日本版は、確かに優れた出来であつたといつていゝ。

しかし本当のところをいうと、この「エヴェレスト登頂」がベストセラーになるような国柄にならないと、日本も、本格的なヒマラヤ遠征を出す段になるとまだ少し無理なのかも知れない。軍艦でも潜水艦でも一応は一等国なみのものは作つても、

いざ戦争になつてみると、押され続けて、最後は敗戦、といったようなことが、結局日本には近代科学は輸入されたが、その科学を生み、育てる過程の経験や勉強が蓄積されていなかったからだということをよく聞いたものだが、日本のヒマラヤ登山にも同じような弱さがあるのではないか、これは大いなる反省の題目であらう。

たゞその英国でも最初にエヴェレスト遠征を計画した一九二一年には、社会一般の関心は殆んど皆無で、費用の大部分を地学協会と山岳会とで折半して集め、その残余を版權料で埋めたほかに、一般社会からの寄附申込はほとんど全くなかつたというのである。しかも地学協会会長や、山岳会会長の名前で、大いに世間に訴えた結果が、それなのだ。ヤングハズバンドが書いているところでは、この勧請にこたえて寄附して来た総額は、わずかに十ポンドだというのだから、思い半ばにすぎることがある。

こんな話をきくとわれわれも決して悲観するに値しないことがわかる。要はどこまでも着実に、真面目に知識と経験とを積み重ね、区切り区切りで、それを整理し検討して、次の試みへの土台を作つて行くということだ。

× × ×

同じ「エヴェレスト」でも映画の方になると、はるかに多くの人々に接していることは、映画なる媒体の性格の然らしめる

ところだろうが、日本で映画の「エヴェレスト征服」を見た人の数は公開約五カ月の間に百五十万をこえるということだ。そのうちの半分は関東ならびに東北一帯で占めているとのことだが、その半分が関西、中国、四国をあわせただもので、さらに、それを大体三等分したものを九州、中部、北海道がそれぞれ占めているという見当だ。この数字は人口の分布とつきあわせてみると、何か面白い比較が出るかとも思うが、いずれにしても、こうした映画の成績は、その道の支人の既成観念を根本的にくつがえすものであつたということだ。もちろん、その後も映画は日本各地をうつつ廻っている。その後の数カ月を合せた一年間の数字はさらに大きいものに相違ない。そして、この映画が、日本の人々の眼を探険とか、遠征とかいうものに開いた功績にいたつては、まことに絶大なものがあつたといつていい。

エヴェレストの映画が東京で公開されたのは昨年の一月下旬のことだつた。

その以前に幾度びか小規模の試写会があつて、一月十七日には帝国劇場で「秩父宮記念会」主催の大試写会があつた。座席は一階も、二、三階も満員で、皇太子殿下が見えたりして、非常な盛会だつたが、この機会に特に英国の地学協会は隊長のサー・ジョン・ハントの次のようなメッセージを電報で寄せて来た。

一九五三年にエヴェレストが登頂されたというのは、長い年月にわたる、多くの人々の、結集された、幾多の努力の賜物でありました。私は皆さんがこの映画を見られるときに、一つの、十分に準備され、かつ鍛え上げられたチームが、彼等の同僚の二人のものを、頂上真近かまで進めるといふ任務において、その一人々々が、それぞれに、力を注いで援けたという点に、感銘を得られることを希望するのです。何か事故があつたり、病人が出たり、あるいは、これはもつとも大事な点ですが、最後の努力をする段階に達する前に、隊員の間私心が出るようなことがあつたならば、私達は成功しなかつたでしょう。この物語については、二つの著しい点を挙げる必要があるのですが、その第一は、私達のために与えられた、これまでの幾度びかの遠征——スイスならびに英国の——からの援助であります。私達は、この援助のおかげでもつて、自分達の遠征の準備を、十二分に、またきびしい経験によつて作られた確固たる基礎の上に仕上げることが出来たのです。その第二点は、これらの幾多の人々が今日まで一歩々々おし進めてきたこのアドヴェンチュアの、最後の仕上げをやるにあたつて、私達が完全な調和のうちに、力を協せ得たということです。昨年の夏エヴェレストに登つた私達は、ほかのたくさんの人々——その中には日本の友人をも含めて——が、やはり私達と同じように、エヴェレストのよう

な高い山々において、アドヴェンチュアとコムレイドシップとの比類なく、高い喜びを見出すことを望むものです。

ハントはその公式報告ともいふべき「エヴェレスト登頂」ではもちろんのことだが、何かの場合でも、幾度びとなく、同じようなことをいつているが、このメッセージは電報だもので限られた語数の中に圧縮され、それだけに、抑揚がはつきり出ていて興味が深い。つまり「エヴェレスト登頂」を書いたハントの気持は、煎じつめると、この一本の電報になるといつてもよいように思ふのである。

× × ×  
エヴェレストの頂上に登つた記録なのだから、「エヴェレスト登頂」という題は、極めて当り前の題だが、これが地球の第三の極であるそのエヴェレストに、三十余年前の苦心、努力、そして犠牲ののちに到達した、いわば二世代にまたがる宿願を成就した一大遠征の報告につけた題だということは面白いと思ふ。

現に最初にこの本の予告が「タイムス」の特別号に出た時、そこに謳われていた表題は「エヴェレスト征服」という表題だつた。そのころは一行はまだロンドンへ帰りついてはいなかつたと思ふが、いざ本が出て見ると、そこに書いてあるのが、この「エヴェレスト登頂」という表題なのであつた。

映画の方は「エヴェレスト征服」となつてゐる。アメリカ版も同じく「エヴェレスト征服」である。アメリカの読者は、西

劇部好みみの映画ファンとを同水準と見てやむを得ないということになった、のでもあるまいが、そこにアメリカと英国の行き方の違いのあることは否定できない。そして、山を知る人とは、ハントが「登頂」といつて「征服」といわなかつた立場に同感するに相違ない。

「山に登るということは人間が自己にうちかつことの象徴であり、神の創り給ひし天地の中における、人間の微小さの象徴である」

これはハントが、ほかの場合に書いている言葉だが、いかにも山をよく知つた人の言葉だと思ふ。

彼は「エヴェレストにおける勝利」という言葉はつかつていゝるが、この勝利は、いわば自己に対する勝利であつて、山に對してのものではない。山における難しい問題や、危険にうち勝つたことは間違いないが、それでも山を征服したのではない。征服したならば、山はそこでその人達の足下に膝をついてうづくまり、その神通力を失う筋書でなければならぬのだが、事実が、およそそれとは正反対であることは、その頂上にたつたヒラリーとテンジンがもつともよく知つてゐるはずだ。彼等は雪の中に小さな穴をほつて、そこに仏への献け物を埋め、十字架を入れてきてゐるのだ。

無私と決意がある限り、人々の精神は、どんな高いところにも登ることができる。

というのもハントの言葉だ。たゞ彼はこれに一つの条件をつけてゐる。

より高き聖靈のみちびきによつて

と。ヒマラヤをのぞいたことがない人でも、山を登つた人ならば、この気持はわかると思ふのである。

× × ×

最後に、これは蛇足かと思ふが、是非つけ加えたいのは、ハントの「登頂」の値打の半分はその附録にあるということだ。

一つの山の登頂の記録として、つまり、この登山を書いた文章としての本文の値打——文学的とでもいつた——が高く評価されるべきことはいふまでもない。しかし、それは記録文学的の意味であつて、あとからエヴェレストに登ろうと考へて読む人で、よもあれば別だが、そうでない限り、それから何か直接の實質の恩恵を期待することは出来ない——といつては明かにいすぎだが、極端にいえば、そんなこともいえるかも知れない。

しかしながら、この遠征の準備について、ハント達がどんな配慮をしたかとか、どんな道具を用意し、それをいかに現地に使つたかといふことは、これはどのヒマラヤ遠征にもすぐ応用の出来る経験なのだ。この意味からして「登頂」の本文の中の第二部「計画」——準備の一ならびに二——は、どんなヒマラヤ遠征の計画によつても必読の章であり、附録の大部分は再

誌、三読されなければならない。ハントはこゝで一九五三年の遠征が何故成功したかの全部の種明しをしているわけなのである。たゞ残念なのは、英国の場合当然のこととして、ハントがわざ／＼種明しをする程のこともあるまいと考えて、飛ばしてしまつたことで、われ／＼としては大切な点があることがあるのを忘れてはならない。またハントが軽くしか触れていないことで、日本の現状としては、大いに検討し学びとらねばならないことがあることを忘れてはならない。そして前にも書いたように、英国のエヴェレストの遠征がこゝまで来るのは三十年余りかゝつているということをおかなくてはならないということだ。

## 山 日 記

1956年版

12月上旬發賣豫定

來年版は全部内容を一新いたし、より使いよい便利なものにと編集室一同努力いたしております。

何卒かわらぬ御支援と御鞭撻を心よりお願い申し上げます。

山日記編集室

渡邊公平 松丸秀夫 藤井 健 大塚博美

大木保太郎 相蘇良正 皆川完一

## ヒマラヤン・ノーツ

### ナンガ・パルバート登頂

——一九五三年——

#### 1 ま え が き

ナンガ・パルバートもついに登頂された。ヒマラヤ山脈の西端に孤高を誇り、インダス河に面してそそり立つ、岩壁と氷雪のナンガ・パルバート（ナンガ・パルバートとはカシミール側の呼称で、サンスクリット語では裸身の峯（註1））は、八一二五メートル（註2）、世界第九位の高峯である。

この山は、北緯三五度一四分二一秒、東経七四度三五分二四秒で、大ヒマラヤ山脈の西の鎮として、カシミール山群に属している。

最初に攻撃を敢行したのは、一八九五年、英国の有名な登山家マンマリイである。ノーマン・コリー、ヘステインクス、ブルースとともに、東南面のルパル氷河に入った。この面は四一〇〇メートルの岩壁で、平均傾斜四七・五度、ヒマラヤ山中で

も、最も豪壮なきり立つた壁である。次の攻撃を西面に転じるため、マゼノ峠（五三六〇メートル）をこして、ディアミール溪谷に入った。谷にはディアミール氷河があり、上部はディアミール・フランケと呼ばれる岩壁である。ここでは人夫の病氣などで引返した。コリー等は谷筋を北方に向つたが、マンマリイはラキオト氷河にぬけるために、ディアミール氷河を登つたまま不帰の客となつたことは有名な悲劇の山の発端となつた。

それから約半世紀の歳月が流れ、一九三二年、独・米合同隊がメルクル指揮のもとに、この山の攻撃が開始されるまで静寂を保つていた。一九三四年のメルクル隊、一九三七年ヴィン隊、一九三八年バウアー隊、一九三九年アウフシュナイター隊と五回に亘るドイツの攻略は、この山があたかも宿命の敵であるごとく、執拗に繰返された。それには三四年のドレクセル（肺炎）、メルクル、ウエルツェンバッツハ、ヴィラントが嵐によ

る退却の途中に死去し、三七年のヴィーン、ハルトマン、ゲエツトナー、ムユルリッター、ヘップ、プエツフェル、フランクハウゼルはC・4で雪崩のために一擁に圧死せしめられ、シエルパなど多くのギセイ者を出したことからみて、当然のように思われ、ドイツが「宿命の山」といい、これにたち向う気も傾けるものがある。特にこの二回は戦前のドイツの総力を傾倒した攻撃であつたにもかかわらず、ヒマラヤ登山史上、最大の悲劇を出す惨事だつたのである。

ドイツのナンガ・バルバート遠征は、当初ウエルツェンバッハの計画によつた。彼は当時のマンマリイといわれるほどの天才的な登山家で、マンマリイのルートを踏襲せんとしたが、検討の結果ラキオト側、即ち北東ルルートが選ばれた。三三年には病後で参加不能、メルクルが隊長をつとめた。爾後三八年までは北東ルルートが選ばれ、三九年にはじめてデアミール側が偵察されたが、ルルートはあるが、安全性とシエルパ向きでないことが確認された。したがつて、一九五三年はたこえルルートが長くても、ドイツとして最も経験をつんだラキオト氷河が選ばれた。

こゝでは過去の遠征についてくどくどと書くのも煩しいので、第一表のように整理を試みた。詳しく知りたい方は文献(註3)を参照されたい。

註1 Nanga Parbat, Diamir, Diamir, or Deomir 著ナ

「山岳の王者」ともいわれている。(ディレンフルトによる)

註2 旧インド測量局の標高は 26,620 feet = 8114 m であるが、一九三四年フィンステルフルダー教授の再測量により 8125 m = 26,658 feet が確認された。即ち一メートル高くなつた。

註3

§ Norman Collie : Climbing on the Himalaya and other mountain ranges, 1902.

§ W. Merkl : The attack on Nanga Parbat, 1932.

H. J. V., 1933, pp. 65-74.

§ Herbert Kunigk : The German-American Himalayan Expedition 1932, A. J. No. 245, 1931, p.p. 192-200.

§ Fritz Bechold : Deutsche am Nanga Parbat. Der Angriff 1934. München : Bruckmann, 1935, s. 68.

§ R. Finsterwalder, usw. : Forschung am Nanga Parbat ; Deutsche Himalaya-Expedition 1934, Hannover : Helwingsche, 1935, s. 143.

§ Paul Bauer : Auf Kundfahrt im Himalaya. München : K. u. Hirth, 1937, s. 170.

§ P. Bauer : Nanga Parbat 1937. H. J. X. 1938, pp.

第一表 ナンガ・バルバート遠征隊

遠征年	1895	1932	1934	1937	1938	1939
月	5—7	5—8	5—7	5—7	6—8	6—7
国籍	英国	独・米合同	独・奥	独・奥	独・奥	奥
隊長	Mummery	W. Merkl	† Merkl	† K. Wien	P. Bauer	P. Aufschnaiter
隊員	J.N. Collie G. Hasting C.G. Bruce	P. Aschenbrenner F. Bechtold F. Wiessner F. Simon H. Kunitzk H. Hanberger R. Heron E. Knowlton	† Welzenbach † W. Wieland † A. Drexsel P. Müllritter F. Bechtold H. Hieronimus E. Schneider P. Aschenbrenner W. Bernard Finsterwalder W. Raechel P. Misch	† Hartman † A. Göttner † M. Pfeifer † P. Frankhauser † G. Hepp † P. Müllritter U. Luft K. Troll	F. Bechtold U. Luft H. Rebitsch H. Ruths L. Schmaderer S. Zuck	H. Harrer H. Lobenhoffer Lutz Chicken
連絡符號	—	R.N.D. Frier	Sangster	Smart	—	—
摘要 (遭難 場所)	Diamir gl.	Rakiot NE ridge. Rakiot-Peak などに登頂	Rakiot. NE ridge 前峯下の 7700 m に達す	Rakiot. Eiswand C. 4 (6185 m)	Rakiot Eiswand 7250 m まで試登	Diamir Flanke. 6100 m まで試登

145—158.

§ F. Bechtold : Nanga Parbat, 1938, A. J. No. 258, 1939, pp. 70—78.

§ P. Bauer : Nanga Parbat, 1938, H. J. XI, 1939, pp. 70—78.

§ L. Chicken : Nanga Parbat Reconnaissance ; H. J. XIV, 1947, pp. 53—58

§ Peter Aufschneider : Diamir side of Nanga Parbat, reconnaissance 1939, H. J. XIV, 1947, pp. 110—115.

## 2 攻撃準備

一九五三年のナンガ・バルバート隊は、正しくは独・墺連合故ウィリー・メルクル記念遠征隊という長つたらしい名をもつ。この計画は今回の隊長をつとめた、メルクルの義弟カール・ヘルリッヒコーフェルが資金の調達に当つた。また遠征準備後援管理局がもうけられ、ミュンヘン市長がその総裁となつた。ドイツ山岳会及びドイツ・ヒマラヤ財団は援助をしていないが、オースタリー山岳会、ミュンヘン支部としては助力している。遠征隊の顔ぶれは

隊長 カール・ヘルリッヒコーフェル博士。

Dr. Karl M. Herrigkoffer. ミュンヘン出身。

医師、三六歳。

副隊長

ワルター・フラウエンベルガー博士。

Dr. Walter Frauenberger. ヤント・ヨハン出身。

ボンガウ裁判所判事、四五歳

登攀指揮

ペーター・アッシュエンブレナー。

Peter Aschenbrenner. クフシュタイン出身。

ヴィルデン・カイザー山小屋管理人。

隊員

フリッツ・アウマン Fritz Aumann ミュンヘン出身。

BC管理人。無電技師、三六歳。

アルベルト・ビッターリング。Albert Bitterling. ベルヒテスガルテン出身。山案内人、氣象担当、

四二歳。

ハンス・エルトル。Hans Ertl. ミュンヘン出身。

ボリビヤ在任。カメラマン、四六歳。

ヘルマン・ブール。Hermann Buhl. インズブルック出身。二九歳。

クノー・ライナー。Kuno Rainer. インズブルック出身。両者は定評あるザイル仲間。三八歳。

オットー・ケンプター。Otto Kempter. ヘルマン・ケエレンスベルガー Hermann Kollensperger. とともにミュンヘン出身の二七歳の若者で、

ヒマラヤ後継者とされている。

今回は科学班は費用の関係で参加しなかつた(註4)。またいわゆるシェルパは使用できなかつた(註5)。それにパキスタンの入国許可が、ドイツ出発の間に許可されるなどの困難にあつた。それでも四月一七日にミュンヘンを出発し、ゼノアで、ロイド・トレスチノ所有のヴィクトリヤ号に乗船し、今どきめずらしい船旅をして、スエズ経由で四月三〇日朝カラチ港に到着した。出迎、税関などの手続きをすませて、鉄路をラワルピンディへ向い、こゝでも旅行許可やギルギットへの空輸などが大仕事であつた。五月六日、四台の飛行機でナンガを眺めながらギルギットに到達した。華やかな歓迎を独特の儀式でうけた。フンザ村の首長が一七人の高所人夫をつれてきた。五月八日いよいよラキオト溪谷をめざしてジープが出発した。が五台中四台が故障して、やはり馬や驢馬による輸送にきりかえ、二六三人の山の百姓達が五〇〇個の荷物をもつて、タリチーへむけて発足した。しかしスリナガルからバブザール峠やカムリ峠を越すよりはるかに能率的で、ギルギットからはタリチーまでが後もどりなだけで、これからラキオト橋でインダス河を渡つてタトー、メルヘンウィーゼをへてラキオト氷河に達する。人夫は梱包三二・五キロより背負えず、一行程の賃金は二五ルピーもするので、輸送費は莫大なものになつた。

五月一三日サープ達はラキオト橋を渡つて進んだ。メルヘンウィーゼはすでに昔日の面影をとどめないまでに荒されてい

た。五月一五日、フラウエンベルガーやブル達はベース・キャンブに達した。フンザの人夫はストライキをはじめた。こゝでタトーの人夫六〇名が加わる。一七日に遅れて出発したアツシェンブレンナーが到着して、BCや作戦計画に筋金が入る。しかし天候は午前中は晴れているが、午後になると雪や雨が降り、荒れだしてきて気温が急降する。

BCでは攻撃準備が行われた。梱包は二五キロから一八キロに軽減しなければならなかつた。またフンザの人夫のストライキが行われ五名が解雇された(註6)。

五月二六日いよいよC1の偵察がはじめられた。五三年は積雪も多くて悪く、天候も不安定で、たえず雪崩の心配があつた。いよいよ頂上突撃隊も稼動して高所幕営の建設にのり出した。その幕営数と標高および到達日時は左記の通りである。

BC	四〇〇〇 m	五月一五日
C1	四四五〇 m	五月二六日
C2	五三二〇 m	五月三〇日
C3	六二〇〇 m	六月一日
C4	六七〇〇 m	六月一九日
C5	六九〇〇 m	七月二日

C3は前進根拠地で、主幕営間の連絡は携帯ラジオが用いられた。ルートは一九三四年を踏襲したが、幕営距離は少しのばされている。即ちC5は前の遠征隊のC6(ラキオト氷壁の直

下六七〇〇m)に相当する。毎日の行動は早朝から行われ、日中の気温は三五—四〇度、夜間は零下二〇度。六月一七日にエヴェレスト登頂のニュースが伝えられ、全員の志気があがる。一九日にはライナーが発熱してBCで静養。二五日にはプール、ケンプターのコンビがラキオト・ピークに登頂。さらに東稜の「ムーア人の頭」までラッセルをする。六月二七日にはモンスーンの雲が流れ始める。翌日はラキオト氷壁は膝までの新雪に悩み、ケンプターは不満をいい出す。各幕営に食糧は豊富だが、遅々とした登高ぶりで、隊員も人夫も疲れたし休養が必要になる。二九日はC3で休息。かくして第一次の攻撃を中止するようにBCから指令が発せられる。ところが六月三〇日は快晴で夜中に一陣の風とともに天候は急変した。満天の星は快晴の前兆を示し、湿度は五〇パーセントから、翌日は二五パーセントにまで下つた。C3では快晴期がきたものとして、BCを説得し、七月一日を期して頂上攻撃を敢行することに決した。この頂上攻撃のプランは、三四年の駿足エルウィン・シュナイダーが立案したもので、「最終幕営を東稜の最低鞍部に設け、そこから最良状態にある一ザイル組が、人夫をつれずに前峯の近くに天幕または雪洞をもうけて頂上へ突撃する」というのである。実際上はC3からC5をへて頂上登攀が行われた。

#### 註4

地質学者クラール博士と測地学者ロイス博士が予定されていた。隊長は「ナンガでは科学的成果は大して上

つていないと非難している人々は、我々に科学費を出すことを断つたドイツ学会の会員達である」と皮肉つてい

#### 註5

遠征隊員に予定されていた若者、ヘルバート・エシュナーがダーシリンに飛んで五名のシェルパを約束した。サーダーはパサン・ダワ・ラマで五名をつれてきたが契約が成立せずに帰国したという。

#### 註6

このストライキは食糧改善、賃金値上、衣服の増加と荷物の軽減で、一日かかつて解決した。解雇された五名は帰村後強制労働に服せしめられた。

### 3 登 頂

七月二日 ケンプターはC3からC5に入る。フラウエンベルガー等はフンザの人夫をつれてラキオト峯西壁を横断してC5をサポート。C5はムーア人の頭(註7)を越した東稜の最低鞍部にもうけられた。C5には突撃隊ヘルマン・プールとオットー・ケンプターが泊る(註8)。前夜もそうだが二日から三日にかけての夜もプールは一寸眠っただけで攻撃準備をした。夜中に荒れた風に対して天幕の補強をした。

七月三日という日は一分一秒たりとも無駄にしてはならないというのが、隊と彼の信念であつた。午前一時、ケンプターを起しにかつたがまだ早すぎるといつて起きない。「三時には

どんなことがあつても出発するぞ、もし君がその時準備が出来ていないなら、俺一人ででも行く」と気合を入れる。プールの荷はふくれたので、栄養弁当はケンプターのザックに入れる。

これが後で大変な失敗になつたが……。二時にケンプターが起きる。プールはラツセルがあるからと三時(註9・10)に天幕を出発。晴れわたつた星空と利鎌の月がかり、風はないが寒い。稜線の雪はしまつてアイゼンはよくきく。シルバーザツテルへのトラバースの始まるところで休む、午前五時。K2、マツシヤブルム、ラカボシが朝陽をうけて見はるかせる。トラバースは雪が固く着氷もあり、ザツテルの上に立つたのが午前七時。こゝから長さ三キロのプラトール(上部大雪原)が始まる。高度七四〇〇m、こゝまでは調子よく一步二呼吸ぐらい。ゆるい登りで前峯近くでせり上り比高五〇〇m。硬雪で一mほどのスカブラは階段を歩くみたいに歩きにくい。プールはこゝまでは高度の影響がみられなかつたが、七五〇〇mで顕著に呼吸困難が感じられた。シルバーザツテルの水平線に人影が黒点となつて見えた。が間もなく消えてしまう。前峯にかゝる前の急斜面にザックを残す。夕刻までには帰れると思つたので、アノラツクに旗・写真機・手袋・スキー両杖・ペルヴィイチン(註11)・ココア入り水筒・凍傷防止用バズーチンとピツケルを携行した。ポケットにはチョコレートと乾果物があつた。

太陽はかんかん照りで空気が乾燥し、風はない。ペルヴィイチ

ンをとる。前峯はダイヤモンド側をまき気味に急峻な岩場をバツイン・シャルテ(七八一二m)に下る、午後二時。頂上までの比高三〇〇m、こゝから肩(八〇七〇m)をこすのは、ルート中の最悪物である。プールは疲れきつていたのでペルヴィイチン二錠をのむ。やや元気をとりもどして、突起の岩場をひたすら登り続ける(註12)。一〇mの一枚岩につき当る。これを全身のエネルギーをふりしぼつて山稜に出る。肩にたつ——午後六時。最後の頂上への登りは岩の堆積で一〇〇mの一步一步が忍耐の極致だつた。スキー杖を残して、殆んど四ツ這いになつて登る。頂上は岩の上に二mの雪が積つた台地だつた——時に午後七時。

勝利の喜びもない。勝者だという自覚もない。ただ、最高点に在るのだ。もうこれ以上登る苦勞がないということだけが悦びだ。とプールは語つている。ピツケルに旗をつけて、頂上につきさして写真をとる。まさに陽が沈もうとした巨大な影がプラトールにうつる(註13)。展望はすばらしい。ピツケルを頂上に残し、七時一〇分下降にうつる。陽のあるうちに出来るだけ下降することだ。ダイヤモンド側壁をからむ。運の悪いことに氷壁の途中で、右足のアイゼンが抜けて流れ出す。アイゼンはつかまえたが縮革を失う。片足のアイゼンをたよりに下降をつづけ、頂上から一五〇m下つたとき、すでに夜の闇が迫り、近くの五〇度の傾斜をもつ岩場に身体をもたれ、右手で確りホ

ールドを掴んで夜をむかえた。ツェルトもルックザックもない、着のみのままの八千メートルのビバーク。睡け覚しにバズーチンを数銃のんだ。

九時、最後の薄明りが西の空に消える。空気も静かだった。星空が拡がり天の川が大空にたなびく。寒さにふるえる。細い録のような月が出た。

七月四日、四時頃ものが見え出すと歩きはじめる。フェルトをはったゴム底靴も凍つて足は無感覚。岩場の小さい手掛りをつかむとき手袋をとつたが、どこかで失う。ここら当りから幻覚にとりつかれる。誰かと歩いている感じがする。やつとバズーチン・シャルテに達した——正午。ディアミール鞍部につきやつとプラトーに出る。右に折れてザツクをさがす。やつと見つけてお粥をつくる。岩を見ても人影に見え、誰かがヘルマンと——呼ぶ幻覚がひどくなる。ペルヴィチンを三銃のむ。やつと——呼ぶ幻覚がひどくなる。午後五時三〇分。C5のことでシルバーザツテルにつく——午後五時三〇分。C5の天幕のそばに二人の男が立っていた。それに力づけられてどんどん降る。フラウエンベルガーとエルトルだ。早速飲物と酸素をもらい、右足の凍傷の手当がはじまる。BCにはすぐに連絡がつく。小さいC5でブルーは登頂の話をしやべる。

この日、フラウエンベルガーは一九三四年に死んだメルクル達の小さな記念碑を、ムーア人の頭即ちメルクル岩にとりつけた。

七月五日 ブールは夕方近くにC3につき、七日にBCに到着した。彼の凍傷は右足の二本の指を半分まで切断するまでヒドクなつていた。七月一日に本格的なモンスーンが来襲して、ドシャ降りの雨中でBCを撤収した。ブールは凍傷のためラキオト橋までタンカでおろされた。ラキオト橋よりジープでギルギットに向つた。往路見向きもしなかつた村民も楽隊を出して遠征隊を歓迎した。

帰路は八月一二日カラチ発の船便で帰る筈であつたが、各自空いている飛行機で帰つた。

註7 「モーレンコップ」といわれた東稜の黒い一五mの花崗岩峰で、メルクルの死体が氷雪下に収容されている。

六月一九日アツシエンプレナーにより「メルクル・シユタイン」と命名された。

註8 このときの隊員の配置は隊長の下降命令があつたので、C4フラウエンベルガーとエルトル。他は全員BCもし荒れたら再び三四年の二の舞を演じたらう。

註9 ブールとケンプターの出発の時刻が合致しない。ケンプターの語つたザツテルまでの行動は次の通り。

「一時にブールが僕を起した。二時に彼の出発準備完了。その頃僕は起き、出かけられるようになったのが三時。ブールの足跡を伝つて、七時頃シルバーザツテル着。ブールは一時間ほど先を進んでいる。一寸休息した。

再び歩き出した時ブールはプラトリーの端に黒点に見えた。スカプラ上の前進は極端に困難。次に休んだ時に一時間ほど眠った。そのために消耗して一歩も前進できなくなつた。彼の帰りを一七時までまつたが、帰らないのでやむなくC5へ下つた。」

註10 出発時刻はケンプターによればブールは午前二時すぎ、隊長は三時、ブール自身は三時三〇分という。C4のフラウエンベルガーは七時にブール、七時四五分にケンプターがシルベル・ザツテルに立つたのを確認している。これは突撃隊の陳述に一致している。ブールはケンプターより一時間前に出たことは確実。

C5からザツテルまで比高五〇〇mで、ブールによれば三・三〇分、ケンプターによれば約五時間。三四年のC7はザツテルまで三〇〇m、水平距離五〇〇m進んだ点で、ザツテルまで三・一五分を要している。また夜明けの状態から考えると、四時に明るくなるからブールの言葉が合致する。従つてブールは三時、ケンプターは四時頃出発したと思う。

註11 ペルヴィチン(Pervin)は *Ephedrin helvetica* から抽出し、エフェドリンとも共存する。別名ヒロポン。

註12 この岩場の悪さはアルプスの岩の困難さの等級で四—五級(むずかしい—大変むずかしい)である。

註13 登頂を証明する写真は一枚しかない。「ナンガ・バルバート・一九五三」の第十図版の天然色写真で、ピツケルに旗をつけ頂上の雪を前景に、背後のシルバーザツテルに落陽の山影がさしている。遠くカラコラムの山脈が写っている。写真集の図版(白黒)ではこれほど鮮明ではない。ピツケルが頂上に残っているから、第二登によつて証明されよう。

#### 4 あとがき

本遠征隊については興味をひく点が多い。その若干のべておく。

##### (1) 遠征隊の構成

成立・資金等については前述した。独・墺連合といつても、お膳立はすべて隊長がしたもので、彼は故メルクル記念遠征隊と銘をうつたことが使命であつたにしろ、この笑顔を見せないメランコリックな隊長は、今までの隊長のような登山家であつたとは思われない。この点でドイツ側の援助がないと思われ、登攀に関する主導権が完全にといつてよいほどオースタリー側に握られてしまつた。アッシェンブレンナーはポケットの中にナンガ・バルバートをしまつているといわれるほどの登攀指揮をしたが、フラウエンベルガーやブールは終始隊の先頭にあつて活躍をした。全体として隊の活動はチームワークが強くな

く、統制が判然としない結果となつた。シエルパを使用できなかったことも活動力をにぶらせている。帰国後の仲間割れも、主因がはつきりしないが、独、塊間や隊員間のことであつたろう。

## (2) 単独登頂と救援

プールが八千メートルに単独登頂したことは、めずらしい。この要因として考えられることは、

1 プールは故郷の山でも、キバツな単独行者として知られている。

2 オースタリー側の優位を示そうとした。

3 ザイル組として不満があつたのではないか。

などが考えられる。いずれにしてもプールは「登山家として、たとえそれが故郷の山におけるどんな頂上であつたとしても、ともかく頂上に登ることが問題なのだ。ましてや八千メートルの未登頂を登らねばおもしろいのか」といつている点からも、頂上第一主義という衝動は常に意識されていた。また大胆でずばぬけた闘志と体力をもつていたことも登頂を可能ならしめたものである。

「登山家の問題に関する限りプールには心配はいらない。彼はツェルトザックと十分な食糧をもつており、それに天候は快晴で、おそらくナンガ・パルバートでは十年に一度ぐらいしかない天気だ」と隊長は、たかをくくっているが、これはプールの

の行為を直接に見ていない感想である。プールはツェルトもルックザックも食糧も酸素ももたずに、五〇度の岩場で、鳥よりまずいビバークをしていたのだ。「八千メートルの高さでビバークするのに殆んど風のない夜を与えられたことは、ヒマラヤ登山の歴史で殆んど再現されないのであろう」と隊長はいつているが、一方「誰も口に出しては言わないが、八千メートルを一人で行くことは無茶だ。当時の最大の登山家マンマリイさえも、これに似た単独行で同じこの山で命を失つた」と隊長はビツタリングと語っているが、これが本音であつたらう。プールが語つた行動以外の精神の問題はのべられていないが、ここにこそ彼をしてラツシユアタックにおもむかしめた要因がひそんでいる。天候にめぐまれた登頂ではあるが、常人では無謀に近い暴挙である点は確認しておくべきだ。

七月三日プールが単独登頂していることは確実なのに、四日C5の連中は一步も救援におもむかないで、メルクル岩に記念碑をとりつけている。なるほど人夫は動かず、ケンプターは下へ降り、酸素をとりエルトルがC4に下る。残りはフラウエンベルガーだけとなるが、天候はよいのだから、彼は登高をして救援天幕を進めるか、少くとも登るのが当然だつたと思う。午後四時にC4から酸素が上つてきたが、註8にもこのべた通り、この時の人員配置はC4からC1まで無人だつたことは異例の攻撃だつたにしろ、BCの連中も呑気すぎる。ケンプター

がC4に下りなくてC5を固め、他は救援をするのが当然のよ  
うな気がする。こゝにも割切れない運営のまささを見出す。

(3) 人 夫

人夫を頂上攻撃に使用しないのは当初からの計画であつた。

隊長は「ナンガ・バルバートは八千メートル級では比較的易し  
い山で、他の山は比較できないほどむずかしい。ナンガではフ  
ンザ人でも充分使える」といい、K2では充分訓練した最良の  
人夫を使う必要があるといつているが、これは全面的に立証さ  
れているわけではない。

「フンザ人はギルギット北方の二五〇〇mの高地の住民であ  
る。体格は立派だが雪と岩の訓練はされていない。フラウエン  
ベルガーの努力によつて、アリ、ハジなどがC5まで行つてい  
る。彼等は遠征隊に協力することを、儀式でさせられ、回教徒  
の断食を破つてもよいといわれたがC1以上には無理であつ  
た。タトーの人夫は強制命令でかり出された。

(4) 天 候

一九五三年のヒマラヤの天候は異例的に良好であつた。この  
ためにエヴェレストや、ナンガが登頂できた。この間は約四五  
日開いている。

五月二十日頃は天候が極めて不安定で、いわゆる春の天候で  
あつた。五月には多大の降雪が予想されていたので、余り早く  
高所幕営を設営することは、時間と体力を損失するので、休養

と準備に当てられ、不意に訪れる快晴期を利用することにして  
いた。最近十年間の統計では、六月一五日より七月六日までの  
三週間が最も天候がよく、モンズーンは通常七月一日にくる。  
最も激しい嵐は九月一五日にきている。従つて本格的な登攀は  
六月末——七月上旬に決戦期となる。これは予想と合致してい  
た。気象観測はビッターリングが行い、観測結果、ジェット気  
流、天気の変り、モンズーン雲の進行などを記録した。報  
告書ではこれらの結果をフーロン教授がまとめている。

(5) 装 備

1 アンラックは背中にツェルトザックや非常食糧、ホウタ  
イ材料を入れる包がつけられている。これは前の方にも入るよ  
うだ。

2 ゴム底靴はルクラインが用いられた。トリコニー・ゲ  
ートル。フェルト内張靴。

3 スポンジ・ゴム・マットレス。空気マットレス。ナイロ  
ン類似品はドイツではベルロンといわれ、8ミリザイル、シェ  
ラーフザック、ルックザック、手袋、靴カバーに用いられた。  
ペルロン天幕は高所用には使っていない(乾燥雪に適し、雨や  
湿雪には不適)。

4 酸素、ドレエガー装置。

5 携帯ラジオ、テレフンケン・テレポルトII装置を用い  
た。

最後に一つエピソードを紹介して筆をおく。

五月二四日全員がBCに移った。六月一〇日に突然一人の訪問客が現われた。これがルドルフ・ロットである。遠征隊とはカラチ附近で逢っているが病気をして来るのが遅れた。

彼は南独アウグスブルグから冒険的な旅行をしてナンガ・バルバートにやつてきた熱狂的なファンである。単身徒歩で、三キロのザックを背に、カーガン溪谷にそい、バプザール峠をこしてやつてきたのだ。目的はBCにきて隊員をケケレイすることだつたらしい。二週間滞在してアウマンの代理をした。いかにもドイツ人らしい、またヒマラヤ病患者がいることが面白い。

なおベルリン地理学協会では、本遠征隊に対し、フェルディナント・フォン・リヒトホーフエン金牌を送つてその成果を祝した。

本文は下記の参考文献によつたが、谷博氏及び京都府立医大の方々、京都岳連山本勇太郎氏ならびに東大・井上重治君の強力な御助力をいただいてまとめたものである。こゝに感謝を表しておく。

### 参考文献

1. Karl M. Herrligkoffer : Nanga Parbat 1953. München : Lehmanns. 1953-Dez. s. 192. 10 Taf. + 66 Abb.
2. Karl M. Herrligkoffer : Im Banne des Nanga Parbat. (Bildband) München : Lehmanns 1953-Sept. s. 80.
3. Karl M. Herrligkoffer : Tagebuchnotizen. Hann : Für Euch-Bucherei, 1953. s. 78.
4. Karl M. Herrligkoffer : Sieg über den Nanga Parbat. Hann : Für Euch-Bucherei, Heft 10, 1953. s. 31.
5. Karl M. Herrligkoffer : Nanga Parbat. Han : Für E.B. 1952. s. 32.
6. G.O. Dyhrenfuth : Zum dritten Pol. München : Nymphenburger. 1952 s. 195—225. Photo u. Karte.
7. G.O. Dyhrenfuth : Das Buch vom Nanga Parbat. München : Nymphenburger, 1954. s. 224.
8. A. Werner : Weg und Ziele : Nanga Parbat, 1895—1953. Verlag für Jugend und Volk. 1954. s. 176.
9. "Der Bergsteiger" Nanga Parbat. 20 J. 12 Heft. 1954-Sept. s. 445-496.

(一九五四・八・二四)

田中栄蔵

## 戦後における学生登山

### 目次

- 一、戦後八年……………慶応山岳部…三〇一
  - 二、後立連峰を中心として…大阪大学山岳部…三〇六
  - 三、戦後の記録……………早大山岳部…三四
  - 四、再出発の断面……………金坂一郎…三〇
- 日大山岳部の場合——

## 戦後八年

慶応山岳部

敗戦直後の不自由の中にあつて事情の許される部員数名が集り、山岳部の扉は再び開かれ様とした。当時、三田のルームも日吉のルームも戦災の為に無くなつていたから、日吉の野球部の合宿所を根城にしてこれからの自分達の行き方に就いて話しあつた。我々は如何にして生くべきか、これからの日本を想い、又我々自身を考えるならば幸にして学窓に残ることを許された人々が集り、直ちに部を再開し我々の信ずべき山登りに精進すべきであるとした。

帰り来つた極く僅かの人々に依り疎開先から道具、図書類が持ち帰られ、各部員の家に分散して保管整理が行われた。そして不自由の中にも細々乍ら山登りが再開されたのである。

然し帰り得た人々の内、戦前の山登りを経験し、盛んな時代の部の雰囲気を知っている者は僅か数名に過ぎなかつたので、再出発に当つては如何にして後進に伝えて行くか、ということが第一に考えられねばならなかつた。

比較的恵まれた環境下に於て他に思い煩う事なく、年間百余日を共に山行し、その間に巧まずして伝つて行つたものを、少数部員が而も極く限られた条件の下にどうして伝えて

行くべきか、自然のまま後進の人々の思うに任せつゝ各個人の山登りを続けて行くか、逆に総てを統合統一した動きに持つて行くか、或いは次に部を担うべき年次の人に重点を置いて十二分に鍛えあげて行くか、これらが惟われ考え抜かれた末、最後の案が実行に移されて行つた。

当時、戦後の不安な社会状態の中にあつた我々は、都会の生活を考え然る後山登りの為の金策、食糧、切符の確保等反社会的と思はれることをせねばならなかつた。この矛盾を乗り越えて行く為に得た結論は、斯かる事情の下に在つても敢えて行うに価する山登りをしなればならぬということであつた。しかも数多く出ることが許されぬ状態であつたからどんなに小さな簡単な山登りであつても、そこに何らかの目的を見出し又自らを内面的に苦しめて行かねば、自分自身に相済まぬ様な雰囲気包まれて行つた。日常の生活、部を通じての山登りの生活、これらは少しも離して考えることの出来ぬものとなつた。我々の行動は他から律せられることが少しも無かつた。だから自らの気の済むまで、安心の出来るまで各人各様夫々の境遇に従つて自身を掘り下げ鍛えて、或る者は極く自然に、或る者は苦しみ叫び乍らその目的に向つたのである。そして心の重みに耐えられぬ二三の人々が去つて行かねばならなかつたのである。

この様なわけで我々の当時開いていた研究会なり、検討会は確かに恐しいまでにつきつめた議論が出、或いは自己反省

の場所となつてしまつたのである。当時たま／＼出席された親しい先輩達から「お通夜の様じやないか、若い者の元気が無い」と再三言われたが、当時の部員としてみれば或いはスポーツ登山としての本末顛倒であつたかも知れぬが「悔の全く無い山登り」の為には第一に山登り以前の、或いは山登りと結びついた都会の生活そのものの充実の上にこそ自分自身のより良き山登りがあるのだと信じていたのである。だから検討会に於ても総ての事柄が反省の対象となり、各人各様、己れをつきつめた姿をさらけ出した結果、先輩達の言われる様な抹茶臭い雰囲気となつたのではあつたが、その当時にしてみれば力一杯のものであつたのだ。

廿一年秋頃から新しい若い人々が入り始めたが部の指導方針は少しも変らず、最も望むことが強く出ていたから入部はしたもののルームの雰囲気のものかに耐えられず去つて行く人が多かつた。止めて了わないうまでも気分には馴染む迄には相当の時間を要したと思はれる。その後上の人々が卒業するに連れて技術的な低下は激しくなり総合的実行力は減少の一途を辿つて行つた。そして若い人々の間に於て行動よりも借り物の理屈が先に立ち過ぎて、やゝもすると足が地に着かず又頭上に重石の感ぜられる様な傾向となつた。この危機に如何にして部の伝統を守り抜き、又如何にして自身の落ち込みつつある苦しみから離脱せねばならぬか、斯くして我々は次の如く考えるに到つたのであつた。

部の伝統の継承とは何か、ルームというものはその時代時代に於て、又それを構成している人々の総合的な能力に依つてその時々々の雰囲気も違えば山登りの方法も違い、又考え方も違ふであろう。只どの様な考え方、方法でも良いが偽りの無い魂を以て自己の定めた途を切り開いて行くということ、この気持が最後の一人にでも伝つて行くならば伝統は受け継がれたのではないか、だから現在我々が落ち込もうとしているやゝもすれば形に囚われた高い技術を駆使した山登り丈が、真の部の行き方ではないのだ。それよりもむしろ自己の総合的な能力に十分適合した我々が心からやり度いと思う行き方の方が、より純粹であり、より良い形で伝統を継いだ事になるのではないか、その為に今後の部の主流の行き方が若しヒルワンディングの様なものに變つて了つたとしてもそれで良いのではなからうかと。斯くして廿二年度は終つた。

戦前に継がる唯一の先輩を送り出した後は、戦後僅か三年間の山歴しかない少数の若輩が自立独歩せねばならぬ立場に置かれたのである。正常な時代ならば予科の大將として己れの欲する自由な山登りをして居れば良いものが、一躍部の総てを背負い、その上に新制高校までも従えて行かねばならなくなつた。見出し得た活路は唯一つ、即ち素直に自分をみつめ山登りの第一歩からやり直し己の基盤を確立し、一人立ちの出来るメンバーを一刻も早く又一人でも多く作つて行くことであつた。研究会に於ては裝備・技術・氣象・雪崩等々極

く初歩からやり直した。これはやゝもすれば冬の稜高に引張り上げられて一応の技術はこなせてもポツカをすれば直ぐ顎を出す。壁や稜がどうだと生意気は言つても満足に火も燃せない等というくらいを極力さけて行こうとする意欲の表われであつたのだ。操り人形の糸の切れた悲劇を生んではならぬのだ。大地は自らの足でこそ踏みしめ得るのだ。

茲に半ば必然的に南アルプスに対する計画が生れた。あの広大な未開の山々で我々は先ず歩こう。そして馬力を養ひ広い意味の山登りを体得し、総てを自分のものにしようとした。勿論恒例の穂高岳の合宿・スキー合宿等は無理をしつても行われたが、主体は南アルプスを目ざして登高を続けた。苦難な道とも思えた。経済的な事情から山行を中止しなければならぬ事もあり、凍傷・スリップ等の事故も発生した。部は幾度か叩きのめされた。そして遂には先輩達から一時閉鎖してはという様な話までが飛び出すこともあつたが、若い部員にしてみればその一つ／＼が凡ゆる意味での切磋琢磨であり、それにも増して次の飛躍への地固めでもあつたのではなからうか。

南アルプスの中に入り闇中摸索を続けていた時、灯の如く現われたのが積雪期南ア全縦走の計画であつた。既に積雪期に五回他の季節に十三回、日数にして一九〇日延人員五十六名の足跡を残した南アに於て、何らかの形で自分達の力を結集させてみたかつた。それに加えて初踏破と言う事が総ての

困難を押し切つて部全体を引きずり込んで行つた。当時のリーダーが述べた言葉がその間の事情を明らかにしている。

「……然し一面、我々の登山技術に対する（これは御山に對する事とも言えるが）考えが変化するにつれて、又、新しい目で南アルプスを見出したのである。そしてその山行を重ねるにつれて何か物心両面の、また好んで歩いた南に對する一つの決算を、また何か自分等の山行に一つのはつきりした一線が欲しかつたのである。そして部を挙げて一つの目的に精進する所に何か現状から一段と脱皮する糸口があるのではないかと考えたのである。」

そして縦走は行われ、ともかく積雪期（三月）の南アルプスは初踏破された。が然し三伏サボート隊のリーダーの遭難死という余りにも尊い犠牲の上に立つ山行であつたのだ。遭難が極く初歩的な失策から起つたものであつただけに部の受けた打撃は大きく、且つ又その教訓の大きかつたのも当然である。

南ア縦走を終つて当然部員の眼は北アルプスに転じられた。一つの大計画を曲りなりに遂行し終つた事は、その後部員に大きな自信と包容力とを与え、漸く部の再建も軌道に乗つたかに感じられた。昭和廿五年、部員の増加と共に社会の種々な事情も好転の兆を見せ、従つて今迄の觀念的な部面の先行した登山の殻は破られ、のび／＼とした山行が極く自然に行われる様になつた。一年を穂高・槍ヶ岳周辺に登り、

冬には久方振りに西穂高岳から奥穂高岳への極地法登山を展開して、前年に続いて部の綜合力に自信を深めたのであつた。然し翌二十六年には一度に五人の卒業生を送り出し、僅かに三人の三年生が最高責任を負うことになつた。しかも前年から新学制となつた為、今迄の子科本科を通じ六年間の部生活も一挙に四年に切り下げられて、六年に匹敵する勉強を四年で終らねばならず、最上級者の心労は並々でなかつた。技術面の低下が目立つのは致し方のない事実で、夏山等では見えない細かい失策が冬山では靦面に表われ、北穂高の前進キャンプでは散々な目に逢つて退却して来た。だが、卒業生が苦勞して播いて行つた伝統精神の故か、或いは種々の情勢の好転が齎した力の故か、短時日の内に下からの盛り上りが部の地歩を次々と固めて行つた。冬山の躰きも春には劍・槍岳の高所露營で取返され、八ツ峰・源次郎・北鎌尾根・北穂と成功し、同時に一有機体としての部の進歩向上も一応の所迄来たという自信を持ち得たのであつた。一単位としての部に纏りが出来た現在次には個人の實力の向上が考えられた。次の飛躍は各個人の成長にある。この見地からする山行が繰り返され二十七年の冬山に於てはその結実とも思われる前穂北尾根の極地法に依る奥穂高岳登攀、北沢を中心とする北岳・甲斐駒岳登攀の二隊を送り、両隊とも成功裡に終る事が出来たのである。こうして部の實力は一年々々と緩ではあるが確かな上昇を続けて行つた。

昭和廿八年三月、戦後第二回目の決算とも言うべき北アルプス主脈縦走が遂行された。廿四年の南アルプス主脈縦走に呼応して為されたこの山行は爾來三年間、専ら劔・穂高岳で作られた技術と、十分に練られた食糧・装備等の研究結果を部員が相当な自信を以て試みたものであった。劔岳より西穂高岳まで、五十余軒の雪の稜線を四人の縦走隊員が二十余日の雪洞生活で踏破し完遂したものであった。

(昭和二八年四月記)

#### 図書室使用規定

- 一、図書室の利用は会員に限る。
- 二、会員は会員証を呈示すること。
- 三、会員以外の者は、会員の紹介又は同伴の場合に限る。
- 四、開室日時 水木土 午後一時より六時迄。
- 五、休室日 日曜祭日及毎年十二月三十日より翌年一月五日迄。
- 六、図書の閲覧は、備付の閲覧票に記入し係員に呈示して図書を受取り、閲覧後は閲覧票を添えて返還すること。図書は貸出をしない。
- 七、団体の会合に利用する場合は左記による。
  - 1 使用者は本会々員の所屬する山岳団体なること。
  - 2 使用者は予め総務担当理事に使用日時、目的、集合人員を申出て承認を受けること。
  - 3 使用後は直ちに使用料を納入すること。使用料 十人以下一回一五〇円、十人を超過するときは一人を増す毎に一五円を加える。
  - 4 冬季ストーブ使用期間中は一回につき五〇円の燃料費を納付すること。
  - 4 使用日時火木土午後六時より九時迄。

## 後立連峰を中心として

大阪大学山岳部

一

大阪大学山岳部の成立に就て語るとき、私達は直接その伝統を土台とし継承した浪高山岳部及び間接に成立の樸機ともなつた関西学生山岳連盟の戦後経過より筆を進める必要がある。浪高山岳部を再建すべき会合は昭和二十一年十月、出身戦没者慰霊祭を兼ね遠見尾根東麓に於て行われた。私達は戦争に依つて多くのものを失つた。それ等の中には山や、それを以て運る友情を含んでいた。戦没した人々は遠い外地にあつて嘗ての日魂を奪われたこの北安曇の地に骨を埋める事を書に遣して斃れた。われ／＼の仕事はその霊を慰める事より出発しなければならぬ。その日、東西より集つた人々は朱実の色付いた懐しい遠見尾根への石ころ道を登つた。荒廃した小舎の上に秋の空は恐ろしい青さを湛えていた。戦後その時迄、私達はこういう状態で空の色を眺めたことは無かつた。再び山を始めようとしたとき、秋の山は一入鮮かに映じた。その夜、再建に就ての具体的な討議が行われた。幸にも部は戦時・戦後を通じて組織と装備を辛うじて保存すること

が出来た。これはこれからの出発に當つて貴重な足がかりであつた。しかし、これを以て仕事を始めようとするには尚沢山の問題に逢着した。戦争に依つて農村の様相は一変した。種々の不十分な磨擦を避け、尚且食糧の現地調達を途を調べ、不時の事故にも利用出来るための根拠地は自ら制限があつた。このことは「後立連峰及びその東面」の開拓という主題に私達を導いた。後立東麓の各部落には過去二十数年の経緯があつたし、こゝならば自分の庭の如く動ける自信があつた。一変したのは独り農村のみではなかつた。戦後の都会には登山を可能とする様な基盤は全く無かつた。人的制約と装備の購入難、そして輸送難……など、これを避けて通る訳には行かない。ラツシュ・アタックという方式はかゝる致命的な種々の制約下の適応として採用された。

会合の翌朝、新しい希望に燃えて私達は平川沢を遡行し〔註1〕。それ迄にも冬季二、三の山行はあつたがこゝに進路と舵を得て部が動き始めたのである。しかし、再建後一年間は捨石的な状態が続いた。その年の冬、白馬東面を目指して二股に入つた私達は、嘗ての小舎の跡もなくなつた荒天下の猿倉台地を連夜苦闘しながら、与えられた唯一回の機会を逸し登攀の中で力尽きるという惨憺たる結果に終り、これに依りラツシュ方式の厳格さを改めて認識し直さねばならなかつた。

〔註1〕 平川沢二本松尾根。昭和二十一年十月。メンバ

1、佐谷、徳永、家田、加藤。

遠見の会合があつてから二度目の正月を同じ遠見小舎で迎えた私達は鹿島槍北壁を前に漸くあせり始めていた。同じ冬、早稲田はペテガリへ、明治は暈岩へ、そして同じこの尾根には関学その他がテントを進めていた。学生山岳界は全面的に極地法を採り始めようとしていた。こういう情勢の下で鹿島槍北壁の登攀に成功したことは私達の前途を明るくした。元来ポラーシシステムと云い、ラッシュ・システムといふ理論的にはその二つが対立的に語られる理由はないと私達は考へる。目的も違ふし第一夫々の下部構造が異質的であるこの二つのものが実際には並んでこの日本の山で実施せられるために色々問題にせねばならなかつた。何れにしる北壁の完登という事よりも遠見小舎より北壁、荒沢を経て鹿島部落へ一気にスライドを延ばすことに依つて此処にラッシュ方式の特徴が始めて十二分に生かされた。この冬の余勢を駆つた私達は昭和二十三年春の合宿に於て白馬三合尾根に成功した。しかし、後立及び東面という浪高山岳部の再建当初の目標はこの白馬三合尾根の登攀を以て終りを告げ、新たに出来た大阪大学山岳部に依つて引き継がれる事に成つた。学制改革に依つて高校の廃止が決定したからである。

〔註2〕 鹿島槍北壁。昭和二十三年一月。メンバー、佐谷、徳永。

〔註3〕 白馬三合尾根。昭和二十三年三月。メンバー、

佐谷、徳永、中西。

阪大山岳部が再建されたのは昭和二十四年六月であつた。戦後の阪大には登山はあつたが部はなかつた。戦前に於ては校舎が分散している為に各運動部が各学部別に組織せられていた。全学的な組織の形成される基盤がなかつたのである。だから阪大の再建は再建というより寧ろ全く白紙よりの発足に近かつた。それまで、部の形成に与るべき人々は出身高校を核として動くかたわら関西学生山岳連盟の仕事をしていた。当時の関西学連は漸く活潑に動き始めたものゝ尚著明な各校間の起伏を如何に克服して行くかという点につき一つの岐路に直面していた。各校別という枠をこの際外し大巾な指導性を与えられた学連を中心に向上しようとする復興策は、先輩の指導性から戦後切り放された一部の学校の要求なり人的・物的欠如に伴う各校間の相互依存性なりに裏づけされ、種々の曲折を経て学連中心主義が擡頭した。昭和二十三年には学連総会の席上で白馬より槍への継続縦走が討議せられ、同年十一月富士合同登山が実施せられたりした。こうした傾向や指導性が正しかつたかどうかにかつての結論は避けるとして、実際には富士合同合宿は一応各校別の枠を取り、学連を中心にして六十数人を動員出来たにも拘らずそれ以後再び単なる連絡と親睦の機関に還つた。学連に集つたりリーダー達は先ず真剣に自分達の足許を開拓し直す事より再出発する必要がある。かゝる学連を中心とする諸情勢は私達の山岳部を発足

せしめる一つの契機となつた。

## 二

発足に当り部は旧浪高の経験と装備及びスタッフを最大限に利用し、後立山に関する仕事を継続し正しく発展させて行く事を決定した。愈々部の発足の見通しがついた昭和二十四年春、関西学院は後立山の稜線に長大な極地法を展開した。周到な準備と戦前から築き上げた組織を挙げて雄大な計画の実現を目指す東西各大学を横目で見ながら私達は胸中深く将来の発展を期しケルンの底石を並べる様な気持で雨飾岳南稜(註1)に向つた。

〔註1〕 昭和二十四年四月。メンパー、徳永、大島。

新学制に依る新入部員を九月に迎えて秋山より正式な活動が始つた。冬に白馬東面合宿を決定していた私達は十一月北岳パトレス東北稜・木曾駒・御岳・八ヶ岳の四方面に向い冬に近い積雪に恵まれて之に備える事が出来た。冬の白馬主稜に対しては既に二回に亘る浪高の失敗があり、春には幾多の足跡を有する此の唯一見長いだけの尾根が何故冬に登られ無かつたかに就て私達は頭を悩ました。何れにしても出来上つたばかりで吹けば飛ぶ様な寄せ集めの部であつてみればこゝらで何か一つ登つておく事がその運営上強く要望された。従来(註2)の経験に依れば、此の方面に於ける冬の登攀の機会は一週か十日に一度と予想された。此の為猿倉台地末端の根拠地

に入つた日から夜と昼を逆にした厳格な生活が始まつた。サポート隊は殆ど連夜徹宵して天候を観察し、風雪で無い限り夜半ラッセルに先行した。登攀隊は之に従つて夜明け迄登行し悪天候を見定めて帰投した。全てを極端に登攀へと傾倒して八日目の一月二日、好天を確実に掌中にして私達は主稜(註2)を完登した。

〔註2〕 昭和二十四年十二月二十二日―一月五日。メンパー、リーダー徳永、大島、家田(以上アタック)加藤、松久、久保、細見、小沢、由比浜、田島、四宮、篠田部長。一月二日午前二時北股根拠地を出発。主稜末端より取り付きサポートと別れ三名のアタック隊は午後八時頂上着。小屋で夜を明し大雪溪を下つた。

厳冬期の白馬主稜はかくして我々の手に陥ち一つの懸案は解決した。後立山東面に於いて厳冬期にバリエーションルートに登られる事は戦前でも稀であつた。之は天候と積雪状態に基くものであるが前述の鹿島槍北壁と今回の白馬主稜の成功はかゝる条件に於いてラッシュアタックの優れている事を立証した。ともあれ、此の冬の計画が建設途上にあつた部の組織を固める点に於いていかに意義深かつたかは想像以上であつた。集合も盛んになつたし討議も活潑になつた。之を期として戦前の先輩との連絡も追々つき始めた。然しやがて私達は此の冬の結果を広い面で分析して行く過程に於いて、これが成功と考ふる要素に案外乏しいという事に氣附いた。部

の運営面から言えば登攀隊以外は一名もアイゼンを着用する機会を持たずに合宿が終るといふ縮少再生産的な不手際があつた。ラツシユ方式は戦後の色々な制約の下において尚且つ戦前に果し得なかつた課題の解決を可能にした。之に依り私達は鹿島槍北壁、白馬主稜、三合尾根及び雨飾南稜等を登つたし之からも後立山東面の尾根と谷を刻明に開拓して行こうと考へていた。然し之のみを続ける事は部を広い分野に大きく發展させて行く途ではない。ラツシユアタックに依り私達は鹿島槍北壁に二十数時間、白馬三合に十八時間、雨飾南稜に十五時間、そして白馬主稜に十八時間という連続行動を要した。実際にやつて始めてその限度を認識すべき時機に到達したのである。毎年々々入れ替る部員に之を推し進める事は在学年数の上から無理があつたし、第一ラツシユアタックを採用しなければならなかつた当時の諸条件が今や徐々に崩れ始めていた。人員も増加したし装備その他の情勢も好転し始めた。

こゝに幾多の貴重な捨石の後に漸く軌道に乗り始めたラツシユ方式ではあつたが我々は白馬主稜を期としてこれに一応の終止符をつけたのである。

### 三

この昭和二十四年末は明治の明治東稜、法政、立教の北鎌

尾根など正に極地法の全盛時代の観があつた。私達も亦この方式に対して冷淡ではなかつたが、それをやる前に未だしておかねばならぬことが沢山あつた。先ず今迄にやつて来た事を「上向き」の登山であつた。今度は三千米の稜線上に舞台を移して「横向き」の登山を「いろは」から始めなければならぬ。何年掛つてもなるか判らないがその為には稜線上にどつかりと「あぐら」をかいてみる必要があつた。此処に於て遅れ馳せ乍ら高処露營の課題に頭を突込んだのである。この決定に基いて白馬主稜につゞく春山は上級部員に依る「八方尾根より鹿島槍」への往復と下級部員に依る「槍より燕」への縦走(註)という形で実施され、更に同年冬には杓子双子尾根にテントと雪洞を進めて本格的な訓練期に入つた。

〔註1〕 昭和二十五年三月二十七日―四月十三日。メンバー、リーダー徳永、松久、家田、加藤、久保、大久保先輩。八方尾根雪洞、唐松小舎を経て全員五竜岳雪洞に集結し鹿島槍を往復した。

〔註2〕 昭和二十五年四月二十九日―五月六日。メンバー、リーダー家田、四宮、川島、田島、小沢、二木。槍平より燕への縦走。下級部員を主体とした隊であつたにも拘らず縦走路に於て二回荒天下のビバークを強行した貴重な山行。

部員全部をいきなり稜線上に上げる事に就ては一応の危惧もあつたが實際は円滑に運んだ。これ等一連の諸計画に依つ

て後立に対する私達の考え方も大きく変化した。これまで浪高―阪大とやつて来たことは「後立」という主題をラッシュェアタックという一つの媒介を以て推進する事であつた。しかし、一度稜線上に舞台を移そうと決めたとき、私達が今迄主題として来た「後立」は最早部の主題ではなくなつてしまつた。ある主題の下に私達が今まで開拓して来た「後立」はその媒介として登場することになつたのである。

新しい主題は山を難れて私達の部の内部に移つた。

このことは一つの進歩であつた。「八方尾根より鹿島槍」以後の一年間の成果は、昭和二十六年春の第一次後立逆縦走(註3)計画によつて問われることになつた。予め荷上げを一切行わない事を主眼にしたこの縦走はサポート隊員の負傷により挫折し、鹿島槍や針の木などへの散発的な山行に終つた。

〔註3〕 昭和二十六年三月十七日―三月二十八日。メンバー、リーダー徳永、大島、加藤、松久、細見、尾藤、川島、坪井、大久保先輩。大沢、冷池、唐松にサポートを入れ計画を始めたが冷池まで行を共にする予定の大沢サポート隊員がスバリ南方でスリッパし右大腿部に打撲創を負つたために中止した。この際現場に雪洞を設けて負傷者の手当をし主力隊員が徹夜で通報に走つたため撤収を整然と行い得た。なおこの時後立に於て使用可能の小舎は冷、唐松、白馬であつた。

この計画に依つて私達は極地法であれば何等問題とならな

い様なものでも十分重大化する、事故に対してもつては縦走形式の弱さや、サポート隊に依る不要な経費面など、縦走がもつている不利な点を学び、同時に食糧、装備の面に於て高度の軽装化、合理化等を要請されることになつた。

これまで私達は冬と春の双方に同様のウエイトを置いて計画を推し進めて来た。これは年額四千円という部費しかない経済面からも亦部員の心理的な面からも当然難点たらざるを得なかつた。堅苦しい正規の合宿を続けてやつて行くからには或程度の脱落者を覚悟しなければならない。しかし歴史の浅い私達にはしなければならぬ事が沢山あつた。冬山はデリケートなテント・マナーや積雪状態などの面で、春山はダイナミックな行動的な面で夫々捨て難い異質的な要素があると考えられるからである。こうした矛盾を打開する策として夏と秋の両シーズンの活用が考えられた。夏山は全く偵察と切り放し、南股、カクネ里などで主たる合宿をした後、分散して縦走し、秋山は天候の急変しない中部並に南アルプスを主に選んだ。この間非雪季のバリエーション・ルートとして北岳バトレス第一、第二、第五、東北稜及び鹿島槍北壁主稜、中央ルンゼ、ダイレクト・リッチ等が登られた。昭和二十六年秋に於ける北岳バトレスへの集中的な山行は引き続いて冬山計画をこの地に持たせた。北岳を経て間ノ岳に向う計画が実施された。

〔註4〕 昭和二十六年十二月二十五日―一月八日。メン

パー、リーダー細見、住吉、川島、田島、由比浜。広河原峠を使つて広河原に入り大樺池CⅠ、北岳間ノ岳間CⅡより間ノ岳へ向う計画。CⅡ破損のため引き返した。この冬山に於ける収穫は三千米上のCⅡの経験であつた。

四

バリエーション・ルートの開拓から稜線上へと舞台を換えてから二年の歳月が流れた。発足当時の新入部員は今では部の中堅であり主力となつた。これまで部を推進して来たのは夫々の旧制高校で育つた既成の者であつた。しかし、今や部はその中で生れ、その中で育つた人々を持つ事になつた。ケルンの底石を並べる様な気持で登つたあの雨飾南稜から丁度三年の間、成功に喜び失敗に打ち沈みながら私達は黙つて石を積み続けて来た。部員の数も三十人を越え、装備も苦しい内に色々と工夫される様になつて来た。こゝらで一度本格的に極地法登山と取り組んでみようという事は当然の成り行きであつた。極地法に就ては便利なることに現在の大学全部が先輩であり、私達はそれ等従来記録を徹底的に渉読する事より始めた。この際、極地法を運営するに当つて意識的に何処に重点を置くべきかに就て、私達は最終キャンプよりのアタックの行動半径と全計画の運行時間の二つに力を入れようと考えた。北岳から帰ると直ぐこの新しい計画の準備が待つていた。前記の要素に適合するものとして「杓子尾根より不帰

を越えて唐松岳<sup>(註1)</sup>が選定された。

〔註1〕 昭和二十七年三月十九日―四月三日。メンバー、リーダー家田、久保、尾藤、田島、川島、坪井、山本、東、安戸。猿倉BC、双子尾根CⅠ、杓子頂上直下CⅡ、天狗池CⅢ、CⅢより不帰を通つて唐松を往復した。

この計画は各隊員の配置が良かった上、天候を巧みに処理して小規模乍らも理想的な展開と運行を見た。かくして白馬主稜の偏向解消以後たゞ無暗と稜線上を歩き廻つていた私達はこゝに初めて部の力をまとまつた形でみる事が出来たのである。

不帰計画によつて極地法登山を手にした私達は発足第四年目を迎えた。

何もかもが手さぐりで一步々々考へては動き出すという創生期の状態は漸く終りを告げた。部は自らの経験に基いて自由に活動出来る段階に到達した。この段階に於ける私達の仕事は右手に極地法をもつてこれを正しく発展させる様に努めながら、左手で今までやりかけていた仕事の整理と新しい分野への仕事の準備に當ることであつた。やりかけの仕事とは後立逆縦走や、一貫した「後立東面」の開拓であり、新しい仕事とは後立東面より劔へと移行する前段階とも云うべき黒部下廊下の偵察であつた。

春の第二次後立逆縦走計画が決まると、私達は前回の経験

に基いて早急にサポート隊の養成にとり掛つた。冬の分散形式の計画は縦走に対処すると共に各個人のコンプリート・マウンテナアとしての生長を助けるという意図の下に生れた。聖を主体とし、木曾駒、大沢、八方屋根、富士山の五つのパーティが五つの方向に散つた。戦後、浪高の跡を承けてつゞけて来た「後立並に後立東面」に関する私達の仕事に一応の終止符をつげんとする第二次逆縦走計画<sup>(註2)</sup>は冬山の成果に連つて実現せられた。

〔註2〕 昭和二十八年三月二十二日―四月七日、メンバ  
ー、リーダー尾藤、川島、住吉、田島、坪井、山本、  
東、宍戸、近、李中、木村、土屋、大村、鷲沢、小沢、  
立花。この計画は前回の経験に基づき、過去の気候の統  
計から最悪の天候でも耐えられる食糧を準備し、サポー  
ト隊も単なるサポートに止らず自主的な目標をもつたた  
め、それだけでも八方―鹿島槍、大沢―鹿島槍という計  
画となつた。(縦走隊、川島、住吉)

十分の余力をもつてこれが達成出来たのは好転した小舎の条件にも依るけれども何よりも第一次計画との間の二年という歳月が大きくものを云つたという事は否めない事実であつた。かくしてこゝに私達は「後立及びその東面」を一応まとめ上げる事が出来た。

## 五

一九五三年はエベレストの登頂に依り永く記念されるべき年となつた。こういう時期に登り尽された日本の山々を真面目に眺める事は苦痛でもあり困惑でもある。しかし、かゝる時にこそ与えられた対象を活用して自らの力を尽さねばならないのは勿論である。徒らに泡立つ内外の情勢に目を奪われた人々は足許を誤つて一挙に谷底へ転落するであろう。飛躍を考へるならば先ずその前に自己の力を知つておく必要がある。昭和二十八年冬の「岳川より奥穂を越えて槍」への極地<sup>(註1)</sup>法は後立を中心に過去四年間を以て培つて来た私達の総決算でもあつた。穂高周辺に就ては夏に於てさえも嘗て合宿をもつたことはなかつた。力を験すためにも普遍的な極地法の特徴を生かすためにも穂高は好個の舞台を提供することになつた。

〔註1〕 昭和二十八年十二月二十日―一月十日。メン  
バー、川島、尾藤、山本、土屋、木村、東、宍戸、李  
中、住吉、山本(進)、広橋、林、抱。天狗コルC I、  
奥穂C II、北穂北峰C IIIより槍の往復を行った。主稜線  
上に於ける広範囲な活動とスピーディーな運営を目標に掲  
げたためC I建設用に別のサポート隊を使つたり、C III  
にナイロン・テントを用いた。

複雑な要素の組み立てを狙う極地法の様な形式になると計画が終つてもそれが成功か失敗かという事は即断出来ない。しかしこの冬山では一応槍を登つて多大の成果を収めた。

つよく春山、黒部下廊下の偵察のため私達は再び後立に還つた。全く経験のない穂高での緊張した生活を経て来た私達にとつては、後立は楽しい吾が家であつた。ホーム・グラン  
ドとして後立を開拓して来た事は決して無駄ではなかつたのである。初め、私達は後立東面に烈しい登攀を続けながらふと暗い谷間から輝く白銀の主稜線を眺めてこれに懼れた。やがてその稜線上に計画を進める様になつたとき、朝に夕に眺める剣や黒部の谷が無言の魅力となつて登場した。「上向き」の登攀より「横向き」の登攀へ、そして「下向き」の登攀を更にこの上加えて行こうとする私達の新しい課題は既に滑り始めたのである。

以上で私達は部を通じて何を考え、何を為して来たかを述べた。現在の部は組織の面に於て未解決に残つた重要な幾多の問題に当面している。極地法の記録を生かす為には細かい専門的な検討を抜く訳には行かない。そのためには部は更に専門分野に分化する必要がある。新しい情勢に即応するためには次々と育つて行く、若い先輩をたゞの先輩として置いておく訳には行かない。現役を指導するという事すらも検討を要する先輩団の立場は重要な問題である。今まで一度も遭難に直面しなかつた私達はこのことだけを唯一の伝統としてこれからも全力を尽さねばならない。

顧みるに、あの戦後の混乱期を通じて、私達はただ自分達だけの力で道を切り拓いて来たと思つていた。しかし、今

こそ私達は、健全な日本登山界の伝統の上に、その暖い庇護を背景として始めてこゝまで歩いて来られたことを悟るのである。

(完)



## 戦後の記録

### 早大山岳部

戦前、滝谷における積雪期未登攀ルートのアタックを終えたわれわれは後立山の鹿島槍、また穂高岳周辺において積雪期の長期間に亘る高所幕営に力を注ぎつつ、年々その成果を挙げて来た。かくして海外遠征に必要な体力、装備、技術等が充実して来ると、朝鮮冠帽峰への遠征が昭和十一年に行われ、引続き台湾新高山、第二次冠帽峰の遠征が行われた。その間、ヒマラヤに対しても数度に亘り計画が樹てられていたが、種々な事情で実現出来なかつた。

その内に第二次大戦に突入した日本の国情は部の活動が活潑に行えるような状態ではなかつたが、出来る限りの計画を遂行し、何時でも実力だけは保っておきたいと努力を続けていた。その後戦況の悪化は空襲の烈しさとなつて現れ、国内の交通さえ不自由な有様となり、昭和十九年十月より終戦迄、遂に休部の止むなきに至つたのである。

このように戦前来、わが部は極地法登山を行ない、チーム力の向上と共に個々のあらゆる方面の能力に精進して来たのであるが、戦後再発足してみると、道具は足りない、部員は少いと言つた具体的な障害、戦前と戦後の部員の気風の相違

と言う目に見えない障害等、幾多の困難な問題が山積して、何時まで頑張つたら昔のような部に立帰るかと途方に暮れる始末であつた。それが戦後七年、曲りなりに南米のコンカグアに出かけて行つて、戦前の夢の一端を実現し始めつゝある現在まで、どんな経過で発展してきたのか。これを戦後の各年度の総決算である積雪期の合宿を通して概観してみることしよう。

戦争が終り、復員してきた部員の元氣な顔や新しい部員の顔が、戦災を免がれた部屋に集まりだしたのは戦後間もない二十年の暮頃からだつた。そして戦後の逼迫した食糧事情や経済事情の下に幾多の困難を克服して二十一年の三月には、小規模ながら白馬岳神の田圃小舎を中心に合宿をした。当時集つた部員達が第一に目指した事は、部の力の回復という事だつた。それで今からみれば随分無理なように思われるが遮二無二押し進み、翌二十二年の三月には一氣に戦前の水準に追いつくべく、戦前から宿題であつた前穂高北尾根に極地法計画を展開した。戦後の悪条件の下においてこの計画は相当に困難ではあつたが、一応計画した如く前穂高の登頂に成功した。しかし戦争中の空白は一氣に回復するには余りにも大きく、社会状態も決して楽なものではなかつたが、新しい部員を迎えた部は、より大きい希望を持つて活動を開始していった。

その間先輩達も追々部に帰り、部の回復及び山岳部懸案の

海外遠征に就いてもだんだん活潑に論議されるようになってきた。それでこの二十二年度の目標としてこの空白を埋め、さらに戦前の水準を踏み越え、より大きな一步を踏み出すことのできるような素地を作る為、新人を含めた現役部員の指導を念頭に、二十二年十二月から二十三年一月にかけて現役 O・B・連合で北海道日高山脈のペテガリ岳に遠征した。この遠征は、暖冬の為、降雨、湿雪または輸送の遅延等の悪条件に悩まされたが、一カ月余の苦闘の後、東尾根よりのペテガリ岳登頂に成功した。これは戦前から練習してきた極地法登山の勝利であると共に、戦争による空白を埋め、部が完全に立直つた事を意味するものであらう。

その翌年度、部は戦前からの部員を送り出し、部員の殆どが戦後の部員になった。この部員達にとつて北尾根、ペテガリ岳の輝かしい成功の後、これを引きついで行き、さらに一步前進するというのはなかなか大変なことであつた。けれども、この飛躍こそ部の力をより充実させ、さらに大きな目標へ進む道であり、又戦後の現役の実力を試す機会でもあると信じて、二十三年度の春山合宿は劔岳西面に入つたのである。ここで比較的距離の長い、そして技術的な訓練を求めて未登攀の無名尾根(赤谷尾根)を通つて劔岳に達するコースを選んだ。その計画はパンバ島小屋をベース・ハウスとして赤谷尾根に取り付き、尾根の中腹に第一キャンプ、赤谷山頂上に第二キャンプ、さらに大窓に第三キャンプ、小窓附近に

第四キャンプを建設し、劔岳頂上に達しようという計画であつた。此の計画は隊長碓井以下十五名、三月六日ベース・ハウスから行動を開始し、二十八日に劔岳登頂に成功、三十日撤収完了、全員無事ベース・ハウスに帰着した。この計画を省みて、食糧装備等、検討すべき点が多かつたが、一応当初の目的を現役のみでなし得たことは大きな喜びであつたと共に現役部員に大きな自信を与えた。

翌二十四年度、新人対象の谷川合宿、劔沢の夏山合宿後、この年より早稲田大学は新制度に切り替えられ、新たに体育が正課として行われるようになった。山岳も体育実技の一部門になり、一般学生の夏期上高地生活の面倒を見るため山岳部員が当ることになった。それで上高地生活中にその年度の春山の計画に就いて O・B を含めて種々検討された。その結果戦争のプランクを克服し、ペテガリ岳遠征、劔岳赤谷尾根極地法と一段と進歩したものと信じ、ヒマラヤ遠征の具体的トレーニングとして O・B を含め、前穂高北尾根に再度挑戦することにした。計画は横尾岩小屋附近に B・C を設営し、北尾根の末端である屏風岩から取り付き、最終キャンプを前穂頂上に置き、北穂高に登頂する極地法であつた。行動の詳細は後記の行動表を見れば判るように隊長碓井以下十五名が三月二日より行動を開始した。その結果、念願の前穂頂上に第四キャンプ設営が成らず、最終キャンプが三、四のコルに設けられ、登攀隊は三、四のコルから北穂へ向つた。しかも

この登攀隊が帰途ビヴァークを余儀なくされたということはいまさらながら極地法登山に於る種々の問題について考えさせられることが多かった。この北尾根合宿によつて慥かに実力もある程度に達したが、今までの合宿形態の短所が少しづつ見え初めてきた。部と云う大きな方の影にかくれて個々の実力を過信し、一人一人の充実がないがしろになると云う傾向もその一つとして感じられた。一方、早稲田大学においては学制の新制度切替えが早く取られた為、六年の大学生活が四年に短縮されることになった。

昭和二十五年、前記の事情により、今年度の春山合宿を特に下級部員のレベルを一気に向上させる為、これまで当部における極地法で取られていたように、下の方のキャンプ間でつかうことなしに最前進キャンプまで上げ、高度の訓練をすると共に上級部員は全員がさらに困難な登攀にあたることにし、その対象を穂高、岳川谷より天狗沢、奥穂高を経て澗谷を登攀することとした。メンバーは隊長飯島貞二以下二十名。結果は非常な好天気も手伝い、予定よりも短時日にその計画を終ることができた。この計画は始めから極地法の幅を広げて、個々の力を最大にのばすことが目的であつたが、その成果がよかつたと云うことは嬉しいことであつた。

昭和二十六年、前年度の計画は前にも述べたように今までの形式の一短所を補う意味も含めて行われたのであるが、

今年度に入つても、部の前途に就いて種々議論された。そして春の合宿には次の点に重点が置かれた。

1 新制度切替えによる実力低下を阻止す為、全員十分なる活動の出来る計画をする。

2 重裝備のみに重点を置かず軽い裝備をも加入した極地法を行う。

3 ヒマラヤに行つた場合を考えてのB・Cの移動の練習。そして左記の計画が立てられた。即ち春の二月末から三月にかけて一ヶ月を十日間ずつに分け、その間に各々三つの計画を実施する事にした。

(イ) 岳川谷より間の岳を経て奥穂へ

(ロ) 明神岳東稜より前穂を経て奥穂へ

(ハ) 三パーティに分れて後立山へ

○ 八方尾根より五竜岳へ

○ 東尾根より鹿島槍へ

○ 唐松岳より神の田圃へ

結果は唐松より神の田圃への縦走を残して、とにかく初期の目的を達成することができた。

昭和廿七年度、前の年昭和廿六年の春頃から若い先輩達の間では海外遠征の問題が盛に議論されていた。講和条約の成立していなかつた当時は今と違つてヒマラヤへ行くと云うことが政治的にも経済的にも極めて困難な状態にあり、何としても他に対象を求めなければならぬと云うことからその打

開策として選ばれたのが南米アルゼンチンのアコンカグア峰である。ヒマラヤ以外では最も高い山群であること、在留邦人の多いアルゼンチンならば種々援助を得られる便宜があることなどが選択の理由であつた。未だ在外公館も何もないアルゼンチン国に対して早速運動を開始し、先輩現役一体となつて努力したが色々な障害の為にこの年は中止、ようやく翌年の廿七年になつて実施の運びとなつた。その間幾度か暗礁に乗り上げて計画を放棄しそうになりながらも多くの人達からの援助と好意に励まされて頑張り、当初の目的とは大部相違しては来たがとにかく隊長以下六名の隊員を送り出すことができた。一行は十二月末アルゼンチンに到着、同国の多大の好意を受け、翌昭和二十八年一月二十六日アコンカグアの主峰（七、〇三五米）を、ついで二十八日南峰（六、九三〇米）に何の事故も無く登頂したのである。

一方現役的主力三名を遠征に送り出した部は、その間の春山合宿の対象を槍ヶ岳北鎌尾根の縦走と、横尾々根よりの北穂高攻撃とにきめ、その実力養成に務めたが、病人が出た事、天候が不順であつた事等の悪条件の為、北鎌尾根の計画のみで下山した。

以上がその年々の最大の計画である春山合宿を通して見た戦後の部の動きである。今われわれはその最終目標を昔からの念願であるヒマラヤに置き、より基盤の広い、より確実な登山をするよう努力している。

## 記 録

昭和二十一年度春山合宿

前穂高北尾根末端より前穂高攻撃。

期日、昭和二十二年三月下旬より四月初旬。

人員、越智以下九名。

結果、三月二十五日上高地徳沢園にて行動開始。

四月五日最終キャンプを五・六のコルに設営。

四月六日三名登頂。

四月八日撤収完了。

昭和二十二年度冬山合宿

北海道ベテガリ岳東尾根よりベテガリ岳攻撃。

期間、昭和二十二年十二月下旬より翌年一月下旬。

人員 藍田以下十五名。

結果、十二月二十四日東尾根末端の尾田村より行動開始。

翌年一月十四日最終キャンプCⅥ設営。

一月十六日登頂。

一月二十三日撤収完了。

昭和二十三年度春山合宿

劔岳西面赤谷尾根より劔岳攻撃。

期間、昭和二十四年三月初旬より下旬。

人員、碓井以下十五名。

結果、三月六日パンバ島ベース・ハウスより行動を起す。

三月二十七日最終キャンプを大窓の劔側に入った所に設営。

三月二十八日登頂。

三月三十日撤収完了。

昭和二十四年度春山合宿

前穂北尾根末端より取り付き前穂頂上に最終キャンプを設けて北穂攻撃の計画。

期間、昭和二十五年三月初旬より下旬。

人員、碓井以下十六名。

結果、三月二日上高地徳沢園にて行動を起す。

三月二十三日最終キャンプを三・四のコルに設営。

三月二十五日北穂へ登頂帰途穂高小屋にピヴアーク

翌日帰幕。

三月三十日撤収完了。

昭和二十五年年度春山合宿

穂高岳川谷より天狗沢、奥穂を経て滝谷へ。

期間、昭和二十六年二月下旬より三月下旬。

人員、飯島以下十五名。

結果、二月二十六日上高地西糸屋より行動を起す。

三月九日奥穂に天幕設営。

三月十一日濁沢のコルに最終天幕設営。

三月十三日より十六日までの間に滝谷第二、第三、第四、第五、ドーム中央稜等の登攀を終える。

三月十九日撤収完了。

昭和二十六年年度春山合宿

1 岳川谷より奥穂へ。

2 明神岳東稜より奥穂へ。

3 三パーティに別れて後立山方面へ。

期間、昭和二十七年二月下旬より三月下旬まで。  
人員、日下田以下十一名。

結果

(1) 二月二十三日上高地にて行動を起す。

二月二十五日間の岳直下にC I設営。

二月二十八日天狗岩の手前にC II。

三月一日奥穂登頂。

三月三日撤収完了並びに明神岳麓にB・C設営。

(2) 三月五日、明神東稜瓢箪池にC I建設。

三月九日、明神主峰直下にC II建設。

三月十二日、奥穂登頂。

三月十四日、撤収完了。

(3) 後立山

A 鹿島槍東尾根パーティ、人員四名。

三月二十日、大町発、冷沢出合に天幕設営。

三月二十二日、全員東尾根より鹿島槍登頂。

三月二十四日、撤収完了。

B 八方尾根より五竜岳。人員三名。

三月二十日、大町発、黒菱小屋に入る。

三月二十一日、唐松岳直下に天幕設営。

三月二十二日、五竜岳登頂。

三月二十四日、黒菱小屋帰着。

C 唐松より神の田圃。

登攀用器具不足の為五竜パーティと行動を共にす。

南米アンデス山脈遠征

隊員、関根隊長外OB二名、現役三名。

結果、昭和二十七年十月二十四日、遠征隊六名、神戸を

出帆。

同年十二月十七日、ブエノスアイレス着。

昭和二十八年一月十三日、ブラサデムーラスに

B・C建設。

一月二十六日、アコンカゲア主峯(7035 m)に全

員登頂。

一月二十八日、アコンカゲア南峯に登頂。

五月十日、遠征隊東京着。

昭和二十七年度

槍ヶ岳北鎌尾根独標側稜より、独標、大槍を経て横尾に至り、横尾山荘を根拠に横尾々根を経て北穂高攻撃の予定。

人員、小倉以下九名。

結果、二月二十二日、大町より入山。

二月二十六日、北鎌独標側稜取附き点(天上平小屋に物資集結)。

三月六日、北鎌平。盲腸炎患者が出たため、槍沢から下すことにする。

三月八日、徳沢着そのまゝ病人は松本まで下す。

以後種々の都合により北穂攻撃計画は出来ず、そのまゝ二十二日下山。

— 以上 —

## 再出発の断面

### — 日大山岳部の場合 —

金 坂 一 郎

終戦直後のこと、残務整理打合せのため出京した私は、帰途先輩の神山を訪ねた。その頃の日本は、実に混沌そのものであつた。軍主脳部あたりでさえ、何から手をつけてよいのやら見当がつかず、徒らにウロ／＼しているばかりだから、我々にはこの混乱が、どう收拾されるのか見通しもつかない。爆撃の廃虚の中で彼は言つた。「とにかく来年の八月十三日、徳沢で会うことに決めておこう。」この八月十三日というのは、奥又白谷で亡くなつた仲間の命日なのだが、このまま我々がばら／＼になり、音信不通になつた場合を予想しての言葉である。

この心配は、幸いにも杞憂に終つた。しかし、その後には続いたものは、暗く、寒く、そして長い冬であつた。

OBはまだ殆んど復員していなかつたが、現役部員の残党は何人かいた筈である。その頃の山岳部は、正式には解散させられていたのだが、残存部員と新たに加わつた少数の仲間とが、戦争の圧力にシリ貧になりつゝも、まだ余命を保つて

いた。先輩広田の発案により、OBがいくばくかの食料の面倒を見てやり、現役を熊の湯にでも遊びにやつたらどうだろうか、という意見が出たのも、その頃のことであつた。私はそのことを、一応現役に相談しかけて見たが、彼等にもまだ山に出かけて見ようというだけの、気持のゆとりは与えられていなかつたようだ。

一山十円のリングゴが、二十円になり、三十円に値上げされると共に、世の中にはいくらかの活気が生じて来た。それは闇屋精神に基づいた、ガサ／＼した活潑さではあつたけれども、動き出すということの必要な日本にとっては、或る程度有効な刺戟であつた。

翌二十一年の四月のことである。それまでOBとの連絡に努力していた神山の要請により、私は現役残党との連絡を積極的にとり始めた。これによつて現役の消息も次第につかめて来たが、何よりも驚いたことは、今まで少しも知らなかつた新しい人々が中心となつて、三崎町(文科)に山岳部を再興したことである。その仲間に、旧部員の何名かゝ入つていたので、駿河台(工科)の連中との連絡もうまく行つた。

その仲間の二人が、疎開させておいた器具を貸してほしいと、私の所にやつて来たのは、五月下旬のことである。来月早々谷川岳の南面で合宿をやるとのこと、私もこれははつておけないとあわて出した。登山の経験はあるらしいが、何と

なく集つただけの連中が、雪と岩の山で合宿し、団体行動をとるとするのは容易ならぬ仕事である。

合宿は六月一日出発の予定だった。折角はりきつて計画しているのに、延期させる訳にも行かず、旬日の間に出来るだけしつかりした準備をさせようと、暇のあるOBが骨を折つて呉れたが、収穫は見すほらしいものに過ぎなかつた。その時ばかりでなく、その後もやはり同じことであつたが、現役の実力と考え方がよくつかめないため、面倒を見るといつても隔靴搔痒の感をさげがたく、結果を見ては口惜しがるのであつた。

合宿は谷川の二股で行われ、天候にも比較的恵まれ、登攀は順調に行われた。が、何よりも嬉しかつたのは、気分が非常になごやかであつたことだ。自発的に寄り集まつた連中が、好きで始めた仕事のせいか、その後これ程のなごやかな合宿はなかつた。私もまだその頃は、怒鳴り立てるようなこととはしなかつた。

しかし、登攀とはいえ、狙窟を中心とした岩場や急峻な草付きに、いきなりぶつかつて行こうというのだから、大分ひやく／＼させられた。沢の悪場は大部分雪をかぶつていて、問題になる所は少かつたが、草付きは急峻で、且つ高距も相当にあつた。運動不足の上、栄養も余りよくない時分のこと、私なんか第一日の登攀には疲労困憊し、中ゴウ尾根の下半は文字通り這つて降りた程で、現役の元気がうらやま

しく思われた。

合宿はなごやかに行われたけれども、お互の技倆をよく知るといふ重大な認識に欠けていたため、登攀は何所へ行つても心配につきまとわれたものであつた。登攀のみに限らず、統率からいつても、生活の面から見ても、極言すれば、すべての点において破綻一步前ということが出来る。一人々々の行動についていえば、もとより好きな道に集まつた連中のこと故、それ／＼楽しみつゝ立派に行動し得るのであるが、山岳部という登山団体を中心とした、団体としての登山を行うべく、余りにも無力であつたのだ。私も空恐しく感じたので、入山二日目には、同行のOBに撤収の指揮を頼んで、早に解散させることを考え、私だけもう一日、まだ登り足りない連中のお供をした。

戦時中のブランクという言葉は、その頃からポツ／＼使われ始めたものである。学校山岳部、一般登山団体何れを問わず、戦争が激しくなると共に、その機能は殆んど停止状態に陥ちつた。しかし、戦後そのメンバーを呼び集めることの出来た部は、その復興は比較的容易であつた。ところが、日大山岳部の場合には、戦時中のブランクというよりも、我が国が戦争に突入する頃には、工科系の部員が多かつたこともあり、すでに登山団体としての機能を半ば失つていた。従つて、戦後再び集まつた旧メンバーたる現役といえども、新人時代に以前のような基礎訓練を受けた者は、一名もいなか

た。これでは再興どころの沙汰ではなく、OBにとつても、現役にとつても、殆んど無から有を生ぜしむるに近い仕事であった。その産みの苦しみの第一歩が、この第一回谷川岳合宿より始まつた訳である。

その頃駿河台工科の旧部員は、全然放任していた訳でもないが、我々OB同様呑気に構え、新人の募集にも大して力を入れてなかつたようだ。また集めた部員も混乱のうちに次第にかすんで行つたので、結局最後まで残っていた横沢が、疎開によつて保存された器具を嫁入道具のようにして、新しい部に嫁入りした恰好になつてしまつた。もつとも彼の立場は、嫁だか姑だかわからないようなものであつたが。

新山岳部が活潑な行動を始める頃には、OBもぼつ／＼復員して顔がそろふようになつた。六月二十三日、奥多摩鳩の巣における懇親会には、かなりのOBが参加し、古い連中と新しい仲間とが親しく話合つた。OBと現役との会合は、公式にはこれが終戦後の第一回目のものである。

これに引き続いて、早速夏山合宿の準備が始められた。場所は剣沢ときまつた。その頃すでにアブレ・ゲールの悪傾向は諸所に抬頭し、登山においてもその例に漏れなかつた。こういう風潮に比較的禍いされずとの予想の下に、また食糧入手の便宜をも考え、夏の穂高をさけて剣沢生活と決定された訳である。当時食糧は、山行上最も重要な問題であり、食糧

さえ容易に手に入れば、何所にでも行かんとする位の情勢であつた。また、剣を選んだについては、穂高よりも雪が多いということが大きな問題となつてゐる。その頃の部員は、苦勞の多い雪を避け、安直に登れる岩にはしりたがつたものであるが、これを適当におさえて、克難の精神を養わんと意図した訳である。この時以来日大山岳部は、夏山合宿をすべて剣で行つて来た。

準備会は度々開かれた。先ず準備会とはどんなことをするのか、ということをお教えるのが大きな問題であつた。千谷、神山のようなOBも熱心に出席し、色々と骨を折つて呉れた。私もつまらぬことを少し喋つたことがある。が、若い連中には余り熱意は見られなかつた。その位のこととは、とつ／＼に知つてゐる、とても考えていたのであろうか。指導的幹部部員も登山及び登山団体の基礎的な重要問題に関しては、至つて微弱な反応しか示さなかつた。これではうっかりすると、谷川合宿の二の舞いは当然予想される。この場合、我々に出来る唯一の予防法は、自ら現役を強引にひつぱり廻すとだと判断した。

出発は少し遅く、七月二十九日であつたが、雪の少い割にクレヴァスが非常に少く、シュルンドの通過も容易な状態であつた。それに反して、天候は至つて悪く、毎日のような雨に、登攀も生活も全く苦勞の連続であつた。戦争に解放され、久し振りにノンビリ遊ぼうと思つてゐた連中が多かつた

から、見ていて全く気の毒だと同情した。リーダーは、とにかく一所懸命やろうとはしていたが、一、二名の者を除いては、合宿のやり方さえも知らない状態であるから、しごかれてブン／＼している新人よりも、精神的には一層甚しい苦痛があつたことゝ思う。その上同行した湯浅と私からは、四六時中怒鳴られ通しなので、我ながら大変なことであつたろうと考へている。

合宿は雪上技術の訓練から始まつた。しかし第二日の学生達の計画は、いきなり分散登攀を始めようという無理なものであつた。マウエルハーケンを論じ、一の倉の登攀回数を誇る連中だが、僅か三〇米程の雪溪に、ピッケルをほうり出して、まっさかささまに墜落する始末では、岩場が済んでも無事に匍匐まで辿りつくことは出来まい。改めて全員で長次郎谷を下降することにした。その日の下降は、大きな谷に圧倒されたためか、前日の訓練よりもまずいものであつた。若い連中はかたツぱしからスリップする、転倒する、果てはピッケルをほうり出す者も出て来る。そこで止むを得ず「いも虫」と名づけられた名譽ある雪溪下降術が發明される等、ほう／＼の状態であつた。そのうちに新人の一人は雪と雨に冷えて真青になり、我々も心配し始めるほどになつた。これでやつと、リーダーたちも、最初の計画が無茶であつたと、気がついたようである。

当時の部員は、体力は意外に強かつたが、アゴは実によく

出した。戦争で命を粗末にしていた習慣の影響であらうか、積極的に確保しようという意志も薄弱のように見うけられた。その上リーダーは観光ガイド程度の頭しかなく、単に技術の問題のみとり上げて見ても、単独で岩場を登ることはさすがに上手であつたが、雪溪上で靴を常に水平に保てる者は、一人もいなかつた。まして新人の登攀能力、心理的狀態、健康状態等に対する判断については、まことに粗末なものであつた。

その後、八ツ峰、源次郎尾根、チンネ、八ツ峰側壁等に、雨やガスに悩まされ乍らも、比較的順調に登攀を行つた。しかし、ザイルに対する技術や観念は全く出鱈目で、この欠陥はその後の山行にも度々現れた。新人のグリセードも相変わらず上達しなかつたが、リーダーがよく面倒を見なければならぬ、ということを理解して来たから、事故らしいこともなしに生活は進行した。結果として見れば、悪条件にもかかわらず、登攀成績はよかつた。そのかわり、リーダーの精神的疲労、隊員の肉体的苦勞は大きかつた。生活最後の日に起つた、一リーダーのスリップ事故も、直接的動機は彼の神経的疲労であつたと思う。これも何とか処置をすませ、その翌日八月七日には、それ／＼縦走、下山に向つた。縦走隊の中には、生活中の消耗がたゞつたせいか、計画を変更して早く下山した隊もあつた。

合宿はすんだが、結果から見れば、たゞ合宿を行つたとい

うだけのことで、新人は合宿終了と共に速にかすんで行った。しかもリーダー級の三名は秋に卒業して部を去り、労多くして功少き山行であった。本格的な新人を養成すべく、まだ時期が早過ぎたのかも知れない。OBは戦前のレヴェルに戻さんとあせり、中堅以上の部員は登攀欲を満足せんと汲々し、新人級は安易にふけらんとする。これでは合宿の成功はおぼつかない。が、この合宿は一つの実験として、大きな意味がある。この実験のデータを有効に利用するのは、部の指導者の任務である、ということ合宿の後で話したことがあるが、リーダー級の部員も、まだその意味をよく理解出来なかつたようだ。しかし、あの頃の幹部は熱があつた。技術、経験ともに浅いため、考え出すことは概ね机上論が多かつたが、たゞかれても、たゞかれても、あくまでも押して来た熱意は、私は今日でも相当に高いものに評価している。

十月の十二日には、奥日光の光徳沼で天幕懇親会を開いた。男体山の紅葉は、紅葉としては大したものではなかつたが、非常に美しいものに見えた。秋の戦場ヶ原の静かな風景も素晴らしい。山にはこういう美しいところもあるのだということ、久しぶりに思い出した。そのかわり、夜道を三本松附近でまごつき、先に来ていた神山にこッびどく怒鳴りつけられて帳消しになつた。

翌日は諸と牛乳で一日暮らし、何もしないでボンヤリ過ご

した。学生は楽しそうにしていたので、私もやつと救われたような気持ちになつた。

その次の日、のんびりしようという学生を残し、OBは引きあげたが、残つた連中は衆議一決、早速穂高に出かけて行つた。しかし慣れない新雪のためか、登攀は簡単に撃退されたい。当時の参加者はこれは「天懇の崩れた気分がそのまま続いた山行で、まつたくだらしないもの」であつたと、率直に認めた。

夏山の新人は、この頃を境として次第に姿を消し、リーダー級は相変らずなのに、新人は後から後からと入れかわりつあつた。しかしその頃からは、将来幹部たるべき部員が、少数ながらもボツ／＼得られるようになって来た。後にリーダー会を構成した石坂以下のメンバーも、その時分から入つて来た人達の中の一人々々だ。

次の山行は、十一月二十三日から出かけた、初冬の富士山であつた。この時分には、準備の完璧ということに重点をおいて、指導につとめていた訳だが、ツアツゲの丸いアイゼンやピッケルを平気で持つて来る始末で、仲々徹底することは困難であつた。準備を相当注意深く、しかも自発的にやれるようになったのは、当時の新人がリーダー級になつた頃からである。

この時分には、夏山合宿の経験がものをいゝ、計画は比較

的円滑に立てられるようになって来た。しかし団体行動を手にとり、登攀をスムーズならしめるというような点に関しては、殆んど改善されていなかった。利己主義的傾向の人が割合に多かつたためか、動作がテキパキ進行することなく、リーダー級の眼もまだ十分に届きかねた。冬富士で行動せんとするのに、出発は常に三〇分、一時間と遅延した。我々の現役時代には sectionalism ということが問題になっていたが、戦後の当時それが一層細分化され individualism に発展したのである。個人主義大いに結構、しかし同一目的に対して団体行動をとらんとする時は、理念の問題ではなく、その最良の方法を選ぶことが問題なのである。利己的行動をとっている間に、お互のイデオロギーの相違を発見し、集合離散を繰り返かえしていたのが、当時の山岳部である。登攀隊長の輪番制というような、不思議な制度が平然と行われたのもその頃からである。

十二月には熊の湯でスキー合宿を行った。合宿参加のリーダーは、この合宿も幹部がモトを取ることばかり考えて、夏山合宿に比較して考えは大して進んでいなかった、と自己批判していたが、この合宿に際して新たに集めた新人も、殆んど残らなかつたようである。合宿の後で、冬山に入りたいという学生もあつたが、大事をとつてOBから中止を勧告した。

その後、翌くる二十二年の二月に、甲斐駒に出かけたことがあるが、深雪に悩まされて敗退した。報告を聞いて見ると、余りにも簡単な敗北なので、冗談半分に「君達は五月頃の山行記録をそのまま呑みこんで、計画を立てたのぢやないかな?」と聞いて見た。答はまことにはつきりしたものであつた。「その通りです。」

この頃までは、OBが不規則に集まつて現役の面倒を見たり、リーダー級の連中が度々OBを個人的に訪ねて話し合うなどして、お互の連絡をとつていた。しかし少数の限られたOBだけが現役に接しているのは、自己を見失ひ易いという欠陥があるので、連絡のとれたOBの数がふえるに従ひ、なるべく多数の人の意見、協力を求めようとする気運が生じて来た。

昭和二十二年二月十八日、野田の骨折りによつて碌々ビルの会議室が借りられ、山岳部初期の先輩も含めて、現役の指導方針を相談した。私はこの日病氣のため欠席したが、席上、爾後毎月一回現役を混えて、在京OBの研究会を開くことが決議された。

第一回三月四日、第二回三月二十一日、ともに碌々ビルにおいて、春山の問題を検討した。研究会は千谷、津村、神山の熊の湯スキー合宿の所見を中心として論議され、結論として団体行動の基礎をもう一度、みつちりと訓練しなす必要あり、ということになり、高峻山岳に向うよりも、再び熊の

湯でスキー合宿をやりなおした方が良い、ということになった。

合宿は真島、村田の指導の下に、現役は幹部四名、新人四名という強力な構成であつた。この時は基本的な問題を重点的に訓練し、気分的にもかなりまとまりがつき、相当の成果を取めたようである。この時の新人は、その後全員リーダーとして活躍するまでに生長した。しかし幹部の間に生じ始めた気持の隆間は、この頃からかなりはつきりしたものになつて来たようだ。

二十二年の四月、再出発後一年にして、山岳部は始めて本格的の新人を受け入れた。五月には谷川岳の東面に入り、新しい期待の下に新人に対する夏山準備訓練がなされた。医科、農科の山岳部と連絡をとり始めたのも、この頃であつた。が、これは若干の者の夏山合宿、スキー合宿の参加に終り、その後の実を結ぶことはなかつた。三崎町と駿河台だけを掌握するのも容易でなかつた当時としては、これも止むを得ないことであつたらう。

この六月には、始めて、新しい部員だけによる山行が計画され、燕から槍へ縦走することになった。しかしメンバーは殆んど新人に近い構成であつたため、雪に対する技術の未熟を認め、中途において引返して来た。が、これは活気ある若い部員の将来にとつて、大いにためになつた山行の一つであ

らう。

一方OBと現役との間には、度々の研究会において、激越なる論争の下に部の行き方が検討されていた。中堅以上の部員は、それぞれ自己の意見を持つようになり、部を向上せしめようとする熱烈なる仲間の気魄に同調し得ざる者は、漸次脱落して行くような傾向にあつた。山岳部もようやく活動期に入つて来たのだ。

これに應じて、この年の夏山合宿は、前年とは全く比較にならないほど様子が變つた。準備会も本格的に行われ、教育やトレーニングにも相当力を入れるようになって来た。

OBの合宿に対する力の入れ方も相当なもので、現役二〇名に対し、OBは千谷以下五名が参加した。準備会にも入れかわり立ちかわり多数のOBが出席し、色々と面倒を見た。

この合宿を前年のそれに比較すると、新人級は問題にならぬ程よかつた。流石に時代は争われないもので、社会のいやな傾向を多分に背負っている者もあつたが、これは昔でもやはり同じこと。山岳部復活一年後に、やつと新人らしい新人が得られた訳である。石坂たちの後を継いで、リーダーシップをとつた北村や松田も、この昭和二十二年度の新人であつた。

ところが、こと中堅以上に関しては、残念ながら未だしという外ない。リーダーは全力を傾けて努力した。が、何といつても、まだ一年間の経験である。リーダーとしての動作に

万全を要求するのは無理であつた。それは、多数決的にものごとを決定せざるを得なかつたような点にも、よく現れていた。まだ経験による判断力が不十分で、その判断も、仲間説明するとなると一層困難であつたから、このような合議制度によつて、ものごとを処理したのではなかるうか。リーダーとしての責任も——登攀に対しても、生活に対しても——至つて希薄であつた。また、若い連中に対する面倒の見方も十分とはいへなかつた。そしてファイブは前年よりも失われていた。この点はOBの注文が多過ぎたという責任もあろうか。

入山は、去年のように手を焼かせられるものと、予め覚悟した。第一日にはかなり参つた者もあつたが、それでもまだ薄明るい中に弘法小屋についた。二日目になると、のびていた連中も次第に元氣になり、前年は極地法を適用して登つた連中さえある雷鳥沢では、我々OBは空身で溜息をつきながら現役の後を追つたものだつた。

これによつて、去年とは様子が少し違ふと思ひ始めたが、グリセード練習の上達ぶりも、昔の合宿そのまゝであつた。チーフリーダーの横沢の指導ぶりもすつかり板につき、生活技術の方がもう少し向上したら、昔の合宿と少しも変らなйдらうと思つたりした。しかし計画の立て方は、まだ不適当なことが度々あつたので、我々が意見を提出して、変更したこともある。

登攀そのものは悪天候に禍いされ——前年の合宿の時よりもむしろ悪い程であつた——大した収穫はなかつたが、新人に対する基礎技術の訓練については、それ程不足ということもなかつた。が、とにかくもう少し余裕のある生活にもとづいて、もつとのび／＼した登攀を味わえたならば、と氣の毒に思つた。

この合宿を省るに、合宿としての進歩は予想よりも少く、新人の質が良かつたがために、前年の場合よりもはるかに成果を収められたが、幹部級部員は前年の貴重な実験データを生かすことが少かつたように思われる。殊に残念に思つたのは、前年の墜落事故を黙過してしまつたらしいことである。あのスリップからは、リーダーシップの問題はもとよりのこと、生活の問題、人間の肉体的、神経的疲労の問題、岩登り技術に関する問題等、批判、検討により幾多の貴重な教訓が得られた筈である。が、幹部のなげやりなザイルさばきや、新人に対する教育の結果だけを見ても、あの結果を生かして向上に資したというような印象は得られなかつた。当時先輩より、現役の山行はいつでも危機一髪、遭難直前の行動だといわれたのは、このような点における進歩が少かつたからである。山行には常に危険が伴うものであるが、少数の危険を片はしから克服して行くことは、健全なる精神と肉体との所有者にとつては、それ程困難ではない。これは我々の登山にとつて必要なものでさえある。しかし、克服されざる危

険が常に累加されながら、表面的行動のみ進歩するということは、よき冒険ということは出来ない。

秋には横沢も遂に卒業し、こゝで部はまた一名の指導者を失った。新人は比較的順調に育つて行つたが、幹部の不足は目立つて激しくなり、OBも重大な困難を予想して心が暗かつた。

そのうちに、山には新雪の訪れる時期となつた。しかし現役はまだ、冬山らしい冬山には一度も入つていない。これを心配した神山は、自らリーダーとなつて、現役の積雪期登山の指導を行わんと意図した。しかし残念ながら、仕事の都合上この計画には参加出来なくなつた。が、現役は現役だけでも穂高に入るといふ計画を進めていたので、神山のかわりはつとまらないまでも、何かの用には立つと思ひ、私がついて行くことにした。

新宿駅で一緒になつたメンバーの一人に、今度は何所を登るのかと聞いて見たら、上高地に入ることは知つていたが、何所を登るのかは全然知らなかつた。少々あきれたが、当時からかなりの後まで、部の方針というような大きな問題から、ほんのつまらぬ些細な問題に至るまで、何から何までリーダーが一人でかゝえこんで頭を痛めていた時代である。

松本駅で勢揃いしたのは全部で五人。沢渡經由で徳沢に向かう。数回の合宿の経験により、小人数の山行の行動は、比

較的の上手になつて来た。

登攀の第一日は徳沢から奥穂往復とした。私は足を痛めて出発を見合わせ、現役だけで出掛けしたが、登攀は深雪に悩まされ、遂に穂高小屋より引きかえした。雪中行動に余り経験のなかつた連中ばかりだから、無理もないことである。

その日私は調子を回復してから奥又白谷に入り、松高ルンゼを上までラッセルしておいた。上高地は長らく雪が降らないので、徳沢まで殆んど雪を踏まずに入れたが、上部は意外に雪が多いので驚いた。

翌日は、現役が疲労しており、天候も快適ではなかつたから休養した。へと／＼になつてもまだ登ろうとする連中の、引きとめ役を期待していた私には、これはいさゝか淋しいことだつた。休養日は準備、練習等一切行わず、一日中ゴロゴロして送つたが、これも一寸解せないことであつた。

その次の日は奥又を経て前穂を往復した。新人には無理な計画と思ひ、リーダー一名だけ連れて暗いうちに小屋を出た。松高ルンゼの氷の滝を登つた頃夜が明け始めた。最初から悪場に出会つたためか、彼は少々度胆を抜かれた形で、それまで私がつつていた彼のおもかげは全くなかつた。雪山というものに圧倒されたせいか、持つている技術の半分も出なかつたようである。体力的にも弱く、栄養失調気味だつた私に、ラッセルして進むのについて来られなかつた。後で話を聞いて見ると、彼が新人に対する時も、これと同じように感

じたそうである。積雪期登山に余り自信のない私だったが、現役の前途の苦難を予想して、暗愴たる気持であつた。始めは調子次第では前穂―奥穂の縦走をして、その日のうちに涸沢を経て帰るつもりをしていた。が、これも到底見込みなしなので、同じルートを辿つて徳沢に帰つた。

登山は技術的に困難な所は少く、冬山の初歩としてはまことに好適のルートで、雪崩、地形判断、ルートファイディングについて説明しながら登攀した。しかしこれは殆んど頭には入らなかつたらしく、その冬の北尾根行では、ルートを完全に失ひ、かなり危い目に遭つたようだ。教育というものは、図抜けた人間に対する時はいざ知らず、一般には教える方の忍耐が問題で、熱烈なる反復をくりかえすより外はないものと、痛感したのはこの時である。

山行より帰つて、私は自分の覚書の最後に結論として、ただ一行「メンバーを一新するを要す」と書いた。今になつて考えて見れば、その当時の気持を思い出せないでもないが、少々過激な考え方であつたと思う。相手の見境もなく、たゞ叱咤鞭撻にのみこれつとめ、うまく行かなければ責めりして地団駄を踏む。考えて見れば冷汗ものであるが、当時、部の再建問題に巻きこまれていた若いOBたちは、自分の姿には気がつかかなかつたのである。

その後熊の湯において第三回のスキー合宿を行つた。合宿

のやり方は着実に進歩して行つたが、この時或る新人が、手にかんりの凍傷を受けた。凍傷は当時我々の若い仲間ばかりでなく、一般に大変多かつた。これは栄養失調と装備の不良に大きな原因があつたと考えられているが、そのみに責を負わすべき筋のものではない。古い連中は殆んど被害を受けてないからである。要は、行動中の凍傷予防に関する細かい心づかいの不足であろう。これは凍傷問題のみならず、山登り全般について見られた欠陥である。些細な問題に過ぎないように見えながら、実は行動の上に重大な影響を持つ各種基礎動作における欠陥、これは当時の若い人たちの重大な弱点であつたようである。

この合宿の直後、五名のメンバーがテントをかついで穂高に入り、西穂と北尾根を登攀した。もとより批判の余地は多分に残したが、これは現役だけであつた最初の冬山であつた。そして続く二十三年の春には、二年部員の石坂が五名の部員をつれて、横尾谷で合宿するほどに生長していた。

しかし個人の技倆を選手的に向上させようとしたあせりは、その夏に若い仲間を失うという結果をもたらした。が、若いメンバーはその遭難にも打ちひしがれることなく、飛躍的ともいふべき向上を遂げた。同時に、一部の部員の間に余りよくない風潮がしみこんで来た。それは物の考え方が悪く大人びて来たことである。やたらに自己批判がうまくなるのは考えものである。手頃な材料を粗上にとり上げ、これを手

際よくあつさりと批判し、悪うございましたと平伏してしま  
うような情熱の喪失が、昨今の低調を招いたのではなからう  
か。

しかしその後の現役は、はつきりと己の非力を認め、コッ  
コツと実力の養成につとめて来た。OBの方も現役の生長と  
ともに大人になつて来ている。失つた力の回復はそう難しい  
ことではなからう。(完)

## 山 岳 第四十八年

(一九五三年八月刊行)

### 内 容

アンナブルナとマナスルウ 今 西 錦 司  
「ツェルマツト。クラブ室」を中心として 成 瀬 岩 雄  
冬の 知床 半島の 山々 A・A・C・K  
京都大學山岳部

木曾御嶽の夏(赤川谷と傳上川) 新 井 清

ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下 山 崎 春 雄

セガンチニの跡を訪ねて 津 田 正 夫

ヒマラヤ遠征と英國の人々 島 田 巽

**追 悼** 秩父宮殿下(愼有恒・松方三郎)

ヒマラヤン・ノーツスイス隊のエヴェレスト(田中栄蔵)

Annappurna and Manaslu. 1952 (英文)

確 保 論 金 坂 一 郎

A5版二一六頁・寫眞二十七葉・地圖五面

定價四〇〇圓(會員割引三五〇圓)

御希望の方は事務所でお求め下さい

# SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

---

---

Vol. XLIX

Issued in August, 1955

---

---

## Contents

Manasalu, 1953.....	By Yukio Mita.....	1
Annapurna, 1953.....	By A.A.C. Kyoto.....	88
Notes on Aconcaguas Expedition 1953.....	By Kichiro Sekine.....	130
Mountain Huts in Hokkaido.....	By Hidegoro Ito.....	154
Hunt's "The Ascent of Everest" : A Review.....	By Saburo Matsukata.....	174
Himalayan Notes		
The Ascent of Nanga Parbat, 1953.....	By Eizo Tanaka.....	189
Post-war Movements of University Students		
Mountaineering Clubs.....		201
By The Mountaineering Club of The Keio Univ.		
"	The Osaka Univ.	
"	The Waseda Univ.	
"	The Nihon Univ.	

### Contributions from abroad

The Fight for K 2.....	By Robert H. Bates.....	1
An Ascent of Chopicalqui in the Pervian Andes		
.....	By F.D. Ayres.....	15
Annal of Post-war Climblings in the Himalayas.....	By Eizo Tanaka.....	19

Plates.....20

Maps and Diagrams.....7

Editor : T. Katano

Associate Editor : T. Mochizuki, T. Yoshizaka

## The Japanese Alpine Club

*President* : Yuko Maki, Esq.

*Vice President* : Shinrokuro Hidaka, Esq.

*Vice President* : Saburo Matsukata, Esq.

*Honorary Secretary* : Iwao Naruse, Esq.

### *Committee* :

Iwao Naruse, Esq.

Kohei Watanabe, Esq.

Takeichi Katano, Esq.

Tatsuo Obara, Esq.

Kanjiro Numakura, Esq.

Ichiro Kanesaka, Esq.

Shoji Imamura, Esq.

Takamasa Yoshizaka, Esq.

Kazuo Hatsumi, Esq.

Yoshio Toyama, Esq.

Sonosuke Chitani, Esq.

Meiken Funabashi, Esq.

Kenichi Orii, Esq.

**Address** : 6-4 chome, Kanda-Surugadai,  
Chiyodaku, Tokyo, Japan.

# 海 外 寄 稿

## THE FIGHT FOR K 2

Robert H. Bates

“Somewhere above the ice, unwitnessed storms  
Break in the darkness on the summit ridge  
And the white, whirling avalanche  
Blends with the storm, the night, the driven snow.”

Michael Roberts

On August 2, 1953, all eight members of the climbing party of the Third American Karakoram Expedition, in excellent physical condition, were camped at 25,500 feet on K 2 with ten days food. The summit of the second highest mountain in the world (28,250 ft.) rose less than 3000 feet above us. It was our hope to establish two men at Camp IX, at 27,000 feet or slightly higher, on August 3rd; and on the following day, if all went well, to thrust at the summit.

That night we were very happy. Food and clothing were good, all members of the team had acclimatized well, a stretch of good weather was overdue, and morale was high. Success in this great adventure, planned by two of us for 15 years, seemed near. But it was not to be.

On that night August 1, 1953, two of us could think back over years of preparation. Dr. Charles S. Houston and I had been members of the American Alpine Club's First Karakoram Expedition in 1938. During that reconnaissance of K 2, our party had climbed the Abruzzi Ridge, reached 26,000 feet on the southeast face, and come to the conclusion that the world's second highest mountain can be climbed. In 1939 a second American party, under Fritz Weissner, attempted the ascent by the same route. Brilliant climbing by the leader took him to somewhat over 27,000 feet, but later Dudley Wolfe and three Sherpas, including the famous Pasang Kikuli, disappeared between Camp VII and Camp VI. Then came World War II.

Dr. Houston, who had led our 1938 attempt, William P. House, and I all through the war had cherished the hope of returning to K 2. But when the war ended, the Indian Government declared that this was not

## THE FIGHT FOR K 2

the time for visits to K 2, and after partition of the Sub-continent into Pakistan and India, we were told that permission to visit K 2 was impossible. By 1952 we had practically given up all hope of returning to our old opponent and had successfully applied for permission to go to Makalu in Nepal, when, by an amazing change of fortune, the Pakistan Government granted Dr. Houston permission to lead an expedition to K 2 in 1953. We jumped at the opportunity !

With a year to make preparations, we began work : first on personnel, writing to large numbers of friends, acquaintances and mountaineering club officers in all sections of the United States to ask for candidates. As a result we finally considered carefully about 40 men. Many of these were interviewed personally. Of necessity we turned down a number of excellent climbers, who are sure to distinguish themselves on expeditions in the future, but we were tremendously proud of the team selected.

Dr. George Bell, 27, of Cambridge, Mass., a physicist and our largest and most silent member, was well known for his work on Yerupaja and Salcantay in Peru. Robert W. Craig of Aspen, Colorado, 28, philosopher, ski instructor, and humorist of the party, had one of the outstanding records among mountaineers of the Pacific Northwest. Arthur K. Gilkey, 26, brilliant young geologist, had directed the Juneau Icefield Research Project in Alaska in 1952, but was best known to mountaineers for his climbs in the Grand Tetons of Wyoming. Dee Molenaar, 35, geologist and photographer, of Colorado Springs, Colorado, had climbed Mt. St. Elias (18,000 ft.) in the Yukon Territory and was equally at home on difficult snow or rock. Youngest of the party, also 26, was Peter Schoening, a chemical engineer from Seattle, Washington, known for his leadership of the King Peak Expedition to Yukon Territory in 1952 and for his hobby of making a fine art of belaying. (For this skill we were all to be profoundly grateful before the end of the summer.) Capt. H. R. A. Streather, 26, of Warminster, England, who had climbed Tirich Mir with the Norwegians in 1951, was selected as transport officer, but he later turned out to be a most valuable member of the climbing team as well. Col. M. Ata-Ullah, 50, of Rawalpindi, Pakistan, a most imaginative



1953年アメリカ K2 遠征隊員

- 後列 H.R.A. Streater ; Dr. Charles Houston ; Robert W. Craig ;  
Dr. George Bell ; William White ; Peter Schoening ; Robert  
H. Bates ;
- 前列 Dee Molenaar ; Arthur Gilbery ; Lt. Zafar ; Col. M. Ata-  
Ullah



Camp VI より新疆省の山々を望む

and determined officer, was to run our Base Camp and assist in many ways. William P. House, brilliant member of the 1938 expedition to K 2, was unable to go this time but served in the important capacity of expedition treasurer.

Long before we were to assemble with "Ata" at Rawalpindi, work must be done: clothing, food, equipment, and funds were needed. In some ways, clothing was the easiest. We tested such items as quilted underwear and some magnificent scarlet jackets filled with down. We had leather boots with rubber cleated soles, and also rubber boots known as "thermos bottle" or "Mickey Mouse" boots because of their shape and sealed-in insulation. These later proved to be the warmest boots we wore on the mountain.

Our climbing equipment was good but not extraordinary. We had 7/16- and 3/8-inch nylon climbing ropes and 2200 feet of fixed rope. Tents, packs and packboards were largely of American make, but our ice axes and crampons were European. Our food included meat bars -each a pound of steak dehydrated to 4 ounces-Italian pan forte, and several precooked dehydrated vegetables. We also had baby food cereals, which required no cooking, but they proved tasteless. How American babies can eat such stuff regularly I can't understand! In general, however, our food was light, nutritious, and easy to prepare. We packed it in some 4000 polyethylene bags, each containing two men's portion of one item for one meal. Larger plastic bags held the food supply for two men for one day. The work involved in making these bags from sheets of plastic, putting in the food, squeezing out the air, and heat sealing them was arduous; but thanks to members of the Harvard Mountaineering Club and other friends we completed it. This packaging proved a tremendous success on the mountain.

Heroine of this period of preparation was Dorcas Houston, whose home was inundated with tons of food and equipment, and filled at all hours with helpful packers and interested onlookers. The young Houstons loved it all, even when the linoleum of the kitchen floor was gummed with a mixture of sticky raisins, excelsior and dehydrated potatoes, and

## THE FIGHT FOR K 2

flaky baby food oatmeal infiltrated the dining room rug. Casualties were inevitable. For instance the bread knife was never the same after it cut 24 Italian fruit cakes into eight sections each. Mrs. Houston even must have considered moving into the garage during our major packing weekend when a 24-pound turkey was consumed at one sitting during a pause in the furious tempo of loading and strapping boxes.

It was Mrs. Houston, too, whose discovery of a tasty new kind of chocolate led to a gift from the company of 30 lbs. of the chocolate, 30 lbs. of another kind of chocolate and 30 lbs. of sugar-coated peanuts, plus a cheque for \$50. Members of the American Alpine Club were very generous with gifts and loans, and these plus personal funds, and contracts with the Saturday Evening Post and the National Broadcasting Co. temporarily solved our financial problems and we were able to proceed. The National Broadcasting Co. was to show our movies on television, and so we went well equipped with tape and wire recorders.

In mid-April our two and a half tons of food and equipment left New York for Karachi on the freighter "City of Carlisle," and a couple of weeks later I flew to Karachi to meet the ship, shepherd our gear through customs and get it on the train to Rawalpindi. All went well. The rest of the party flew to Karachi and on May 27th to Rawalpindi. We had chosen this time of year to assault K 2 because previous expeditions and the Pakistan Weather Bureau were unanimous in the opinion that late June, July, and early August is the period of best weather in the Karakoram. Opinion seemed unanimous, too, that no monsoon ever reaches the Karakoram. The nearest weather station, Skardu, reports an annual rainfall of about 7 inches, and the barren rock faces throughout the Karakoram testify to its dry climate.

On June 2nd we flew to Skardu on a flight that seemed especially remarkable to Dr. Houston and me. Fifteen years before, we had driven for a whole day to get from Rawalpindi to Srinagar, and then had walked 241 miles over rough terrain to get to Skardu. Now in an hour and a half we had traveled the same distance ! And this time we were greeted by rajahs with garlands of roses, brilliant cloths hanging

throughout the bazaar, and placards in English with words of welcome. When we saw the modern hospital and moving picture theatre we were even more amazed. The Pakistan Government has done wonders in Skardu.

Capt. Streater, who had flown in earlier, met us with the statement that all porters had been arranged for, but prices were high. We had estimated porter costs as three times what they were in 1938, but they cost eight times as much! Twelve Hunza porters were there, too, of whom we were to take six with us on the lower part of the mountain. They lack the humor and experience of Sherpas, but are bigger, more rugged and aggressive, and should build up an excellent tradition as mountain porters. Sherpas, of course, were not available in Baltistan, where bitterness against India for holding southern Kashmir runs high, and we were strongly advised to use Hunzas and train them as we went. They performed well.

The expedition crossed the Indus at Skardu on June 5th with over 100 porters, and began the rough, two-weeks march to Base Camp. Drought had dried up many springs and we had great trouble getting anything but silt-laden river water to drink. At Dassu the coolies insisted that the trail along the southeast bank had been damaged by rock-fall and so we crossed the Braldu River by goatskin zhak and went along the northwest side. Up and down the cliffs of the barren river gorge we worked our way, occasionally passing through villages where delicious mulberries clustered on the trees, always within sight of distant snowy summits. At Askole, the last village on our way to the mountain, we bought atta, took on some 75 more coolies to carry this flour for our men, and made arrangements for mail runners. Then we were off for the Baltoro Glacier and its fantastic spires and pinnacles. Masherbrum rose above us in perfect weather, and we had fair views of the Muztagh Tower and the Gasherbrums before turning up the Godwin-Austen Glacier, which flows between Broad Peak and K2. Six of the world's highest peaks rise in this fabulous area.

On June 19th, the day we were to arrive at Base Camp, Dr. Houston and I arose very early and went on ahead to select the site for Base

## THE FIGHT FOR K 2

Camp. Our 1938 campsite on the Godwin-Austen moraine near its confluence with Savoia Glacier had totally changed, but we finally located an even better site a little further east. Our objective, the second highest mountain in the world rose awesomely above us.

In the next few days we reconnoitered two different routes to the site of our old Camp I on the glacier near the foot of Abruzzi Ridge, and started to move up supplies. Then came reconnaissance to our old Camp II, where we found jam, ovaltine, and a 4-man Logan tent of the Weissner party in almost perfect condition. Craig and Gilkey placed several hundred feet of fixed rope between Camps II and III, for the route is unpleasantly exposed for loaded men. Our Hunzas carried loads to Camp III and helped us build tent platforms there that hung dramatically over space. This camp was 100 yards from our old Camp III, which had been dangerously exposed to stonefall. Above this point we did not take the Hunzas, who were neither equipped nor technically trained to meet the severe conditions above. They returned to Base Camp just before a storm struck the climbing party at Camps II and III.

Shortly after this storm at Camp II, Dr. Houston neatly pulled a tooth which I had loosened earlier while biting a very tough chicken leg at a dinner given for us at Askole. One of the Hunzas, a professional dentist at home, was fascinated by the forceps and the doctor's modern methods. Later, Dr. Houston gave him the forceps.

Above Camp III, we pushed steadily on to our old site for Camp IV, just below the House Chimney. This is a narrow, icefilled gash about 100 feet high, that cuts the cliff band of steep, reddish yellow rock that blocks the Abruzzi Ridge at at 21,500 feet. Ropes from the 1939 party still hung in the Chimney (which was first climbed by Bill House in 1938), but of course they were entirely untrustworthy. Dr. Houston led this dangerous pitch as determinedly as George Bell had led the wicked gendarme below. Above the Chimney, Schoening placed an aluminum A-frame he had made for the purpose in Seattle, and it proved invaluable as we hauled up 900 lbs. of food and equipment.

We found food and the remains of tents at IV, and when Schoening

and I reconnoitered to Camp VI, a pitiful sight greeted us. Within the remains of two Meade tents lay three neatly rolled Sherpa sleeping bags, still with their characteristic smell, a primus stove, ovaltine, and a blue bandana handkerchief in a Primus stove box filled with excellent Darjeeling tea. From this camp three gallant Sherpas, splendid men—Pasang Kikuli, Phinsoo and Kitar—had departed on July 29, 1939 to attempt the rescue of Dudley Wolfe, whom circumstances had caused to be marooned at Camp VII. None of the four ever cameback. Mountaineers should never forget their magnificent rescue attempt. They were men among men, and we paid silent homage to them.

Storms had bothered us continually above Camp II, costing us an extra day or more in every camp. Indeed, we had been forced repeatedly to work in unsettled weather. Snow and wind hammered us at Camp VI shortly after Houtston, Craig, and Bell returned from a reconnaissance to the top of the Black Pyramid, as we called the culminating point of the Abruzzi Ridge. Actually the ridge is more a rib on a broad face than a true arête. From VI to VII the way is very exposed and the holds are small. This is probably the most dangerous section on the route. Loose rock continually endangers the lowest men as a group moves upward. With fresh snow over these slabs and ledges, climbing with 30 to 40 lbs. was most unpleasant.

After the storm at VI, we all established a cache on the windy col at the top of the Black Pyramid, and next day Gilkey and Schoening left very early with light loads to find a site for Camp VII. To our dismay and surprise, they could find nothing. Almost in desperation Craig and Houston helped them to carve a platform in the steep ice slope so that they could bivouac in a small tent and continue the reconnaissance next day. That night one-third of their tent overhung the slope, but they managed to sleep, and next morning, which was cold and raw, they examined the slope where the 1938 and 1939 parties had set up their Camp VII. To their utter amazement, they found that the whole small plateau of the old Camp VII had slid off the mountain!

Now there seemed nothing to do but attempt to climb the steep ice

## THE FIGHT FOR K 2

slope that had daunted the 1938 and 1939 parties and caused them to traverse at this point. With great skill and daring, Gilkey and Schoening now began to cut steps straight up from the point where the two previous expeditions had made the "ice traverse." Ice pitons were sunk, some 300 steps were cut—at 25,000 feet!—and gradually as firm snow was reached the slope began to ease. At frequent intervals throughout day, those of us at Camp VI, where visibility was zero, talked to the two men above. Though the weather was better where they were, we were all relieved and thrilled by the news that they had forced the "ice cliff" and found an excellent position for Camp VIII! Our morale soared. If we now could firmly establish Camp VIII, we should be in a strong and enviable position. Or so we thought.

During the next two days considerable fresh snow fell, but by nightfall on August 2nd all eight of us in the climbing party were firmly established at Camp VIII. We were all there because we wanted the carrying capacity of eight men to establish two men without delay at Camp IX, from where they would assault the summit. Our plan was for two men to make the attempt from Camp IX. The day they attempted the summit, we would move up a second pair to Camp IX, to try for the summit on the following day if the first team failed.

But these plans were never carried out. On the night of August 2nd monsoon winds smashed at our exposed camp with unbelievable violence. We could not even communicate with the other tents, pitched three feet away, for most of the time the drumming of the blowing snow and groans of the straining tent fabric eliminated all other sound. On the night of August 3rd, Houston and Bell reported that their tent could not hold much longer. It survived the night, but at seven-thirty next morning we heard a faint cry, "Our tent's gone!" Houston made two trips from his torn tent to the one Streather and I were sharing, and that was all he could manage. We hauled him in, brushed him off and warmed him. George Bell crawled in with Gilkey and Schoening. No man could survive more than a few minutes without shelter in this terrible blast of wind and blowing snow.

For the next few days, as the storm continued, we never knew how long our tents would endure. That was our greatest concern. Another was how we were to get liquid. Food we had, but the violent buffeting of the wind so thrashed our tents that the flame of our stoves would be sucked out soon after we managed to get a stove lighted. Some days we had tea or hot cereal, but often we did not, despite almost continuous attempts. One cannot eat much snow and keep warm and one cannot melt much snow by friction, but we did our best. Since we were breathing through our mouths, however, we lost more moisture than we gained; and as our blood became thicker, we repeatedly lost sensation in our toes. Our feet were warm inside the sleeping bag, but our toes lacked sensation unless we kept kneading them hour after hour.

On August 7th, during breakfast, a brief lull developed in the storm. The snow stopped, the wind dropped and we began to discuss the state of our supplies, the condition of the snow, and what two climbers we might still be able to push up to Camp IX if the weather completely cleared. During the storm we had voted Bell and Craig, and Schoening and Gilkey to be the first and second teams to try for the summit. Art Gilkey was apparently in excellent condition for the final assault. But our optimism was brief. Ten minutes after breakfast Art Gilkey stepped out of his tent and fainted from pain. Somewhat he had developed thrombo-phlebitis, with a blood clot in the calf of his left leg.

We were shocked! Gilkey had never been ill before, and we had never heard of anyone developing thrombo-phlebitis on an expedition. Smallpox would have been no more surprising to us. There was but one thing to do: to get him down before pieces of the clot broke off and entered his lungs or other vital organs. At once we wrapped him in his sleeping bag, in the shattered tent, broke camp and started to drag him down, but we had not estimated the depth of the new snow; we stopped 120 yards from camp for the whole slope was saturated with new snow and in danger of immediately avalanching. Our old route had become a trap. We needed all our strength and over an hour's time to work Gilkey back through the three-foot depth of floury snow to Camp

## THE FIGHT FOR K 2

VIII, where we grimly repitched the three tents.

At this point Schoening and Craig went off to see if they could find some other route down. If they couldn't, we were all in an extremely bad position, for even under favorable conditions, the slope below us would not consolidate for several days. Fortunately, the storm, which was now beginning again, held off just long enough for our two scouts to climb down to a rock ridge which they thought could be descended, and from which we hoped to be able to cross to our old route below the avalanche slope. But new storm clouds rolled in to limit further observation. Over the walkie-talkie Col. Ata-Ullah gave us the weather forecast specially broadcast to us: more storm !

We doubted our ability to slide or carry the helpless Gilkey down from Camp VIII, but were determined to try it if he couldn't walk. Fresh gusts of snow tore at our tents for the next three days. We were getting low on food even with half rations, and our energy was being sapped. On August 10th we decided that two men should stay with Gilkey when the storm lifted, and the others go down and attempt to bring back food from VI. Though we all volunteered to stay with Gilkey while the others went down, Dr. Houston insisted that he must stay for medical reasons and he chose Streather to remain with him.

On August 11th, however, Houston came to my tent and said, "We must take him down."

Someone said, "In this storm?"

"Yes. It means life or death for Art."

During the night a clot had entered Art Gilkey's other leg, and at least one piece had entered his lungs and been thrown off with difficulty. Outside the tent where Gilkey lay in this sleeping bag, ferocious gusts were pounding at the little camp, straining the tents to the utmost, but without another word we all began to pack. The venture seemed absolutely desperate, but we would do anything for Art Gilkey, as he would have done for us. We lashed the torn tent around his sleeping bag, tied four nylon ropes to it and started down. "How do you feel, Art?" we asked as we started off. "Just fine," he said with a drawn smile, but he

knew the odds against him. I have never known a braver man.

The next hours none of us will ever forget. As the furious wind lashed us, beards, eyebrows, and goggles became coated with ice, and hands and feet steadily lost sensation. Once, while we were belaying Gilkey down a long snow couloir, he and Bob Craig, who was with him, disappeared under a powder snow avalanche, but the rope held firm and the cold powder roared on without them. It was a near thing for Bob Craig. The whole descent was desperate. Snow squalls blotted out everything and nearly choked us. By three in the afternoon we were nearly exhausted. Craig unroped and traversed across to our cache at Camp VII to try to enlarge the platform there and get up a tent. The rest of us, except for Bell, were near Gilkey on a steep ice slope, getting his ropes to pull over to where we could get a belay and move him horizontally toward Camp VII. Above us was a snow gully, below us nothing to halt a fall to the Godwin-Austen Glacier, nearly two miles below.

As we were in the act of moving across to a belay point, without warning George Bell fell. Whether a rope snagged and pulled him off the ice slope, he doesn't know; his feet and hands were numb and the gusts were furious. Streather, who was roped to him, was torn off and hurled into the rope between Houston and me. All of us were still several feet from the nearest belay. As I saw Houston disappear, I thrust desperately at the ice with my axe, and at the same instant was thrown violently backward. Nothing, I knew, could stop us. This was the end. I bounced down over rock outcrops, and, just as I expected the next bound to be several hundred feet and end it all, I stopped !

My head was much lower than my feet, and my hood was jammed over my eyes. The rope had wound round my hands, and I was nearly helpless. Just then I heard a groan, almost in my ear. Someone pulled the ropes off my hands. I gripped a rock and swung around. There was Molenaar with his hair on end and blood trickling over his moustache. Above me, I could see Streather trying to stand up. Then blowing snow blotted everything. A moment later I heard a cry from below, "My hands

## THE FIGHT FOR K 2

are freezing !” There, 60 feet below, on the edge of nothing and without his pack, crouched George Bell ! He had been as high above me a moment before. His outstretched hands were bare and a sickly white. I climbed down to him and worked a pair of spare mittens onto his hands. His had been whipped off in the fall.

Meanwhile, Dee Molenaar had seen someone unconscious. It was Houston. I unroped and climbed carefully down to him. He stood up when I touched him, but he didn't know where he was. There was no time to waste; we must gain shelter. “If you ever want to see Dorcas and Penny again (his wife and daughter), you climb right up there now,” I said, with great intensity, pointing to where Molenaar held him on a rope. A look of fear came over him, he turned and climbed rapidly and skillfully over the difficult rock.

Gradually we assembled everyone at Camp VII, Craig anchored Gilkey securely on two ice axes, and Streather, Craig and I began to enlarge the platforms and get up the tents. Apparently we had been saved by a combination of circumstances: Schoening had a strong belay on Art Gilkey, and just before the accident Molenaar had tied onto one of the loose ropes used to pull Gilkey across the slope. Bell's fall pulled off Streather, who fell into the rope between Houston and me, and then into the rope between Molenaar and Gilkey. He fouled onto both. In this way the weight of Houston, Bell, Molenaar and me came on Streather, and through him was transmitted to Gilkey and Schoening, who held us all. It couldn't happen, but it did !

As soon as the tents were up, Streather, Craig and I traversed back to the icy gully, 150 feet away, to see whether we could move Art Gilkey to Camp VII. We had called to him and he had called to us while we were chopping the tent platforms, but the storm made words indistinguishable. Now, as I crossed the rib of rock separating Camp VII from the icy gully, I saw something I shall never forget. The slope was bare. An avalanche we never heard above the roar of the storm had swept the gully. There was no trace of our beloved and gallant companion.

The shock was terrible but at the moment somewhat dulled by our

exhaustion and the perils of our own position. That night Houston was continuously out of his head except when he slumped unconscious, and he needed continuous care. Thank God the gale ceased in the evening. At dawn it began again, but all of us though badly shaken and going largely on nerve, fought our way down the steeply angled icy slabs to Camp VI. It was like descending the icy roof of a cathedral, but nobody slipped.

Camp VI seemed like heaven. For the past two days we had done the most desperate climbing of our lives, but we still had a long way to go. Next day, August 13th, we were trapped in our tents, but on the 14th we worked our way to Camp IV as Houston showed a marvelous recovery and was the last man to descend the Chimney. On the 14th, despite appalling conditions of snow and ice-covered rocks, we descended to Camp II, where our faithful Hunzas met us. We looked for Art Gilkey's body all the way but never found it.

The meeting at Camp II we shall never forget. Our porters fed us and cried over us and prayed for us. Our own feelings were too deep for words. Somehow all but one of us had been saved to live again and climb again and savor the joys of friendlier mountains.

We reached Base Camp on August 16th and next day left a memorial to our brave, beloved comrade Arthur Gilkey in a magnificent cairn erected at the confluence of the Savoia and Godwin-Austen Glaciers. His ice axe rests there. No man has a monument in a more beautiful and majestic place.

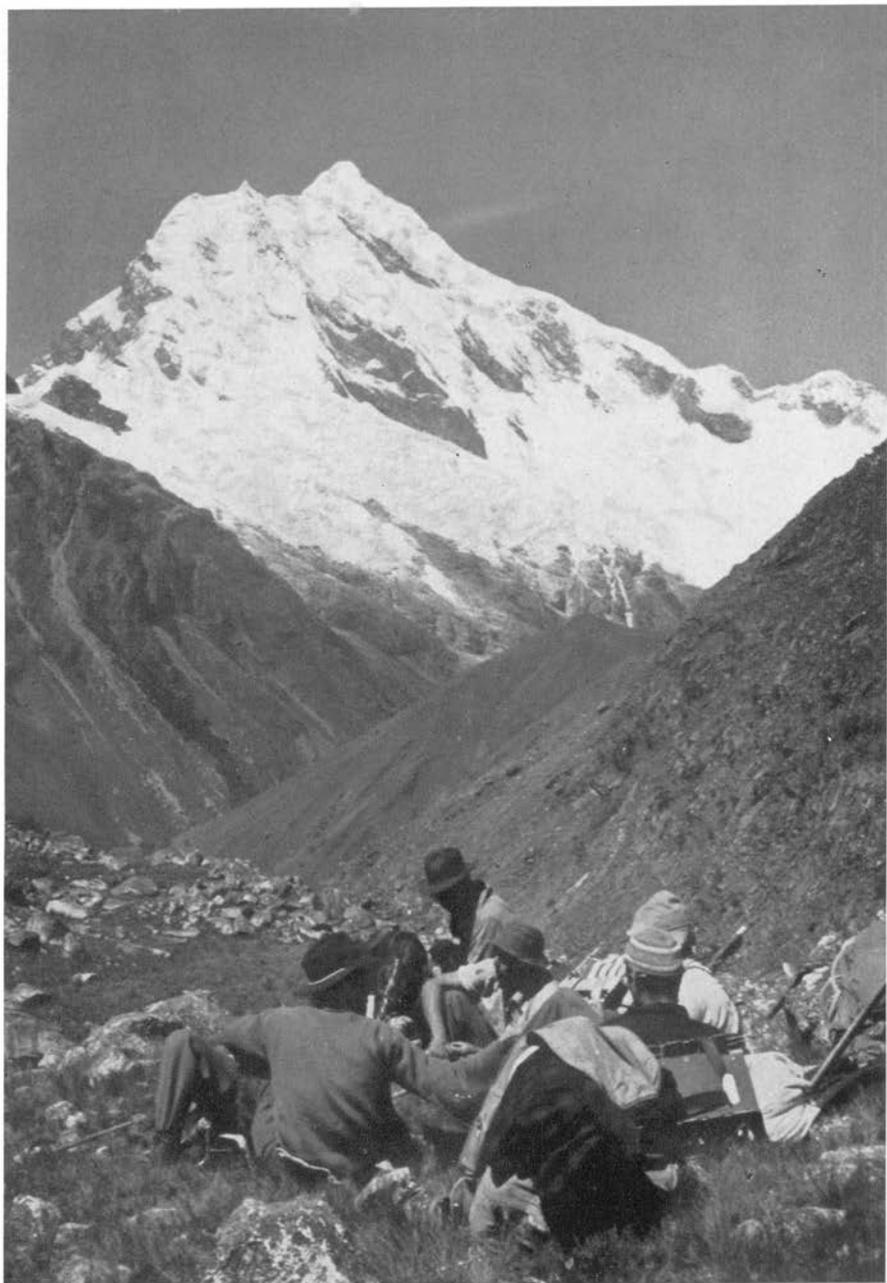
On August 18th the battered party began the return march to Skardu. Houston, whose indomitable spirit and leadership had shown from the start, had a chest injury, and Craig and Molenaar had frost-bitten heels. George Bell, whose feet were badly frostbitten and who had shown tremendous nerve in the descent, now had to be carried,\* and all of us showed signs of our battle for life. Still, in spirit we were unconquered. All of us who came back would climb again. We

---

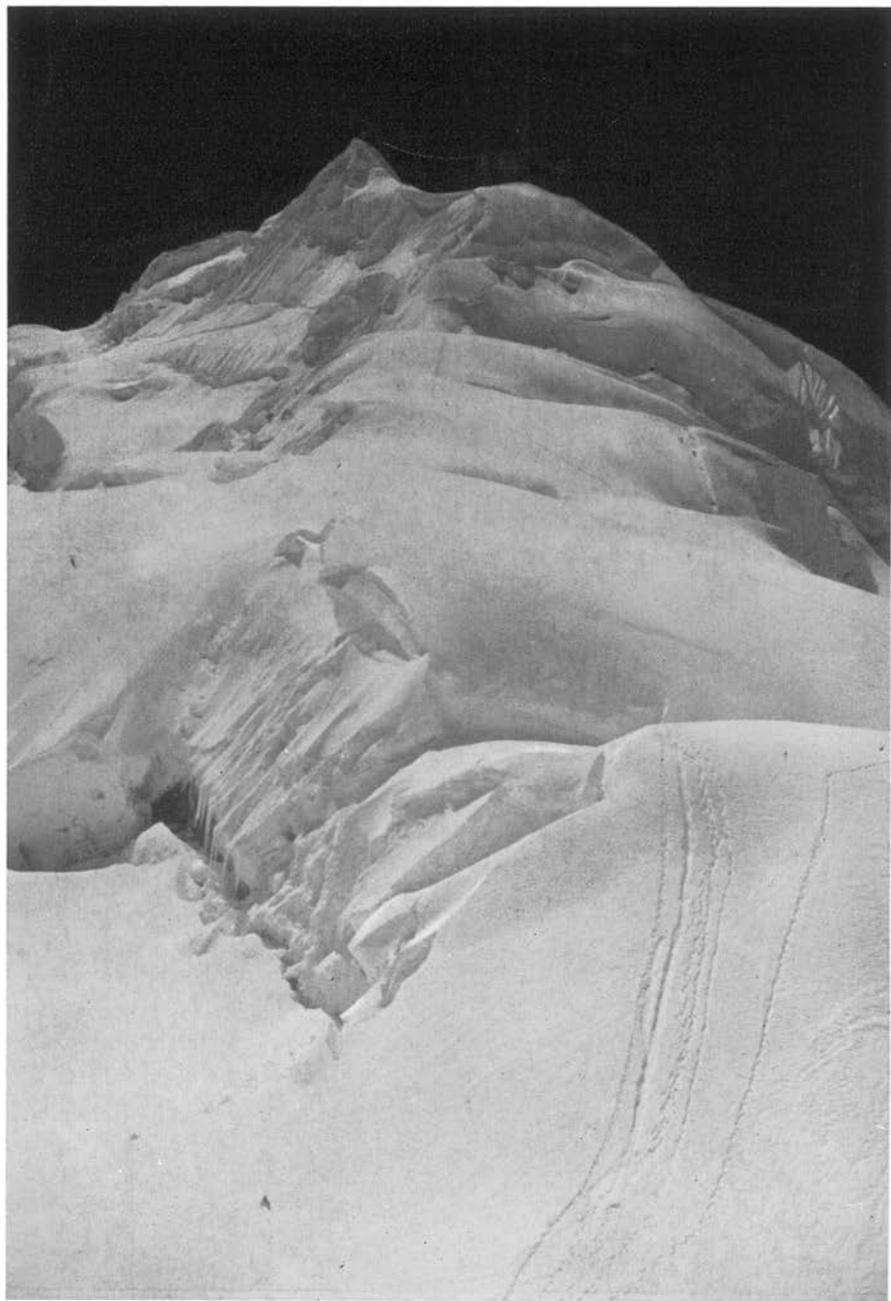
\* In September the small toe and one joint of the big toe on George Bell's left foot were amputated in Boston, but thanks to Dr. Houston's care this was the extent of his loss. He is now skiing and climbing as well as ever.

## THE FIGHT FOR K 2

had taken the worst that K 2 had given us and were retreating with heads high. For we had done our best. We had kept faith with ourselves.



フアンドイの斜面よりチョピカルキを望む



チョビカルキ最高キンヤンプより頂上を望む

## AN ASCENT OF CHOPICALQUI, IN THE PERUVIAN ANDES

Fred D. Ayres

The Andes of central Peru reach a sustained climax in the Cordillera Blanca, or the White Range. This chain of bold, snow-covered peaks extends for about 100 miles parallel to the coast and only about 70 miles from it. Between Champara, the northern outpost peak, and Rajutuna at the southern end, there are more than two dozen major summits over 6000 meters high. The Cordillera is only about 700 miles from the equator and enjoys generally mild and stable weather during the dry season from June to September.

Many of the peaks are readily accessible. A gravel road connects Peru's coastal highway with the town lying along the western foot of the range. From these settlements, situated at 2000 to 3000 meters, good trails lead up the principal canyons to elevation of 4000 meters, and some continue higher over passes exceeding 4500 meters. Thus the mountaineer can in many cases gain a great deal of altitude quickly and easily, and may even do so on horseback if he so chooses. These factors, combined with a pleasant climate, the friendly hospitality of the Peruvian people, and the rich historical background of Peru itself, make the area an especially attractive one.

About the middle of June, 1954, an eight-man party from the U.S. arrived in the town of Yungay, Department of Ancash, near some of the highest summits in the range. Our objectives were among the peaks bordering the Yanganuco Valley, which runs directly back into the heart of the Cordillera from Yungay.

The party had scattered origins. Leigh Ortenburger and Richard Irvin came from California, Graham Matthews from Massachusetts and John Oberlin from Ohio. George Bell was from New Mexico. Alexander Creswell and Fred Ayres, from Oregon, arrived in Lima a week early and completed customs and transportation arrangements. David Michael, originally from Georgia, hurriedly returned from a study tour in Germany,

## AN ASCENT OF CHOPICALQUI, IN THE PERUVIAN ANDES

barely skimming through the eastern U.S. in transit.

By the time we arrived in Yungay, Mr. Cesar Morales, of the Grupo Andinista Cordillera Blanca, who assisted the expedition in many ways, had already located for us four porters, Eliseo Vargas, Miguel Flores, Eugenio Angeles and Felipe Mautino, all sturdy reliable fellows. On June 19 base camp was established near the head of the Yanganuco in a delightful meadow at 3900 meters. We maintained the camp until August 5, a period of over six weeks. During this interval, the weather was generally good and we made successful ascents of Yanapaccha (5460), Pisco (5753), Chopicalqui (6400), and two of the Huandoy summits (6395 and 6356). From another camp the two summits of Huascarán (6768 and 6655) were climbed at a later date. No one member of the expedition climbed all these peaks, though Ortenburger and Creswell climbed six each. There is described here only the Chopicalqui climb, the single one in which all eight members of the party participated.

Chopicalqui had been climbed but once before, by an expedition from the German-Austrian Alpine Club in 1932. We made the ascent by substantially the same route they had used, the southwest ridge. For five days we worked to establish a high camp (Camp 3) in a col at 5650 meters on the ridge. By late afternoon of July 9, we were solidly in position eight-strong with food for several days. The porters were in Camp 2 at 5150 meters, where they were to remain until time to evacuate the high camp. The summit was still 750 meters above us and the route an unknown quantity. We made up climbing packs and squirmed into our sleeping bags shortly after dark, four in a Logan tent, the others in two smaller tents.

In the gray dawn of the following morning, we started up the ridge. First, there was a long grind through deep unconsolidated snow over a series of rolling shoulders. We interchanged leads in the first rope as well as alternating the leading rope. However, on some of the pitches it seemed to make little difference whether one were first or in number eight position. In the later case the trail certainly was well broken, but just as bottomless and perhaps even more unstable for having been

thoroughly churned up. Eventually we reached a narrow section of the ridge, happily constructed of firm snow, up which Matthews kicked steps for 90 meters until it rounded off into a sloping shelf.

We were now confronted by a great ice wall which was clearly unclimbable at any point in sight. We followed the bench to the right, the only choice. It climbed slowly, becoming more commodious all the while. What pleased us more was that it eventually led out into the sunshine. We had been on the shaded side of the mountain all morning and had never quite recovered from the refrigeration suffered while wallowing in the deep snow.

By now we had almost crossed the entire upper south face of the mountain, and the subsidiary southeast ridge was not far ahead. The ice wall was still above us on our left, but it was dwindling to the proportions of a crevasse with an overhanging upper lip. At the very crest we finally succeeded in crossing, and then continued up until we rejoined the south ridge.

The summit was only a few hundred yards ahead. We viewed it with mixed feelings. It was a handsome snow tower, but its top was accessible only by the side facing us, a steep, fluted wall of snow. When we approached the base, we found we were separated from it by a side-wise crack which extended nearly horizontally back into the tower. Though the upper lip was higher by at least a vertical foot than the lower, long-legged Bell surmounted it in one swoop. The surface snow on the face was insecure and cascades of it came pouring down as Bell scooped it aside in search of reasonably secure footing below. Irvin, who was belaying, finally sought escape from the deluge by backing into the little crevasse. The last four feet of the wall was too steep to climb directly, but Bell opened a passage by vigorous chopping and yards feet over into the upper slope of the tower, whence it was an additional 300 feet to the high point further back. During the rather lengthy process of ascending the tower, clouds had gathered around the summit. However, soon after we reached the top, the fog cleared almost completely and we had a magnificent view of all the northern Cordillera. We were above

## AN ASCENT OF CHOPICALQUI, IN THE PERUVIAN ANDES

everything except the twin summits of Huascarán only a short distance southwest of us. Irvin and I were the last to leave the summit. We worked our way down the face of the tower and joined the others waiting below. For the most part the descent was rapid. We belayed down the few steep pitches and lurched through deep snow elsewhere, arriving in Camp 3 well before sunset.

The porters joined us next morning, and with 12 people available to carry loads, all equipment was returned to base camp by the end of the next day. Though not the highest of our Cordillera Blanca climbs, Chopicalqui was probably the most enjoyable.

海外二寄稿はいずれもアメリカ山岳会のセクレタリーである、John C. Oberlin 氏の斡旋により K2 1953 年は Robert H. Bates 氏より。望月理事に、又 Chopicalqui は Fred D. Ayres 氏より三田評議員宛にいずれも鄭重な書簡と、見事な数葉の写真を添えて送られて来たものである。紙面の都合により全部の写真を掲載できないのは残念である。尙いづれも編輯当初に於ては邦訳して掲載の予定で K2 は今村理事が訳し後者は編輯者が訳したが、その後紙数を削減する必要から原文のまま掲載することにした。

Robert H. Bates 氏、Fred D. Ayres 氏いずれもアメリカ山岳会員である。本誌に対する両氏並びに John C. Oberlin 氏の御好意を感謝する。 (編者)

# 戦後のヒマラヤ登攀年譜

(1945~1953)

田中栄蔵編

## 凡 例

- 1 本年譜はマルセル・クルツ編「ヒマラヤ年譜」を参考として編集した。
- 2 資料の入手不能のものがあつて、採録していないものがある。
- 3 配列と記載の順序=年代、遠征月(間)、隊長名(隊名)、地域と目標の山岳の登攀・探査範囲、到達地点、人名、月日。
- 4 参考文献は煩雑にすぎるので省略した。
- 5 正確を期したが、未祥・誤りは御叱正・御教示を乞う。

## 1945

- |                  |   |
|------------------|---|
| 5—6 von Spindler | Garhwal の Bandar Punch (6315 m) の東面に試登。   |
| 6 (イタリア隊)        | Punjab の Mulkila (6517 m) の西北西及び北北東の 6300 m に試登。Gangstang (6163 m) を Cima Italia と命名した。 |
| 10 (イタリア隊)       | Punjab の Deo Tibba (6001 m) に試登。  |
| 7 J.W. Thornley  | Punjab の Salgaraon の北の P. 6300 m の 4700 m まで試登。   |
| 7 Tilly          | Sikkim の Chomiomo (6828 m) の北東稜よりの初登攀。  |
| 9 W. Noyce       | Sikkim の Paühunri (7127 m) の第二登。  |
| 9—10 Wood        | Garhwal の Nanda Ghunti を Ronti の間の鞍部より試登。   |
| 10 Langton-Smith | Sikkim の Sugar Loaf (?) にて行方不明。   |

## 1946

- |                   |  |
|-------------------|--|
| 4—5 Leakey        | Garhwal の Bandur Punch (6315 m) の南東稜 6200 m まで試登。                      |
| 5—6 Berry         | Nun-Kun の White Needle (6700 m) 第二登。                                   |
| 5—6 Krenek & Kolb | Punjab の Padar 連峰探査。 Dreikant (ca. 5850 m) Sonnwendspitze (ca. 5800 m) |

戦後のヒマヤ登攀年譜

- 5—7 Robert & Lorimer Karakoram の Sasir Kangri (7672 m) 西, 北及び南面  
探査。
- 7 Holdsworth Garhwal の Bandur Punch (6315 m) 南東稜の 6100 m  
まで試登。
- 10 Braham Sikkim の Tangu 地方踏査。
- 12 Marsh Sikkim の Kabru, C.2. 5600 m まで試登。
- 1947**
- 4 Denman Everest の North Col 7007 m まで試登。
- 5 Marsh Sikkim の Kabru C.1. 5300 m まで試登。
- 5 Wylie Garhwal の Nilkanta (6596 m) 南東及び西稜を 5500  
m まで試登。
- 5—9 Hans Gyr Karakoram の Biro 氷河の 3500 m に B.C. を設置し,  
R. Kappeller Rakaposhi (7790m) の北, 西稜の 5700 m まで試登。  
C. Secord 続いて南の Kunti 氷河より南西稜の 6200 m に至る。  
Tilman 7 月 さらに北方の Kukuay 氷河を上部までさぐり  
5700 m 峯の近くに達した。  
8 月 東方の Rhakan Gali をこし, Haramosh の西部  
をさぐつた。
- 5—10 Sutter & Lohner Garhwal の Kedarnath (6940 m), Satopanth (7075 m),  
Graven, Roch Balbala (6416 m), Nanda Ghunti (6309 m) に登頂。
- 8 Shipton & Tilman 新疆の Mustagh Ata (7434 m) の頂上近くまで試登。
- 8 Braham Garhwal の Kalindi Khal と Bhyundar Khal 行。
- 9 Malcolm Garhwal の Trisul を南面の Bidalgwar から試登。  
Baroltali (5275 m) 登頂。
- 1948**
- 7 Maraini Tibet-Sikkim 境界の Tangkar La (4895 m) P=5377 m  
に達したか?
- 1949**
- 4—8 A. Sutter 北東ネパール。Darjiling より Kang La の北の Kangla  
R. Dittert Nangma をこし, Tamur 河の源流の Lhonak (4660 m)

- Wy-Dunant  
A. Lohner
- 5—8 Braham
- 6 Walter
- 6 Unsoeld
- 6—9 Tilman
- 7 Arne Naess
- 10 D.G. Wood
- 10 Charlton-Thomas
- を B.C. として Kantsch 氷河及び Lhonak 氷河の Pyramid Peak (7123 m), Tang Kongma Peak (6250 m) に登頂。さらに Tibet 国境の Nupchu (7018 m) の 6800 m に達し, Dzanye Peak (6600 m) に登頂。帰路は Tamur 河ぞひに下り Taplejung, Sandakphu をへてかえる。
- 北東 Sikkim の Khangkyong 氷河に入り Hidden Pass (ca. 5800 m) をこして Mome Samdong に出て, Dongkya La をこし, 北及び西方より Kangchenjau (6889 m) を試登, 6200 m に達した。
- 北東 Sikkim の Pauhunri (7127 m) 第三登。
- Grahwal の Nilkanta を西方より 5500 m まで試登。
- Central Nepal の Langtang 及び Ganesh-Himal を偵察。
- Hindukush の Tirich Mir の偵察。
- North Sikkim の Jonsong La (6145 m) に達す。
- Garhwal の Panch Chuli (6904 m) を東方より試登。

### 1950

- 4—6 M. Herzog
- 5—8 Murray  
Scott  
Weir  
Mackinnon
- 5—10 Tilman  
Evans  
Robert
- 5 Lucas
- Nepal の Dhaulagiri を偵察し, 続いて Annapurna 主峯のルートを発見し, North Annapurna 氷河に入り, C.5 (7300 m) より 6月3日主峯 8078 m に初登頂。帰途は散々な目にあう。
- Garhwal の Rishinganga より Betatoli Himal と Hanuman, South Lampak Peak に試登した。続いて北方より Uja Tirche (6202 m) に初登頂。Girthe, Milam, Unta Dhura をへて Ralam から Panch Chulhi の東面より 5800 m に試登。
- Nepal の Marsyandi Khola を登り, Annapurna IV 峯 (7529 m) を北側より攻撃した。C.4 より 7300 m に達したが退却。
- Sikkim の Chomo Yummo (Chomiomo) (6828 m) 第

- 三登。
- 6—7 A. Naess Tirich Mir の South Barum 氷河に入り、南稜より、7月21日 C.9 より主峯 (7700 m) に初登頂、続いて7月22日 第二登。
- 7 Gibson Garhwal の Bandar Punch II (White Peak 6316 m) に登頂。
- 7—8 Chevalley & Ditter Chevalley & Ditter Vyvyan Garhwal の北方西藏側の Gantug 氷河より C.5 をへて、8月22日 Abi Gamin (7355 m) に初登頂。
- 8—11 Sneloon & V. Graaf Garhwal の Panch Chuli の Darmaganga 河 (東面) より C.5 をたてて Panch Chuli を偵察、附近の谷と峠をさぐつた。
- 10—11 Houston & E. Cowles Houston & E. Cowles Tilman Everest の南方ルートを辿り、Khumbu 氷河端に至り、南面をのぞいたが登攀に対しては悲観的だつた。
- 1951**
- 6 D.G. Greenwood Garhwal, Trisul nala より C.1, C.2 を建設し、6月25日 Trisul West に登頂 (第三登)。
- 5—7 R. Duplat Garhwal, Rishi-ganga に入り Nanda Devi Basin より 1936 年の Tilman route に従い、Nanda Devi 主峯近くに C.4 を設置し、一方 Nanda Devi East に支援隊を出して待機したが、6月29日 Duplat と Gilbert Vignes の縦走隊が発したが行方不明となる。
- 5—8 H.E. Riddiford, H.E. Riddiford, W.G. Lowe W.G. Lowe F.M. Cotter F.M. Cotter E.P. Hillary E.P. Hillary Garhwal, Nilkanta 試登、続いて7月11日 Mukut Parbat (7242 m) に初登頂。その他 5 峯に登頂した。Riddiford と Hillary は Shipton 隊に参加した。
- 8—11 E.E. Shipton Everest, Post-monsoon の Everest 南方ルートの偵察をした。Khumbu 氷河の氷瀑突破に成功した。帰路 Cho Oyu への偵察。Imja 及び Honga 氷河の偵察も行い Gauri Saukar 山群の Menlungtse (7171 m) を発見した。
- 夏 H. Harrer Garhwal の東端 Panch Chuli に挑み (西稜?) 頂上下 400 m に迫る。

## 1952

- 3—6 Wyss-Dunant Everest, スイス隊は初めて Everest 南方ルートに見参し, Pre-monsoon に Khumbu 氷河の Western Cwm から South Col に達し, 5月28日 Lambert と Sherpa Tenzing は南東稜の 8600 m に達した。
- 8—11 G. Chevalley Everest, スイス隊は続いて Post-monsoon に異例の年内2回目の攻撃を続行。雪崩により人夫を失ふ。South Col に達したがきびしい天候にはばまれて登高ができなかつた。
- 春 Shipton Cho Oyu, 翌年の Everest を目標に Ngojumba 氷河附近で訓練を行つた。Hillary は Nup La を越して Rongbuk へ往復し, 帰途 Hongu, Arun 氷河に入り, Makalu 周辺をさぐつた。
- 9—11 今西錦司 Nepal, Marsyandi Khola をさかのぼり Manangbhot より Annapurna IV に試登, Bimtakhoti より Larkya Bhanjyang をこし東面より Manaslu を偵察し, 登頂可能ルートを発見した。Buri-Gandaki を下る。
- 秋? (イタリヤ隊) Nepal 西北 Api 試登。

## 1953

- 3—6 John Hunt Everest, Khumbu 氷河に入り South Col に達し, 南東稜より, 5月29日午前11時30分 Edmund Hillary と Sherpa Tenzing によつて初登頂された。
- 4—6 三田幸夫 Manaslu, Sama より Manaslu 氷河にそつて進み, North Col よりプラトウ上 7750 m に達し引返えす。
- 4—6 Lauterburg Dhaulagiri 北面に ルートを求め, C.5 (6400 m) より 7700 m に達し引返えす。
- 4—6 (ニュー・ジールランド隊) Nepal, Ganesh Himal に挑んだが敗れ, Sringsi Himal (7176 m) の一峯を Tibet 側の側稜より初登頂す。
- 5—9 C. Houston Karakoram, K2 の Abruzzi 稜にとりつき C.8 (7772 m) を設置したが敗退した。

戦後のヒマヤ登攀年譜

- 4—7 K. Herrligkoffer Nanga Parbat, Rakiot 氷河より, 北東稜の C.5 (7000 m) より Silver Sattel をへて, 北面より 7月3日 午後7時 Herrman Buhl によつて初登頂された。
- 7—8 B. Pierre Nun-Kun 山塊の Nun (7135 m) に西稜より Vittoz, Kogan 夫人が 8月28日初登頂する。
- 8—10 H.W. Murray Nepal 西北 Api 山群踏査。  
夏 P.N. Nicole Garhwal 東端 Panch Chuli (6904 m) に登頂。
- 9—11 今西寿雄 Nepal, Pokhara より Annapurna II の南面をうかがい 後, Namun Bhanjyang を越し Manangbhot より Annapurna IV の北面の 7200 m に達したが, 天候悪く引返えず。
- 9—10 Ardito Desio Karakoram の Baltoro 氷河に入り K2 偵察。  
Riccardo Cassin

登山中の栄養確保は

ヒット食品で!

ヒットビー (専売特許第 196597 号)

ヒット固型スープ

ヒット C 菓

ヒットエレリツチパン

マナスル隊・カラコルム隊 御用  
海空自衛隊

製造元 社団法人 ヒット協会 (村上開新堂)

販売元 ヒット食品株式会社

東京都港区芝田村町五の四 (電芝 3307)

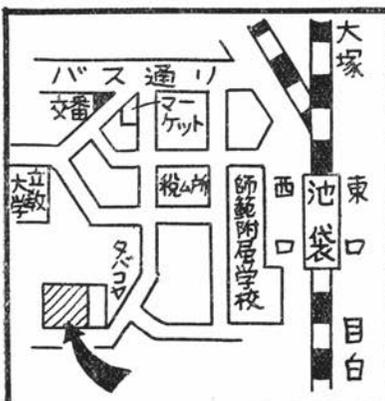
**Caravan**

日本山岳會推薦  
ヒマラヤ登山隊使用  
京大カラコルム探險隊  
指定



登山靴・総ゴムスキー靴・アフター(雨雪)シューズ・小型エアマツト登山用大底・ホステルシューズ

製造 藤倉ゴム工業株式会社  
発売 株式会社山晴社  
東京銀座3の4 (56)6151-9



# 登山 スキー靴 B.B.B.マーク

# フカザワ

東京都豊島区池袋二の二二八一

電話  
店 宅  
(95)(97)  
四二二二  
二二二二  
二二二二



カタログ進呈



# 十條製紙株式會社

製  
品

印刷紙・筆記用紙・包裝紙・圖書用紙・新聞紙  
薄葉紙・煙草用紙・其他一般用紙

社 長 西 濟

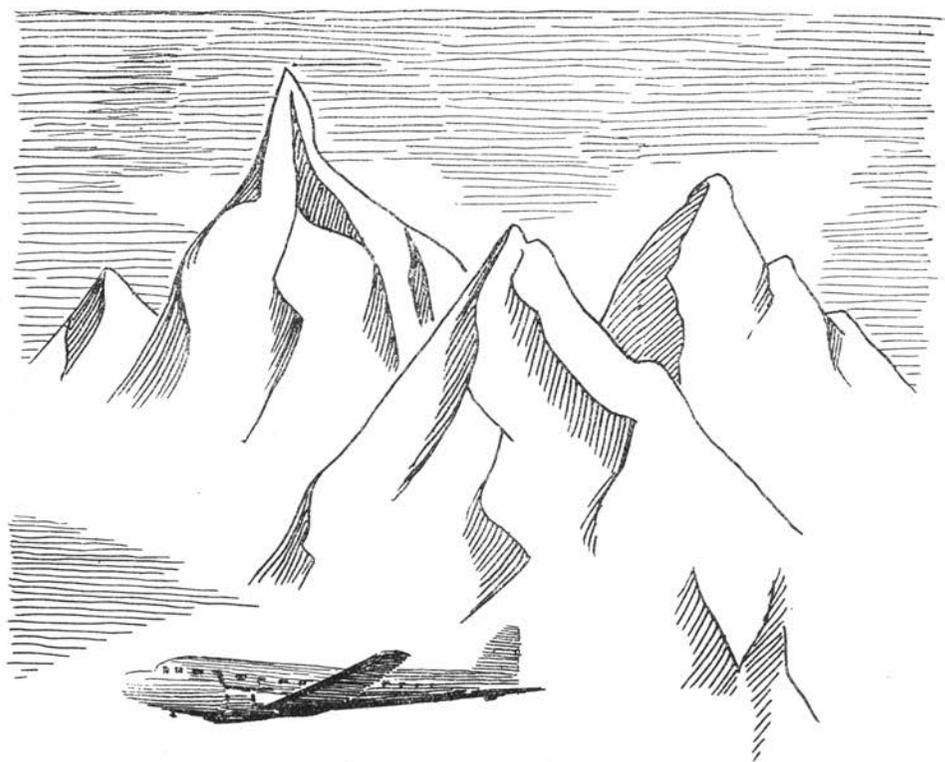
本 社 東 京 都 中 央 區 銀 座 東 三 ノ 四  
工 場 十 條 ・ 都 島 ・ 小 倉 ・ 八 代 ・ 坂 本 ・ 劍 路

印刷紙・筆記圖画用紙・特殊用紙  
板紙・薄葉紙・硫酸礬土・明礬

  
**本州製紙株式會社**

取締役社長 田 武 次

本 社 東京都中央区銀座東五丁目二番地の四  
出張所 大阪市東区備後町二丁目二十一番地(第一野村ビル)  
工 場 江戸川・富士・富士第二・岩淵・中津・淀川・熊野・名古屋



# 日通航空

旅客 23-2311~6

貨物 57-4029.4916



# 登山用品



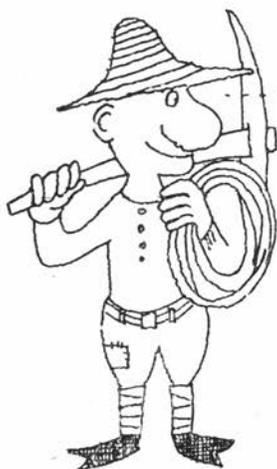
東京・新宿駅前

## かざみ

TEL(35) 2959・2960

# 山とスキー用具 せくもん 秀山荘

プライス・リスト進呈

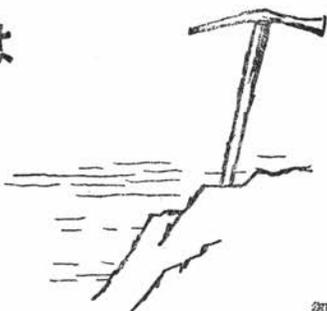


似て  
非なり

東京都中央区横町一ノ一  
Tel.(56) 1861

# 登山と旅行は

人生を明るくする



豊富な資料と経験に裏づけされた交通公社  
交通公社はあらゆる御旅行の相談相手です

海外旅行のサービス  
旅程と費用の作成  
切符と旅館の予約

## 日本交通公社

御幹旋は無手数料です

*R. K. Mizuno Co., LTD.* OSAKA · TOKYO

登山用品



R. TRADE MARK



# 美津濃

本店・大阪 淀屋橋 支店・東京 神田小川町

Takahashi

HANDICRAFTS SHOEMAKER

日本の登山界に傳統を誇る

# スキーと登山靴



新宿区三栄町三番地  
電話四谷 (35) 1912

中央区八重洲二の五  
電話千代田 (27) 1560

山友社

# たかはし

優秀なスキー、登山用具の

御用命は……

株式会社 **キタハラ運動具店**

東京都中央区京橋二丁目四番地

電話 (28) 7 6 0 6 番

洋紙一般

株式会社

**壽文堂洋紙店**

東京都文京区関口水道町 46 番地

電話 (34) 8 2 3 2 ~ 4 番

# 技報堂優良図書案内

東京都港区赤坂溜池 5 振替口座東京10

中小企業協 会編	企業診断ハンドブック	1,200円 円 50円
上野陽一編	新版能率ハンドブック	2,300円 円 50円
土木学会編	土木工学ハンドブック	草 3,700円 布 3,200円 円 80円
窯業協会編	窯業工学ハンドブック	1,600円 円 50円
統計工学会 研究会編	統計工学ハンドブック	1,900円 円 50円
児玉桂三他編	生物化学ハンドブック	1,800円 円 50円
有機合成 化学協会編	有機化学ハンドブック	1,600円 円 50円

★御申込みは最寄書店又は直接本社へ★

内容見本送呈

高級オフセット・活版・プロセス  
証券類・カタログ



株式会社 集美堂印刷所

東京都千代田区神田錦町 2-9  
電話東京二九局 2,856~9  
振替口座東京 15,162



三井 鋤山

株式 会社

社長 栗木 幹

東京都中央区日本橋室町二丁目一番地一

カロリーの補給の  
栄養源に



ライオン  
マーガリン

ライオン油脂株式会社

東京都江戸川区平井三丁目 電話 城東 (68) 1131~5

明日に備えて

よく眠りましょう!



催眠鎮静剤

**プロパリン錠**

前の晩の寝不足は必ず明日にたえます。どうも寝つきが悪く、神経の昂ぶりがひどい方に好適です。30錠・100錠

熟眠剤

**イソミタル錠**

病的な不眠症もこの熟眠剤の2,3錠で今まで御存知なかつた程の深い充分な眠りをとることができます 10錠



日本新薬株式会社

# 片桐・キスリング型ロックザック

キスリング型ザック

No.3 小型	1.65×2.3	¥ 2,500.00
No.4 中型	1.8×2.5	¥ 2,600.00
No.5 大型	2.0×2.8	¥ 2,800.00
No.6 特大	2.2×2.8	¥ 2,900.00



ビッケル札幌門田作

尺モノ	¥ 3,500.00	尺1寸モノ	¥ 3,600.00
リング	¥ 150.00	皮ザック	¥ 300.00
アイゼン	門田作 各号共八本爪		¥ 3,500.00

放出羽根入寝袋入荷しました

山とスキー用具は全般に御用命承ります。

東京都文京区  
湯島天神町三の十九

**片桐**

電話 下谷 831794 番

片桐盛之助

## スキー靴・登山靴

専門製造

**森田靴店**

東京都千代田区神田神保町三ノ一  
電話 九段 (33) 3716  
専修大 学 前

# 信頼の出来るマミヤ製品

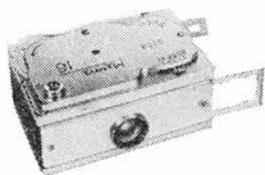
マミヤフレックス  
オートマツトA型



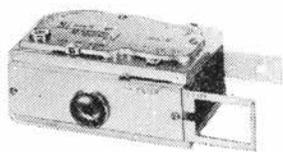
マミヤフレックス  
オートマツトB型



マミヤシックス V 型



マミヤ-16

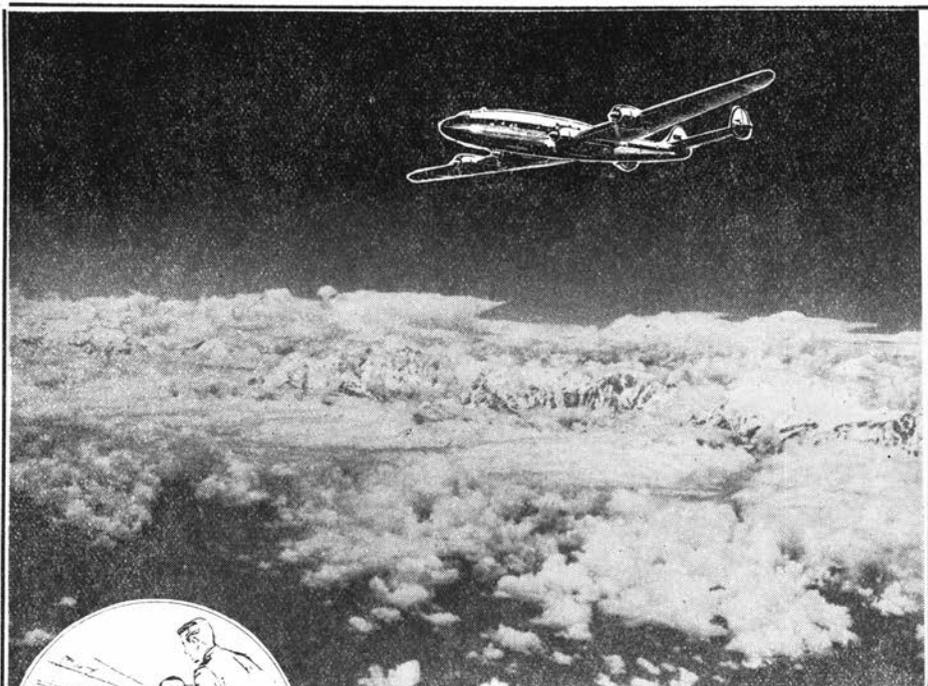


マミヤスーパー16



マミヤ光機株式会社

東京都文京区本郷一の七



## 世界に誇る BOAC の サービス

六つの大陸を結ぶエヤライン……安楽快速  
な空の旅は BOAC の英国風サービスで

BOAC の英国風サービスは世界的に有名です。これは 35 年の長い経験から生れたものです。お客様が気持ちよく御旅行なさるようにと、全従業員は厳格な英国式訓練を受けています。皆様に必ず御満足をお与える BOAC のサービス……空の旅は六つの大陸を結ぶ BOAC で、

# FLY B·O·A·C

英国海外航空会社

# 天 幕 (夏・冬用各種)

リュックサック  
マット(ヘヤーロック)  
シユラーフサック  
ウインドヤッケ  
オーバーシユーズ 等

製 造 販 賣

——— ◁ ◇ ▷ ———  
日本山岳会ネパールヒマラヤ登山隊の天幕  
その他は弊社にて製作納入致しました

——— ◁ ◇ ▷ ———  
各大学・実業山岳部御用

## 吉 田 喜 義 商 店

東京都杉並区中通町一 (荻窪駅北口下車)  
電 話 荻 窪 (39) 0 9 9 0 番 (呼出)

# 登山にスキーに



お忘れなく御用意下さい!!

サロメは山やスキーツアーに忘れられぬ常備薬で  
思わぬ時の捻挫、打撲などにすばらしい効めを発  
揮します。その他筋肉の疲れにサロメのマッサージ  
療法は廣く岳人間に定評があります。

すりこみ薬



サロメチール

20瓦：¥100

土木建築



設計施工

株式  
会社

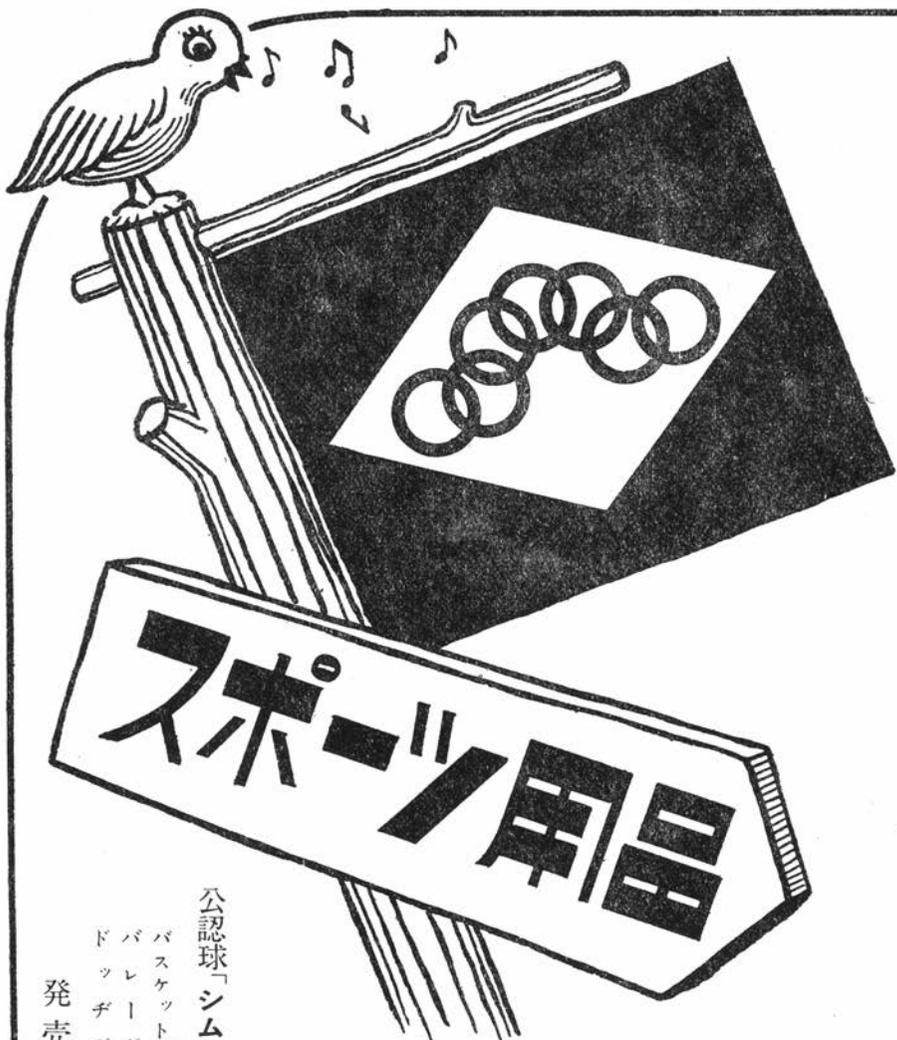
安藤組

取締役社長 安藤清太郎

本社 東京都中央区横町一丁目七番地

電話 京橋 (56) { 代表 8686  
                              { 直通 6430~2

支店 大阪・名古屋・静岡・水戸・仙台



スポーツ用品

公認球「シムレス」

バスケットボール  
バレーボール  
ドッジボール

発売元

タチカラ

本店、小売部 東京都中央区日本橋通三丁目八番地  
TEL 千代田(03) 3318・3875  
工場、営業所 東京都台東区松葉町七番地  
TEL 浅草(84) 6868  
根岸(87) 8005

PRICELIST 進呈

登山スキー具

大塚

東京 中央区日本橋江戸橋1-7 TEL(27) 7686

登山に...



頂上を征服する最後の頑張りは心臓です。2～3時間前に3～6錠をのんで置けば疲れを知らずに登ることが出来ます。  
(詳細説明書進呈)

心臓薬 (製法特許)

第一製薬 東京日本橋・大阪福岡札幌

アヂスチン

吾錠 二二〇円・一〇〇錠 一、〇〇〇円



創立 明治六年

# 第一銀行

本店 東京・丸の内

## 「山岳」投稿規定

- 一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
- 一、原稿の採否は山岳編集委員会にて決定する。
- 一、原稿は返却しない。
- 一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
- 一、紀行に成るべく概念図を添付すること。
- 一、写真は光沢印画紙に焼付け、必ず説明を付けること。
- 一、地国、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
- 一、編集者は原稿の一部を削除又は訂正することがある。
- 一、校正は編集者に一任されたい。

送り先 東京都千代田区神田駿河台四ノ六

日本山岳会「山岳」編集部

編集委員

交野武一  
望月達夫  
吉阪隆正

一九五五年九月一日印刷  
一九五五年九月十日発行

定価 五〇〇円

東京都千代田区神田駿河台四ノ六

発行所 日本山岳会

日本山岳会内

編集兼  
発行者 交野武一

東京都港区赤坂溜池五

印刷者 株式会社 技報堂

東京都千代田区神田駿河台二ノ一

發賣所 株式会社 茗溪堂

電話神田(25)二〇四四番  
振替口座東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真及地図の無断転載を禁ずる。



# 東京瓦斯株式会社

取締役社長 本田弘敏

取締役副社長 安西 浩

東京都中央区八重洲 1 の 3

電話 (28) 0111-10・0121-10・1121-10

登山とスキーの

日本最古の  
専門店

好日山莊



東京店 海野治良  
東京都中央区銀座西2-5  
電話 (56) 3600  
振替 東京113657

大阪店 西岡一雄  
大阪市北区堂ビル前  
協和ビル三階  
電話 (45) 7745  
振替 大阪 68763

神戸店 島田直之介  
神戸市生田区三宮1-32  
電話 (2) 5951  
振替 神戸 21352

The Journal of  
The Japanese Alpine Club

**SANGAKU**

Vol. XLIX 1954